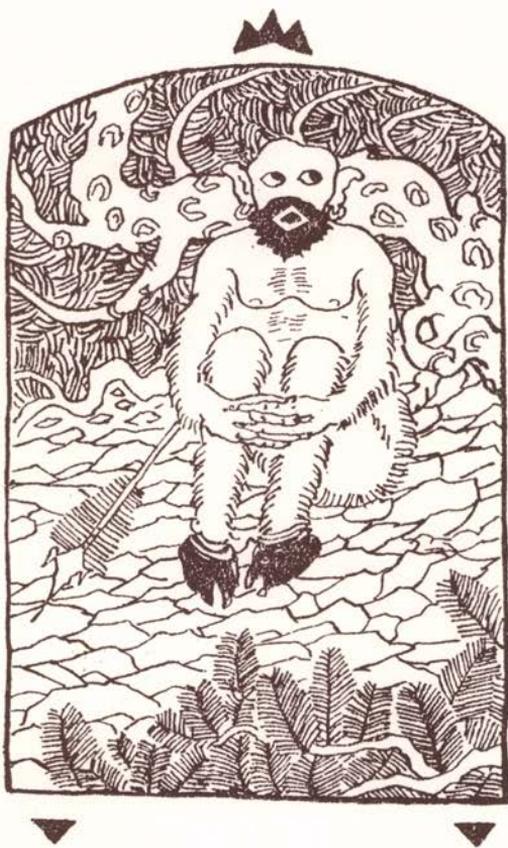


山志

第八卷 总号



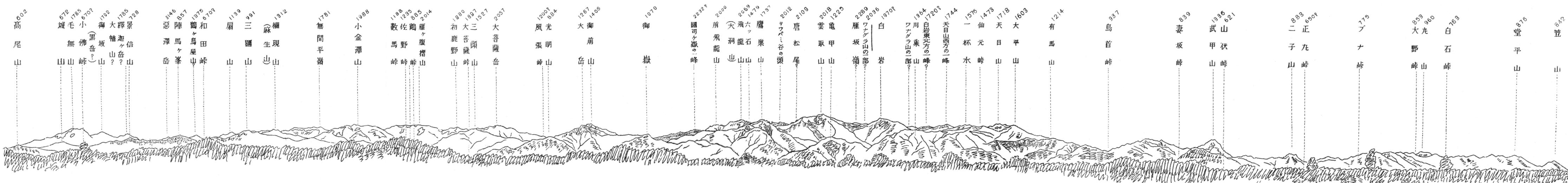


山

岳

号二

号儿



るめ望りよ袋池外郊京東
山群父纒



目次

(著作権所有)

表紙	紙	しらねあふひ	石版刷	石崎光瑤氏筆
巻頭	畫	<small>東京郊外池袋より望める秩父群山</small>	銅版石版刷	中村清太郎氏筆
タイトルページ		はひまつしの蔭	石版刷	茨木猪之吉氏筆
地圖		大井川奥山地圖	銅版石版刷	中村清太郎氏作

挿畫

○	大井川奥山の小屋	コロタイプ刷	中村清太郎氏筆	八頁	
○	澤の木	寫真銅版	全	上……………一六	
○	朝	コロタイプ刷	全	上……………二四	
○	聖ヶ岳より赤石山を望む	寫真銅版	全	上……………四八	
○	冬の大洞	コロタイプ刷	辻村伊助氏撮影	……………二〇	
○	冬の赤石山	全	上……………二八	上……………二八	
○	「巨人の跡」	寫真銅版	全	上……………三六	上……………三六

本欄

大井川奥山の旅

中村清太郎……………一

穂高山南稜跋涉記

赤城山の冬

登山の準備

繪畫の題材として山岳の出現

歐洲アルプス旅行と其感想

雜 錄

○風凰山塊に就て(辻本) ○鋸岳白崩岳及び其他の二三ヶ條(小島) ○鋸岳附近の甲信境(梅澤親光、山川默) ○穂高群峯の稱呼につきて(鷺殿) ○山名につきて(鷺殿) ○駒込富士詣(朝倉無聲) ○千垢離と大山詣(朝倉無聲) ○甲州山村の三升嶽(小島) ○陸地測量部槍ヶ岳附近の地圖を出版す(蝶郎) ○一高山岳會の成立(〇、〇生) ○間違ひ(梅澤親光) ○机上談山(加留原) ○秩父山岳の記文(一記者) ○東京より見ゆる山のこゝ(中村) ○「瑞西風景論」の作者ジョン、ラボック先生を弔ふ(小島) ○立山白馬黒部の地圖出版さる ○挿入の地圖に就き(中村) ○追言(中村)

雜 報

○淺間山の記 ○御嶽山の山開き ○白峰山村の生活雜 ○蓮華岳鳴動 ○諸高山の晩雪及び融雪

會 報

○日本山岳會大會の記 ○出品目錄 ○出品評判記 ○會員登山報 ○信濃山岳研究會 ○「高山深谷」第五輯に就て ○志村氏「千山万岳」稿成る ○山岳發刊遲延に就て ○新入會者

丸	小	高	關	鶴
山	島	野	口	殿
晚	鳥	鷹		正
霞	水	藏	泰	雄
……	……	……	……	……
一三七	一三一	一二二	一七	一〇四

大井川奥山の旅

中村清太郎

山

明治四十五年七月九日から八月一日まで。

―静岡―大日峠―田代―大井川信濃俣―光岳―イザルヶ岳―カッチ河内岳―仁田河内岳―上河内岳―聖ヶ岳―兎岳―大澤

岳―赤石岳―大井川奥西河内―大井川上流開墾場―田代―

概畧の記事は七年三號雜錄拙文『日本南アルプス登山雜談』中にある。

一、麓まで

寢過し氣味の眼に、もう高く昇つた、鮮やかな初夏の日光がワクワクする。壯んな、光澤を持つた響のある蟬の聲が、廣い緑先の柿の木から掛けて、この狭い田代の村を犇々と圍んだ大無間山の裾山の、青木黒木の茂みといふ茂みから一齊に放射されて、青葉の上に立つ陽炎の小刻みに顫へるのが、眼に見えるやうだ。

何となく今日は氣が衰へた。ゆうべ遅く着いたせいもあるが、山の懷に抱かれた安心——そんな氣分がポーッと身體を取り巻いてゐる。かうして今年の夏も私は歸省したのだ、さうだ、この人氣の無い山の中へ。それはツイ後へ残して來た大都會、どうかするとまだ氣笛の悲鳴でも聞えさうな、あのヒツクリ返るやうな雜間の街なかに生れた自分だけれど、それが何の故郷だらう。どうしても此處だ、山だ、これが私の心の故郷なのだ、眞の故郷なのだ。

そして茲迄私は今歸省して來たのだ、しないではゐられなかつたのだ。否も應も無い、命がけで、

◎大井川奥山の旅 中村

而かも計り知れない幸福を聳と身に感じながら、凡てこれからだ。

デツとこの山村の物象に身を浸してゐると、家を出てからもう大分経つやうな氣もする、しかし實は未だ二夜なのだ。氣分の移り變りが時の距たりを大きく見せる。去年のやうに静岡から馬車で、安倍川の岸を走らした時は氣が無暗にセイてちつとして居られなかつた。馬車の立場で山から來た女房に、分けて貰つて食べた山桃の實の甘酸ばいやうな澁いやうな色と味とが、山の方の旅らしい感を燃える胸に泌み込まして呉れた。

山々の端は雨らしく烟つて、其の隙から緑りがあやしく銀の光りを放散してゐた。幾重の雲に澆されたキメの細かい光線がポーツと被せて來て暑いもの、時に川上から吹いて來る風は黒つぽかつた。安倍川の川原は、岸の柳が吐くらしい氣に明るく霞んで、川身が柔かいスデを引いて光る、去年の秋の旅には、この川筋には蜜柑が累々と南國の色と香とを誇つてゐたのが、今は唯一面に青い許りで物足りなかつた。

廣い安倍街道に沿つた小川は、ダブトくに溢れて、庭先きのあぢさゐや待宵草やみそはぎを、被ひかぶせたり揺り動かしたりしては流れてゐた。雲といひ、風といひ、水といひ、もう懐かしい山の方が、今ごんな有様にあるかを知らせて呉れた。去年の冬觀たあの奥山の姿から、その雪を擽つて落ちる澤の、日に日に太る様子から、高山植物の光る迄見えるやうな氣がして、一つどころ許り見つめてゐた。今年こそ！もう荷物なんぞは捨て、一人で走りたかつた。

それでも段々山へ近づいた、窓から頭をかゝめると、文珠岳や龍爪山の山腹に、新らしい緑りが滑つこくなつたりザラトになつたりしてゐた。牛妻坂下からは馬車は利かない。私はこの軒毎に七夕の色紙を結んだ竹を立てた田舎町、平原と山との境目といったやうな町に暫らく休んで荷持ちを頼んだ。四時といつても、七月初の日は未だ高く、少しでも山の方へ踏込まないでは、體よりも氣が承知

しなかつた。荷持ちには黒光りのする素裸に赤輝をブラ下げてベラ／＼饒舌る爺がやつて来た。雲助——と頭がつぶやく、それも我慢した、唯山の方へ。

安倍川の水はドンヨリと間色に濁つてゐた。夏の香、青草の盛んな鋭い匂ひを思ふさま吸ひ込むと、筋肉の末端迄一齊に收斂した。郷島から雨がやつて来た。濡れて、緑りの香は愈々高い、旅の心がその中で躍る。荷持ちの爺は道々茶屋といふ茶屋へ荷を下ろしては、輕口を叩いて、其の頃町場で流行つたイヤな歌などを聲高に唱ふ。私はもうヂレてしまつた。先きに人が無ければ否應なしに田代迄行く道連れなのだ。私はソツと聞いて見た。親切な茶店の亭主は「酒さへ飲まなければいゝ、隠居ですが、まあ氣をつけて一緒に御出でなすつたら……」といつて呉れた。

六番の渡しは水が増したせいか、前に無かつた針金の渡しが出来てゐた。川幅に似合はない大きな舟が、無雜作に針金でくくり付けられてギゴチなく動く。茲許りは何度橋を架けても駄目だといふ、私はこの廣い荒れた河原から狭い暗い上流を覗いて一種の快感を覺えた。あたりを一心に馬を乗り廻してゐる若者があつた。支流の中河内川へ入ると急に山は鼻の先きへ来た。道端に寂しい河原とも圍ともつかない石原がある、水害の跡ださうで、へえ、元は一反五百圓もした上等の田地でござんしたがねえ——と爺がいつた。山の角から落合の部落を眺めた時には、もうあちこちに壯んな蛙の聲が起つた。大きな鐘樓のある寺、小高い位置にある杉の杜の社、小松の植つた築地塀を圍らした白壁、小さい乍ら豊かな山村の景象が見えた。

宿屋は山の方へ出外れの只間といふ處にあつた。街道に面した小綺麗な二階は、軒に葱などが掛けあつた。裏の湯小屋から歸ると、蛙の聲が薄明りに交つて、家を包み、何か見えないもの、精が躍つてゐるやうだつた。宿の亭主は自分で出て行つて別の荷持ちを捜して呉れたが無かつた、あきらめて「雲助」の爺を泊まらせた。螢が折々、フーツと窓際までやつて来た。空の星は螢の數程も無かつ

た。

◎大井川奥山の旅 中村

四

昨日も梅雨じみた空合、時々氣まぐれな雨が畑るやうに來た。宿の二階から見ると、濃い緑りの中を分けて行く一條白い川に、ポツンと人を載せた筏がツツイツイといと、どめども無く流して行つた。西河内川の落合ひには新らしい玉川橋といふ釣橋が出来てゐた、又いつ流れるのだらうなどと、思つた。川に差し出て合歡の木がバツと涼しい煽を立て、尾長鳳蝶が悠たりと翅を振ふ。長熊からは峠のやうな地勢を幾つか越えて、愈々山深く分け入るやうな氣になる。又蒸されるやうな日が射して來た。

山あひ山あひには、如何にもホカ／＼した圍が出来て、茶摘みの人々がチラ／＼した。荷持ちの爺は、立ち留まつては大聲に謠つた、そして間近の若い女達の群から無邪氣な笑聲を酬いられる迄は止めなかつた。日射しがそろそろ強くなつて來たので、長妻田ではサツパリした雜貨店なども兼ねた茶店を見つけて休んだ。蟬の聲が細かい綾を織つて響いて來る、鶯も聞いた。上落合を通り越すと、もう川の奥行も短くなつた氣がした。その方には大日峠の連山が、雲に浸つて銀緑の大屏風を翳してゐた。陰もない日盛りを、雜木の茂みに天牛が容捨もなく、物を擦り減らすやうな聲を振り立てる。

阪本へ來てホツとした、もう雲に近くなつた。上流から、村を蔽ふやうに聳え立つ大杉の梢へかけて、奥山嵐の暗雲が離れたり固まつたりして、爪立ちながら東の山際指して消えて行つた。大杉の陰の物賣る家へ休む。不精無精に跟いて入つた私も、茲の老翁に會つて休んだことを悔いなかつた。全く山へ來て會へるやうな人だつた。香りの高い茶を勧めて呉れた。

霧雨に濡れながら峠にかゝると、いきなり左手に、諸の澤の海老殻色の大崩れが眞白に瀧津瀬をたぎらせて血走つた眼に、斜にこつちを睨まへてゐた。峠は頂上迄卅三番に分れて、石佛が所々に立つてゐた。いつぞや、道をとり違へて迷ひ込んだ作畑や、岐道もわかつた。あの時無暗に雜木を掻き分けて、始めて身に受けた奥山の光りが、マザ／＼と浮んで來た。十六番と水呑茶屋と二軒の粗末な小

舎が旅人を休ませる、静岡の方から大井川谷の村々へど、米や味噌酒などを運ぶ人々が汗を拭いてゐた。

愈よ雲の中へ来た。何もかもシットリとして、氣迄がオットリ落着いて来た。偶にはこんな山の中へ来るのもいゝナ」自ら勵ますやうな調子でこんな事を言ひながら、もう疲れたらしい道ざりで上つて行く、静岡あたりの商人連中もあつた。強い西風に煽られて、ぐす暗い雲が峠のみね越しに、後から後から押へつけるやうに込み合つて来る。時に南の空に、きれぎれの青空が剥けて出ると、龍爪山のあたりの緑りの波が、バット蕪つたやうに照り返すが、それも束の間。此の邊は近頃毎日のやうにこんな天氣だと、茶店の亭主が癖のやうに空を見上げながら言つた。

日は暮れるともなく暮れて来た。峠の頂の大日堂近い木下道へ来た時には、石佛の姿も臙ろになつた、それでも峠のみねは、一面の青草原がホンノリと照つて、夜明けのやうな空気を流してゐたが、奥山の方は唯、深さの知れないやうな暗やみで、スツカリ水づいたフヤケ切つた雲が灰鼠の汚點だらけになつて、跳ね上つたり、流れたり、澱んだりしてゐる許り、漸く片隅に、大井川に沁り込む裾山の斜線が、薄すりばやけてゐるのが判つた位のものだつた。

大井川の瀬音が近くなる頃に、螢のやうな灯のボツと霞む谷向ふの井川村から、晝と夜との界の鐘が重々しく雲の中へ沈んで行つた。釣橋の遙か底に、川は夜霧を湧き立たせるやうに、薄白く地響を打たせてゐた。重い荷を負つた老人を夜更けに田代迄連れて行くわけにも行かなかつた、氣のセキ切つた私は、爺を井川の木賃宿に泊らせて、提灯を持つなり、二里の谷沿道を走りながら来た。時折り星の光りが洩れて来た。崖などへ凭つて弾む息を休めると、夜氣の恐ろしく冷たいのに氣が付いた。頭はガン／＼と熱い。宿では見知り越しの若い内儀さんが、爐の側で驚ろきながら迎へて呉れた。今度私を奥山へ案内しやうといふ、獵師の松次郎爺もノソリと表の方からやつて来た。私は力を籠めて

◎大井川奥山の旅 中村
人々ど色々話し合つたのであつた。

それで今日は種々山入りの準備をするのだが、面倒だからイ、加減にして松老爺に頼んでしまふ。宿の主人の若い益吉トスキさんも相變らず言葉少なに話した。僅かの間乍ら宿の庭まで變つた、いかにも古びが着いた。手荒つぽい四周の自然は、物の廢滅などには左程手間を取らないのであらう。今何かの果物の植ゑられてある所に、去年は白菊が雨に濡れて咲いて居たのを思ひ出した。飯の時内儀さんにその事をいふと、「ねえ……」とさもその時分を思ひ出すといふやうに見えた。

縁先きから仰ぐ許りの、緑りの山際に、夏らしい碧空が垂れて、輝きのある白い雲が靜かに動いて行く。下駄を借りて、村外れの諏訪山迄行つて見る。見れば見る程、この小山は、荒くれた大井川奥の自然の手から、この五六十の板屋根が親しみ深さうに固まつてゐる田代の山村を、諸手を擴げてかばふやうな形勢にある。社の杉の杜の前は碓碓の燒畑に、粟がポツ／＼貧しい緑りを散らす。見渡す裾山は一面、木々の緑りが黒く深々と重なり合つてゐる。四方へ伸ばせる丈け枝を伸ばした樅の梢に、上河内岳の一ノ角を眺め得て満足して歸つて來た。遙かに見た偃松帯の濃綠淺綠が、眼の底に燒き付いてしまつた。

村の東外れの崖下を、水成岩片の妙に白くギラ／＼する川原に、大井川が冷たい青磁を溶いては流し、溶いては流ししてゐる。

二、大井川の西岸

夜明け前から起きて、東の山際から送られる薄明りに宿を出掛ける。松次郎爺が雜品を赤毛布に包んで、その上へ大鍋を伏せたのを背負つて先きへ立つ。主立つた荷は外に二人の山人やまうとが持つて行くことになつてゐた、一人は川上の作畑を打つ男で、昨夜の中荷を持つて自分の小舎の方へ歸つて行つた。

も一人はやはり獵師、何でも今朝早く私の眠りが、危ふく切れたり繼がつたりしてゐる中に、宿の土間でガタゴトいはせながら、丁寧に挨拶して出て行つたのを知つてゐる。

爪先きに、うすら冷たい露を浸ませて、諏訪の段を越える時、もう朝日を受けて光る頃だと振り仰ぐ小無間山の前峯には、ドツシリと雲が垂れて、訝かる間も無く小雨が落ちて来る。しかしこんな旅の初めでは、いつも少しの雨くらゐ自然に何でも無く思つてしまふものだ、それに今日の道は谷筋許りのつもりだから。

大井川は山の鼻から鼻を、際どく身を交はしながら、薄白く雲の裡から走り出して来る。スツペ段といふ山腹の垂んだやうな處を行く。濡れたヒヨロ長い青草や灌木が、もう不慮に蔽い被さつて来る青い、無数の手が先きへ行く松次郎爺の肩や腰を捉まへて押やるやうに靡くかと思ふと、サツと私にも取り付いてくる。後ろを見ると、もう房ざりと小徑を蔽つてヂツとしてゐる。吾々はかうして否應なしに、山の奥へ奥へと送り込まれて行くのだといふやうな氣がする。コデ澤、イツハ澤などが不意に横合から、聲を擧げて落ちてくる、そして霧臭いひいやりした山嵐をサツと襟元から浴せる。

曲りくねつたクニス坂といふのを越す、之が手始めでこの川筋にはかういふ處が幾つもある。頭の上の赤石山脈の峯々が、毛脛を揃へて二の深谷へ踏みはだかつてゐるので、それを一つ一つ越えて行かなければならないからだ。その爪先きに當る處には、きつと幾らかの平地と廣い河源とを持つ、このあたりの山人が「島」と呼んでゐるのがそんな處である。こゝのは桃島といふのだ。そしてその向ふは川が往々恐ろしい淵を作してゐる。上から覗くと、白い河原に寒い藍色の練玉を嵌め込んだやうに見える許りだが、傍へ行つて見るとどうして、上流から白い泡を嚙んで躍り狂つてくる水は、一度この崖下の淵にのめり込むと、太い幾條かの蛇體になつて背と背、腹と腹を擦り合はせながら、聲を呑んで大きなトグロを巻いてゐるのである。この吐く息が細かい氣泡になつて、連れ合ふ蛇體の間を

◎大井川奥山の旅 中村

くいつて、ヨロ／＼と浮かび上がつてくるのが見える。静かではあるが、冷たくはあるが、力が満ち溢れてゐる。山人の「マキ」とか「アミ」とかいふのは、こんな所である。

生々しい岩の隙を露出した崩も横切り、樺や檜の翠蓋をくいつて河原へ下りると、トヤマ島に水楊が鋪びた緑りの細葉を谷風にヒラ／＼させてゐる。川は、すに身をひねつて、急な瀬を浪立たせながら、又向ふの緑りに隠れる。カハグルミ瀧よ、と松爺が烟管の雁首で光る浪を指さす。トヤマ澤の釣橋から仰ぐと、上流に當て眞黒な小無間山が見上げるやうに高く、胸のあたりになご（霧のこご）がモヤ／＼と伸しかゝつてゐる。又羊腸の上りが始まればトヤマ坂で、下に大淵のマキが稍暈りを帯びた淺葱色を湛え、幾本かの材木が埃のやうに散らばつて、中にはキリ／＼とめぐりを廻つてゐるものもある。

蛇の骨澤を越すと、焼畑に粟の芽生が靡き、馬鈴薯が薄紫の花を持つてゐる小山の背にかゝる。今は無いといふ大杉が一本杉の地名を残してゐる。粗末な藪作りの作畑小舎は、眞黒な口をポカンと開いて、人氣もない、細い縦樋のやうな石瀧を通り抜ける、名は鋳砲崩、直径にすれば幾らもあるまいと思はれる、谷向ふの白峯山脈の峯嶺も、重つくるしく蒼い上衣を皮つて、大枯澤や火打澤の惨ましい地肌の剣がチラ／＼見える。このカレ或はガレは、南アルプスの旅につき纏ふ景象で、イツモ自分の疵口へでも觸れるやうなシヨツクを感じて、一體に木立の薄い北の山には無い峻烈な印象を與へるのである。

又ヤマコ澤が落ちて来る。澤へ来るたび道はその潤葉樹の枝を幾重にも翳し掛けた青い暗やみの中へ、グイと引き込まれる、私たちは屹度チラと水の来る方を仰いで、危ふく落ちかゝるやうな岩塊なごを眼に残して、又明るい大谷の方へ出て来るのである。カツザウといふ山腹を通ると、上の方に菊太——私の荷を持って行く男——の作畑小舎がポツリと立つてゐる。松爺はオーイと聲を掛けてゆく。返



事もない、あたりはひつそりして私達二人の足音がヒタ／＼と妙に明らかに耳立つ許りだ。

谷の傾が俄かに展ける。底の方から蓬々と雲が湧き上ると、蓋をするやうにその上へ東河内の入りポッチ薙の頭が、ボヤケ切つた夢のやうな弧線を掛け渡す。薄弱い銀の光りがヒタ／＼と大谷を満たす。満山の青葉がどろけて睡むさうな臉を合はす。もう谷もない、山も無い、天地は唯シンミリとした銀と緑のシンフォニアになつてしまふ。木の直幹がスク／＼と無惨な棒槌を立ち切るので眼が覺める。日蔭カレイ澤が二條、暗い古びた石の梯子を傳つてドン／＼と驅け下りてゆく。日向カレイ澤は碌碌水が無かつた。

又山圃が出来てゐるので、緑りの目隠しが急に撤せられて、谷は底迄突き出しになる。そこは川と山とが縦横に入り亂れて、水は今更ら自分の運命に驚ろくといふ風に、或時は逆さ川になつて落ちて行く。古生層の峽間を行く水のあはたゞしさ。そこへ向山から小淵澤が、さか落しに落ち込むのが、よりのかゝつた絹絲のやうに見える。今私達は長ゾウリの阻道を、暗い緑りに浸つて草間の蜩せみのやうに動めいて行くのだ。向ふ山にも棧道が見え隠れに走つて、取り付き場もないやうな山腹に、小舎が二三軒小さく抱き合つてゐる。菅山といふ、田代の村人が夏だけ畑を打つ處ださうだ、あれでも今大根が作つてあるだ、と松爺は流し目をくれながら行く。勤勉な山人たちの苦しい生活の斷片が、こんな峻しい山や谷の、僅かのすきに飛び々々散つてゐるのだ。

東河内が霧と一緒に、狭い谷合から白峯山脈南方の水を吐き出して「鳴り合ふ」のを見下ろしながら、桑の木島の小鼻を廻ると、下からオウと太い聲が掛かる、道端の見上げるやうな岩蔭で、先きへ來た茂作が待つてゐたのだ。「御早う御座んす」と男盛りの逞ましい山人が挨拶する。村ではやつと朝飯が濟んだ位な刻限だが、もう早晝をやつたさうで飯盒が取り亂らしてある。茶も煮てあつた。私もしるしばかり食べる。近間に湧水があつて、山人の定休場らしい、「ツ、ミガレの岩下の休場」といふ

◎大井川奥山の旅 中村

一〇

のなさうだ。山一面の淵葉樹が谷へ谷へと乗り出して、私達はその中の何處かに息を凝らしてゐるのだ。眼は青葉から青葉とさまよふ許り、イモガラシデの木が細長い俵のやうな實を重さうに揺すつてゐるが、それもやはり青い。偶見える谷水は満山の葉緑素を搾つて、茶のやうに香りさうだ。私は酔心地になつた。皆の顔も仄かな緑りを射してゐる、吐く息も青く、血迄鮮やかに青いのが循つてゐるやうだ。

道はそろ／＼齒を剥き出して來た。山人がゴトー、ゴロンなどいふ類ひで、穿いた草鞋はもうサ、クレてしまつた。谷はサクラ瀧から上流、八兵衛瀧、七兵衛瀧とチラ／＼白い急瀧を躍らし、唸りを持つた瀧音がこの全谿の青葉の累層を射透して、雲の方へと擴がつて行く。コーセ島を過ぎる。川はもう勢そのものに化つてゐる。今更ら止まり度くても止まれないといふやうに、自ら恐れてもがいてゐる。岸に衝き突ると、堅硬な水成岩を深く抉つて、蔭を蔭をこ足搔くもの、終に安住の地を見出し得ず、又何處とも知れず駆けてゆく、淵から瀧、瀧から淵。カゴウス淵もその一つだ。

水カ子などいふ處を何時か通り越すと、大谷が山を割つてガツクリと口を開ける、明神谷だつた。亂れ伏す大岩を跳ね越えて、筋張つた水がたぎり落ちて來る。そいろに深さが思ひやられる。そのわけだ、あの大無間、小無間の大小塊も最早後になつたのだ。奥へ來たぞと何か迫るやうで、思はずアタツが見廻される。本谷は危ふい程追つた急崖の間から、凄まじく狂ふ無量の水を射出すと強い彎曲を描いて、忽ち勢ひの擅な動亂を怪しい迄に内包して、ホンノリ立つ河霧の底に紗に包まれた翡翠玉のやうに凝る。しかし此處は暗い崖腹に、岩躑躅などが優しい色ざりを交へてゐるので、イ、ナアなど言へる。二人の山人は道ばたの樹に蜜蜂の巢を見付けて、蜜があるとか無いとか、古いとか新らしいとか、頻りにいひ合つてゐる。繊細い釣橋に越つて坂に懸ると、もう大井川は何處へ行つたか知れない、明神谷の瀧が重厚な青葉の隙からチク／＼光る。かと思ふと坂上からは又大井川の谷が

深く深く窺へて来て、暫らくは私達は大きな谷の中空を、雲と一緒に漂ふやうな氣になる。

山毛櫛と梅が空一杯に枝を擴げた下に、道祖神と彫つた小さな石碕が有つて、破れ草鞋などが散らばつてゐる、サゴの休場といふ、之も伐採の持子や山人どもの自然腰を据える所で、こんな處は妙に黙つて通り抜けれないやうな心易さがある。山人の荷から翻れたか小豆が一粒心細さうに芽を出してゐた。茲はもう霧藻が、奥山の息の掛かゝる所だといふやうに、長く垂れてゐるのだ。深山鳥が兩翼の白い紋をチラと見せて、梢から梢を飛び廻る。

ハテンザウリになると、又道は大井川本谷の中にある。アサマヤスンドも同じやうな一服するにいい所だ。ノタハギ段へ來ると稍廣い草原が流れ、あたりの山勢も餘り迫らず、脅かすやうな瀨の音は、たと止んでしまつて、人の棲めさうな山懷がある、下ンザウリの作畑や小舎が、こんな所の一部に出來てゐる。低い空が落したものゝやうに雨燕が飛ぶ。けれどもクヰレ澤が横なぐりに岩層を飛ばすかど見ると、伏兵のやうに又瀨の音がドツと起つて、やつと一としきり伸びたやうな身體が又グツと引き緊まる、中尾の道は水檜の緑りがタツブリと濃やかな影を織つてゐる中を抜けて、棧にかゝて急に崖下に下り立つと、田代澤の河原の流石が灰白く照つて、さすがに山の晝らしい光りがある。不圖出た、平らな崖上は足元に迄躑躅の紅い花辨が翻れて、大井川は瑯玕色に凝つた上流らしい水を崖から崖一杯にはらましてゐる、靜かな目にも止まらない水面の波紋の變化が、一重の裏の恐ろしい混亂の態を暗示しながら。

一としきり房さりした夏草の、泌みるやうな香を浴びて行くと、下の島の一軒屋へ出る。こゝもよくある浅い山懷の一つで、見上げる程の後ろ山の中腹から落ちる澤に段をしつらへて山葵畑とし、飲水は別に獨木舟に似た樋で木影に落とす。狭い粟畑は獸の害を防ぐ爲めに無雜作な荒木の柵が結んであり、細い桃の木が實る下に豆や瓜がオツとと伸びかゝる。その真中の小さな板屋に、この田代

◎大井川奥山の旅 中村

一一一

澤の草分けといはれる、もういゝ年の森竹豊藏翁が獨りで棲んでゐるのだ。私たちは山水を一口味はつてから、この小舎へ入つた。燻ぼり返つた爐邊は、曇り日とはいへ、この眞晝間にまるで黄昏のやうだ。氣のよさゝうな老爺は、棚から和蘭陀喜(馬鈴薯)の蒸したのを取り下ろして勸めて呉れた。しかし翁の言葉は纏れるやうで私には分かり兼ねた、之が却て又よかつた。焼いて呉れたウグヒ(赤腹といふ魚)を肴に晝にする。後から荷を負つて來た菊太も、こゝで私達と一緒になれた。今年は桃がよく實らなかつたさうで、翁は獵夫たちどうなづき合ひながら軒へ被さるその木を見てゐる。戶外は山葵畑の上に垂れかゝる、降ることも降らぬとも知れない滲んだやうな空の下に、この一つ屋をとり巻いて空氣が一段と明るいやうだ。かうした纏まつた山人の生活を眺めると、そゝろに心憎くもなる。山葵畑に沿つてトチアまでは急坂になる。そこは小さな段になつて、木の間に八幡祠が壊滅に任してゐる。草間にドブと音を立てるトチア澤を渡ると、山坡に入つて上ヅウリ道祖神迄は一氣だ。茲は馬酔木の多い山の背で、そゝろに春の色が思はれる。今は栗の花が梢に生白い首を垂れてゐる。山人達は村でのいひ習はして、この花が白いうちは雨が降る、それが黒くなると晴れるといふことなごを話してくれる。見ると黒い花はまだ殆んど見出せなかつた。この山中に入つて左様のことはいへぬものをと、恨めしくもなる。微光に生きてゐるやうなカナヅがもう、あつちにもこつちにも、心に泌み込むやうに鳴き出す、せはしない聲だ。まだ暮れるには間があるのに、今更ら頼りない空が仰がれる。

見る限りコハゼの單純林が、頭上三尺のところへ雨も洩らさないやうな、眞青の押蓋をする下で、路が二ツになる。どちらも青葉の中に分れて、青葉の中へ消えてゐるが、右は大井川の本流へ飽く迄沿ふて行くもので、左のは駿遠信三國の國境あたりに蟠屈する、奥山の續きから搾れる生々しい水をば、この大谷へ捲き落とす信濃俣——八百八谷といはれる大井川の支流の中でも、水域の廣く深いのでは

恐らくは右へ出るものがあるまいといふ——へ入つて行くのださうだ。そしてそれこそ、私達ちの之から行かうとする路なのだ。さつき下の島の一ツ屋で、後から来る菊太を待つてゐる間に、松や茂が頻りに氣を揉んで「ナアニ今迄のやうな道ならいゝだが、信濃侯へ入ると中々悪場が多くて、橋でも落ちてるご一人ぢア後へも先きへも行かれぬやうになるがこわいだ」といつてゐたのを思ひ出す。心に強い期待を満たして、私はさりげなく青葉の中についてゐるこの恐ろしい道には入る。

緑の幕は切つて落された。私達は忽ち高い崖上に導かれた。どの位深いのか眼にも入らない信濃侯の上流の空に、一個尨大な岳がのつしと顯はれる。大きさを驚ろく程遠つてゐたが、正しく昨日諏訪の段から眺めたその山なのだ。昂つた肩から掛けて、筋肉のハチ切れさうな上河内岳！麓から匍ひ登る潤葉針葉の林、雪解の跡に萌え出たらしい若々しい緑りで埋められた幾つかの縦谷、頭から胸へかけ暗い緑りを浴せてゐる偃松帯、そんなものが驚喜に見張つた眼にも瞬間に識別される程も、もう近くなつてゐた。薄い水銀のやうな谷の吐息が、向ひ合つて立つ私と岳とを嘘のやうに隔てたり近づけたりする。始まつたぞ！と胸が早鐘を撞く。直ぐ私達は、赤くべとべとに薙ぎ落ちた崩れを、匍つて渡らなければならなかつた。

澤ザウリ澤は、一目に全體が見えない程の栓や朴などで眞暗に、深く閉ぢ込められてゐる。貴さい寶玉でも藏ふやうに。その水は仄かな光りを放つて、末はまだ大井川に落ちるのである。カニカウモリやその他の陰の草が一齊に潤葉を斜に捧げて、幽かな光りを享けてゐる。空の方からカナ／＼や、山人も名を知らない小鳥が、瀬音にもまぎれず、華やかでは無いが鋭い光りのある音を降り注ぐ、谷の空気を搾つて濃くしたやうな聲だ。松次郎の胴間聲が土の中の獣でも鳴くやうに聞えた。山のひらを出たり入つたりして、ダイノソウリやタテ澤を過ぎると、まだ眼には見えない信濃侯の冷たい息吹が、早やムラ／＼と顔にかゝる。

◎大井川奥山の旅 中村

一四

ソコモグリや山桃の大木が衝立つた峠めいた處から、自づと私達の足は西の空を指すやうになる、併し信濃侯は杳として底などは無いやうだ、この谷の上流は、西河内、中侯（本谷）、ガッチ河内どれもこれも雲で行き止まりだ。それが見える限りでも随分深い。天気がよけりあなア」と信濃侯の主の松爺は口惜しさうにいふ。谷の真中へ平たく乗り出した樺段といふ尾根の根方が彼の住居、今夜私達の泊まる大ヨキの小舎の在所だといふ、大分あるナと思ふ、しかし心は素直にうなづいた、もう何か大きな命令の前に甘んじて服従するといふやうに。全山の青葉が俄かにざはめくと、山らしい夕立が襲つて来る、本流の方はまるで暗だ。アタフタと樹立の深みへ逃げ込む。茂作衆は桐油紙でも引張つてゐるらか、大分遅いぞ」などいひながら、松爺は先づ烟草にする。悪場でも烟管を咬へてゐると力がつくといふ程好きなのだ。一としきりで壓力のある低い雲は岳の方へ移つて行つた。

三、信濃侯谷の奥

折立澤は大きい、それほど暗い感じはない、断崖にかゝると、木を伐つて急拵への棧を渡しながら、漸々私達は信濃侯の谷の深みへと引かれて行つた。眞青な露をハラ〜と襟首へ揺りこぼす雑木の枝をくゞり抜けて蒼い暗から、始めて水音のする國へのめり出ると、横なぐりトツタ澤がゾツと冷たいものを浴せかける。亂石を跳び越えて始めて私達は信濃侯の底に立つた。

あたり一面に狭霧がほう〜と立ち淀んで、乗り出した桂の枝が小揺れもせずにはポヤケかゝる下を、谷水は沈んだ色の小石の上を抑へるやうにツウツと通つてゆく。川原の石も、むら立つ蓬も、流木の膚も、凡てがしつとりと濡れてゐる。信濃侯の谷は、今靜かに眼を閉ちやうとしてゐるらしい。折から又降り出した雨を、日蔭ヤダイラの大きな桂の根方に避ける。水音は燥がしいどころか、ズウツと氣を落つけるやうに濃やかで、身じろぎもしない川霧の一顆一顆に溶け合つてゝもゐるやうだ。信濃侯

と聞くど何がなしに、眞白な雪を吐く奔湍と雷のやうな瀾音を想像するともなく想像して來た私は、初めオヤと思つた。そうしてやがてこの静寂の裡に、想像にも増した恐ろしい「力」を感じた。しまひにかうなくては信濃侯らしくないと思つた。向ふ岸の日向ヤダイラの山の神の森といふのや、上流の樺段が時たま氣づかないうちに、薄すりと顯はれてゐる、谷の見てゐる夢のやうな色だ。桂の木蔭もピツシヨリして來た、山人たちももう途中で暮れると覺悟したらしく、提灯などを用意してゐる。私は軽い懶さにごらはれてしまつて、松が「サア主人！」と聲を掛ける迄、ごここからか聞えて來る幽かな小鳥の聲にボンヤリ耳を貸してゐた。

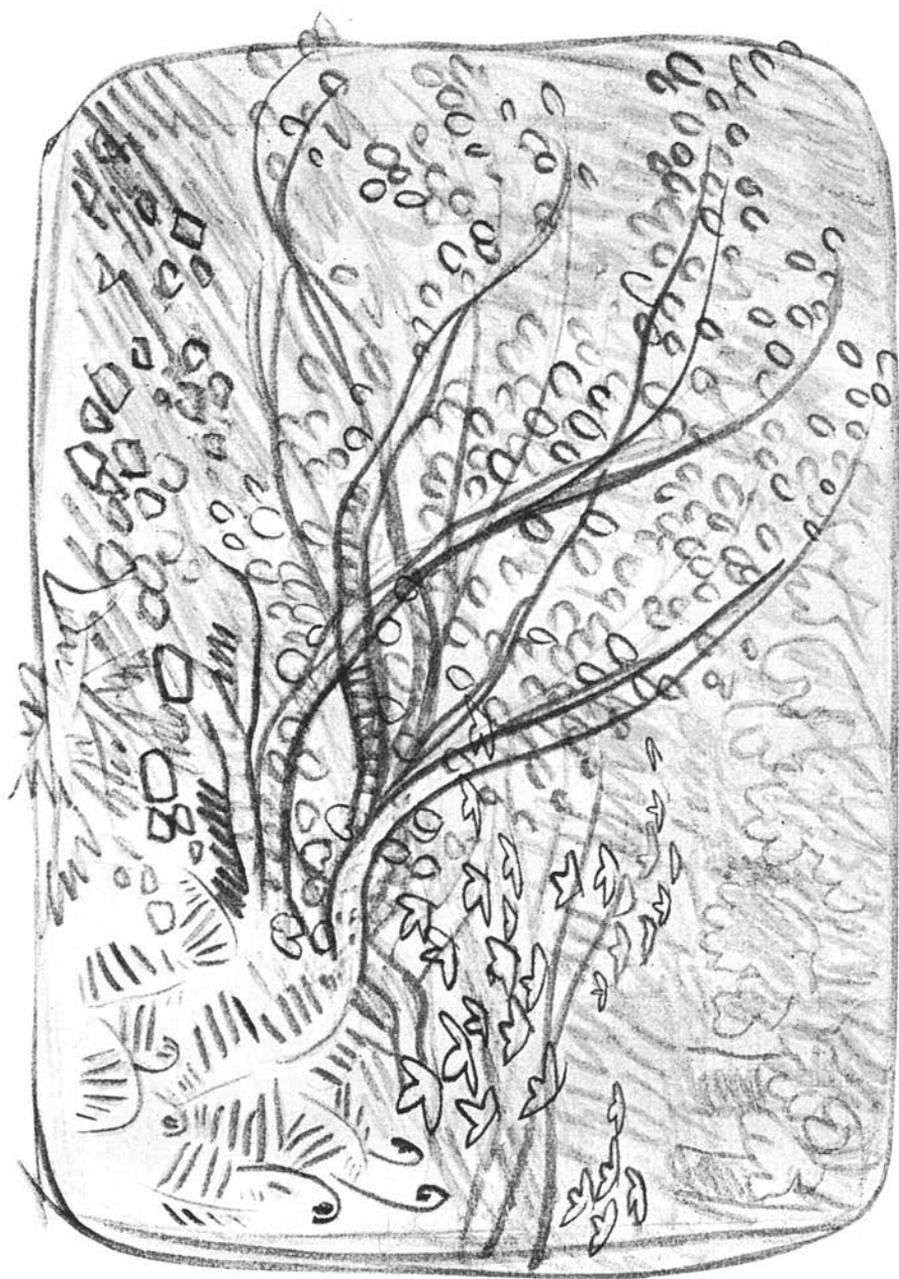
それでも岸ばかりは行けない、一ところ河床は白い脈を入れた暗緑の水成岩の廣い一枚張になつて、その薄く苔を被つた滑らかな背を、水とも思はれない滑らかなものがソツと過ぎてゆく、静寂そのもの、流れるけはひがある。ツと足を入れると、ザザツと慘らしく光る、ズーンと頭へ來るやうなので、周章して、向ふ岸に跳び上る。猿糞澤だと、松爺が荷棒ばんぼうを向ける方をチラと見ると、夜は早や、間近の木立迄迫つて來たのに氣がついた。その時はもう足は、濡れて濡れて怪しく光る笹の中を無暗に分けて、皮付きの丸太で組んだ荒けた小舎の前へ出てゐた。宿の益吉さんの椎茸を作る小舎だといふ。強い雨がゾーツと音を立て、注いで來て、伸び放題に伸びた四邊の草が一齊に身顛ひする。

暗と私達とは向ひ合つて走る車のやうに近づいた。谷のつく息が烟のやうにポーッと凝つてゐるのが見える許りになつた、信濃侯をグルリと一周りさせる山鼻——雲の中をガツチの岳から下りて來るのだといふ——を越える途中で、足がどうく自由にならなくなる、眼などはもうどうに役に立たなくなつてゐたのだ。提灯に火がヤツと點じられて、四周の間を赤黄ろくボカシ出すと、青葉から落ちる雫がガラリと光る。この色を見ると大分身體も落着いて來た。外の二人は續いて居なかつた、「ナニ道は知つてる衆だ、案じはねえだ」と爺は受合ふ。

脚の先きを眼にして、しごろに伸びた刺々しい草の裡に、角石の出た細い阻道を無意識に探つて行く。サクリ音がして、丈夫な草の活力が襲ふやうだ。松爺の翳す提灯がグラ／＼亂れて、動もすると、木の振り落す水滴にチュツと消え入りさうになる。折々立留まると遠い瀬の音が俄かにワ／＼と調子を高め、眼の前の梅の太木が見るうち頼りなく消えてしまひ、苔の香許り強く迷つてくる。やつと少し明るい處へ出たと思ふと、「サア御宿へ着きましたぞ」と松爺が提灯を照らして見せる、黒い大變大きな家だと思つた。

ガチ／＼いさせて、彼はきしむ大戸を力任せに押し開ける。中はかなり廣い板敷で、大きな爐を見付けた時は無暗に嬉しかつた。早速樺の皮へ火を移して隅々迄明るくする。蓆を出して呉れる、しまひに彼は何處からか投網を持ち出して来て、河原を少し見て來るといひながら、訝かる私を置いて、雨ど暗の中へサツサと出て行つた。私は勢よく燃え出した爐邊に足を投げ出して、ウツ／＼と獨りあたりを見廻したり、小歌みもない雨垂の音などを聞いてゐた。それでも後から來る者の目印に提灯を入口の棟木に掛けて置くことだけは忘れなかつた。やつと濡れた脚絆を脱らうとするとぬらぬらするものが手に觸はる、薄暗い蠟燭の火に照らすと山蛭だつた。三つ許りも背を圓くして、血に飽いたらしいのはポロリと落ちた、執念深く離れないのもあつた、拂ひ落した跡からは血が止め度もなく流れる、妖しい動物だ、出逢つたのは之が始めてだが、私にはこれが旅といふ感念と妙に放れ難いところがあつた。小さい時、旅好きの祖父からよく聞かされた、旅といふものに關聯した幾多のロマンチックな物語りが心の隅に漂ふ。

だしぬけに、「とても暗くて駄目だ」といひながら松爺が歸つて來る、「見され主人！それでもこれ河原へ行つた印しはあるだぞ」ニヤ／＼笑ひながら、水を噴くやうな魚籠を下タリ板敷へ投げ出すと、尺許りの鮎と岩魚が重なり合つてヌラリと光る。ホウ！と私もこの魔法使ひを賞讃せずには居られな



かつた。魚を探つて食はう、といふ楽しみは私達をこの小舎まで引張つて来た一つの方だつたが、暗くなつてその望みは絶えた。私は思つてゐたのだ。濡れホウケた後の二人が、それでも無事に着いてから、めらく燃え上る爐を中心にして、この荒溪の中の孤屋に珍らしい談し聲や笑ひ聲が起つた。凡てを引き包んで夜は益す雨に更けて行つた。

△七月十三日。午前五時駿州安倍郡田代出發。六時九分、クワイニス坂。六時四十五分、蛇ノ骨澤。七時四十分、カレエ澤。八時五十分、桑ノ木ツ、ミガレの岩下の休場。九時五十分。明神谷を渡る。十時廿分、サゴの休場。十一時十八分、ノダハギ段。午後十二時十五分、下ノ島孤屋。一時卅三分、同上出發。二時卅五分、大井川本流通路と信濃俣通路との分岐點。三時卅五分、澤ソリミタイソソリとの境。四時廿一分、峠狀地、之より信濃俣、五時卅分、折立澤を渡る。六時十分、信濃俣の河原に下る。七時五分、椎茸小舎。七時五十分、大ヨキ松次郎小舎着。

△田代より大ヨキ迄道程七里、下ノ島がその中途と稱してゐる。前半の方が距離が少し遠いやうだが、その代り後半の方が困難に於て大に勝つてゐる。

△この邊は陸地測量部地圖五萬井川圖幅に委しい。

寢覺めの耳へ、いろ／＼な物が、雨だぞ！と囁やくのを聞くど、もう何もかも懶うい。この永劫の谷間に巢喰ふ人の棲家にも又今日といふ日が明けたのであらう、眼ぶたがボツと薄明るい。ガヤ／＼いふ山人どもの聲、ピシヨ／＼する點滴、近間の青葉を叩く雨の音、時折り満山の木々をドツと揺する奥山嵐の唸り、又それ等總ての背景をなしてゐるやうな谷川の音、何もかも鬱陶しい低音を送つて來る中に、鶯のホー、ホホホ、キヨキヨといふ光るやうな聲ばかり、いかにもスツキリと浮び上つて、うつら／＼してゐる魂をビクリとさせる。山人たちは手ん手に、竿や網を持つて魚を探りに出掛けるといふので、簀が役に立つとか立たぬとか、いひ合つてゐる。私は昨日濡れたセイか懶るいで、やつぱり横になつたまゝ、板羽目から吹き込んだしぶきが、隅の蜘蛛の巢をブラチナの細線のや

うに光らしてゐるのなごを眺めてゐた。

起き上がったのは午近い頃、探つて來た許りの鮎や岩魚を、ギョデンにしたりブツ／＼切りにして汁の中へ入れたりして。遅い晝飯にする。松爺が薬味に濡れた紫蘇の青葉をむしつて呉れたのは嬉しかった。雨の息をつく隙を窺つては、山人手作りの無細工な下駄をつゝかけて、そこらへ出て見る。小舎の内外何もかも整つてゐるのには驚ろいた。三間に四間程の、屋根には例の石を戴せた巖丈な建物は、半分が土間、半分がこの板敷の住居である。真中に大きな爐があり、岩魚の形を摸した自在鍵が垂れ、側には茶箆筥やらの棚があつて、瓶やら茶道具やら、飯茶碗やらが置いてある。壁には鹿の角の折れ釘に、熊の敷皮や鐵砲やカン／＼、釣竿、魚籠、松明用の樺の皮などがズラリと掛け列ねてある。そして入口には破れや雨じみで散々になつてはゐるが障子が引いてある。土間の方は薪などが積んであるが、よく獲物をコナシたりするし、明け放しだから松爺が留守の時など、勝手に獵師などが泊ることもあるさうだ。前は前栽めいたところで、夏草に交つて豆、葱、紫蘇、瓜などが爺の丹青で出來てゐる。水はちき上手に落ちる大ヨキ澤から汲むのだ、流石松爺が十二年來の棲家さうなづかれる。

一體此處大ヨキは、信濃侯の深い谷間に臨む山腹に懸つた、掌大の平地で、この小舎と圃と物などを干す少し許りの草原とがその總てだ。四方悉くいかつい山だが、その中南の方ばかり空が稍扇の地紙なりに擴がつて、谷水もそつちへ流れる、小舎もそつちの方へ顔を向けてゐる、今日はドス黒い雲も足早にそつちの方へ飛んで行く。その方角を睨んで松爺が、「まづいぞ」と顔をしかめる。信濃侯は覗いた眼に、青く冴えた淵と僅かの瀬とを見せるに過ぎない。先年妻に別れたといふ松爺の孤獨な生活は、この原始の谷間のはかない小舎を中心にして、岩と水と木の間を幽かに輪廻してゐるのだ。過去もさうだつた、未來も恐らくはさうであらう。年は幾つと聞いたらよく知らなかつたのも無理はない、村へ歸つてから眼鏡を掛けて、唇を繰つて、五十三歳だと自ら確かめるやうに繰返へしてゐた。

午過ぎには風がゴーと遠鳴りして、時折り雲がパツと吹き拂はれると、下流に西河内の谷間が深い深い紫を淀まし、源近い唐松ガレが妖しい牡丹色を吐く。上流は小舎を埋め盡さうとする潤葉樹の茂りからかけて、亂れに亂れる青菜の上に、下築地ガレが古い刀疵のやうに薄光り、高い高いガッチ中俣の合尾根といふのが、蒼黒の膚に生々しいシミ崩れを曝しながら、雲の浪に揉まれ、漂はされ、グラグラ揺れてゐる。どこからか濡れた大木を擔いで来てコナシてゐた松爺が、腰を伸した序に空を仰いで、大分雲行きがいゝといつた。晩には蜂蜜を出して呉れる、古いのださうだが味はいゝ、軒に掛けてある箱が巢だつた。

今夜は耳を塞ぐやうな点滴は餘り聞えず、谷の水音と峯を渡る風の音とが一緒になつて、私の思ひをズツと高い方へ運んで行つた。

朝の雲足は昨日のやうに早かつたが、心持ち南の方へ向きの變はつたのが何よりの力だ。けれども山人達は、一つ「タテ洪水」の出る程大降りしなけりあ、ほんとの天氣にはならぬといふ。此處に居るうち谷の水嵩が増すとそれつきりだ、一つ尾根へ逃げて新田の岳へ抜けるといふ手だてはあるもの。それでなくとも心は上へ上へと噪ぐ、水の中の藍靛のやうな上流の山と、同じやうに暗い山人の顔とを眺めてゐた私は、思ひ切つて「登らう」と言つて見た。愚圖々々してゐては、氣も身體もデユクデユクに濡れてしまひさうだ。この状態を脱する丈けでもいゝ、山人たちも、もう悪びれはしなかつた。私は心のうちで彼等に謝した。

大ヨキ澤から暫らくは、まだ夜の匂ひの迷つてゐる梅の林だ。壊れかゝつた山神の祠に黙禱しながら行く。河原に下り立つと下築地ガレが重苦しく頭の上へのしかゝる。餘程年代が経つと見えて頼り無げな滑つこい岩間へチョコビくゝと灌木などが生へてゐる。兩岸は額と額とを衝き合はせて、人は水の中を行くより仕方がなくなる。やつと向ふ岸に逃れると、又直きに追ひ戻される、どころどころに

沈んでゐる黄緑の水成岩が。冴え切つた極寒の水に幾らかの温味を注してゐるやうだ。鮎がフツと通る腹の鱗がキラリと水の光りの焦点になつて、冷やかさがゾツと人に働らきかける。或は又川蟲のやうに崖をへつる腰から下は藍色に染まつたやうな氣がする。

向ふ岸（右岸）から奥築地ガレが、自分の刎ね飛ばした木の骨を跨いだりくゞつたりして性急に落ちて来る。茲で又通せん坊を食つた私達は、流水が辛く横さまに引かゝつて居る上を抜き足しで渡つた。恐らく刻々に増して来るらしい谷水は、勢ひ猛に流水のたゞ中を躍り越える。おどなく水へは入つた方が、よほど氣が樂だ、無数の目がこの憐れむべき輕業を圍んで、今にも嘲笑を浴せやうと待かまへてゐるやうだ。私は無雜作なものだ、先きへ渡つて棒を差出しては皆を助けてゐる。シナノ木が枝を重ね合はせてゐる山坡にもぐり込むと、重々しい苔の香がブン／＼する。息をハツマせて匍ひ上れば、何時か水からは遠ざかつて、果てしもない青葉の圍みに陥る。

山人達ちはもうキョ／＼して、獸の足跡を荷棒で教へてくれる、熊が嘗めた跡ださうで、搔きむしられた巢から狼狽へた蟻が、右往左往してゐる、私達が來た爲めに命が助かつたとも知らないやうに。松爺は荷さへなけりあなア、と大ヨキに置いて來兼ねた鐵砲を、ひねくりながら吐やく。森の中のふやけ切つた倒木には「アマブリ」菌が咲く、淡い脂色がブヨ／＼してゐる皺の中には、森の神經でも集まつてゐるやうだ、氣味の悪い耳茸。松は之は食べる菌だ、といつて止めるのも肯かず、食つてしまふ。

青葉隠れに押切山かけて、ガツチ中俣の合尾根がよほど近くなる。梅の梢のサルノオガセを顛はしてカナ／＼が頻りに鳴く。小澤と中俣が見えない足の底で鳴り合ふ、ガツチ河内はもう下手になつたさうだ。茲で私達はシ、崩れの道を取らうか、中俣へ入らうかといふ追分けに立つことになつた。泊るのに水が自由だから、といふので中俣へ入ることにする。暫らくは小澤について、細徑は愈怪しく

なる。とある獨木橋で、それがグラリと廻つたハツミに私は仰のけに崖腹へ落込んだ、掌を少し割いたいけで濟んだが、皆驚ろいたらしい。瞬間に登れなくなるゝ大變だといふ恐れ許りを抱いた私は、彼等に強て笑顔を示して、大丈夫だと繰返へして、自分でもホツと安心した。乗り出した灌木に支へられたのだが、下にはさして深くは無いものゝ奔湍が白く泡立つてゐた。

小澤を越して熊びら峠といふのへかゝる、峠とはいへ伸びられる丈け伸びたといふやうな、梅で眞暗な小澤と中俣の合尾根を、どこ迄も傳はつて登るのだ。落葉が積り積つてフハリとする地肌から、ドウダンがヒョロ／＼と伸びてゐる。熊の寝た跡や糞などが方々にある、梅の樹皮を剥いで脂を嘗めた跡などもある、赤い菌が亂らかつてゐるのは猿の仕業ださうだ、本鹿やニク(倉猪)はもうみらい(柔かい)岳の草を食ひに高みへ登つたさうで跡が少ないといふ、處々にこの邊に見えない黒松(方言)の實が落ちてゐるのを松爺は、カケスが持つて來たもんずらいと言つた。彼等は獸の生活を語ると、隣人の生活を語るよりも委しい。今の今迄鳥や獸が、獵師でも電が降る時分でなくては來ないといふこの自由の樂園で、てんでに勝手なことをしてゐたのが眼に見えるやうだ。私もその仲間入りをしに來たのではないか。

妙に赭黒いシ、崩れが眼の前へ出て來る、曇つてゐるのが幸だ、日でも照られたら耐まるまい。長い長い熊平峠が終ると山腹になる、シナノ木が遙かの空にバツと枝を擡げて、さらでも弱い谷間の薄日を断ち切つてしまふ。まだ午過ぎて幾らも經たないのに、早や暮れやしなやかと心忙しい。一面に灰色の、獸の足跡と保つ位細かい、しかし刺立つた岩片が崩れかゝる處に、徑とはいへ足を托するにも覺束ないのが、杜切れ杜切れについてゐるのだ。

杓子澤が眼の前に、雪のやうな瀑を押し落とした時には、やつと少し頭がハツキリして來た。黒い粘板岩質の岩肌が冷たい汗を滲ましてつる／＼する。虎杖や矢車草がうつ向いて、チヨイと水へ觸れて

◎大井川奥山の旅 中村

二二

は身顛ひをする。山人は早速火を焚きつける、鍋へ水を汲んで先づ茶を煮るのだ。飯を食ふのに茶が無くてはゐられぬといふ、御國柄少さい時からの習慣ださうだ。嚴めしい山鉦と一緒に、腰へ小さい袋を下げてゐるのが何か持薬でもあるかと思つたら、粉茶が入れてあるのだ、おかしくなつた。又幽鬱な路が始まる、今度は山毛櫛だ、やはり恐ろしい高い。山鼻を廻ると中俣の本谷は北の方へ離れ去る、私達の入らうといふ百又澤(トンヤゴヤ澤ともいふ)にはスル〜と雲の垂幕が下りかゝつて、僅かに奥の方にはの白い岩が薄眼を開けたやうに見える許りだ。兩谷はこゝで落谷ふのだといふけれども、眼に入るのは唯果てしてもない青葉だ、寧ろ緑りそのもの、變化だ、常夜の國! 古生層山谷の「深さ」には今更らのやうに嘆じてしまつた。耳元で四十雀が鳴く。

もう路はしごろもごろだ。偶ま樹幹に刻まれた鈍の覺束ない痕が頼りになるだけ、やゝ平らなヂェクヂェクした處へ迷ひ込む。草間を浸すありとも見えない水が、妙に暗く冷たい。長い草を折り敷いた猪の床もあつた、まだ温か味がありさうだ。さうかと思ふと、山神の祠といつて木ッ葉の固まりとしか思へないのがあり、小舎場の腐れ骨まで見付ける。山人の所謂「トンヤゴヤ」で、十六年とか以前にこの下で木伐をつた時のものださうだ。この百又澤ではよく人が迷ふさうだが、それは強ち小俣が多いといふ許りでもあるまい、森の妄執——そんなものが未だに迷つてゐるではあるまいか。對岸のタル澤を梢越しに見上げて百又澤へ出る。象皮の亂岩が無暗に積み上がった處へ、水は容捨なくドツと瀑を懸ける。冷たい飛沫を頭から浴びながら、ザハ〜と被さつて來る雜木雜草を、先登の松次が力任せに薙ぎ倒す。青い血烟がバツと四邊に散亂して、生くさい香がツンと鼻へ泌みる。パチ〜二三滴來たナと思ふうちに、ザーツと狭い谷は眞白になる。僅かの淵迄が一緒になつて、ピョン〜跳り出す。私達は身を細めて立ちすくむより仕方がなかつた。そのケロリと靜まつた跡へ、青葉がハラハラと舞ひ落ちるのが耐らなく寂しい。

百又澤の名に背かず、澤は幾つにも小魚の骨のやうに岐れる、何でも真中あたりの太い尾根をどんどん登る。梅もシナの木も樹といふ樹の膚には、老緑の苔が房さりして、下は羊歯やカニカウモリや一面の蔭の草が、歩くど痛々しい衣摺れのやうな音を立てる。遠い木立は薄紫にボケて、青白い霧の匂ひと苔の香とが緩く木の間を流れる。深いナ、と思はず言つた私の聲は高かつたが、獨言になつてしまつた。見され主人、下で見た白い岩より上へ来たぞ」と松次が顎でしやくる。私は無言で、谷底の方に通つて来た山々を物色したが、垂幕はどうに私達の後ろに下りてゐたので、何一つ見えることはない。氣は自分分でわかる程落着いて来た。併し山人どもは泊り場所で、先刻から心配してゐる。獸の足跡を拾つて深くもない谷底へ下りて見たが、見上げるやうな大岩の下に聊か凹みはあるもの、水が浸いて役に立たぬ、うつかり岩間へ寝れば「飛び石」がこわいといふ。見上げたところ、冷やかな石の溪はムツと雲から垂れてゐる許りだ。とりつき場もあることではない。

又森に逃げ込む、ヤツとポロ〜に腐朽した又手（材木を落す柵）か小舎場かといふやうなものを探り出した時は、もう緩くりしてゐられない時刻になつてしまつた。僅かの平らを均らす、石を投げ出す、木を叩き伐る、草を薙ぐ、いろ〜な聞き馴れない雑音が、塗つたやうな森の静謐を破る。何となく氣が措ける、何かしら眠つてゐる大きなもの、神經を喚び醒ましはせぬかといふやうに。ぐしやぐしやした泥の中から、薄黄ろい微の匂ひがムンムと上る。そこから異形のぬもりがぬら〜と匂ひ出た。あゝと思ふうちに、松爺は手早く押さへて、有り合ふ木の枝に申指しにしてしまふ。菊太はこんなものがあつたと見せる、砥石だ。私はそゝろ十六年前とかいふ山人共の生活を想像した、けれどもこの恒久の自然にとつて十六年は真に一瞬であつたらう、そして床にしたらしい組丸太を押分けて、見上げるやうな澤胡栗がヌツクと生へてゐる。

こんな所だけに水が近間にあるのは幸ひだつた。天幕の上から梅に交つて大きなシナの木や楓桂な

◎大井川奥山の旅 中村

二四

どが潤葉をフツサリと翳しかけて呉れる。しかし火を焚く迄は蛸が集まつて来て困つた。白い烟がモクモク擴がつて、どつしりした霧の中へ割り込んでゆく。果ては霧とも烟ともつかない、灰白い氣に化つて四邊を囿める、その中に頭の上のシナの木が墨を潑ねかしたやうに滲じむ。飯がフツフツいて煮え上がると、鍋蓋の裏へ山の神の御初穂を取つて、テンデに二粒三粒一寸頂いて食べる。しかしいつの間にか松爺が、焚火の側で焼いたと見えて、先きのゐもりの申指を平氣で噛つた時には、私は何だかあたりが見廻はされた、このまゝでは濟まないぞといふやうな氣がした。

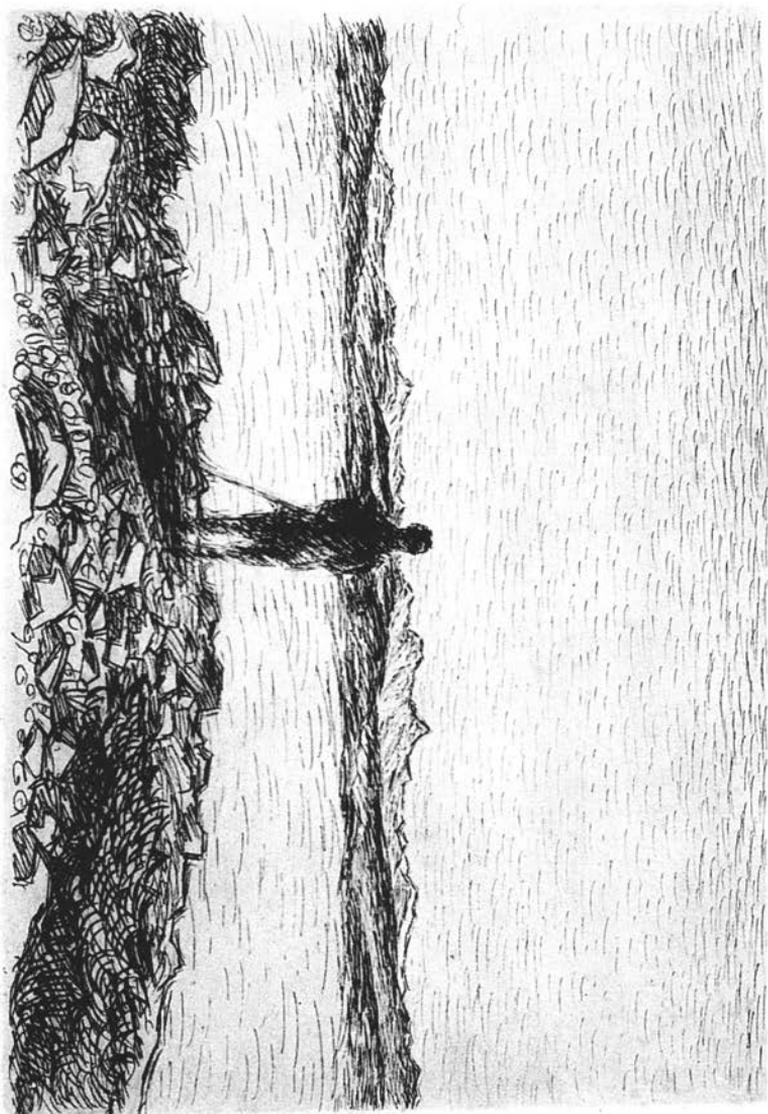
△七月十五日。午前八時五十五分、大ヨキ小舎出發。九時廿分、奥築地^{ツイヂ}ガレ。十時三十分、中澤小澤追分け。十二時、熊平峠中。途。午後一時五分、熊平峠終る。一時廿五分、杓子澤(靈食)。二時卅分出發。三時卅五分、トンヤゴヤ澤に入る。四時五分、澤三分す、右と中央との間尾根に入る。四時四十分、白き大岩上、澤の右岸林中に野營。

△地圖はやはり陸地測量部五萬井川圖幅。

四、駿遠信の國境

(光岳及びバイザルケ岳)

あけ方の霧が身じろぎもせず立ちこめてゐる森の、あつちからもこつちからも駒鳥の聲が鋭く鳴き交はす。天地に白金の矢が織るやうに飛びちがふ。霧の顆は一つ一つその閃めきを反射して、靜かな朝が来る。私の心も光つてくるやうだ。昨夜は折り敷いた床の羊齒が水を噴く、更けてからは冷たい雨迄降り出したので、皆寒さに顫へた。手早く寢道具などを片付けて、出掛ける時分には、森の霧は少女の頬のやうにポツと赤らんで、時々天上の綠葉を洩れる日が、無數の匂ひの高い金環を撒き亂らす。雲の行衛も見分けられるやうになる、昨日のやうに南の空を指してゐるのが、いひやうもなく氣強い。



百又澤の灰白けた石瀧を匍ひ登る。淡い陽炎が眼の先きにチラつく。私の足は早かつた、振り向くと谷の空を横さまに截つて、大井川向ふの大淵澤の入りあたりが、まだこつち側は紫紺色に眼をつぶつてゐる。頭許り見えてゐた山人達は、「えらいぞ、えらいぞ」と呼吸を切りながら、いつか足元の河原達の中から顔を出す、もう汗みごろだ。仰げばまだ針葉樹の林と思はれるあたりまで、雲がづつしりと下りて、それがまだ餘程遠い。そつちから氣を抑へつけるやうな風がフーツと颯してくる。水はもう動やもすると、谷間の空氣を喘ぐやうに一口吸つては、眞暗な岩のはさまにもぐり込んでしまふ。

谷の一方に心をどよろかせるものがあつた。雪！表は一面に岩泥が刎ねかり、木の古枝などがつかかゝつて酷らしく汚れてはゐるもの、裂け口からは水づいた白光がギロ／＼人を睨む。(恐らくは)日本アルプス極南の雪！、早や幾何の生命であらう、こゝにも數奇な運命がある。彼が悲壯な最後を遂げる時こそ、重苦しい雲の群がこの谷を見捨てる時であらう。松次が指す方を見ると、凄まじいのはこの雪や樹屍の故郷であつた。反對の山腹は痛ましい迄に裂創を開けて、この癡癡の谷底を覗き込んでゐる。澤縁りに密生する灌木などは、もう恐ろしい力を眼の前に見せるやうに、腹匍ひになつてやつと擡げた頭に、青葉をチヨビ／＼と翳してゐる。

谷は止めどもなく岐れ岐れて雲の中へもぐり込む。私達も右に入り左に入り、唯もう雲の方へ行く許りだ。ヤウラクツ、ジがぼつ／＼細紅を點する。立留まつて不圖後ろを顧みた時。淡い藍色を捏ね返へした遠い空に不二の一線がキラリと落ちてゐた時には、叫び出さずにはゐられなかつた。下に蹠まる東河内日蔭澤入りの山々も早や遠く離れたものになつた。それもさうであらう、谷の水は額を掠めるやうになつたのだ、雲は一步で私どもを呑まうとしてゐる。岩片は微塵になつて崩れ放題だ、押し流されやうとする脚を四ツ匍ひになつて耐える、何かなし蟻地獄に落ちたみじめな蟻のさまを思

ひ出す。

◎大井川奥山の旅 中村

二六

溝谿——流石谷も、う淺くなつた、山人の所謂窪といふもの——を埋める藪と岳蕨との中へ、獸のやうに匂ひ込んだ時は既に、雲の懷であつた。草の刺が冷たく汗ばんだ肌に、怪しくイラ〜と泌みる。窪の中段に、少し許りの水が虺ひ廻つてゐる處がある、雲の國で始めて見得る柔かい若々しい緑りの色が私達を押包んだ、心がなごむやうな色だ。私達は自然もう谷——水と別かれなければならなくなつたのだ、松が草の潤葉をむしつて、猪口のやうに疊んで水を掬つて飲んで見せる、私も眞似した、青葉の盃の中のは水でなかつた、薄荷酒のやうに芳烈なものだつた。

氣まぐれな獸の足跡を追つて、唐檜の森林を匂ひ上ると、濕つばい脂の香を交へて、雲の匂ひが愈深くなる。木の間の薄光りが段々沈む。「寸又（大井川支流）境は直ぐだぞ、主人！」と松が後ろから呼ばう。私は夢中に嘔け登つた。心を轟かせて峯の馬背——赤石山脈頂上の一地点——に立つと灰色の大氣が胸苦しくズン〜と物を壓へつけるやうに寄せて来る。見る限り深山槐、唐檜、樺などの大木が空へ頭を突込んで、木影のゴゼンタチバナやイハカミを古池の藻の花のやうに、ハツキリと浮き出させる。寸又川の大谷、白日にも光りを呑んで夜のやうだといふ駿遠信國境の山々も、今は何處であらう。深さの知れない霧の海が、眼の先きの唐檜の枝に裂けて、バツ〜と葉裏に細かい南京玉を播き亂らす許りだ。寸又の谷によく獵に行くといふ茂作は、霧の中を透して見て舌打ちをする。私はこの行程にも一小段落が付いたといふやうな氣がして、心がうろ〜としてゐる。

馬の背を傳つて、ノロ〜と「切り明け」が通つてゐる、千頭山の御料林の界ださうだ、そこを私達は辿つて行く、見えない北の空を指して。所々さ、やかな木杭などがあるけれど、頭の釘が鏽の固まりになり、人間の匂ひは最早や消えかゝつた文字と共に微かである。白いキンボウゲがよろ〜と倒れかゝる、羊齒やカニカウモリが茂りに茂つて瑞々しい緑りを滴らす。間近からドドツと倒れた朽

木に響く物音は、夢を破られた鹿の逃れたのであらう。山の背はいつか廣くなる、果ては左右に蒼黒い堤防を作つて私共をその中に押し包み、東北の空へと運んで行く。行き止りは干上がつた泥沼で、猪やら鹿やら、蹄の痕がソックリ残つてゐる、彼等の水を飲んだ跡ださうだ、山人どもの通用語では「ノタ」今更にその中へ奇怪な人間の足跡が加はつた。

緩く縦よこに波を打つ山上を、唐檜の森林は果てしもなく深い、僅かの木の間木の間は霧が悉く暗い紫色に塗り込めてゐる。深い色だ。無限の深さが四邊から迫つて、そこに狭い眼界を與へて私達を保つてゐる。その眼界さへ今にも脆く閉ぢられてしまひさうだ。この僅かに許された暗緑の寂しい世界を運んで、四人の人間が蝸牛のやうに押し黙つて北の方へ旅して行く。

時は経つた。森もいつか疎らに低まつて、上層の霧が頭から冷やつこく散りかゝる。足元のオヤマリンダウやタケビル（方言）やツマトリサウにも、高い處へ来たよといふ暗示はたつぶりある。馬の背が又クルリと北を望むと、サアーツと沈んだ聲が耳元へ忍び込む、低い聲だが心の底迄徹る聲だ。そしてわざと有り餘る力を潛めてゐるやうな聲だ。かういふ聲を聞くと今に何か異常な事が始まるやうな感が漠然と起つて胸の騒ぐのが私の癖だ、夢の中でよくそんな聲に脅やかされることがある。急にワアーツと千百萬倍の聲になつて、凡てがその下に厭倒されてしまひさうな。「ありあ中俣（信濃俣）すらい」と松爺が烟を吐きながら事も無げにいふ。私は合點いた、どうしてもあの谷——底の知れないやうな——の聲に違ひない。ニツチン（蜂）が耳元でブン／＼唸り出すと幻想は破れる、こいつア何處迄も居る奴だゾと松が茂を顧みる。

唐檜がオヤと思ふ間にすくんでしまふと、荒つばい突き放すやうな西風が真横からドツと吹き當てる、日木アルブスを通じての恒風だ。白い花をもつた石楠花が足元でカリ／＼鳴り出す、偃松がザハザハと蠕動し始める。一瞬の間に天地は一變した、親しみの深い顔がそこにもこゝにもある。愈よと

◎大井川奥山の旅 中村

二八

全神經が一齊にツマ立つ。そして何かに感謝するやうな心持ちになる。細かい紫褐色の岩片がシットリと水を打つた中を、風に凭れるやうにして、どん／＼進んで行つた私はいつか山人達を後ろに置いて来てしまつた。無制限に白霧を飛ばす疾風は、焼け山（山人たちはこの岩片剥落散亂した兀山のどこかういつてゐる）を蔽ふ偃松にザハ／＼と幾條もの足跡を付けて、大井川に跳り込むと山側一面の偃松や石楠花や樺の中になぐれ落ちて、パツ／＼と纏れる霧を捲き返へしてゐる。

私は全く新たになつたやうな氣持ちで四邊を見廻した。生れてこの方幾百萬年、嘗ては我々の祖先に懐かしい棲家を興へたこともあつたらうか、雲が湧き、水が流れ、雪は幾度か積り幾度か消え、かくして人間の歴史は一瞬の間に飛び去つたが、そのうちには、長いこと太平洋の岸を通ずる街道を往來する數多の旅人たち——その多くは悲しむものも樂しむものも、齊しく足元許りに氣をとられてゐる中を、僅かに見出した多感な心と、電光のやうに交通したこともあつたであらうか——斯くて今も猶ほ、そして未來も恐らくは永遠に、この凡てのものがウツトリ酔つたやうな、ほしいまゝな南方の空に、獨り荒らかな光りと色と音とを苛ら立たせてゐるこの赤石の山脈！岩石、雪塊、偃松、草、………周囲の總てに向つて私は敬虔と愛との混沌とした心を以て對しないわけには行かなかつた。寧ろ小さな自分を現在のそこに見出して空恐ろしくもなつた。

足早に過ぎて行く霧は、折々かすれてギザ／＼の口を開ける、そこからチラと脈を打つ尾根續きの峯や、信遠國境をめぐる群山の瑞々しい藍色が、鋭く眼底へ食ひ込んで離れない。一遍背を沈めた山勢は再び捲き起つて、荒けたこと前よりも甚だしい高みを盛り上げる。高低常なき山勢がまた一度霧の底へ沈んでからは再び浮き上がつても偃松は見えなかつた。忙しく見廻はした私の眼は空しく唐松や樺を徘徊ふに過ぎない、私の心はこの蒼黒い刺々しい植物を缺いて貧しくなつた、半ばに惜くも夢を破られたときのやうに。しかしとある木影に。パツと明るい空氣を匂はせてゐる信濃金梅を一輪

見出してからは心は後へ残らなかつた。

唐檜などが疎らに衝立つてゐる小高い峯角で、山脈が二俣になる、西へ行くか東へ行くか、かう霧にとり込められては松次にも足が出ないといふ。御料局で立てた標石が足元にある、遠い異邦で同國人がめぐり合つた程の懐かしさはあるものゝ、双方の心と心とがうまく通じないのは是非もない、俺とお前とは没交渉だよといふやうな眼つきだ、彼が背に負つてゐるのは或る(小さな)「必要」なのだ、それが彼をこんな處で毎日雲と睨めつこをさしてゐるのだ。天外で孤獨を感じさせるのは自然ではなかつた。そこへ不意に——然り不意に、東の空へ溢色の圓塔がヌツクと顯はれた、その時は蘇へつた、足踏みをした。イザルヶ岳だと松爺が教へてくれる、怪しい僧形のこの岳は、この山脈にして始めて見得べき形と色とを持つたものだつた——南方古生層地に君臨する帝王として、いかにも相應しい權威を狭んでゐると見えた。

信濃侯へ面した急崖は、荒れ切つた膚が凄惨な光りを放つ、それに引換へ西向きの山背は、一個廣やかな盆状の高原で、蒼黒の偃松を波と湛え、底に暗い鏽びた一面の古鏡を藏してゐるけはひがある。凡そ山上の高原くらゐ、山の旅人の尖つた神経に寛ぎを與へるものはあるまい、そんな所に一張の天幕を翳して、花の蔭に快く疲れた身體を横たへた時が、どんなに楽しいことだらう、この眺めはほんの一瞬に過ぎなかつたが、私達の足は自然にその方へ向いて下りて行つた。歩々に境の幽かになることが感じられる、それを確かめるやうに胸が高く波打つ。偃松から矮さな樺の木の間にかけて、もう天上の純の極なる色の流れがこゝ迄來てゐる、流れはバツと微光を放つ、その中へ飛込んだ私は冷い陽炎に酔つてしまつた。ヤマハ、コ、オトギリサウ、ヨツバシホガマ、ミツバワウレン、ツガザクラ、高根董、小岩鏡……もう隨處に喜びが滿ち溢れてゐる。私は跪づいて頬ずりをしないでゐるはなれなかつた。山人達は振り向いて笑ひながら、村の子供を草刈場へ連れて行つたやうだ、など、嘲ける。

◎大井川奥山の旅 中村

三〇

信濃侯の谷間に亂れる霧のおごろの髪を、崩れかゝる崖の頂きから覗き込んだ許りで、サツサと平の方へもぐり込む。獸の道が自ら偃松の間を池の方へ導いて呉れる。薄濁りした淺い瀧水だ。黒い墓がのそりと匍ひ出てこつちを見てゐる。周圍は深い偃松、白檜はこゝでは小さくなつて肩をすばめてゐる。ミヤマナ、カマドの青白い花がその中にポツカリ抜け出る。どう／＼冷たい岳の雨が降り注いで來た、大急ぎで池畔の天狗樺（方言）の蔭へ這入り込んで、枝から枝へ桐油を掛け渡して凌ぐ。西風が雨の脚を横なぐりにヘン折つて、偃松も樺も七竈もザツ／＼と寒い音を立て、揺らめき合ひ、飛沫が一際濃い霧を噴き上げる。靜かな池の面もザラ／＼刺立つて鉛を削るやうな光りを放つ、何だかあの飛沫の中でサツキの墓が躍り狂つてゐるやうな氣がする。

忽ちに頭上の油紙は猪口のやうになつて氷つた水滴を首筋に注ぐ、押し上げるとザーツと瀧のやうに流れ落ちる。山人達はこの中でも例の如く悠々茶を煮て、遅晝飯をすゝめて呉れる。雨は再び霧になる、濃い霧の塊まりが何か一刻も忽せに出來ない使命を果たすといふ風に、後から後から目ま苦しく押し重なつて、大井川の絶谷に落ちて行く、何が始まるだらう。白ぼけた顔をして焚火から離れにくがつてゐるが、暮れぬ前に少しでも進んで、いゝ泊り場所を見つけないければならないので、氣を揃へて出掛ける。偃松の淺みを北につつ切ると、廣やかな草原へ出る。寂しい程平らな原だ。霧がその上へスツポリ蓋をしてしまふ。ニヨホウチドリやハクサンイチゲなどが濡れに濡れて重さうにつつ伏してゐる。黄昏の春の野に似た色が流れる。

しかしこの霧で、先きに泊り場所を得らるゝあても無かつた。偃松と樺の茂り合つた山の背やら腹やらを、小一時間掻き分けた揚句、全身水に浸かつたやうになつて、原々ど叫びながら又元の處へ争つて戻り、ホツと息をついた。一度偃松の梢から、淡い青空を背負つて、岳の丹塗りの膚がきらめいたものゝ、もう心は原に落ついてしまつた。低いツガザクラを蔭にして、大きな火の前に、ピンと形

よく張られた天幕の中へ横はたつた時は、皆偃松の中の苦しみを言ひ合つて笑つた。

二千五百米突の山上の高原！原の果ては偃松がぐるりと、嚴めしい垣を結つてゐる、此處はその或る根方だ。霧はだん／＼天幕を捲きくるめて、近い偃松さへ白く化つてしまつた時には、銀の微粒がハラ／＼身の廻り迄迷ひ込んで來た。

△七月十六日。午前九時七分、百又澤上流露營地出發。十時十五分、谷二岐左をさる。十一時十六分、谷二岐左をさる。十二時、澤上流最後の湧水。午後十二時廿分、赤石山脈山背に登る。一時四十三分、山脈著しく北微西に轉向す。二時二分、一高處、石楠花偃松始めて顯はる。二時廿分、一高處、御料局界標あり。二時廿八分、駿遠信國境に當る高處、山脈二岐左遠信界光岳へ、右信駿界イザルケ岳へ。二時四十五分、イザルケ岳南方の窪地に池を得、休憩。四時十五分、出發附近露營地搜索の爲め彷徨。五時、窪地に隣れる高原の一端に野營。

△地圖は陸地測量部五萬井川圖幅が、この行程の途中で盡き、其の先きは未出版故今の所信憑するに足る地圖は無いといつてもいい。百又澤の上流を登つて赤石主脈に達したのは井川圖幅に所謂信濃俣なる三角點に近い、凡そ二千百米位の處らしい。之を北方に進んで同圖に絶えるが駿遠信三國界迄は之に餘程近いであらう、海拔凡そ二千五百七十米位だ。茲は別に著しい峯頭を作つて居ない、一方は北に走つて後出のイザルケ岳に向ひ、一方は直ちに一峯後に確めた光岳（二五九一米）から加々森（二四一九米）。池口岳（二三七五米）と遠信の界を劃する。現にこの國境だ、從來の地圖では最も信用の出来る農商務廿萬でも四十萬でも實際よりは餘程北方に寄つてゐる。

翌る日は朝も晝も夕も無いやうな日で、一日眞暗な霧の中を迷ひ歩いたばかり、暗さが心の中まで浸み透つてしまつた。そして又同じ原の一端迄戻らなければならなかつたみじめさ。三時半だつた、寝たかと思ふうちもう眼が冴えてしまつたのに、天幕に怪しい音が立つて、外は昨日よりも激しい雨西風が天地を我物顔に領略してゐるのだ。しかし一日も早くこの山脈の中樞へ分け入り度いといふ燃えるやうな心に煽られて、霧雨を衝いて出た。皆夫れ夫れ雨支度にする。着物も餘計に着込んだ。茂作は布子の上へ頭から妙な黒布を被つた。何だと思ふと古い洋傘の布の眞中をくり抜いたのだつた、之にはムツカシイ顔をしてゐた私も思はず噴出してしまつた。

◎大井川奥山の旅 中村

三二

怪しい磁石を頼りに眞東指して、昨日のやうに満身に冷たい雪を浴びながら偃松の荒海を乗切つて、やつと自由になつた脚を緩やかに流れかゝる岩片の瀧へ踏み入れた時には、ごうだらう、尖つた筈のやうな水滴を飛ばす勁風に射すくめられて、顔を向けるさへ耐え難かつた。岳の頂きの廣場は一面に均らされたやうな砂岩の細片で布きつめられて、隅に何かの杭が一本朽ちかけてゐる許り、これが唯一の人間の跡だ。四方へなだれ落ちる偃松は足元から白く化けてしまつて、四人は息を呑んで暗い顔を風下に見合つた。ザツ／＼と固い痛い雨が人の身體といはず、岳の岩片といはず烈しい音を立て、打ち當る。私達は居耐らず、風下の山腹へ逃げ下りて、樺の木影に立ちすくんだ。焚火々々、何よりも先づ之だが、濡れきつた木の枝はシウ／＼水を噴く許りで、白い烟がヨロ／＼と情なく腹立たしい。徒らに擴げて見る『三角點網圖』は水沫を食つて、忽ちべろ／＼になつてしまふ。

何だつてあの原を出て來たのだらう、——私は自分許りか人々の顔にこの文句を讀んで、ドス黒い氣分になつた。それでも松と茂は行くべき國境の大尾根を探さうといふ。彼等の後ろ姿が偃松の間に消えるのを見送つて、私はひそかに感謝した。松爺は大分イラ／＼してゐるやうだ、彼は山の頂上こそ知らないが山腹から下は中々委しい様子だ、それがこの天氣で見渡しが利かないので、肝心の智識といふものが寶の持ち腐れの形なのだ。それが又茂作をブリ／＼させる、「案内だ案内だと大きな事を吐かして、こんな重い荷を持つた者をまごつかせる、天氣が好ければ誰だつて見當位つく」、二人は中ッ腹で競争のやうに、あちこち道を探し廻つてゐるらしかつた。

焚火はやつと赤い舌をべろ／＼出し始める、菊太と二人これを挟んで何かに憑かれたやうな顔を見合はしてゐるところへ、水浸けになつた二人が戻つて來た、ずつと下迄下りて漸くそれらしい尾根を探り當てた、といふのを聞いて生き返へつた。兎に角火を圍んで少し許り腹を膨らして元氣をつける。又ピシ／＼雨の吹きつける頂上を通つて、ざはめく偃松の茂みへ乗り入ると、いつか細い尾根に入

つて北へ北へと運ばれる。霧の中からバサツと黒いものが舞ひ下りて来たと思ふと、松が鐵砲をとり直す間に又消えてしまう。「鷺の畜生め何づらと思やアがつて」と口惜しさうにいふ。始めこそ眼の前へ高い尾根の波がボツと顯はれて来て心強かつたが、だんく、足元は下り許りになる、しまひには偃松さへ「もう知らないよ」といふやうに姿を隠す、今の私達にとつて、こんな頼りなく寂しいことはない。「どうも變だ」、皆が代り代りに言ひ出した。唐檜の密林が薄紫の息を吹きかける、恐ろしい下りだ、何處迄下りるのだらう、不安に襲はれて足が伸びない。濡れたカニカウモリがいやにテラ〜光る、ツマトリサウがちらりほらり咲く。

さうく尾根さへ幾つにか岐れ始めた、其の時、木の間から行く手西より北、生々しい藍靨を流した山の腹がチラリと見えた、残雪が金屬性の光りをさへ洩らした。間違つた！と皆思つてしまつた、天氣がよくなつたのではない、低い處へ来てしまつたのだと思ふのは情けなかつた。それに時間も早や午を大分に過ぎてゐる。私の頭には又しても前夜の原が閃めいた、あの温かいソオフアのやうな。斷然戻らう！と私は強く言つた。固より彼等とてもさうするより仕方が無い、とはいへ重い荷を又あそこ迄背負上げるのか——といふ暗い表情が蔽はれずに出てゐる、重たい頭を俯つむけて、一步二歩戻りかけた私は、ヒョイと木蔭にオサバ草を一株見つけた、その純一無垢な姿を見て、私の心は一息に透き徹つたやうな氣がした。思はず私は山人達にそれを教へて、喜びを別たうとあせつたが、恐らくは夫れは彼等に何の慰めをも齎らさなかつたのであらう。

途中から先刻二人が下りて見て置いたといふ、浅い澤の方へ下りる、道しるしの新らしい切口から偃松の枝が脂の香をブン〜放つ。澤は例の原の水を集めて來るものらしい、ミヤマナ、カマドや樺や偃松の下蔭をく〜つて、苔の厚い岩間をトットと走り下りる、今夜はこの綺麗な水を飲まうとお互に言ひ合つた。信濃金梅や黒百合が飛び飛びに光つて、自ら原の上へ續いてゐる。泊つたのは前夜の

◎大井川奥山の旅 中村

三四

處よりも一段低いやはり高原の一部で、北へ對角線の位置にある。劣らずい、「巢」が出来上つた。燃木をこなししてゐる二人を置いて、私と松とは南の方を指してブラ／＼出掛けた、方々をまごついて歩いてゐる中に大體の地勢が幾らか解つて來て、信遠國境の山脈がどうも來た方から出てゐるらしいと覺へたので、これから先きを明るくする爲めにその邊を少し見定めて來やうと思つたからだ、それに松は又松で今迄一發も放さない鐵砲を持つてゐる。やあゆんべの處を通つたら暗やみで南蠻(唐辛)を味増漬にしたもの、山人の好物を落しておいたから拾つて來て呉れや、松兄「留守居の山人達もこんな冗談をいふ程氣が輕くなつて居た。

御料局の石のある處から信遠の國境は、唐檜白檜の矮林の中を西の方へ走つてゐるのだつた。途中で又原續きの窪の一つへ下りる、ピチャ／＼に潰れた小舎の跡が信濃金梅の眼の醒めるやうな金の盃を戦がせる中に埋もれて、側のノタの濁り水に深山七竈が薄白い花を映す。測量の役人の泊つた跡だらう、三角點が近間にあるナと二人とも思つた。直きに「切り明け」を見つけ、山櫻の下をくゞつたりなごして又國境へ上ると、偃松がわびしさうに一株出て來る。霧の中から果して三角標の殘礎が顯はれた。石に「三等三角點」など、彫つてある、西寄りの低い一角には又御料局の石も立てゝある。峯頭は何れも木立が遠のいて、岳樺や偃松がのさばつてゐる。西南に面して灰白の斷崖を三丈許り裂き出す、岩石の膚はザラ／＼に荒らけて、地衣が青白いのや樺色のや膏藥でも貼りつけたやうだ。こんな所に何の滋味があるのか、高根蓋薇や深山金梅草や苔桃などが露を振るつてゐる。

巖崖の下、眞青な樺の傾斜から向ふ、限りのない薄紫の霧の底は寸又の大谷であるらしい。耳を澄ますと瀨音のやうな響きが微かに沈靜な大氣の裡に顛へてゐたが、或は何處かの峯角を掠める風の音であつたかも知れない。寸又谷には奥山の高みに四角な大岩がある、遠く迄光つて見えるので谷間の獵夫達ちはテカリ石と呼んでゐる——と聞いたそのテカリ石といふのはこの事ではあるまいか。青

木黒木を深々と鎧つた信遠駿國境の山々、南方赤石山脈の山々が、暗い暗い顔に白い眼を剝いてギロリと偶に來る人間を睨む眼つきは凄いであらう。その下を大井川最大の貢流寸又谷が眞青に流れ、熊や鹿や猪が跳ね廻り、それを逐つて時たま入り込む獵夫は動もすると道を失なつて、生米を噛みながら心細い一夜を明かす。「全くおつかねえ大きな尾根が幾つも出てゐて、中々馴れぬ衆にア入れねえ」と茂作も言つてゐた。

松爺はツマラなさうに鐵砲をガチム／＼はせて欠伸をしてゐる、寒くて晝寢も出来なかつたらう、と勝手に獨り長い間色々な事をしてゐた私は、少し氣の毒になつた。北の方の山腹を突切つて行つて見やうといふ彼に同意してその方へ下りた。一帯に峯から放射された緩やかな段状の高原が幾つか連なつて、氣の落つくやうな色と匂ひがウツトリとその上を流れてゐる、溜水などあつて羚羊ヒツジの足跡は、そこら中にある。巢にかへると大鍋が食慾をそゝるやうに沸々と煮え立つてゐる、松爺は手持無沙汰に鐵砲を投げ出したが、地理が幾分でも解つたのが土産で皆晴れやかな顔を向け合つて、甘い食事をした。

この晩は遅くまで談しがはづんだ。

五、ガツ々河内の入り

不意に眼が覺めるとハットして思はず天幕の外を窺ふ。星がキラ／＼してゐる、その下で偃松の奇怪な影法師が眞黒に躍つてゐる。燐寸を磨つて枕もとの時計を見ると三時を僅か過ぎた、時計の銀蓋が氷りのやうに冷たい、私は足を縮めて毛布を被つて暫らく跼まつて見た。山人達の寢息が不揃に高く響く。呼吸が低まつて、尖つた感覺になつて行く。宵に焚いた火の跡が白はうけて燃えさしがしつと濡れてゐる。眼に泌みるやうな冷つこいそして濕つぽい風が、フーツと流れ込んで來る。私は思

◎大井川奥山の旅 中村

三六

ひ切つて茂作を起した、彼が一番こんな時には忠實にやる。火がバチ／＼いひ出すとあたりの物に親しみが出来てくる。濃い白烟がどん／＼近所の偃松の間へ藻繰り込んで、房さりした枝を段々にぼかし出す。

原は恐ろしい程廣く、星のある空に續がつて、仄かな緑りの敷物が水を打つたやうに平らである。不思議な程何も無い。見てゐると何か盛んな醜樂——この山の精靈たちのであらう——がタツタ今まで行はれた、その直ぐ後だといふやうな氣がする。天氣がい、ぞ、といふ聲で後の二人もノコ／＼起き出す、見る見る星の光りは薄れてうそ寒い水のやうな空の下に光岳續きが、低く堤防のやうに原を限つて出る。一方からはギゴチなく高低する偃松から偃松へ、イザルヶ岳が鈍い楕形を懸け渡したが、もう薄葉のやうな霧の手がムラ／＼と纏はつて來た。かうなると早いもので、忽ち原は何處からともなくピタリと昨日のやうに閉ぢ込められてしまふ。その執念深い象皮色！私は思はず舌打をした、長い棒か何かで無茶苦茶に引き廻してやり度い氣がする。もう何でもい／＼から早くこの山の向ふへ行つてしまひ度い、そつちにはまるで異つた世界があるに違ひない、此の平つたい草原へ重たい霧に押つけられてゐるのは悪夢でも見てゐるやうに胸苦しくて耐まらない。

「之でも昨日よりは餘程い、ネ」こんなことを言ひながら、荷を纏めて早めに原を出掛けた。皆行く先きはもう解つたやうな顔をしてゐる、所が三度頂上を越えて探し残した東寄りの尾根らしい方へ下りて行くど、偃松は忽ち盡きて岳樺が出て來る、どん／＼下つてしまひさうだ。松と茂が又分れて霧の中へ没して行く、私と菊とは残つて又燃えもしない火を焚くのだ、私はもう見放されたやうな頼りない孤獨を感じた、霧は眼の前に相變らず冷やかな頬を見せて過ぎて行く。濡れた偃松の小枝やら樺の削り片を積み重ねて、一生懸命に吹いてゐる菊の横顔に疎らに伸びた髻をマジ／＼と見てゐた私は、空虚な顔つきをしてゐたに違ひない。

松爺は昨日下りたの迄に別段尾根らしいものは無かつたといつて歸つて來たが、茂が遅いのでヂツとして居られないといふ風で又眞下の方へ下りて行つた。入れ違へに茂作が歸る、松に會つたかといへば知らぬといふ、ほつ（尾根のここ）はズツと下に續いてあつてい、唐檜の林だと話す、念の爲めに遙か東の方まで歩いて廻りながら來たと附加へた。暫らく經つて松の歸つて來る物音がすると、茂作は忽ち兎のやうに側の偃松の中へもぐり込んで首を縮めてゐる。こんなイタツラは始終だ。うそ、うそ四邊を見廻し乍ら歸つて來た松が、「茂作衆はどうした歸つたすらう」といふと、菊が「知らのうワ」と可笑しな顔を向けたので皆笑ひ出してしまつた。

霧は時々むら／＼と濃淡を顯はし始める、何處かで日の射すけはひさへする。そんな時は皆聲を擧げた。私も幾分か氣分が軽くなる。急な下りで果して白檜唐檜の深い林に陥つたが、世界はまるで新たになつた。惡戯者の霧は何時か早や引揚げてしまつて、木の間から山々がキラ／＼と射し込んで來た、皆一齊に荷を投げ出して、木立の薄い方へ驅け出して食ばるやうに眼を動かす、濕っぽい森林の底の草や苔へも薄日が黄ろい果物でもぶち撒けたやうに影を落す。淡いながら空の色も珍らしかつた。一方は大無間山續きの黒々しい木山が重なり合つて、日光を吸ひ込むやうに見えてゐる。一方からはガッチ河内が深く深く口を開いて、國境の大尾根は間近く西の空に匝つてゐる、皆顔を見合つた、昨日下りた尾根を構はず行けばよかつたのだ。一邊低くはなるが、それからはズツと伸し上つて、ガッチ河内の水上、大バルキ澤の上に岳の澁色が之は未だ雲と纏れ合つてゐる。私達の居る尾根は驚りにガッチの谷間に落ちてしまふのだ。けれども私達はもう失望しなかつた、無限の力はこの日光から來たと思はれた。西澤を横に搦んで昨日の尾根へ移らうと立どころに決まる。

ひどい山腹を廻つた。西澤の頭の危なかしい「段」で火を焚いて腹を固める、澤は鐵塊のやうな黒い崩岩の間をチラ／＼躍つて暫らくは見えてゐるが、終に何處とも知れない谷底を求めて消えてしま

◎大井川奥山の旅 中村

三八

ふ。眞向ふには大バルキの澤（ガツチ河内本谷）が雲の下から凄惨なガレなどを押し崩して、その間に澤水をキラリ〜と光らせつゝ、これも果ては何處迄落ちるのか、見ゆる限りの山の水は一樣に底といふものゝ有りさうにも思はれないガツチの大谷に呑まれてしまふのだ。「ガツチはおつかなく廣えもんだぞ」と茂作も驚ろいてゐる。

ぐるりと西澤を廻ると、南方白峯山脈（東河内の入り）の空へ大きな不二がサツと出た、痛いやうな白金の線が何本か頸の周りに揺らめいてゐる、ゾツと身顫が出る。獸の道を探しあてゝは、ひどい唐檜の茂みから、ザク〜に剝けて骨の出たガレへ、ガレから又樹の根へ小一時間匍ひ廻つた揚句、やつと前の日引返したあたりへ出て来た。人の悪い霧はもう遙かになつた偃松帯のあたりをまだ驅け上つたり驅け下りたりしてゐる。昨日霧の隙から私達を脅やかしたのは和田川の谷間なのだ、しかし術は既に破れた、遙か谷の末はピロウドのやうな手觸りの緑りがベツトリと光つて、信州遠山大野あたりの山烟が薄い陽炎の中にひら〜してゐる。その上を雲の影が冴えた藍色の手で撫で廻はす。目路の果てには廣やかな天龍川筋が、木曾山脈を押し包んだ雲塊の下暗みに靜かに横たはつてゐる。

頼りにする「切り開け」は一行を引張つてグント〜西の谷間に下りて行くやうだ、しかしよく見るとやはりこの尾根ともつかないやうな森林の山ひらが、大井天龍二大急流の「水こぼれ」になつてゐるのだ。鳥のやうに飛立つた足元から、朽葉の化けた紫色の土が清く香つて、そこにもこゝにも椋葉草がこぼれてゐるのが、晴れた山上の星座を眺めるやうだ。冷たい白檜の幹につかまりながら下りた處は、餘程もう低くなつてゐた。之から暫らくは國境の山脈も、暖かさうな黄な感じのする緩い幾うねりになつて、ガツチの大谷を西の方へ遠巻きにし、和田の谷間を際ごく覗き込んで行く。私達もやつと久し振りで開放されたやうな氣になり、ホツと悠るやかな息を吐いて、來し方イザルヶ岳の空を振り仰いで見た。あの苦しさが早や半ば甘い懐かしい味に代つて私達を微笑ませる。松爺の吐く烟

草の烟も今日は長閑に渦まいた。

天狗樺や七竈や躑躅の類が薄日を浴びて、生ぬるい吐息を洩らす。仄かに電光を含んだ雲が低く垂れて、ムシ／＼して膚がベツトリ汗ばむ。行手にガツチ河内の岳（後に私達の名づけた）が大寺の浮圖を幾つか重ねたやうなが、つしりした姿を顯はす、赤銅の瓦が偃松の緑青を噴いてゐる。木々の差し交はす枝が、こんぐらかつて通せん坊をするので足場は悪いが、氣は圓るくなる。唯時々風もめの爲めだといふ灰白の立ち枯れが墓場のやうに衝立つてゐるのでビクリとする。倒れたのへはフク／＼した苔がクシヨンのやうに被さり、そこへ安んじて根を下ろしたゴゼン橋がはつきりした模様を縫ひ出してゐる。

山勢が一曲して東へ向くと、和田谷の入りは愈々深く廣く暗く赤石の大山脈を抉つて眼の前へ展開して來た。谷の空はその吐く息が凝つてホーツと烟つてゐる。遙かの地の底を西へ西へと平原を求めて、太い白蛇が匍つて行く。谷の果てからかけて、聖赤石の方角には荒つほい手法の彫塑のやうな積雪が嵩にかゝつて蟠屈してゐる息がつまりさうに暑くなつて來た、身體に觸れる草木がものゝすえるやうな匂ひを放散する。大野の村の方から蟬の聲でも聞えて來やしないかと思ふ。

早や低い所は通り越したのだらう、上りが又えらくなる。不圖山人は生新らしいセブツキ（木の幹に刃物で痕をつけたもの山人のよくやる道しるべ也）を見つける。「誰かこの頃信州へ越えたもんずらい」と松がいふ。然らばこゝが赤石山脈南半唯一の横斷通路なのだ、淡い淡い人間の香の漂よつてゐる處を淺黄斑蝶が悠々と遊んでゐる。一峯へ登る、御料局の標木があつて、「區劃線峯」など、そつ氣もないう字が消えかゝつてゐた、和田谷のイロウ澤の頭あたりに當るものか、四邊は針葉樹が大分伐り倒されてあるがそれでも思ふやうな眼界を與へない。南方イザルヶ岳から大無間の連山は晴れれば晴れる程、黝くなつてもく／＼と大きな甲蟲のやうにうごめいてゐる。しかし北方は盛んな活動を開始した。

◎大井川奥山の旅、中村

四〇

荒つばい西風が、まごもに打ち當ると、絶大の雲塊は鋭どい鑿でも加へられたやうに、パツ／＼と端の方から缺け飛んで、終に根からぐら／＼と動るぎ出す。白熱した岩漿のやうな重苦しいのが中から流れ出しては、大井川の谷へ落ちて行く。其の間から先づ、壊れかゝつたゴシック風の尖塔を見るやうな仁田河内の岳が、眼ま苦しう出沒し始めた。上河内岳がそれと並んで好個の對照をなした悠たうした太線を張り渡す。そこから北、聖ヶ岳へ掛けては山脈がポロ／＼に壊滅して、數多のガレが赤く青く荔枝の熟み割れたやうに懸け列なつてゐる。綠色の冴えた段なども見えたことは見えたが、峯といふ峯は皆苦しうな深い暗い皺を刻んでゐる。聖ヶ岳はたつた一度特有の尖頂の影法師が、思ひもかけぬ天上からヌツと覗いた限りで、鬱陶しい雲が未練らしく搦みついて放れさうにもない。私はその雲の影の妖しい紫を含んだ深奥な山皺にポツリ／＼と眞珠のやうに光る貴どい雪を見守つた。嘘のやうな高い處に、大きな瀑なども見つける、絹絲を撚り合はしたやうな水の道が雲の縮木にかけられて、スル／＼と落ちて行く。岳は雨つゞきらしい、今頃はさぞ躍り狂つてゐるだらうと思はれる和田川の瀬音は、ごこを迷つゐるのか茲迄は聞えて來ない。

行手の山々の初めて私達に許した利那の姿は先づ、恐ろしい荒廢と限りの知れない深さと盛んな動搖とを暗示した。私の心はごこかに痛みを感じるやうで、氣分は益々嚴肅になつて行く。山人達もこれから行く處だけに、一生懸命見てゐたが、「岳といふものは下で見たのとはおつかなく違ふもんだ」なご、言ひ合つてゐる。これだからが大變だぞ！誰でもこの囁きを聞かないものは無かつたに違ひない。岳の方から黄鳳蝶が飛んで來る、私はこの親しい山の友達に逢つて何となく嬉しくなつた。

下るかと思ふご又何時か上りになる、今度は信濃侯からかけて明神谷の入り大無間山塊がよく見える、和田入の霧は眉に迫るガツチ河内の岳を頭から蔽被せて、モヤ／＼と河内へ向つて匍ひ下りると、奇怪な形をのた打つてヌツと消えてしまふ。明神谷の入りや小澤の入りが見えた枯槁色に匂つて、

唐松ガレ、杓子崩れなごが日向に咲いたダリアのやうに赤黄ろい中に一道の白光を反映する。かくして餘程斜めになつた日射は一しきり信濃俣の大谷に満ちたが、ガツチ河内の峯角に凸レンズでも當てがつたやうに眩しい金茶色を燃やすと、もう落ちてしまつた。

唐檜白檜の喬林から闇が待ちかまへてゐたやうに、鼠色の布をおつ被せる、木の間に冷つこい霧が大きな蜘蛛の巣を張つてゐる。山人たちは身輕になつて、ガツチの河内の方へ水を得られさうな泊り場所を探しに行つた。我はしつきりなしに墮ちては土に浸み込んでゆく露の忍び音を聞いてゐた、胴顛ひが出るので木の間の薄明るい方へ行つて見ると毛茸きぼうがの一群が戦いでゐた。

三町許り下に泊れる所が見付かつた、差當り不用な荷物を唐檜の根方へ桐油を被せて忍ばしてそつちへ下りる。「今夜あの荷を熊にでも食はれてしまやあせまいか」など、トボケた調子で誰か言ひ出した。

天幕の周りは白檜や深山栲なごが細いけれども喬い梢を籠目に組んで、奥の見えない位立ち續いてゐる。梭葉草が天幕の中まで白い瓜の種のやうな花瓣をこぼしてゐる。火をどん／＼焚いて、赤い異様な顔を向け合はして飯などやつてゐる時分から、満山の死んだやうな寂寞を破つて軽い足音と共にビューン、ビューンといふ鹿の聲が始まつた。「本鹿だぞ、側へ來たらぶつて呉れる」松は鐵砲を引寄せて呔やいたが、どうもなるものではなかつた。頭の心へ響けるやうな尻上りの鋭い聲はこの怪しい侵入者をさがめるやうに、近いたり遠ざかつたり、東になり西になり、夜更けまで聞えてゐた。

△七月十八日。午前六時八分、イザルケ岳南腹露營地出發。八時五分、誤つてガツチ河内に直下する尾根の一點に下る。九時廿分、西澤上流休憩晝食。十時十分出發。十一時十分、尾根急に西方に低下す。十一時五十分、イザルケ岳山勢茲に盡き一段低き山脈に移る。午後十二時廿五分、尾根一曲して東に向ふ。一時四十五分、信濃俣和田谷通路の頂上。二時八分、一峯、御料局標木あり和田谷イロウ澤の頭。三時廿分出發。五時十分、ガツチ河内岳西方山脈の一部に達し露營。

△イザルケ岳は光岳（二五九一米）より少し低いかも知れない、併し山容は高山的で、豪壯の景象遙かに光岳に勝つてゐる、その

◎大井川奥山の旅 中村

四二

間に我々の露營した高原（之も二五〇〇米以上ある）を挟んで遠望する大釜を伏せたやうに、形大なる一の山塊を作してゐる。山脈は連なつてゐるけれども南北共に著るしく低く、北ガツチ河内岳に對し南大無間南山塊に對し、まるで孤立の態を保つてゐる。そして大なる尾根がガツチ河内に入り、山側のやうな處から自然一枝を派して北方に連なつてゐる様など、古牛層山貌の特徵を顯はしてゐるやうだ。

△イロワ澤の頭かと思はれる一峯は三角點もなし、随かりは解らぬながら高さ凡そ二千三百米位であらう、この附近に易老岳（二二五四米）といふ三角點があるのだが、何處か解らなかつた、勿論支脈であらう。

△山脈橋斷の通路は、信州大野からイロワ澤を溯つて尾根にまじりつき、山脈の最低所より少しく北方を越えてガツチ河内に入り、大ヨキ小舎を経て大井川谷に出、駿州田代なり或は大井川上流の開墾場を経て甲州へ出るなりする、至つて覺束ないものである。大野から頂上迄四里、頂上から大ヨキ迄三里大ヨキから田代迄七里位であらう、先づ二日を要する。天龍大井二大河の大支流が背中合せになつてゐる處を貫通するのであるから、森林溪流の深奥美は恐らく見るべきものがあるであらう。

六、ガツチ河内岳と仁田河内岳

曉方に霧雨が幾度か天幕を叩いた、岳嵐が森の梢の露を搖り落したのかも知れない。樹間を透して龍大なガツチ河内岳の山腹が唯一面の針葉樹林に見える、紫ばんだ檜の幹が隙間もなく綾織の緯を見るやうにおし填まつて、何か非常に遠いもの、やうで氣が變になる迄に單調だ。そこを暗い鼠色の霧が往つたり來たりする。時々岳の一角へ空が寸碧をかすらせるが、慥かり捕まへたいと思ふうちに、忙て、意地の悪い霧が塗り消してしまふ。頭の上から清らかな小禽の聲がツイーチャーシユウ、ツイーチャーシユウ——と繰り返へす。

悠くり支度して出掛ける。光りといふものを知らないやうな森林の中を二時間近くも登つて、高い縦嶺の或る一點へ達した。もう針葉樹も影が薄くなつて、ウリハダ楓や岳樺や岳山椒が疎らに生へてゐる。私達は殆んど盲目的に北の方へ旅するのであるけれども、ガツチ河内の岳の頂上を極めたいと思つて、この三又の峯角へ荷を置いて、反對の南を指して急いだ。一步下ると偃松の海が始まる、乗

り切つては南へ南へ、霧の礫を荒つぽく叩きつける勁風に逆らひながら走つて行くと、高山の景象は歩々に展ける、巨岩が起伏する、地衣が陰鬱な色を塗る。灰黑色の粘板岩は「笹折」をへし折つたやうになつて布きつめてゐる。苔桃や梅櫻がその間にチヨビ／＼固まつてゐる。一ツ小高い峯を過ぎるとガツチ河内岳の頂上だ、小さな窪みに三等三角の標石が生白く立つてゐる。米脚躑やツマトリ草、ゴゼンタチバナなどが咲き、石楠花が淡紅の花を翳して、人の心にはんどの温か味を傳へるばかり、囁目の凡てが物を凍らせるやうな霧に濡れて顛へてゐる。後から山人たちがオーイと心細さうに呼び合ひながら、頬被りの首を縮めてやつて來た。

風は霧を逐ひ、霧は風を促して、假松の背を迂り、破片岩をやげに擦つて仁田の谷へと跳ね込むと、大きく渦を巻きながら、岳樺の尖つた青葉を逆に撫で、銀色の葉裏をヒラ／＼させてゐる。姫赤タテハ蝶がその邊を舞ひ狂つてゐた霧の裡から岳雀の聲がする、寂しい聲だけが鳴いてゐるやうな聲だ。大井川の谷間は折々バツと霧が裂ける、緑りのしなやかな裾山が晴れやかに日に浸つてゐる、「信濃俣のドだ」寺島向ふの河原すらい——の作畑だぞ」と山人達は罵り合ふが、私には唯別の世界の華々しい色彩が機關の眼鏡を覗くやうに珍らしい驚ろきを與へる。

「どうも裾山は毎日天氣らしいなア」村の奴等ア今頃暑いといいて大根の種でも播いて居るらしい」顛へながら山人はこんなことを言つてゐる。美しい幻の消えたあとの寂しさ、全身へ灰色の血が循環出したやうな氣がする。重い荷を背負つて又北の方へ旅を續け始めた時には、忌々しい暗い霧雨が容捨もなく注いで來た、併し極端は反て耐え易いものだ、細長い窪地へ駈け込むと、俄かに息使ひも樂になる、バイケイ草、信濃金梅、高根菫、タケビル、女寶千鳥、御山龍膽、三葉黃蓮などが派手な色を四邊に撒き亂らす、それでゐて岳山椒の獨り寂しい花を垂れてゐるのが妙に眼に留まる。向ふの高みから大井川に面しては廣い『食場』(獸の草を食ひに集まる所)で信濃金梅の豊麗な色が霧の中

◎大井川奥山の旅 中村

四四

へ亂發して、暗い夜に街の燈火でも望むやうだ。

窪地は窪地へ續く、風を避けて大井川のひらへ入つたりする。一とこ砂礫の間に大きな足跡を見つけた、山人でなければ解らないやうなものだつたけれども、人の足跡だといふ。もう此處らでは足跡といへば獸のに定つてゐる、そこへ人間の足跡といふと何か怪しい迄に珍らしく感ぜられる。低い尾根一重を隔て、向ふは偃松のザハハと噪ぐけはひがするけれど、窪地の空氣はウツトリと花の香を溶かして緩るく渦巻いてゐる。安逸は何時まで許されなかつた。窪地は急に底を傾けて、ガラハとした石の瀑布が頭の上へ押しかゝつて來る、人影と誤まる程の石荀が空へ空へと伸し上つて、霧が尖角にパツパツと裂けて散る。荒つばい碎末が尖つてはピチピチと跳ねる。匂ひ上る鼻先には、米蹟躑や深山大根草やらが、濡れ切つて固くなつて、鹽漬のやうにこびり付いてゐる。刺々しい風が爪先きから吹き込んで、腦天から飛び去る。私達はあの昨日眺めた雲の中の尖塔へ足を踏み掛けたのだ。

一つの高處へ達したが、これはまだ絶頂ではなかつた、尖塔の突端は霧の中からチヨイと覗いては此處迄御出でと招いでゐる。そこへ達する迄には心迄濡れたやうな岩石の、怪しく光る冷たい犬牙の間を顧えながら、憐れな獸のやうに匂はせられた。この仁田河内岳の頂上は二抱も三抱もある砂岩の巨塊の無難な累積だ、その一つの大きな錆びた鏡の箱のやうな根無し岩の一角が、この荒廢した石の尖塔の天邊なのだ。不圖そこを覗いた私は眼を睜つた。そこには金の十字架ではなくて、錆び腐つた長刀の五寸許りのが十數本、岩面の隙に生へた苔と菅草との間に突刺さゝつてゐる。果然この尖塔は山下の人々の眼にも決して無意味に映りはしなかつたのだ。私は顧えながらこの異様な形をした鏡片を熟視した、濃やかな霧がその尖端に劈かれて大井川の空へ吹飛んで行く。この南アルプス高峯の或ものに登拜する山麓の民衆が、斯ういふ物を神に献じて行く習慣を私は知つて居たが、それは大概槍か劍の形をしたものだつた。これは恐らくは遠山あたりの山民の捧げたものであらう。田代の山人

達はこんな物は始めてだと怪訝な顔をしてゐる。私の眼には彼處の山民が焼畑を打つ手を止めて、岳の姿を仰ぐ敬虔な眼ざしが見えるやうに思つた。あの深い谷底を幽かに光る和田川は、私はこの岳と麓の人々とを繋ぐ微妙な糸を見た。

緩やかな山稜は益々荒廢の姿を顯はして來る。前からも後ろからも上からも横からも、深い霧がすつかり私達を包んでしまつた。足元さへ見る限り、霧を壓搾した汁でも塗つたやうな粘板岩の薄片が、濡れてゐながらカサ／＼になつて生もなく散り布いてゐる。色らしい色といつては、僅かに貧しい黄色を金梅草の一種が綴つてゐる許りだ。雷鳥が子供の映す影繪のやうに出たり消えたりする、私達は灰色の輿に昇かれて、この怪しい鳥に導かれて、無限から無限に運ばれて行くのだといふやうな氣がする。沈んだ綠色が又眼に入つて來た、この色はシンと氣を落着かして呉れる、手枷足枷が少し宛緩められるやうだ。「ノタ」が窪地の處々にあつて、雑多な爪跡が生々しく印せられてゐる。本鹿だ（鹿）、羊だ（羊）、ヤ猪だ（猪）など、山人どもは罵り合ふ、私は白由そのもの、足迹を見たと思つた。金車が豊富な色彩を始めてバツト放つ、懐かしい日の色だ、それが頭の中へ入つてくる／＼と廻轉するとホツと蘇へつたやうになる。信濃金梅や毛茛風露などが亂れ、女寶千鳥や梅鉢草も咲く。花の波には霧も少し遠のくさまがある。偃松の奥から岳雀がツ／＼と絶え入りさうな聲を絞る。

山稜の偃松を亂つて西風を眞どもに受けながら、一つの廣やかな盆地へ迂り下りる、雪消の頃は美しい池であつたらう、幾日幾夜峯の影を浮べ野獸の咽を濕はしたか、水は今一溜まりもない、淺い草間に四葉鹽竈などがヒョロリと立つてゐる。一段上にも又小さなたいらがある、曇きの盆地は和田川の水神の領であらうが、茲の水は既に、一塊の礫の面の光りに大井川へ落ちる運命を擔つてゐるのだ。山上の「水こぼれ」といふもの程、あやしく人を考へさせるものは無い。火を焚いて休んでゐると氣まぐれな霧は又も大井川の谷間にチラリと晴れやかな緑りを垣間見せる、山人達がガヤ／＼騒ぎ始め

◎大井川奥山の旅 中村

四六

る。フササウ、下ンザウリなどの作畑が見える。指して見せる。新田河内の「入り」は何時か通つて早や上河内の領へ踏み込んでゐるのだといつて、松爺は何か頻りに感心したやうに首を傾げてゐる。見ろ、もう後へも先きへも容易に出られることではないぞ！と何か々囁やく。

暮れると見えて、西の空へ傾いた草場さへ緑りが灰色を吸ひ始める、ネバリノギ蘭や猩々袴やチングルマやツガザクラなども出て来た。岩地へ出ると恐ろしい闇が急に身邊に迫つて来たやうな氣がする、ポツリと立つてゐる御料局の木杭に一寸眼をくれて、遽たゞしく下りになつて行く、急に眼前へ幾塊かの眞黒な大巖が、古の地質時代の巨獸をでも見るやうにスク〜と立ちふさがつた。今夜は水はおろかい、泊り場所は到底得られないなど瞬間に直覺する。

皆なそれでも未練らしく、とぼ〜先きの方迄、うろついて行つたが恐ろしい石坂は假釋なく空を指す許りだ。大巖のちき東寄りの偃松の中の些やかな凹みに天幕を擴げたが、何となく力が無かつた、餘分に米を煮て持つて来た程覺悟はしてゐたのだが。四人鐘詰の果物の汁を吸つて、ホツと息を吐いた。執念深い夜霧が心細い焚火を取り巻いて、マジ〜と憐れな漂泊者の寝ざまを見てゐる。

△七月十九日。午前十時四十五分、カツチ河内岳西方山稜の露營地出發。十二時廿分、三又の峯頭に着。十二時廿五分、カツチ河内岳頂上。同五十四分出發。一時三分、三又峯へ歸着。二時三十分、一高所御料局四等測量標あり。三時廿分出發。三時廿五分仁田河内岳最高點。四時五十五分、山稜低下して窪地をなせる所に下る。五時五十分、巨岩に逢着し、附近東方大井川に面せる斜面に野營。

△カツチ河内岳は赤石山脈主脈が南走して、一時大に低下しやうとする處から南東に分派した一脈である、高さ二五二四米と計られてゐる、陸地測量部の三角點名には仁田岳とあるが、後の峻峯の方がその名に適してゐるから該名はそれに讓つて、自分はこのカツチ河内岳と呼んだ。仁田河内岳は三角點も無く細かい數字は判らないが目分量でいへば、凡そ二六五〇米位かと思はれる、或は少し低いかも知れない。

七、上河内岳を越ゆ

偃松の床に又夜が明けたが、又しても阻はしい霧！風がその中を無茶苦茶に引掻き廻してゐる。天幕に近い硅岩の大塊は家屋のやうに突立つて、霧に包まれるのか霧を吐き出すのか、唯もう白くなつたり黒くなつたりしてゐる。連日土龍のやうな旅を續けた私達は、もう日光に渴してしまつてゐる。顔や手足の上皮こそ霧に焼け、偃松の煤にまみれて黒はうけてゐるけれど、心は生白くふやけてしまつた。

菊太を此處から村へ歸すことにした、私達が限りある食物を持つてこの上北方へ旅を續けるに就ては、誰か一人犠牲にしなければならぬのだ。嚙んで含めるやうに路を教はつて、二日許りの食料を持ち、朝霧の中へ消えてゆく菊太の姿を見送つた時は、淡い哀感を抑へることが出来なかつた。

石坂は急に胸を蹴て颯る。岩ベンケイ草、岩梅、岩ツメクサ、ムカゴトラノヲなどがおづ／＼と背を屈めてゐる。銀の針を含んだやうな峯越しの風に煽られて、東の窪地へよろけ込むと、向ふにも亦面を背けさせるやうな岩塊満面の峻壁が衝立つてゐる。冷たい薬研の底に立すくんで、先づ行先きを考へなければならぬ。松と茂と西と東に別れて、すぐ姿を失なつてしまふ、私は獨り薬研を匍ひ上つて、峠へ寂しい杖を立てる。ツガザクラや白山一華などが見える。大きな永劫に抱かれつゝ小さな人間の一刻も頗る長く感ずることがある。漸く頭の上から茂作の聲だけで三角標石があるといふ。私は擦り切れたやうな偃松を足掛りに、暗赭紫黒の岩塊が濡れに濡れて怪光を放つ急崖をグ／＼攀ち登つた。登つて滿身に力を籠めつゝ、そこに上河内岳の絶頂を見た。二等三角の檜が地上三尺から切り放されて、暴風の跡の潰家を見るやうに残つてゐる、二八〇三米！

紫藍色や暗褐色の粘板岩や砂岩、硬砂岩などの破片がテカ／＼に凍りついて玻璃質に變じさうだ、そ

◎大井川奥山の旅 中村

四八

の中にタウヤク龍膽、苔桃、梅櫻、ミチズワツ、深山大根草などが失神したやうになつて慄えてゐる、
 偃松がフューと剛い毛髪を逆立たす。此處が誠にあの太井川のズツと下流迄、奥山らしい皺だらけの
 額をつき出して、淡い人間の影を見守つてゐる上河内岳、あの絶頂なのだ。茂も松も荷を負つて登つ
 て来たが足が止まらない。私達は以前の低い峯脈を北に手繰つて、恐るべき劫風の叫びを頭上高らか
 に聞きながら一つの窪に入る。

黄花岗楠花が薄い花瓣に露の顆を亂して、あつちにもこつちにも岩石に額を擦りつけてゐる。青の
 ツガザクラ、チングルマ又薄青いドラバ。巨巖の、満身に刻んだ皺に青白い薄赤い影を秘めて、闇の中
 の腐肉のやうに燐光を放つのもある。憂鬱の谷の印象！私の心の憂鬱がこの山上の谷の薄黄ろい空氣
 と互に滲み合つた。谷は益す深くなるが、風のわめく山稜を失はない限り意に介するに足らぬ。水、
 水、——唯それが願ひだ。足元の霧の中から、パンと銃の音がする、先行の山人達が雷鳥でも見付け
 たと見える。近づくに茂作が、空しく岩間に舞ひ落ちた白い羽毛を逐つてボンヤリしてゐるだけだつ
 たが——そこに一面の雪田が懸かつてゐる。私は驚ろき且喜んだ。雪田は私の心の一隅の空虚を満た
 して横たはつた。西の空、赤石山脈の稜角から生々しい獣の肉でも切りさいなむだやうなラヂオラリ
 ア板岩の大小塊が、そこへ奎角を鋭い鑿のやうにイラ立たせて、噛み合ひながら落ちかゝる。寒さ
 からばかりではない、私はほんどうにブルブルと筋肉の顫へるのを覺えた。

動もすると息を吐きかけた鏡のやうに、霧に曇る雪田を横に見て、偃松の間に疲れた神身を横たへ
 ると、松脂の香が頭を穏やかにして呉れる。霧の水滴が粗くなると雨だ、それが山稜の方から掛かつ
 て来た。龜甲形を刻んで角々ばつた、陶器の破片のやうな雪田の雪を溶かしたり、それから滴る僅か
 の雫を溜めたりして炊いた温かい飯を食つたのは、贅澤な業だつた。松が珍らしがつて雷鳥を逐ひ廻
 してゐたが、どうく一羽提げて来てしまつた、忽ち偃松の枝の串に刺されて、見る影もない黒焼に

(聖ヶ岳より石末山を望む)



なつてしまふ。眼前には折々、上河内岳の絶頂から大井川の大谷へ揺れ落ちる山胸が、絶大な素焼の甕の一部分でも見るやうに顯はれる。雨は無意味に落ちなかつた。大井川谷の霧はスーッと簾でも捲くやうに揚がつた。高みの偃松の枝を慥かり捉へて見る。緑りの膚に付けられた幾多の痛ましい創痕を雲の縋帯で裏んだ大山岳が尖つた頭を反らしたり、鈍い背を伏せたりしてゐる。山人達も何だらうと私を顧みる。私の眼は尖つた山の頂きと見合ふとフト默會した。筑ヶ岳、千挺木の連山、白峯山脈南方の帝王なのだ。そこから反對にこの赤石山脈の氷雪に封せられた姿をズラりと眺めて戦いたのは、つひ去年の冬の始めであつたが。

雲の中から裏不二が碧の一線を顯はして來た、天上と大地を連鎖する微妙な一線を。脚の下は深い聖澤の谷だといふけれど、恐ろしい急崖を掛け列ねたこの山脈は、偃松の一枝に遙かの大谷を易々と隠す。何ともなしに一種の緊張を覺えた心に又北へ行く。尾根へ出るとワーツと風が搦みつく。こゝにも北蔭の偃松の間に、雪がカン／＼凍み付いてゐて、大井川谷の霧と何かヒン／＼囁やき交はしてゐる。

突然私達の行く手には、恐ろしい舞臺が開けた、餘りのことに思はず立ち留まつて、マジ／＼と眼を睨らないわけには行かない。頼りにする山稜はずた／＼に壊滅して、精も根も盡き果てたといふやうに、あるか無しの老骨を剥き出してよろ／＼と立ち上り、和田川の底を覗いてゐる、そこには抜け落ちた白髪のやうな霧がクシャ／＼に纏れ合つてゐた。——自分と自分の壊廢の跡を見つめて澁面を作つてゐる、山の骸骨！、慘らしい西風がドツと吹き當てる、グラ／＼揺れるやうだ、蟲けら程の人間が載つても、バラりと壞れてしまひはせぬかと不安になる。やつと山人達は、大井川谷へ臨んだ方の側に、鹿の足跡を見つけて、前後に氣を配りながら、脆い骨の屑に軽く手足をあてがつては匍つた。それでも白骨はぼろ／＼締りもなく抜け落ちて、怖ろしい空虚な響を立てながら何處とも知れない

◎大井川奥山の旅 中村

五〇

い深い深みへ消えてゆく。根を洗はれた偃松が白く化けて逆さに谷底を指してプラト、揺れてゐる。しかし高根の花は麗はしい廢滅の嘆美者だ、岩ベンケイ、タカチツメクサ、姫赤花、立山金梅草……一面にカサ／＼の腐骨のやうな山稜を、天界のあらゆる純の極な色彩の種類を以て飾つてゐる。死んだやうな岩石の間から生の光りが脈を打つて奔出してゐる。私は獅嚙みついて聲を擧げ度くなつた。山人ごもは鹿がゐたと聲をひそめて、物々しい顔を向け合つてゐる、平らな尾根へ出たので、私は長い溜息を吐いて御料局の測量杭へ寄り掛つた。杭は土管で取り巻いてある、その残りだらう、その邊に赤ちやけた壞れかゝつた仲間が散らばつてゐる。もう要らないからと、この雲の中へボンと抛り出されて行つた時は、心細かつたらう、接ぎ穂もなく周圍からは糞子扱ひにされて、やはり一樣の壞滅の手を待つてゐる。少し滑稽の感が無いでもない。絶えず和田谷へ臨んでガレが續く、ガレは濡れに濡れて鋼色に水を噴いて光る。底は深い霧だ、時々思ひがけない緑りの濡れ色がヒラリと射して白い一華の群落が「大小霞」の模様のやうに顛へる。山ハ、コ、高根堇、當藥リンダウ、ムカゴトラノヲ、ドラバの白い花などが足元に寂しい色を綴る。

今日の陰鬱な日も、早や大宇を過ぎた。動もすると霧と溶け合つて、有耶無耶に化けやうとする山稜を、執念く右に左に搦み廻つて一步は一步より霧の底へと沈む。信濃金梅、鳥足シヨウマ、唐松草などが咲き始めた。泊るによさうな處、それ許りが皆なの眼の對象になつて來た。満目唯偃松の中に岩ヒゲなどが垂れた大巖が顯はれると、茂作が例の杭を下の方に見出して來て、そつちへ導いて呉れる。この山脈の怪しさは、頼りにする大尾根は動もすると我々を大井川の荒れ谷へ振り落さうとするのだ。餘程下つたらう、久しぶりで偃松がフツリと眼界を去つた、寂しいことも寂しいが、温かい寢床の方が頭の中を占領してしまつた。

白檜と樺の林は荒つばい風から私達を庇つて呉れる。ふつくりした苔の足觸りもいゝ。霧は蜘蛛の

巢でも張つたやうに林間を囂めてゐる。その中からゴ—と腹の底を振はすやうな響が傳はつて来る。考へてゐた松爺が「ありア聖の大垂おはたらすらい」といふ。私はさてこそと思つた。同じ水音でも容易く親しむるは餘り恐ろしい程の響だ。聖澤にはその外にも、奥西河内や上河内と同じやうに檜垂ひのたるとなどいふ大瀑があるさうだ。その水上の聖ヶ岳こそは、まあごんな荒い姿を天上に曝してゐるのだらう。私どもは霧を隔て、今やそれと面を向け合つてゐるのだが、何かそれとも思ひ及ばない程遠いもの、やうに感ぜられる、寧ろ足の踏み得べきものか何うかも解からないやうな氣がする。私は山といへば、ちき聖ヶ岳、聖ヶ岳といへば策ヶ岳（白峯山脈）の天邊や愛鷹山の越前岳や不二山麓の十里木の寒村などから、つくづく眺めたあの彈力ある尖つた肩の線がマザ—と眼底に浮ぶのである。數多い日本アルプスの山々の中でも、何かしら大山岳の生命といふやうなもの、充實した、あんな緊張の極度にある線を見たことが無い。打てば鏗然と高鳴りして、波動の擴がる所無邊無量の力を放散するだらうと思はれる。

森林の果てに偃松を見て、恐ろしい兆でもあつたやうにサツサと引返へした。山人達は水音のする方へ下りて泊り場所を探し出した、三四町下ると冷たい半ば凍りかゝつたやうな水が得られる。今宵の隠れ家は深い白檜森林中の些やかな段だ。氷室のやうな空氣がちつと身じろぎもしない。高い梢から寶石を磨り合はせるやうな聲が聞えて来る、この森林の醸されたやうな大氣が啼くのとより外は思へない。

天幕の前の焚火の烟がモク—と木の間に擴がると、霧と溶け合つて天地は薄白い夜になつてしまふ。水聲と斷續する遠雷の音とが調子を合はせて、夜更けに聞く汽車の響きのやうにシンミりと青草の枕に傳はつて来る。

△七月廿日。午前八時四十分、上河内岳南麓露營地出發。九時廿分、上河内岳頂上着、二等三角點あり。九時五十五分、出發。十

◎大井川奥山の旅 中村

五二

時四十分、大井川方面の窪地を板岩多き所に休憩食。二時十分、出發。二時四十分、山稜崩壊甚だしき(特に信州側に)處を通過す終れば一高處に御料局四等△あり。この邊聖澤の日蔭澤の頭ならん。三時十分、出發。四時、切明けを得て信州側に下る如く行く。偃松絶ゆ。四時三十五分、白檜林中に露營。

△上河内岳は絶頂に二等三角があり、高距二八〇三米と計られてゐる。峯頭は僅かではあるが、山脈主脈を東に外れて大井川谷の空に獨立高聳してゐる。

八、聖ヶ岳に登る

灰色の日に續いて又灰色の日が來た、何時まで續く積りだらう、もう咀ふ勇氣もない、唯耐え難い願ひは一目でも日光が見たい、その懐かしい陰影に住み度い、この光りに伴はない陰影だけに生きることは實に耐え難いのだ。影の無いもやしのやうな人間になつてしまふのだ。今朝の霧はそれでも餘程明るみがある——と思つた。それが何か大きなものゝ息づくやうに潮し引きする度び、自分の胸も暗くなつたり明るくなつたりする。

遅く森林の中の野營を立つた。小雙葉蘭が病みほうけたやうに青く透きとほつて、今にも消えてしまひさうだ。偃松がチヨイと顔を出したきり引込んでしまふ。白檜の森林は下へ下へと愈よ深く傾く。下闇には椴葉草が細々と風も無いのに白い花瓣を揺り翻す。キンポウゲも藻草のやうな花をヒョロリと泛べる。熊が岳さんしよの皮を剥いたといふ跡がある、たつた今たさうだ、こんな人間の足音に逃げて行つたのだらうか。しかしこんな物も眼に馴れた。近い水聲。上つても下つても依然白檜の森林だ、時折り纔かに南方に秘色の面帕を掛けた上河内岳を窺ひ得て鈍い刺戟を受ける。引すつてゐる登山杖が石や草に粘りつくやうで重苦しい。思ひ切つて下つた揚句、やつと鬱陶しい圍みが遠のいて、和らかな光りがウツトリと私達を取り卷いた。廣やかな原地には深山キンポウゲの仄かな黄が一面に溢れてゐる、その間々に唐檜の喬木が紫色の肌を露はして仁玉立ちになつてゐる。薄い翅の蛾が煽られる

やうに足元から舞ひ立つが、重い大氣に壓せられて姿が消えてしまふ。ス井ー、ス井ー、ビ、ビ、と幽禽の聲がどこからともなく聞えてくる。

爪先下りに東の方へ歩いて行く。白檜林の奥の方からドブ／＼と豊かな水の音がする、懐かしい音だ。皆してその音をたよつて行つた。林間には北の方から、思つたより廣い流れがたつぷりと、矢車草や車百合を揺つて、走つてゐた。行きなり口づけに飲んだり、久しぶりて應揚に顔を洗つたりした。何か重苦しく蓋ひ被さつたものをハネ除けたやうに、氣がスツキリして來た。水は黄や紫や碧の膚のツヤ／＼した堅緻な水成岩礫を透かして、つるりと音も無く過ぎて行く、その表面に顯はす童女の鬢のやうな波紋が、眼に残つて忘れられない。これがやはりあの音に聞いたゞけでも恐ろしい、大垂なごにかゝるのだらうか。凡てが灰ツ氣を含んでチャリ／＼する中に小禽と高山植物と水とが純な光りを電波のやうに漲らせる。

水に枕んで珍らしく唐檜の皮で圍つた小舎が出來てゐた、信州あたりの獵夫の作つたものだらうと。有り難いことには日の光りが一條二條、キラリと水へ落ちて來た。私達は狭い河原へ腰を下ろして、空を仰いで少しでも多くその貴い光線を受やうとした、周りの草や木が葉や枝をせい一杯擴げてゐるのと同じやうに。ゆる／＼食事などして時が經つ、何となく離れにくいやうな、この山上の春の野を出掛けた時は午を餘程過ぎてしまつた。

原は其まゝ私達を載せて、緩くうねりながら空へ空へと登つてゆく。莞草などがチラ／＼松明でも灯したやうに行列してゐるのを見ると、不圖秋の火山の裾——淺間の追分ヶ原でも行くやうな氣もする。しかし忽ち大きな偃松が出來て來たと思ふと、脚元から水づいた灰白の或は又古血の凝固したやうなガレががら／＼崩れかゝる、先達て見たあの熟した荔枝の頭へさし掛つたのだ。深山金梅や風露草が崖端へゐざり出て、「こはいもの見たさ」におづ／＼と覗いてゐる。私も思はず曳かれるやうにその眞似をし

◎大井川奥山の旅 中村

五四

て見たが、忽ちそのガレも花も何もかも何處かへケシ飛んでしまつたと思ふと、冷たい雨がバチ／＼懸つて來た。しかし皆案外平氣な顔をしてゐる。餘り悲しい出來事に出遭つた人が涙を忘れるやうに。構はず登る、又しても白檜の疎林に抱き込まれる。森の地膚には款冬や虎耳草の類が、ニヨキニヨキ生ひ茂つて、太い莖が青い酒でも盛つた硝子瓶のやうに透きどほる。種々な形の濶葉が思ひきり伸し合つて、浮藻のやうにフワツきながら、表面から青白い水をだら／＼流してサツケ立つてゐる、恐る恐るその中を踏み分けて行くと、ベキ／＼いつて痺れるやうな匂ひがツンと頭の心へ來るので、氣がちつとも落つかない。バサツ！と突然森の静けさを破つて、間近の太い白檜の根方から、大砲の彈丸でも破裂したやうに、褐色の團々が飛び散る。そして引掻き廻されたおごろの霧の奥に消えてしまふ。山鳥か——と思つた時は、ポカンとした脚元から後れた仲間が悠々と舞ひ出して、草葉の露をサツと振り拂ひさま姿を隠す。松は厄氣になつて追かけたが、もう片影もありはしない。一體あんな大勢で何をしてゐたのだう。こんな日に彼等は饗宴でも張つてゐたものかしらむ。そして何處か見えない蔭から首を揃へて、このみじめな侵入者を冷笑してゐるけはひがある。松がヤケに烟管を咬へてドン／＼先きに立つた。

傾斜に樺が多くなると同時に草が短くなつて、深山毛茛や信濃金梅草や四葉鹽竈が、しなやかに手招ぎしてゐる、かと思ふと樺の下蔭に偃松がスク／＼立ち上がつてゐるので錯覺がまご／＼する。もう何もかも夢中だ、行ける處迄——それだ。この灰色の氣體が身體中の細胞といふ細胞に満ちた果ては木乃伊にもならず、そのまゝどこかの空に四散してしまひさうで、ヂツとしてゐられないから動くのだ、動けば一寸でも高い方へ動く、その位の方——登山者本然の——が未だ身體の何處かの隅にトロ／＼と燃えてゐるらしい。

突如雨がピイドロの簾でも捲き下ろしたやうに降る——といふよりは突立つた。鋼線を叩くやうな

響が天氣を震はす、苔の間には遠雷が何か恐ろしく大きいものが虚空をのた打ち廻るやうな呻きを送つて来る。山人達は荷へ掛けた桐油を引き出して、兩手で頭の上へ翳しながら、濡れてゐる急傾斜の草間に踏み込んでゐる。私は樺の下で、パシパシといふ滴に叩かれながら杖に寄りかゝるやうにして突立つてゐた。雨の勢が少し減ったかと思ふと、頭上の尾根へ烈風が吹き當てるを見て、荒れた手で繻子の上を撫で廻すやうな音が聞える。松と茂が匍ひ出して、尾根の方を見てくるといつて出掛けて行つた。霧はムラを生じて雫のやうなのが、ぶつかり合つたり、ちぎれ飛んだりして行く。あゝ動搖に限る、静寂の極は死だ。自分も聲を擧げて喚めき度くなつた、が駄目だ、自然——風、霧、雨、雷、岩も草木も何もかもが聲を合はせて、何か思考を絶した大きな歌謠の、一篇の一節の其の又中の一句を、高らかに唱誦してゐるのだといふやうな氣がする。そこに調子の外れた、伴奏の出来ない自分を見るとき、孤獨の感が身體を締めつけるやうに押し寄せて来る。そして真正に生きやうといふ努力精進の念が心の底から清水のやうに薄く、藝術といふものが言ひやうもなく懐かしいのもこの時だ。

引返へして来た二人に跟いて出掛ける、荒れ、ば後がい、——こんなことをもう頭の中で思つてゐるものがある。眞青な雫を揺り落とす樺の木の間を通つて、葉の一本一本が新しい縫針のやうに光る。偃松の間を、おづ／＼／＼と山稜へ出た。すぐ爪先きから和田の谷へ向つて、漆黒の岩砂が雪崩を打つてゐるのが、先きの豪雨に洗はれ磨かれて、山鼠の瞳のやうに光る。矮い岳樺が其の間に忍びやかに實を持つて踏まつてゐる。風がどつど吹き當てる。銀の裏がヒラ／＼舞つて、青い實の房が吹流しのやうにフーツと空に浮ぶ。一團の霧の迅風が、周章てふためいて、奇怪な尾を曳きながら引たくられるやうに飛び去ると、聖ヶ岳の峯頭へ志すらしい山稜が、遙かの空際から恐ろしい螺旋階をなして霧の中へ衝立つた。無数の鮫の齒のやうな巨岩が、テカ／＼氣味悪く光りながら、自分達の流したボロボロの垢を、和田谷の底へ足蹴にして處嫌はず躍つてゐる。もう平べつたくへばり着いてゐる偃松

◎大井川奥山の旅 中村

五六

や苔桃、金梅草、岩爪草、深山爪草、深山大根草、黄や淡紅の石楠花などの吐く冷たい息の香りに、一段一段と階段は高まる。

急雨が又注いで来た、雷鳴も愈よ間近く鼓膜がブン／＼唸り出す。階段の一つの突角は荒れ狂ふ大海の中に僅かに頭を顯はした孤巖のやうになつた、みじめな信天翁の私達はその上に立ち慄んで、痛い天水の筈を満身に浴びた。非常な勢で落下する水滴と、堅硬な岩面へ打ち當つて跳び上る水滴とが身の廻りで叩き合つて火花を散らす。少し苛責がゆるむと、私達は黙つてきしむやうな手足を動かし始める。今度は俺の番だといふやうに階段は思ひ切り細くなつた。頼みの大井川向きまでが、背を反らして、偃松は猪の怒り毛のやうに逆立つて、足の入れやうもない。信州の方面は固より一列の堅壁で、幾百萬年の昔から氷雪風雨が駆け登り、駆け下りた跡が、むしろ取れたり生々しい蚯蚓脹れになつたりしてゐる。その一つだ、岩石の逆樋は兩壁が觸れ合はん許りに迫つて、傾斜などは眼に入らないやうなその峽間から、西の卓越風が剃刀のやうな刃を翳した霧を絶大なフイゴにかけて吹きつけてゐる、そのパツ／＼と息を切る度に、私共の身體は、高山植物の枯葉一枚よりもタワイなく醜弄される。

血の氣の無い身を細めて、手足に吸盤を持つた小蟲のやうになつて匍ふ。それでも赤色に爛れた岩泥はツルリとこつて胸がギクツとする。その鼻先きで深山鹽竈が、血紅色の花穂を揺すつてニタリと笑ふ。頭の中はくわつと燃えるやうになつて、それで全身は土のやうに悪感を覚えるのである。同じやうな處が續いた。或る處では尾根のすぐ側から水がトットと流れ出して、霧の底へ吞まれる前に、青白い上眼をつかつてこつちを見た。三人が兎も角も迷路を抜け出て、霧から霧へと翅を伸した破片岩の廣い山腹へ移つた時は、石の冷たい肌へ耐え性もなくベツタリと抱きついてしまつた。山人達は程經つて「ヤツキリした」と投げ出したやうに呟いた。鈍い黝灰色の破岩屑は個々の歪角を、大きな平面に統一して恐ろしい單調を展げてゐる。

眼先きが變つたので安心し過ぎたせいもあらう、霧に圍まれたこの石原は周圍に比較するもの、無
いせい、左程にも見えなかつたが、二歩三步踏み込んでこれも優しい味方で無いことが解かつた。
今の今木の葉のやうに弄ばれたこの身が、鏡の塊でもあるやうに重い。急傾斜の石壁は果てしがな
い、假松さへも根を下ろし兼ねたと見え、僅かに梅ザクラ、白山一華、高根爪草、千島甘菜、深山大
根草、當藥龍膽、岩梅、高根董などがしほくど戦いでるばかりだ、——不思議な天工の壁畫。頭の
上へ大きな箱のやうな、將基の駒のやうな黒影がポーツと顯はれて、濃くなつたり淡くなつたりする。
何でも見えるものが目當てだ。化かされるのを恐がる程の餘裕も持たない。氣に伴はない脚が動もす
れば岩屑の上を空上して虚空に怪しい線を截る、そこから岩屑は止めどもなく崩れ出して、ザーツと
遞増的に底氣味悪く強迫するやうな聲を擧げるが、又幽かに消えてしまふ。頭がシーンとする。恐ろ
しい紡錘狀の聲！御互に離れた山人達が黙つて眼を見合はす、そして手ん手には、しこく、足が、りを選
つては猫のやうに匍ふ。屨氣樓を逐つて沙漠を旅するカラパンのたよりなさ。

併し暴風雨の前表は畢に顯はれずにはゐなかつた。上屑の霧が綻れ始めて、右にも左にも黝い大魚
の背が浮み出した時には、何でも構はず嬉しかつた。山人達は碌に見極めもせず、赤石澤へ入る尾根
だとか何とか、囁言のやうなことを言つてゐる。極寒の光りを持つた大氣が、もう吹き當てるのでは
なく物を吹き透す。身體も何も硝子で出来たやうに透き徹つてしまふかと思ふやうだ。ピリツと神經
が電氣を放つて、高い處へ來たなと、怪しい意識が氣をとり直す。ほんの一瞬間に、西方の霧は大き
な幕を引いたやうに、除れてゐた。而してそこに驚ろくべき天上の雲の世界が顯はれた。

無数の大きな蛭輪のやうな雲がヌラク、背を並べて、天と地との間に恐ろしい大廣間を作る、綠玉
色の空の襖がそれを匝つて建つてゐる。そして中には、巨大な逆髪を亂した雲の幾群が、音もなく靜
かに躍り狂てゐる。或ものは力そのものを結晶させたやうな瘤々だらけになり、白熱の極自ら自分の力

に倒れやうとする。或ものは全身から青白い火焰をめら／＼と吐いて己れを燒盡しやうとし、苦痛に耐えでもく／＼どうごめき廻る。それ等を又取り巻いて、大小諸種の象が裂けたり、固まつたり、のめつたり、立ち上つたり、態々の怪しい運動を續けてゐる。そしてその變化の推移が不可思議な迄に精妙な速度を以て音も無く行はれてゐる。その摩擦から發するらしい晝間の瓦斯の火のやうな光りが隔々迄瀾漫して、亂舞に連れて照り返され影にされ變幻の極を盡してゐる。今迄片隅に絞られてゐた騰雲の幕がモーツと擴がる時、この天上の神秘劇はそれつきり閉ぢられてしまつた。私は何か見る可からざるものを見たといふやうな氣がした。長く燈火を見つめた後のやうな幻光が眼の奥に止まつて離れない。自分の吐く息も青い焰を出すのではないかとあやしまれる。

この時から奔騰するぞす黒い雲は方々に破綻を生じて、杜切れ杜切れの山の姿を眼ま苦しく洩らし始めた。先づ東方へ白峯山脈の策ヶ岳千挺木山の連山が出て来る、紫藍色がコックリと濃くて、山の厚みを暗示してゐる、而かも一點の濁りを止めない。その眞上へ目八分に不二が浮み出た、——浮いてゐるごよりは思へない、地よりも遙かに近く天に屬してゐる。これは又冴えた青藍に純粹そのもの、色ど光を放つてゐる。そのメロディアスな線の振動から一脈の温味がこの冷え切つた身體へ傳はつて来るのを感じた。振り向くと瞳の先きに、さつき登つた階段が見える、大井川の大谷に満ち充ちた白霧が、そこからヒョイと覗くと、信州から吹き込む峯越の切風に額を衝かれて、キリ／＼顛倒してゐる。

身輕の私は四ツ匍ひになつて兎のやうに登つた、登つて石壁の窮極に達した。そして些やかな窪の西の高みに御料局の四等三角點を見た。次の瞬間には私は又崖端迄引返して、山人達を喜ばせやうと思つて大聲に呼んだ、彼等は風當の比較的弱い處へ、危なかしく腰を据えてゐたが、そのドロンとした眼と合つた時に私は自分が如何にも慘忍なやうな氣がした。そして悄悄と引返へした、自分と彼等との別人なのに氣がついた。

西の遠空に惠那山が獨り大洋の中の一頭の鯨を見るやうに浮いてゐる。赤石の岳と思はれるのには、見えない巨大な指で撫でるやうに、すつぱり覆ひ被さつた雲がぞろ／＼と筋を引いて大井川の谷間へ爬行してゐる。頭が搔きむしり度いやうに鬱陶しい。赤石澤であらう、雲の底の蒼黝い壺の底に凄い瞳を凝らしてゐるものがある。不二や笹ヶ岳や千挺木や皆な益々線の強みを増して、見てゐる私の心も夢から覺めるやうに緊張の度を増して来る。この旅の始め以來身體中に鬱積した灰色の毒素がさうけ立つた毛穴から一齊に放散する快感がある。金峯からかけて秩父の群山が、乳酪色の大空に一線碧空を顯したやうに澄んでゐる。大雙里、金峯、奥千丈、國司、甲武信、雲切、破風、雁坂などの峯頭が古典派の詩のやうな韻律を合はしてゐる。大井川の霧が始めて翅をすばめると、赤石澤の鳴合なごみあひ（合流點）あたり僅かの處が古井戸の底の溜まり水をでも覗くやうに見えたが、その他は上流も下流も、見えやうにも餘りに深過ぎるのだ。

四邊一面、黝灰暗褐黄さまざまの硬砂岩、砂岩など上部秩父古生層の破岩片が算を亂して散り布いてゐる。そして半腹のところがつて、樺色や鼠色や暗緑の地衣が岩石そのもの、やうに堅く、へばりついてゐる。チングルマ、青の梅櫻、峯ズソウ、岩ベンケイ草などが、もう縮み上がり、偃松も山の肌へベツタリと腹匍ひになつて息を殺してゐる。こゝから東寄りに續いた凸點は、更に心持ち高いやうだ。私はそこに岩屑を周圍に散亂されて、その母體の嚴として躡まつてゐるのを見た。聖ヶ岳の背骨、その高いこと約そ三千米突！天工に成つたその昔の宏大な岩石の殿堂の、この残つた大圓柱の一つのカピタルは、めり／＼と惨忍な決裂が入つて、地衣が奇怪な浮彫の斷片を見せてゐるばかりだ。偃松も高山植物もすつと周りに遠のいてゐる。私はこの恐らく人間といふものを知らない岩石の突端に立つて今更のやうに心から身慄ひをこゝめ得なかつた。

西風は極荒つぽくはないが、何物をも透徹しければ止まないといふやうな力を以て吹き過ぎる。日

◎大井川奥山の旅 中村

が暮れるのには未だ間があるものゝ、ヂツとしてゐるとそのまゝ化石してしまひさうなので、山人達と荷を置いたまゝ泊り場所を求めに出掛ける、長大な山背は蜒々と東西に伸びてゐるのだが、こゝは西寄りだから、東の方へ行つて見た。その間にもこれが果して聖ヶ岳の頂上だらうかと、心に疑ひ度くてならない、それは九分九厘間違ひはないのだ。しかしあの頭の中の聖ヶ岳——山といへばすぐ浮ぶ、幻の聖ヶ岳——その上に今この生身が立つてゐるのだらうか、怪しからぬことだといふやうに、夢から醒め際のポーッとした氣味がある。俯目になつて下つて行くと、黄花岗梅花が咲く深山小田卷草が咲く。

山背は東北にガツクリと落ち込む、その向ふの低い突端に岩壁に圍まれた窪地があつて、水銀を一滴滴こぼしたやうな雪田の光りが眼に入つた、それが疲れ切つた身に宿屋の看板が見えたやうに嬉しかつた。彼處にしよう——皆急いで荷を取つて来て又下り始めた。大嵩の岩塊がビーク状に削立してゐたり、巨人の死骸のやうにぶつ倒れてゐたりして、尖锐な歪角の線が狭い山稜に擅まに錯綜してゐる。その中をおづ／＼行くのに動もすると脚を持つて行かれさうになる。人間つてこんなイクヂのないものか——石の冷罵が聞えるやうだ。聖澤へたるみもなく引下ろす大傾斜は赤黝く兀げて、縦谷に侵入した残雪が頭だけ見せて、蒲公英の葉形に鋸齒を刻んでゐる。こんな雪は赤石澤の方にもある、こつちは碌に傾斜などは見えないのだ、高い塀の上を匍つてゐる蟻の眼には。

雪田の縁にはいゝ平らがあつた。近頃迄この窪地は一面の雪だつたらしい。狸々袴などがやつとおづ／＼首を擡げかゝつてゐる。西風は高い巖壁の頭を擦つて飛んで行つてしまふので、始めて久しぶりの樂な息を入れる。しかし一刻も動かすにはゐられない、身體が無感覺に痺れてしまふ。薪、薪、何でもそこら中を歩き廻つて偃松の枯骨を拾ひ集める、小高い岩峯を越して、上から見て置いた低い東の崖端にある三角點へ下りて、茂作は倒れて恐ろしい岩角に引懸つてゐる櫓の木を、危いからよせ

六〇

どいふのも肯かず鉦で叩き切つて、ヒョロ／＼しながら擔いで来る。生存の本能の驚ろくべき力！火が勢よく燃え上る、ガツ／＼手足を翳してゐるうち、脅かすやうに雨の大粒が飛び始めたので、周章で、天幕を出して張る。風當りが弱いといつて、この大屋根の棟だ、裾へ岩片を並べたり、頭から細引を引張つて石壁の裂け目へからみ付けたり、そこらへ轉がつてゐる大きな岩塊へ縛りつけたりして用心を怠らない。石壁へ偃松の胴骨をかけ渡して鍋を下げる、雪が湯になる迄の長さ。

漸く温かい飯を食つてゐると、東の空は灰青く匂つて眉毛のやうな数抹の雲が浮く。岩壁の上へ夕榮の色が、水づいた大氣をぼう／＼と樺色に燻し出した。と思ふどフツツリ夜になる。眞黒な風が頭から吹きちぎれてどつと天幕に衝き當る。雷鳴は西から南へかけて往つたり來たりしてゐる。それが岩壁へ響いて、危ふい吊床の上に搖られるやうで氣が落つかない。しかし腹が足りて仰のけさまに毛布の上に横たはつた時は無論悪い心持ちではなかつた。

用を達しに外へ出る八日の月が西の空へポツと顯はれてゐた、その下にこの山の絶巔が眞黒に衝立つてゐる。側の雪田が鮫の腐肉か何ぞのやうに燐光を放つ。眼が闇に馴れると、今迄眞暗だと思つた深沈の瀾氣の中に様々な山の象が精靈のやうに出て來た、晝間見るやうな形骸はかなぐり捨て、しまつて、その本體がさまよひ出たのであるまいか。南の方に上河内岳らしいのが俯伏せになつて、頸に羅の襟卷をしてゐる。笹ヶ岳以南の白峯山脈が大入道小入道をもく／＼躍らせてゐるが、裾の方は一様に薄白い氣に化けてゐる。それよりもその上に、仄かに異様な不二の形が見えるではないか、硝子へ凝つた息ほごな、そしてフワリ／＼と人魂か何かのやうに漂ふさままだ。私はガチ／＼齒と齒を打ち合はせながら、二度三度眼を擦つた。

天幕へかけ込んで、焚火の下で熱せられた石ころを足の方へさらひ込んで、毛布引被つて——寝た。體だけは寝たがしんは寝なかつた、青白いふは／＼したものが、そこら中を飛び廻る。二度目に思ひ

切つて天幕から忍び出た時は夜中らしかつたが、唯薄白い許りで何にも無かつた。

△七月廿一日。午前九時五十分、上河内岳北腹露臺地出發。十時三十分、白檜林中より南に上河内岳を望む。十一時十五分、尾根の最低所、草原をなせる所に着く、白檜林中に水流を得葦食。午後十二時廿五分出發。一時廿六分、樞松顯はれ、之より細くして峻急なる山稜にかゝる。二時五十分、山稜險惡を極む。三時廿五分、廣き聖ヶ岳山腹の傾斜に入る。四時廿分、聖ヶ岳頂上の一部、御料局四等三角點ある所に達す、附近を彷徨。四時五十六分、聖ヶ岳の長大なる山背を東に下り、小窪地殘雪を湛ふる處に野營。茲より絶頂迄凡そ十五分程、又東方に下り再一高處を越へて尾根懸崖をなせる突端に參謀三角點あり、凡そ五分程。△聖ヶ岳は赤石主脈の走向とは殆んど直角に即東西に山勢を伸展してゐる、その狀一寸と惡澤岳に似てゐる。主脈はその西端の方に、低く辛ふじて連鎖されてゐる有様である。參謀三角點は東方低く大井川を俯瞰する一角にあつて、高距二九七八米と稱されてゐるから、この山の絶頂は恐らく三千米突を越えるであらうと思はれる。

九、聖ヶ岳の頂き

烈風のうちに、聖ヶ岳頂上の夜が明けた。死んだやうな睡りから覺めた時は、イキナリ耳元で、ぶんどぶんと大濤の打寄せるやうな響に驚ろかされた、白ぼけた天幕の布が膨れたり凹んだりしてゐる。睡り足りない眼に、昨夜の幻影がつき纏つて放れない。尾根の岩堤がゴーツと唸り出すと、鋭尖な岩の齒や雪の刺に劈かれた風が、まるで傷ついた惡獸のやうにこの淺い窪地に跳り込んで、縦横に暴れ廻るのだ。

天地は刻一刻に物騒がしくなつ來た。天幕はダブ／＼にたるんでしまつて、支柱が今にも折れさうにギ／＼鳴る。雷鳴さへ又起つて、床の岩石迄ガタ／＼顛え出す。風が變つたと見えて、岩壁が頼みにならなくなる。南方から砂利交りの豪雨を叩きつけると、却てそれに反射して、擾亂を捲き起す。裾に乗せて置いた、やつと持上げられる程な岩塊迄、あざり出して、天幕はもう難破船の帆柱見たやうになつてしまふ。松次が第一番に、「こはいことだ」と呻きながら、毛布の上から油紙を被つて俯伏

せに踏まつてしまつた、皆さうするより仕方がなかつた。床の岩間を冷たい水がトットと流れる、背の桐油で雨洩りの雫がボチ／＼跳ねかへる。私は俯伏した胸に、よせばいゝものをわざと、あの肩骨のサツト颯つた聖ヶ岳の姿を描いて見る、そして風雨の荒れ狂ふ中を、その天邊の細い鋭い線の何處かの一端に辛く獅噛みついてゐる、養蟲程の護りもない人間の生命といふものを想像して、見て心細さに耐えられなくなつた。どうなるか任せて置くよりしかたがない——誰だかこんな事を呟やく、全くそれより外無いのだ、漠然と何かに禱るやうな心持ちになる。

火だ火だ、しかし焚く所がないのだ、苦しさの極天幕の中で焚いて息の止まるやうな苦しみをした。それ程寒さに耐えられなかつた。つく／＼このやく／＼な人間の肉體といふものが呪はしくなつた。家の温かい柔かい布圍などが眼の先きへ出て來て忌々しい。飯は炊き残りで間に分はず。暮れ方からウ井スキーを仰いで苦しい睡を買つた。

何か重いものがのしかゝつたやうな、又物がブーツと無限に擴がるやうな氣がしに、幾度か眼が覺めかゝる。一遍はもう薄明るかつたが、天幕がビタ／＼鳴りその間に交つて豆を煎るやうな雨の音が耳に入ると、打ちのめされたやうになつて、そのまゝ又胸苦しい睡に落ちた。「旦那山が見えるぞい」と呼ぶ聲がする、頭がカーンとする。跳ね起きて外を覗ふと山々は水蒸氣の飽和した深沈の大氣の中にポツと淡い影を滲ましてゐる。私は急いで毛布をぐる／＼身に巻きつけて、眞上の岩壁の山稜へ匍ひ上つた、そしてその朦ろの線を慥かり捉まへやうとした。

眞北に赤石の岳が恐ろしくづつしりと根を張つてゐる、流石にこれは線が堅く太く力で瘤々だらけだ。頂上だけが一際高く破風を抜き上げて、そこから掬ふやうに雪崩れ落ちる縦谷に磁器をぶつ缺いたやうな雪が止まつてゐる。山の肌は丹塗りが剥げチョロケになつて、生地が露出してゐる。これを衛るやうに惡澤岳と西河内岳とが東西に寄り添つて立つ、前者の尖頭には二點三點白いものがチラつ

山

く、後者はばやけながらも刺々しい山の稜角をキラリと光らせる、それで西河内岳と解かつたのだ。赤石が東へ引落す斜線はギクリと折れて、恐ろしい平準單一の線を劃す、積雲の塊をぶつ切いたやうな山の片影が、其の上に紛然と入り亂れて、靡ろめいた輪廓線が搦み合ひ纏れ合つて怪しく眼を惑はすが、小河内岳の仙丈岳の巨像は流石に欺かれない。さらでも大小長短の尾根の脈絡を思ひ切つて錯綜させたこの北部の赤石山脈伊那山脈を縦観すると、まるで巨大な百足蟲の躍つてゐるやうだ。

赤石澤の奥を立て廻す峯脈には、大澤岳が鋭利な鋸齒をいら立たせ、鬼岳が半ば壊廢した金字塔を押し立てゐる、崩れ出した半腹の石材を厚く封じてゐる、蒼黒い古苔——偃松の色が見えるだけに近い。この澤源頭の深い谷間には處々雪が鉛の削り屑のやうに光つてゐる。天半に動かない一抹の横雲と見えたとのは、木曾駒の山脈であつた、寶劔岳がチクリと神經を露出する。南の方は齒が抜けたやうに空が低い。河内岳を始め仁田河内、ガツチ河内、信濃俣の岳、大無間山かけて皆のろ／＼と緩やかな蒼い穏波を打たせてゐる、南方から仰望した時心を顛へさしたあの威容はもう嘘のやうに失せてしまつてゐる。

私は殆んど本能的にポケットからくしや／＼に濡れた手帖を引ずり出して、纏れ合ふ山の皺波よりももつと怪しい線を何本ともなくのたくらしてゐた。烈風が凍つたやうな霧雨の粒を眞どもに吹きつけて、おどろに伸びた髪の毛が亂れてはうるさく眼には入る。鉛筆の痕が散り滲んで雲が湧くかと思はれる。下では先きから山人達が、主人飯をあがれ——と呼んでゐる。私は居すまひを直さうと思つて足元を見た、そして圖らずそこに、大きな瞳をパツチリと開いてゐる長之助草と眼が合つた。私はもう手帖も何も擲り出して座つて頬をすり當てた。不思議に温かい血がそこから脈を打つて廻り始めた。三年ぶりの邂逅だつた、御身にこの南の山で會はうとは思はなかつた。

火の側へ飛び下りた時には、二人は山の神へ御初穂をとり分けて持ち遠しさうな顔をしてゐた。山

が見える。主人はまるで馬鹿になつてゐる。かういはれた時には横から自分の姿が見えたやうにハツとした。午過ぎ雨のスキを見て絶頂の方へ行つて見る。四方の山は未だに水底の青み、どろのやうに漂つてゐる、それが朦朧とすればする程この聖ヶ岳の大岩塊は角度が強くなり堅硬の度が倍加するやうだ。そらうに天地創造の時を思はせる。混沌の波濤は今、後年の大山岳を形造らうとしてゐる、そして先づ凝つて結んで地の一角を顯はしたのがこの聖ヶ岳の絶頂である。お山のエンドウが藍紫のインキで、寒冷の泉のやうな點々を打つてゐる。

夜、月の影はやはり淡かつたが、どこか鋭く冴えた光りがあつた。二點三點の星も見えた。仄青い光線が通風窓から射し入つて、天幕の裏を顛えながら匂ひ廻つてゐる。見上げるやうな大きな火を焚いて、その前に躑まつてゐるのだが、背中から銀の針でも打たれるやうだ。眼が冴えるので種々な話しをする。私はいつもこんな時には面白い話はないかと彼等にせがむ。聞いて戦くやうな人間と自然との交渉を暗示する物語、何かそんなものがあるに違ひない、それを彼等の口から待ち設けるのだ、けれどもこの山人達はさつぱり自分を満足させるやうな話しをして呉れなかつた、時々無益に胸に轟ろかせる計りで、ちき話しは脇へ外れてしまふ。ある谷間のある岩の根方のある木の側で、その後どうしたか解からない獸の片足へ確かに彈丸を打ち込んだ——などいふ事を、細かに繰返へし繰返し話してくれるのが精々だ。物質文明の威力はこの奥山嵐に吹かれ、雲解の水を吸つて生きてゐる山民をして、固有の貴い寶物を見向きもしないやうに強ひるので。彼等は今や無智の幸福を失なはうとしてゐる。飛行機と蓄音器とを混せて、「テクオキ」とかいふ奇妙な語を私に聞かせて、みぶるひをさせたのも彼等である。都會生活といふことは彼等の唯一の空想の對象であるらしい、何かといふと此の世に生れた甲斐には東京のやうな立派な處に暮して見たいものだなどいふ。さらでも紙屑でも捨てるやうな氣で、東京を飛び出して來た私は、都會の生活といふものゝ恐るべく咀ふべきことを、彼等が

◎大井川奥山の旅 中村

六六

驚ろきの眼を睜る迄聲を極めて叫ぶのだつた。けれども情ない哉、私の心は裏切られた、さうだらうよ！と何處かで皮肉な聲がする。もう私はグタリと黙つてしまつて、話しを外らす勇氣さへ失くなるのを感じる。私の心の一隅には、あの濃爛な燈火と温かい寢床と人工的な食物が、シンクヒ蟲のやうに巢を食つて「ざまを見ろ、この分知らず」と嘲笑するのを如何ともし難いではないか。

頭えながら夜を明かした、寒さは元より耐え難いが、天氣模様がいづにない好いので、異常な期待が神経を突つて、目蓋が合つても眼は痛いやうに冴えてしまふ。曉方になつて、知らないうちにつどりしたと見える不圖見開いた眼にあたりは薄明るかつた。毛布の手觸りがピリツと冷たくて、そこから一面にほう／＼とたかつた偃松の灰が水を打つたやうに濕つてゐる。草鞋の緒を搦みつけて草履のやうにしたのを突掛けて、外へ出て見ると、夜明けの淡い水色の濕氣の中に一際鮮やかに不二や笹ヶ岳が出てゐる。雪田からほうと薄い霧が立つて、足元の岩片も高山植物もピッシヨリ露を浴びてゐる。爪先きが細い白金の針でも踏むやうにチク／＼する。そして痛い程爽やかな感が、身うちにも一ツと漲つてくる。私は迂る草履を引すつて、長之助草の山稜へ攀ち登つた。岩壁の上へヒョイと顔を出した時、不意に濃い朱黄色の光線がポツと眼の底へしみ徹つた。瞬間は頭が茫として一種の驚ろきに打たれてしまつた。日の出だつたのだ。それは昨夜だつて考へない處ではない、天氣になればと思ふと片方へ陰鬱な灰色の霧を描いて見て、晴れやかに身體が顛へる位だつた。けれども目のあたり、蛋白石の盤のやうな幅廣い横雲の上へ、四分の一程の朱黄色の弧がのつと顯はれてゐた時には、全く新たな驚ろきを感じたのだ。太陽といふものを始めて見たやうに感じた。朱黄色の光線は見る見る私の身體の中に擴がつて來て凍りついたやうな血液を融かし、血管といふ血管の隅々迄循環り始めたやうな氣がする。

私は下の幕營の方を覗いて、日の出だぞ！御天道様が見えるぞ！と力を込めて叫んだ。火か何か吹

いてゐた茂作が急いで登つて来たやうだ。私は東の空から眼を放さない、圓盤かつこ横雲を離れやうとすると、中の光體がクル〜と廻轉した。私は立つて合掌して禮拜してゐる自分を見出した。いつか上つて来た茂作も同じやうに頭を下げた。光線が心持ち燻るやうな色を帯びたと思ふと圓頂がひらむやうになつて上層の雲に滲み込まふとする。ホッと息して私は四方を見渡した。遠近の山々が悉く垂れた額に聖い光りを受けて、跪いて禮拜してゐるごより外は思はれなかつた。

この時程強く私は太陽の有り難さを感じたことは無かつた、この時程確かり太陽の存在を感じたことはなかつた。未開の民族に見出すといふ太陽崇拜教徒の心が私の心だつた。幕營へ歸つた時、呼んでもモン〜として出て來なかつた松次の顔が醜惡な鬼のやうに見えた。

赤石の岳まで山上の旅を續けることに決めた。岳はヒョイと抱きつける位近いけれど、赤石澤が鋭い切尖を、深く遠く割り込んでゐるから、遙かに西の兎岳から山脈傳ひに大廻りをして行かなければならぬ。天幕の取片付やら、荷物の整理やらを二人の山人に任せておいて、私は獨り双眼鏡を頸に吊して山稜を絶頂の方へ急いだ。暫らくしてあの恐ろしい而かも幸ある三晩の旅寢の跡を振り返つた時は、まだ天幕がしよんぼりと小さな蜘蛛の巢のやうに見え、小蟲程の人影がムツ〜とそこらを蠢めてゐた、暫らくはそれから眼が放されなかつた。雪田がキラ〜と光るあなたに、三角點附近の小さい岩峯が聳えて、それから先きはポツキリ虚空に消えてゐる。身は恐ろしい平滑な巨岩の断面に垂り懸つて絶頂は眉の高さにある。私はあの頭の中の偶像の聖ヶ岳の、その神來の力に満ちた肩骨の線にこの四日自分の足跡を印したことを強く意識して、空恐ろしい迄の幸福を感じた。

それのみではない、もう山といふ山が四方から放つ、或は鋭い或は仄かな薔薇色を含んだ電光が閃々と虚空に亂れて、大氣が研ぎ澄まされたやうに光つてゐる、何もかも皆、今生れた許りのやうに新らしい輝きやうだ。日本アルプスを三分したその二つ、中央の兩大山脈が雁行して、大虚の西半

山

岳

球を眞二つにサクッと横断する、驚ろくべき無邊際山の空線は、唯もう電波の走つた跡のやうにピリ／＼と顛へてゐる、けれども落つてくると一波の尖りにも嚴乎たる特性があつて強く存在を宣してゐる。何時も一番最初に眼につくのは槍穂高の連壁だが、それが今は一層に甚だしい。鋭い峯角から短冊をかけ列ねたやうな生々しい雪片が燦々と眩ゆく揺らめいてゐる、あの上河内の谷間——梓川の水色が思はれる。笠ヶ岳の背ろから黒部五郎岳が、淺黒い素顔をチラと覗かす。北では大天井常念の肩から立山劔岳が遙かに銀箭を射出す。針木岳。蓮華岳——鹿島槍ヶ岳は双頭の白鷹の翫きをするやうでいつも人を叫ばせずには置かない。五龍、鏡、白馬ヶ岳、緊張の線が終極點になる。南半は火山が多いだけ、北半のやうに副迫した神經の痛い快感はないが、盡きない情緒の懐かしい喜びがある。

御岳の南に展べた一線が階調の音波を無限に擴げてゐる、暗紫の膚には玻璃の細片のやうに鋭く光る雪を鏤めてゐる。白山が遠い空に夢と現の境界を引く。長大な木曾駒ヶ岳の山脈は、最近く廣い紫紺の幔幕を張り渡して、流石にこれは威かつい筋骨を剝き出してゐる、南方丈念烏帽子のあたり、峯頭は亂杭齒を露はして、圓筒を半截したやうな特異な縦谷には白いものさへチラついてゐる。惠那山は獨り極南に離れて、奇醜な圓顛を撫してゐる、乗鞍の尖つた兜の鉢もさることだが、裾の斜線が見えないのが如何にも物足りない、前に立ちふさがる木曾山脈の透明な膚へ、想像の線が微妙なすちを引く。

赤石岳はもう直ぐそこに暗赭色の尨大な全容を曝露してゐる。絶頂から赤石澤の絶谷へ向つて、名の通りな赤裸の砂岩層の大肌脱ぎになつてゐる、それが風雪に擦破され、穿削されて岩層の断面が峻酷に波を打つて、胸のあたり肋骨でも剥き出されたやうに物凄まじい。落ち残つた肉に偃松がベタベタと紫斑を印してゐる。數點の電許り瑞々しい光りを放つて、杳かに谷間へ消えてゆく澤水と眼を見合はしてゐる。日が斜めにこの巨體の半面に匂つて、山の老いた血も蘇つたやうに見えた。西河内岳

の後ろから今朝は荒川岳の額が薄青く覗いてゐる。南方の山脈は蜿蜒、上河内岳から仁田河内岳、ガツチ河内岳、一段遠くイザルケ岳、光岳と蒼溟の大波が捲き起つては將に崩れやうとする形である。不二が笹ヶ岳千挺木山の空に白羽二重の雲の厚衾を幾枚か襲ねて、没するやうに端座してゐる、極寒の藍色が凍つたやうな純白と映發して、華やかに沈痛を極めてゐる。稻又山虎杖山以南、南方白峯山脈からかけて、大無間山の方は早や霧が如露で注ぐやうに掛かつて來た。和田川の谷から沸々と湧き上る眞白な雲が、行手の兎岳、圓山、大澤岳——長大な環壁の頭を越え肩を越えて、油でもつぐやうに底も知れない赤石澤へ滴つてゐる。

私といふ一個の人間は今、聖ヶ岳の絶頂、天に近きこと三千米突の空間に呼吸してゐるのだ。初秋の光りを持つた淺葱色の大空は山々の頂きにも、私の頭にも爽やかに垂れかゝり、仄温かい高山の朝の日光は冷やかな水のやうな大氣を通して、ポーッと岩石にも高山植物にも私の身體にも甘い官能の歡びを傳へる。私は實に「幸福」とは自分のことであらうと思つた。そしてヂツとしてゐられなくなつた、私は當てもなくそこへと歩き廻つた。兎が一匹偃松の影からチョコ〜と走り出て、岩の凹みに踏まつてこつちを見る。温かさうな朽葉色の毛並にも艶々しい圓らな瞳にも、日光が柔かく照る、私は撫でもやり度いやうな氣がして靜かに近づいた、兎は又、つと傾斜の岩間に見えなくなつた、私はそれを庇ふやうに、岩角から來た方を覗いて見たが、二人の獵夫の影はまだ石坂の半途にポツッと見えた。

十、赤石澤の水 上

(兎岳及び大澤岳)

後れた二人の山人を待ち合はせ、三人一緒になつて、聖ヶ岳の頂上から山脈傳ひに、西の方へ一歩

◎大井川奥山の旅 中村

七〇

一步下りて行く時分には、もう遠いアルプスの雪の山脈には雲の青簾がスルリと捲き下ろされてしまつた。朝なぎの雲の太平洋にも波頭が白く立ち初める、妙高火山彙が遙か沖の一系列の岩礁のやうに、没しやうどしては又顯はれてゐる。間近の西河内岳の巨大な爪で搔き取つたやうな崩壊の小口々々が日を照りかへして、生き生きと動くやうだ。魚無河内岳も出て來た。荒川岳と仙丈岳とに挟まれて、鋸ヶ岳が亂雑な黒い齒を逆立てゝゐる。

細い山稜には偃松が段々枝を伸してくる、斷崖の絶端から和田川の谷間を窺ふと、白い霧の噴泉は簌々と岩壁へ頽れ當つては颯と散り、飛沫は軽く騰つて横なぐりに兎岳の峯腹を掠めて、赤石澤へ吹き込んで來る。この兎岳の南半面は、絶頂からかけて皮肉がズタ／＼にすり剥げて、危なく段になつて止まつてゐる處もあるが、終には耐まらずカツと絶大な創傷を裂開する。その赤黝い面が微かに蠕動するやうで、神経がズキ／＼痛むやうな氣がする。底なしの古井戸のやうな赤石澤にも早や薄昏い雲霧が満ち溢れて、時々間歇泉を見るやうに奔騰するが、遠く北のアルプスから雲の大溟を渡つて吹き寄せる鋭い風の切尖きに散らされて、聖も赤石も冷たい水凍をしどいに浴び始めた。

日光が谷間に白く縞を織つて、山の膚に落ちる光りが斑になる。漸く萬象は慘憺の色彩を帯びやうとする。山稜の斷崖から處々、ラヂオラリア板岩が曉露を浴びて、生々しい眞赤な瀑を左右の谷底目掛けてドツと迸らしてゐる。山の血！今にも腥い香がブンと襲つて來さうだ。私は始めてこの齡の傾いた山の體軀にも、こんな若々しい血の循つてゐたのを知つた。しかもこの貴い血潮は日に日に失はれつゝあるのだ。かうして温かい肉が裂け落ち、痛ましい骨が顯はれ、果は冷たい濁體迄も粉々になつて散つてしまふ最後の日が——それはどんなに遠いことだか知らないが、想はれて來る。而かもこの冷やかな自己の運命の前にヂツと身じろぎもせず衝立つてゐる大山岳の姿から、強く無窮の生命を感じずにはゐられない。

崖頭を行けなくなるので、赤石澤の方へ向いて、急な山側を廻りながら下りる。點々と飛び散つてゐる粘板岩の碎片の間に、香ばしい禾本科の青草が房さりと、血に飽いた古戦場の芳草のやうに生ひ茂つてゐる。踏む足がぬらりと沁つて頭の心へズンと響ける。樺の矮樹が出て来る。大いなる赤石谷の一澤が脚元に薄白い瀬を光らせ、重たい空気を搔する音が、もう耳元でぐんぐんと唸る程になつた時、我々は兎岳へ連なる山稜線の絶底へ立つた。登山杖を崖端に立て、樺の葉越しに、兎岳を額の上に振り仰ぐ。絶頂は音もなく流れ寄る大霧の中に仰のけに倒れやうとする様だ。峯腹には偃松がベツタリ青壘を敷きつめたやうに見える。四邊の草間にはまだ、血潮のどばちりが點々と落ちて、黒百合がそこにも、こゝにも伏目になつて咲いてゐる。振り返へると、今過ぎた腥慘な斷崖の上に、早や霧の銀の長髪が巴になつて蓋ひかゝつて、聖ヶ岳の頂きは見えやうもない。私達は山上の谷底にギシと身動きも出来ないやうに封じ込められてしまつた。山人は暗い顔をして兎岳の峯角をぬすみ見てゐる。凄まじい裂傷の縁を登りにかゝる、繊細い山稜は人間一人の重みにグラグラと揺らめくやうな處もある。偃松の骨が執念く搦みついて、それで危ふく命脈を保つてゐるやうな處もある。やつと段へ出る、脱落した山の皮肉の堆積だ、偃松がのた打つて落下するのを繼ぎどめてゐる。絶頂はこの眞上今にも又新たに削られはしまいかと思はれる崖端である、砂岩粘板岩の切りさいなまれた間に、深山鹽竈、ドラバ、小金梅草、深山大根草、高根董などが、荒んだ周圍を蔽ひ隠すやうに、美しい優しい色ど光りを散布してゐる。二七九九米の三角標が西の方の低い峯角に、頭と一脚はどこかへケシ飛んで三本足をバラバラに天に向けてゐる。

急斜の石板を下りになる、向ひ合つた赤石の大岳は、愈よ頭が吊し上がるやうに尖つて来る。行手の山脈續き大澤岳の頂邊が、時々西の谷間から蒸し上る雲の背に、高く高く覗いてゐる。私達は又かうして山稜の凹所へ逐ひ落された。時間だからバサバサとする飯を薬のやうに嚙み下す。大きな葉牡丹

◎大井川奥山の旅 中村

七二

のやうな雲が頭の上へ咲き崩れて、日影が心細く薄れて来た。緩い礫の山背を、ひたすら急いで小高い机のやうな峯頭を過ぎる、御料局の四等三角點が偃松の中に埋れてゐた。私達もその嚴つい枝に頭を撫でられながらくゞつて行くと、後から来る茂作が「あ、ニク、ニク！」と不意に叫び出した、そして振り向く松の背から彈丸と鐵砲を引攪ふと、獸のやうに行手の岩壁へ飛び上つて小さくなつてしまふ、私がまだ獸の姿さへ見出せないうち、軽い銃音が一發二發聞える。松が誘はれて急ぎ足に行くあとを私はそろ／＼跟いて行つた。

私は山人達の残して行つた荷の側へ腰を下ろして獨り四邊を見廻はしてゐた。彼等は獸の跡を逐つて何處へ行つたか、何かにさら／＼も行かれたやうだ。足元の岩間にはあつちに一株こつちに一株、立山金梅草がつゝましく咲いてゐる。西の谷間から濃い霧が蒸々ど湧き返つて、日光はもう一條も落ちなくなつた。薄ら冷たい鎮靜の氣が霧の中から搾れて滴たつた、岩間へ重くたゆたつてゐる。岳雀がその底で清水の流れるやうな聲を立てる。向ふに低く兎岳が出る、續いて今朝身を顛はせた凄まじい山稜の一部が充血した眼でまだこつちを睨んでゐる。聖ヶ岳の頂上はむら／＼と雲が纏はつて、よく見えないが、赤石澤目がけて恐ろしく峻直に削り落された傾斜は、一面の偃松が貴い柔氈でも展べたやうで、轉がつて見たいやうだ。銀の大鋸でも吊下げたやうな残雪から、幾條か澤水が顛へながら走り出て、岩壁に無數の飛瀑を懸け列ね、半ばは雲に化けて天に昇り半ばは無地の地底——赤石澤指して消えてゆく。その大氣を劈き岩石を叩く音が低く底強くこゝ迄傳はつてくる。聖ヶ岳の肩先きに黄昏に見るやうな青白い空が明り窓のやうに冴えかへつて、身體がスーッとそつちの方へ持つて行かれるやうな氣がする、深山鳥が兩翼の白斑をチラリと見せて、霧の中を音もなく舞ひ歩いてゐる。うろ／＼方々を見廻しながら、やつと霧の中から山人どもが戻つて来た、確か手答へがあつたのにとかどうも引金が堅くてうまく落ちなかつたとか、情ない顔をして呟やきながら。これから何でも岩

石と偃松の恐ろしく急な梯子段を登つた、登つて狭い突端へ出た、そこにも偃松が硬砂岩の膚にベツタリ食ひついてゐた、これが圓山の頂きだつた。同じやうな梯子を逆に下ると、今度は大澤岳の岩壁が息もつがせず、暗い霧の中に棒立ちになる。灰白の岩砂に岩爪草の白、岩黄耆の黄が絶え入りさうな色を綴つてゐる。もう眼を伏せて唯足を動かしてゐる許りだ、誰が發したともない聲にハッど覺めた眼の前に、大きな羚羊がゐた。崖際の小高い岩角にのそりと立つて、大きき何も考へてゐないやうな眼がマジメとこつちを眺める。尖つた角が霧の中で小搖れもしない、胸に獅々のやうな長毛を房さりと垂らしてゐる。茲にこの四個の生物の間に恐ろしい瞬間の沈黙が湧き返る。山人は眼と眼で合點いて、荷から鐵砲を外さうとした、刹那、羚羊はクルリと向き直るとフエツと霧でも吹くやうな聲を續けざまに放つて、一面に岩砂崩落する急崖に、軽い脚音を殘したがり、向ふの岩角に消えてしまふ。松はイキナリ鐵砲を抱へて獸と殆んど同じ位に飛んだが、もう遅い。岩角から黄耆の大株をヤケに引抜いて、行きには眼も止まらず飛んだ所を抜き足して戻つて來た。この草は藥になるさうで村の人に頼まれて來たから持つて行くなど、言つてゐる。

山稜は凹凸だらけになつて、窪地がついく、こんな所は穏やかな緑りが溢れ、黒百合や高根薄雪草や信濃金梅、白山一華、ムカゴ虎の尾などが頬を觸れ合はしてゐる。見上げる眞黒な岩石の塔の頂きから、底冷たい霧が舞ひ下りると花の群を撫でるやうにして消えてしまふ。足觸りの荒い山稜をトツと登つて行くと、大澤岳の三角點——二八一九米——が眼の先きにあつた。櫓はヘシ折れて生もななくぶつ倒れてゐる。あたりは一面、灰白色堅硬な砂岩で、絶大な鍔鎚が何かで打つ缺かれたやうな大片が亂立して、一段高い峯頭を作つてゐる。奎角が研ぎ立ての鏽のやうで、手を觸れると切れさうに鋭い。流石の偃松もこゝでは影を匿めてゐる。細かなドラバ、色丹草、大文字草、岩爪草、高根爪草などが、やつと獅噛みついてゐる許りだ。この最高の岩角に同じ岩片の手頃なのが三四枚積み重なつ

◎大井川奥山の旅 中村

七四

てゐたが、何かの手で按排したやうな形跡がある。しかし神を祠つたやうな様子もなし、近頃來た人間の痕迹も見當らなかつた、これは未だに何のしはざか解からない。

石劔の尖端から谷間を覗つて見るが、もう眼に映るものは灰白の一色だ。唯その峻直に落下する硬いものが岩石で、濼々と湧き上がる軟かいものが霧だといふことが解かる許りだ。その霧は風に逐はれて岩の薄刃に抉られて、ヒューと悲鳴を擧げてゐる。最高點に匹敵する程の高い一峯を越した。山稜は及がこぼれて缺所を偃松が柴橋を架してゐる所もある。山人達は、——ニクン兵衛なんぞ打たないでよかつたぞ、こんな悪場わるばちあとも持つちや行かれぬわ——それに夏毛は悪し、頸くびんどころにあボロを下げてゐるやがる——こんなことを言つてゐる。

激しい下りになつた、頼りにする杭もどうかすると根こぎにされて、危い崖ツ端に寝てゐる。偃松が岩をおつ被せて來た、いちけた樺の群が出て來た。三人ビタリと足を止めてしまふ。赤石はもう東の方になる筈なのに、この山稜は依然北へ走り下るやうだ、兎も角も松と茂が又空身になつて、別れに霧の中へ分け入つて行く。私は石で根元を圍つた一本の杭の側へ腰を下ろしてゐる。霧の微粒が仄かに光りながら、方三尺の處を上つたり下つたりしてゐる。時に偃松がザツとと寂しさうに騒ぐ。不圖いつの頃か知らないが、この荒らかな天上へ測量の杭を打ちに來た人々のことが思はれる、彼等の努力は並大體のことではないだらう、どんな氣でこの霧に包まれ、雨に打たれ、日光に照らされ、岩石を踏み、草木を見たのであらう……「どうもナゴでさつぱり知れぬが困つたもんだ、チツトでいゝから晴れてくれりやあなア」山人の聲が耳元で、さうだ彼等は行く手の路を探りに行つたのだ、見ることもう時間も迫つてゐる、又押し伏せられるやうに暗い氣分になる、舌打ちをする、もうこゝい、いらでも、うつかりしてゐると食つて寝るといふ簡單な生存さへ續けられないのだ、下らない智慧にみじめにも貴い頭を下げなければならぬのが忌々しい。うごましい末世の人類!

茂作が歸つて来て、多分そつちだらうといふ方へ、足を向ける。一面に廣い山腹は偃松の外何にも見えない。唯低い所へ行けばいいのだ、そこにはきつと水がある。霧の中から向ふにポーッと黒いものが出て来た、赤石岳へ連なる山稜の崖頭の岩峯だと解かつた時には、霧は愈よ淡れに淡れて赤石岳西方の高原状の峯の一部も恐ろしく龐大な影を頭の上へのしかつた。暗い石の窪は私達を押し包んでその裾の方へと陥つて行く。崖腹が一面白々とほうけて凄まじい白珊瑚のやうな木の骨の骨の突立つた所へ出てくる、神經纖維でも剥き出したやうで痛々しい。中へ踏み入ると偃松や樺が生えなりにされてしまつてゐるので、そのまま自然の墓場だ、それが身體へ觸れてポリ／＼生もなく毀れるから誠に氣が措ける。大澤岳の中腹から恐ろしい雪崩の一擧に過ぎ去つた跡らしい。

崖は深くなつて、懐かしい水聲が淙々と樺の青葉の下から忍んでくる。もうこの聲を聞いては、耐まらなくなつた。三人争つて水の方へ走り下りた、そして荷物を抛り出して口づけに、齒の痺れるやうなのを思ひ切り飲んだ。水流は思つたより太く、暗赭色の砂岩の磊塊の間に瀬を躍らして、大澤岳と赤石嶺の大尾根との間を樺や七竈の下枝に水沫を浴びせながら、トットと落ちて行く、あの底無し赤石澤へ。

水に沈んだ浅い窪地を綠草がフツクリと埋め、信濃金梅が一面に咲き續いて、人をひきつけるやうな優しみのある色彩が緩やかに流れてゐる、私たちはこの寛濶な大布團の片隅を借りて寝ることにした。山人達は綱を持つて、遠くから薪を集めて背負つてくる、清らかな水で炊いた飯で、久しぶりの賑やかな食事が開かれる、焚火に照らされた皆の顔の筋肉が生々と動いてゐる。

大澤岳つゞきの峯を越えて舞ひ下る雲が、薄すりと焼け初めると、谷の末に雪を鏤めた聖ヶ岳が、恐ろしく幅の廣い大穹窿を打ち建てた。上半身がほんのり落日の最後の光りを浴びて、裾からムラムラと湧き上がる紫の影は鮮やかに匂ふやうだ。私は引入られるやうにデツと無言になつた。半月

◎大井川奥山の旅 中村

七六

がその眞上に赤々と照り始める、殘照の影が山からも雲からもふつ、つり拭はれるやうに消え去ると、月の光りも青みを帯びて照つてくる、右肩に小さな星さへ痛い光りを射出す、萬象が一樣にその冷やかな灰かな光りに浴して、靜かに深々と現實の境から退いて行くやうだ。そしてその吐き出す青白い息に、大氣が重く濕りを含んで流れる。月も微かな暈を帯びて來る。焚火の烟りが、あたりの樺の木の間にも重く淀んで、ヂツと身じろぎもせず凝つてゐる。

△七月廿四日。午前七時五十五分、聖ヶ岳絶頂出發。八時五十分、聖ヶ岳兎岳間山稜の最底所。十時四十分、兎岳頂上三角點着。十一時五分、出發。十一時十分兎岳絶頂着。午後十二時廿五分、兎岳圓山間低所。二時十分、圓山頂上。二時廿分、圓山大澤岳間低所。三時十分、大澤岳頂上。三時五十分、尾根北に向つて大に下らんす、之より東に轉向。五時廿五分、大澤岳と赤石岳西南の支峯との峽間、赤石澤最奥の一澤に下り野營。

△兎岳には陸地測量部三等三角點がある、二七九九米になつてゐる、併し絶頂は東寄りに一頭を抽いてゐる、三角點よりは六七七米高いであらうと思はれる。大澤岳にも測量部三等三角點があつて、二八一九米、これも眞正の絶頂よりは稍低いとろに在る。

△聖ヶ赤石とは直徑にすれば甚だ近く、その裾などは觸れ合はん許りに接してゐるが、赤石澤は深くその間を穿削して遙か西方に上流を展いてゐるので、山脈は聖から兎、大澤と馬蹄狀に大彎曲を畫いてゐる。こんな高さでこんな甚しい彎になしてゐる山脈は外に一寸見當らないのであらう。この邊は赤石山脈でも餘程特異な山貌を呈してゐる所である。

十一、赤石岳に達す

狭い赤石澤上流の空は、水淺葱の澄んだ光りに明け初めた。聖ヶ岳が西風の持つて來る烟のやうな霧に、消えたり出たりする。大澤岳の連壁は胸から上一面の偃松が、鏽びた綠色の毛織物のやうで、心持ち温か味を含んでゐる。そのうちに、重い過分の水蒸氣を保つた大氣は、淡い樺色にポーツと燻ぶり出した。生ぬるい、咽せつばいやうな息苦しい氣分になる。水邊の樺の若木の茂みで駒鳥が、鋭い聲を鳴き交はすが、それさへ今朝は心持ち鏽びたやうな氣がする。

今日は赤石の岳を乗り越して、大井川谷の奥の水音を聞きたいものだと思つた。食糧が減つたので大分軽くなつた荷を纏めて、後ろの窪地を登り出す。信濃金梅や唐松草を押し分けて行くど、樺の蔭に偃松が寂しさうに中腰になつて岳の方を振り返へつてゐる。矮い岳樺の密生した窪の頭は自ら赤石岳へ續く山稜になつてゐる、偃松の淺瀬を選つて東へ東へと登つてゆく、小澁川がつい爪先から深く陥つて、支流の古川が赤石澤と背中合せに落ちて行く、昨日下りた邊の小高い岩山はそつちへ向つて齧ちやけた大懸崖を引落してゐる。

川下には曲線の入り亂れた伊那山脈が、裾山らしい柔かい銀緑をベツトリと流し、上藏^{ウラジロ}あたりの村の白壁が針で突いたやうにチラ／＼と光る、懐かしい光りだ、いかにも信州だナと思はせる。あすこらにあい、草刈場があるなア」と山人達は羨ましさうに見てゐる。小澁鑛泉あたりの木山には伐られた材木らしいのも齧つぼく見える。皆人間と共棲してゐる山だ、兩者の呼吸が交り合つて、温か味のある雰圍氣が緩やかにその邊に淀んでゐる。遠く木曾山脈が雲を引き破いで紫の背禰を引く。二人はさつきから、——今年の秋には是非この邊へやつて來やう、獲物はあの村の伐採衆の處へ持ち出せばニクだつて一貫目——錢位にあなる、さうすりあ米と代へて又山通し存分打つて歸れる、こりあきつと面白い——乗氣になつて眼を光らしながらこんなことを語り合つてゐる。

そつちとは全く反對な上流の荒らかさ、荒川（小澁川上流の一つ）の源の方、凄まじい創だらけの西河内岳は頭をスッポリと厚い雲の綑帯に裏んでゐる。ふり向くと大澤岳の山腹に懸垂する縦谷に、錫色の殘雪が鈍い重苦しい光り方をする。霧が捲いて來るのでもないが、古沼のやうな雲が藍鼠にドロンドロんと濁つて、低く頭を抑へつけるやうに垂れ下つて來た。私は重いものを振り拂ひでもするやうにドント／＼登つて行つた、廣い山頂へ出て來る、灰染みた岩塊が峯になり窪になり、偃松がそ／＼ちう起きたり寝たり勝手な態をしてのさばつてゐる。鈍音がしたナと思ふと、後ろから來た山人は荷の横

◎大井川奥山の旅 中村

七八

へ眼の血走つた雷鳥を一羽だらりと括りつけてゐた。暗い岩の間につゝ、まじやかに深山タチツケ花が咲く、今にも消える泡沫のやうな。

山背は茫漠とした草と偃松と岩との曠野になつて、そして重たい雲と腹合はせになつて、この三個の生物を一舉に壓殺しやうとでもするやうだ。足元まで黒合百が陰森の氣を吐く。いつの間にか又細い山稜に投げ上げられると俄かに小澁の谷から高い羽偃を立て、霧が飛び掛つて來た、そして鋭ごい嘴に當るものを突き刺さうとする。

爪草や黄色の石楠花などが身を細くして潜伏してゐる。私達も赤石澤の方へ逃げ下りる、岩石の代りに偃松が執念く身體に搦みつくれども、まだこの方が樂だ。そして草間には人なつこい信濃金梅や白山一華などがある。さうく雨になつた。足元から岩の雪崩れる音がドドツと響いて、フユツと鈴羊の聲がする、姿はまるで解からない、それでも山人たちは重い荷の腰をかゝめて岩を拾つては力任せに霧の中へ投げてゐる。

山上の曠野は盡きた、巨岩塊が古城の石垣のやうに崩れかゝつた赤石本岳の大傾斜が、礫と胸先に垂れ懸る。頂の方は霧雨が暗く烟つて見えないけれども、茲迄來ると私には四年前の曾遊の地だけに、怖ろしい記憶の底に何となく親しみがあつた、先きの知れない命の縮まるやうな不安は感じずに濟んだ。そこらに朽ちて朽ちて生が抜けた草鞋のからさだけ解かるものがあつた、あの時のかも知れない、と思ふと妙に氣が引かれて振返つて見たが、一種の氣強さがあつた。私は先登になつてドンと不規則な石の階段を登つて行つた、毒々しい暗赤色の膚目の荒けた硬砂岩の大塊は、ピツシヨリ霧雨に濡れて却て足を吸ふやうで心よい。登山杖の「石突き」がカラン／＼と悪鬼を潜伏させる祈りの鈴のやうに、高く霧に響ける。振り向いて見ると二人は頭許り見せて岩の間をヘツタリと匍つてゐる、そして時々力の抜け切つたやうな上眼をドロリと向ける、私は聲を掛けては成るべく歩きよさうな處を

知らせた。

見上げるやうな岩峯の根方を匍ひ上ると、もう頂上に近い、岩罅から深山柳が濡れに濡れて仄かな黄色の花粉を荒れた岩の肌になすり付けてゐる。高い山稜の一端に立つて、眼の前にポーッと雪田が見分けられて来た。恐ろしく大きく見えた。私はひたすら絶頂の方へと急がうとしたが、山人たちはこの雪を見ると溜息をついて飯にしやうと言ひ出す、私はどうも腰が据はらなかつたが、彼等の様子を見ると強いことは言へなかつた。風當りの弱い岩間へ焚火を始める、山人達は懐から大切に藏つて置いた樺の皮を出して、濡れ切つた偃松へ丹念に火を移す。

私は自分ももう強く人間を戀ふてゐたことに氣がついた、見えない絶頂の方が頻りに氣になる、晴れやうともしない霧の中を幾度となく物色した。そこへ行くと誰か知らむ人間があるやうな氣がする、或は誰か野營でもして自分の噂でもしてゐやしないか、………ほんどうに人聲が聞えるやうな氣もして、耳を澄して見た。そして幾度となくそつちの方を向いて大聲に喧鳴つて見た。怪しい反響が反對の雪田の方に嘲けるやうに聞える許りだ。私はそれと知りつゝも又聲を擧げないではゐられなかつた。しまひには山人達も怪しむやうな眼を向けた。

兎も角も飯を濟まして、小雨の水沫の中を絶頂の方へ急ぐ、右にも左にも大雪田が畑りながら顯はれて来た時は心細かつたが、間もなく窪地へ出て、そこに見覚えある一箇の巨岩の面に、先年書き止めた文字が臆氣ながら残つてゐた時には、自分のうちへでも歸つて来たやうな氣がした。小高い峯角に、崩岩を積み圍んで出来てゐる屋根なしの石室を覗くと、新聞紙や鐘詰の空殻、干物の嚙りかけ、薬の袋、千切れた草鞋、そんなものが散らばつてゐて、それが一樣にびつしより露を浴びて、残された人の香がわびしくその邊に漂つてゐる。岩の壁に生々しい墨で二三日前に信州から登山した人々の樂書などがしてあつた。ちき上の峯頭に石片で圍まれた小さな白木の祠がある、神體は一本の白帛で

◎大井川奥山の旅 中村

八〇

いつ供へたのやら、幟であらうへチマの繊維のやうなのが岩面にへばり付いて淡い墨の跡が幽かに「奉納赤石不動尊」と讀まれる。もうそこら中の物といふ物に人の匂ひが濃くつき纏つてゐるやうな氣がした。

一段高く聳えた絶頂には、今も眼にある一等三角の櫓が切り倒され、岩間に咲く高根薄雪草、立山金梅草、高根爪草、御山の豌豆、深山塩竈などを撫で、濃厚な霧がむら／＼と西から東へ峯を亘つて過ぎて行く。私達は今、赤石山脈最高の凸點に立つた。この日頃荒らかな自然の手に育まれて、名状し難い心の歡びを味つて來た山上の旅も、こゝで終りを告げるのだと思ふといつ迄もこゝへ止まり度いといふやうな心が頻りに燥ぐけれど、而かも之からあの水と共に峯を駈け下りて、懐かしい人の棲む國の方へ出て行くのかと思ふと全く新たな心が躍らないでもない。

遙々辿つて來た方を振り返つて見たいといふ望みは終に空だつた。足元から暗赭色の大側崖が陥つて、その下に大雪田が幾つか赤石澤に向つて、ムンムと蒸し返へす霧の中へポーツと融け込んでゐる。私達はその北縁を限る大きなほつ（尾根のこと）を下らうといふのだ。それを求めながら山稜をそろそろ北の方へと下つて行く。絶えず東側に盛んな雪田が續く、時々はわざとその雪堤の上を踏んで見る、冷たさが背髓から脳天迄ズーンと衝き透るやうだが、強ひられるやうに離れられなかつた。一高一低するうち、小赤石の峯頭に出る、粘氣のあるやうな霧がすぢを引いて、ムツト岩壁へ翳みついてゐるので、皆目下り口が解からなくなつた。

私一人を残して山人たちは絶壁を匍ひ下りて様子を探りに行つた。西風は無盡藏に冷やかな霧の流れをこの山上へ傾けてゐる。私の眼の前には、絶壁へのり出して深山小田卷草や色丹草やドラバナなどが絶えず顛えながら咲いて、無限の陰暗な霧の流れに、麗はしい光波を環のやうに擴げてゐる。段々見てゐる自分の身體がその環の中へ吸ひ込まれて行くやうに感じた。時は餘程経つたらう、私は胴慄

ひが怖へ切れなくなつてそこらを歩き廻つた。杖をついて漸と戻つて来た二人は、——何處も彼處も絶壁で下りられないが、たつた一つそれらしい尾根があるから下つて見た、いかにも細くて急で中々危い、しかしその外には無さうだ、さういふ意味のことを息を荒く出し入れしながら話す。直ぐそつちへ下りることにした、もう肝心の食糧が明日精々だといふことが解かつたので愚圖々々してゐられない破目になつたからだ。

しかし下りたのは怖るべき絶崖の皺の一つに過ぎなかつた、この山に加へた大きな鑿の痕と鑿の痕との境目に過ぎなかつた。終には筋が吊るやうに足が下ろせなくなつて、偃松の枝を捉まつて全身の重みを幾らか分かちながら、足の下へ捲いては返す霧の深みに、この仄崖を根元から揺るやうな水音を聞いて戦いた許りであつた。音を立て、波を打つ胸を抑へて又山稜に歸つた時は、もうこの附近に一夜を過ごすより外術が無かつた。来る道に一個所い、窪地があつたのが誰の頭にも残つてゐたらしい、直ぐそこ迄戻つて天幕を張る。狭いがい、平らだ、偃松の茂つた小高い山稜が不思議にうまく、慘忍な西風の牙を避けて呉れる。側の崖端には大きな雪田が盛り上がつてゐる。皆して薪を集める、火が熾んに燃え出したが、茂作は中々歸つて来ない。松と二人鉦で切つた雪の塊が周りから少し宛角がどれて行く大鍋を挟んで、イヤな沈黙を味はつてゐた。

餘程經つてこの忠實な山人は戻つて来た、細引で樺の枝やら偃松の枯れ骨やらを大束にして背負つてゐる、序に尾根を探しながら大分下迄行つて来たといふ、そしてやはりどうも絶壁ばかりだ、ど力なく言ひ放つた。私はもうヂレてしまつた。私の語は自然荒かつたらう。「もうい、明日萬一天氣なら格別、こんなふうなら斷然信州の方へ下りてしまはう、小澁温泉の方へなら如何なことをしても下れるだらう、人の通つた足跡はあるし」、飯を食ひながら私はこんなことをポツ／＼言つた。今朝の晴れやかな麓の村の景色が皆の眼に、新たな色で再現した。山人達も大分意が動いたらしい、それぢア主

◎大井川奥山の旅 中村

八二

人に氣の毒だなど、言つてゐた。夜霧は濕つぽく天幕の中迄入つて来る、卓越風が山稜の偃松を大きな掌で撫で廻すのが睡りを誘つた。

△七月廿五日。午前七時、赤澤水源露營出發。八時四十分、廣き山背の一端に御料局標あり。九時廿五分、赤石本岳基點。十時四

十分、赤石岳頂上より西南の山稜の頂きに着、晝食。十一時四十五分出發。十二時、赤石岳絶頂。二時間以上を費やす。午後三

時、小赤石峯頭。一時間位を費やす。四時廿八分、小赤石と赤石絶頂間の山稜の凹處に露營。

△赤石岳絶頂、陸地測量部一等三角點、高距三二〇〇米。

十二、水と共に（奥西河内を下る）

暗い霧が明るい霧になつて夜が明けた。霧で眼かくしをされた三人が、三千餘米の山上に突放された。愈よあの大井川峡谷の奥の水に背いて、精々で信州の方へ下りてしまふより仕方がないのか、——今更ら氣の抜けたやうな張合なさに屈托する。處が山人は山人で「かうやつて主人を案内して來ながら道が解からねえで自分たちの村へ下りずに他國へ出て行つたぢア村へ歸つても面目くない」、こんなことを頻りと繰返へして、どうしてももう一遍は、つを探すといひ出した。愈よさうなれば大井川へ下ると決めやう、萬一ほつが解からなければ、奥西河内へ下りても如何にかして出られやうといふことになる。濃やかな霧の中を又小赤石を越える、餘程低くなつた一角に劍が二本赤錆びて、杭に打つけて立てゝある。こゝから山稜は東西に岐れるやうな形勢になる、信州から登つた人々のであらう、生々しい足跡が西の方へついてゐる。それに負いて私達は、何でも東の方——大井川の方を指して行く、そして二人は又荷を下して、杖一本持つて、ひよこくと霧の中に消えてゆく。

私は又一人ばつちになつて、とある大岩壁の根方に躡まつてゐた、頭の上へ梅ザクラや岩辨慶草がさし覗いて清い瞳でこの情けない漂泊者をしげくと見てゐる、取り縋り度くなつた。向ふの小廣い石原は底冷たい光り方をして、偃松が墨を吸つた海綿のやうになり、黄花石楠花があつちにもこつち

にも、しどやに露を浴びて重たい額を伏せてゐる。いつも何かを憂へてゐるやうな花だ、細い襟筋が痛々しく青ざめてゐる。

雪でも落して來るのではないかと思ふやうな風が、霧を捲いて西の方の山稜からサーッと谷間へ颯して行く、その間から石原の果てにスク／＼と立つてゐる鈍色の巨岩が顯はれたり消えたりする。私は不圖眼を引据えられた、猿人の中間のやうな異形のものが霧に向つて跣座して胸のあたりに合掌してゐる——としか思へない。それが霧の去來につれて、體を揺つたり居すまいを直したりしてゐる。何を祈つてゐるのだらう。私は眼を轉じて花を見たり何かするが、どうもその怪しい影法師の方へ眼を持つて行かれてしまふ。私の運命は這奴に握られてゐるのだといふやうな氣がする。眼を閉ぢてもやはり見える、唯の岩だと思つても思ひ切れない。私はポケットから濡れ腐つた手帳を引き出して、無暗に花の形を描てゐた。

何かの音が耳に入つて振り向いた時に、影法師がフーツと動いて來たと思ふと頭の心こゝろからゾクとしたが、それは人たちが歸て來たのだつた。何しろよく解からないが一個所悪い所がある丈で、充分行かれさうだといふのを聞いて、すつかり安心した。ピタ／＼と肌へ喰ひついた薄い着物を見ると、もう氣の毒で耐まらなくなる。構はずそつちへ下りてしまふことにする。山人たちが息を入れるを待つて、振り棄てるやうにこゝを立つた。石原はそのまゝ、谷の方へ傾いて行つたが、忽ち窮まつて逆落しの亂石の階段にかゝる。階段は危ふい方の均齊で組立てられてゐるから、足の軽い一觸で怖るべき岩の瀑布の緒が開かれる。偃松の深い山腹へ跳り込んで、夢中に藻掻いた末、又茫とした横廣い岩原に抛り出された。尾根は又左右へ岐れるらしい、殷々と聞えてゐた何處かの水聲が俄かに調子を高めるかと思ふと、北方の霧がバツタリ杜切れて絶大な船底をでも傾けたやうな谷が、直ぐそこに顯れた。船底には水瀬がたぎつて、薄白く光つてゐる。奥西河内！と思ふと避けるやうに南方の尾根へ足を旋

らす。

甲高な茂作の聲に首を擧げると、南方高く、恐ろしい黒木の茂つた山續きが連亘してゐる。半腹からは雪の大塊が落ちかゝり、このほつとの間にも白いものをチラ／＼させて、深い谷を抉つてゐる。私達はとう／＼あの奥西河内の真中に、おびき込まれてしまつたのだ！黒い影法師が眼底に映る。振り返ると今下りた石坂は龍卷のやうに奔騰して、その遙か上から大山稜の絶崖が、赭白い額に氣味の悪い皺を寄せて殘忍性の満足された時の悲感を泛べてゐる。かうなると却て氣が痛まない、勢に乗つて下る許りだ、下に何が待ち構へてゐるかも考へるにも及ばない。偃松と深山七竈と天狗樺と簇生してゐる中へ割り込むと、風と雪の外には壓伏されたことの無い、彈力のある梢が人間を手玉にとつてドツと投げ落とす。獅噛みつく處をおごろの青草と、剥き出された地肌とがはづみをつけて脚を掬ふ、信濃金梅の黄ろい花が流星のやうに空へ流れる。

身體中が冷露を瀧のやうに浴びて汗も凍るやうだ。急な崖などを渡つて白檜の森林の、すく／＼と立ち並んだ寂びた灰白の幹の列に犇々と圍まれた時は、氣が緩んでズーツと沈むやうになつた。水聲が地心から湧き起るやうに森の空氣を大搖りに揺つてゐる。茲に至つて雲の國を脱したのであらう、日光がチラ／＼雨のやうに私達の身體へも木の肌へも草の濶葉へも注いで來た。縦横につけられた獸の道を右へ左りへ頼つて行くと下りは愈よ峻急になる木々の幹から幹へ抱きつくやうにして水際へ下りた。まだこゝは北の谷である、水を噴くやうな苔のポツサリと蒸して暗色の大岩塊が雪崩れかつて、恐ろしく間の延びた段々になつてゐる處を、谷水は力任せに石をこづきながら奔下して行く、偶ま崖側の岩間などへ遁れ込んだ傍流は青白い苔色に澄んでゐるものもある。狭い谷へ兩崖から桂や峯楓や川楊などがしなやかな手を指し出して、飛沫をビュツ／＼と截つては、葉と葉とを揺り合はせてゐる、その間から一條々々日光が、幽かに水に落ちると仄かな虹を浮べてゐる。薄暗い木々の根元は四葉葎

やミミナ草が、朽ちかゝつた落葉の間からバツチリと可憐な眼をみはる。物の朽ちて行く匂ひと若葉の吐く息の香とが纏れ合つて、頭のしん迄ツンと浸み透る。うつとりと氣が遠くなつてくる。

枝と枝との間をくゞり抜けて廣い明るい處へ出て來た、先きへ着いた山人達はもう、石から石へ種な濡れ物をひろげて、半乾きの流水を盛に燃し始めた。南の方の谷水もこゝで落ち合ふのだ、灰白のゴロタ石が一面に溢れてゐる。上流はまだ重苦しく昏く、そつちの方から白茶けた雲が折々フツツと風して來るが、下流へかけては狭い谷の空に碧が深く覗いてゐる。日光がバツと射すと全谿の石が薄白い陽炎を立てる、私はぢか熱い焚火をよけて、滑つこい人肌の大石へ抱きついてウト／＼した。鼻先の蓬がホーと温かく香つて、子守唄でも聞かされるやうだ。日光が又潮の退くやうに曇ると、ソ一ツと肌さむくなる、遠鳴りして岳の方から冷たい霧雨が風して來る、河原の樺の裏葉が冷たい銀色に光つて、雨滴は白く乾いた石に瞬時の小紋を印しては、そばから消えて行く。谿は端から皮を一枚剥ぐられるやうに又輝やいて來る。

茶が煮えたといふので、丁度時間もいゝから晝飯にする、恐ろしい記憶を喚び起すやうに皆時々岳の方を仰いで見る、今下りて來た尾根に一際高い唐檜が轟々と突立つてゐて、頭が岳をおッ被せてゐる赭濁りの雲の底と、すれ／＼になつてゐる、川下の空には大井川對岸の白峯山脈の一部が門の扉を閉めたやうに立ち切つて見える、今夜はその下迄行かなければと思ふと、中々落着いてはゐられない。皆重い腰を起して下つて行つた。河内はまるで山人の所謂「石垂いしくだる」の層々相倚つたものだ、奔放するのは水許りではない、隠忍な石は唯活く力を沈黙のうちに匿めて或時を窮はうとする、性急の水はもう一刻の躊躇もしてはゐられないといふ風に、大聲に喚きつゝそれを跳り越えて走り下る。私達は身を細くして水を涉つたり、崖を攀ちたりした、人間の聲などは蚋の鳴く程にも響かない。

滿谿に算を亂した水成岩は、大きいのは人の丈の二倍も三倍もあり、小さいのは南京玉のやうだ。

山

黝黒、暗赭、鮮紅、青緑、そして或ものは緑りの苔を被り、或ものは生々しい筋だらけの膚を光らしてゐる。そこを水は練絹をしごいたやうになつて落下する、淡い鮮青を湧き返す、そして音もなく走るときは底の礫の色をそのままに浮き上がらせ、滑らかな面に絶えず變化する曲線の皺を疊んで、雲の色を映し空の色を映し、日光を反射させ青木黒木の影を含んで、瞬間毎に全谿が色彩の變幻に脈を打つてゐる。陰鬱で單調な霧を見馴れたせいもあるが、この深い谿底の雲の多い午後の日の下に、晴れやかさに耐えられない程だ。

ザブリと入ると美しい水も恐ろしい力を漲らしてゐるのに驚ろかされる、腰から下は麻痺したやうになつてしまふ。崖から車百合が一輪二輪、伏目になつて過ぎ行く水と調子を合はせて首を振つてゐる。古い「押し出し」(岩石の崩壊)に薊が林のやうに茂つてゐるあたりを雲間紅日影蝶が薄い翅を應揚に振つてゐる。山腹は白檜の森林が黒々しい屏風を引廻してゐるが、もう水邊には大きな山毛櫸が滴るやうな青葉を枝一ぱいに翳して輝やいてゐる、下を通る水には無数の鱗の青い小魚が群をなして泳いでゐるやうだ。もう餘程下つたがまだ南岸にしん丈けになつたやうな雪が消え残つてゐた、岩片や木の枝やでそれとも見えないやうになつてゐる、あたりは喬木が骸骨の御互に力も抜けたやうに弱み合つて、水の中へのけ反り、中には水の齒に噛み碎かれて髓の出てるものもある。皆雪崩の仕業だ、北の岸の恐ろしい高みから崩岩の瀑布が懸垂してゐる、この残雪は「己れの仕事はもう了つたのだ」といふやうに姿を晦ましてゐるが、一重下は結晶したやうに光つて、カンと登山杖を弾ね返す。

途中へ上ス澤といふのが落ちて来る、惡澤岳の半腹から出て来るのだといふ。雨燕が不意に脇の下を掠めるやうにして舞下りて行くと思ふと、又鋭い羽音を残したまゝ上流の方へ消えてしまふ。すると岳の暗雲は執念の手を伸ばして追かけるやうに嵐して来る、冷つこい霧雨がハラ／＼舞ひ落ちる。そこらの岩蔭や木影からも闇が匍ひ出して来るやうで、暗い不安に脅かされる。もう目ま苦しいやう

に徒渉しなければならぬ、倒れ木の自然橋も渡つた、水を被つてふやけてぬる／＼滑るのもある、石に擦られてさ／＼くれ立つてゐるのは渡りいゝ。悪澤岳の大傾斜からは盛んに山揚げが、岩石や木の屍を水の中へも此方の崖へも吹き散らしてゐる、そんな處では、荷は荷で運んで、唯もう身一つで高い岩の壁を蝙蝠のやうに吸ひ付いて過ぎる、吸ひつけなくなると水へ飛び込む、水の中には美しい虎斑を入れた輝綠凝灰岩が滑らかに沈んでゐる、そこを聲も立てずに這つて行く水は、粘り氣があるやうでズル／＼と人を引き込まうとする。

或る處では仰ぐやうな斷崖と深い水とに挟まれて、人丈け三倍程もある大岩が衝立つ、その根方に僅かの隙間を見つけて土龍のやうに匍つて扱けたが眞暗な處から蒸れ臭い微の匂ひがブンとして、いい心持ちがしなかつた。或時は逆に抉れたやうな斷崖の上へ出て、そこに寄せ掛つた細いブヨ／＼するやうな木のされ骨を頼りに荷も人も別々に綱に縋つて下りた、その時崖の中途から覗いてゐた女郎花のやうな黄ろい花の色が眼に残つた。この木の怪しい梯子は何でも、もど人が手を加へたものらしく、これが人迹の始めで、松次が荷棒で指すのを見ると、川楊の枝で作つた釣竿、古い飯盒の蓋、そんなものが岩の上などに置いてあつた。いつか岩魚釣が來たものらしい。私達の心は谷の傾斜と共に段々緩やかになつた。

石も大分細かくなつた、鼠色の砂が崖をなして堆かく盛り上げられた處などもある、けれども谷の屈曲は益々甚だしいから幾度となく水には入る、水の力は餘程加はつてゐる、身體がブヨ／＼顛へる、もう腰きりある。左岸のひよろ／＼した雑草の裡に、木の皮で圍んだ粗末な小舎なども見つけた。甲州三里村あたりの獵師が作つたものだらうと、慄悍なあつちの獵夫は、盛んにこの大井川筋へ入つてくるさうである。もう松次が昔來たといふ記憶が役立つて來た。雨燕が氣味のよい曲線を曳いてスーイと水へ落ちて來る、滑らかな水面に翼をすべらすやうにして又逆にヒラリと返してゆく、そして

◎大井川奥山の旅 中村

八八

遙か川上から小雨が注いでくるが直ぐ收まる。駒鳥の聲が幅つたい水音をピリツと稻妻のやうに縦断して眼が覺めるやうだ。茂作迄が「あゝいゝ聲だ」と嘆じてゐる、それが私は駒鳥の聲よりも嬉しかつた。

河原が漸々開けて來た、水も却て淺くなつた。そして生温いやうな氣がする、感覺が麻痺して鈍つたせいかも知れない。河鳥が重さうに低く水に腹をつけて飛んでは、何か小寂しさうに呟やいてゐる。見上げる森林の中へ一條の幽かる小徑が通じてゐる、私達は茲でこの美しい河内の水に別れた。この森林は惡澤千枚澤の岳の裾を纏つてゐるもので、梅、唐檜、白檜、山毛櫨などが背を伸し合つてゐるが、もう斧鉞が入つてゐるらしくかつた。小徑を上つたり下つたりするうちに木の間から虎杖澤諸の澤あたり白峯山脈の一部が、こつくりと深い不透明な藍色を塗つて見えた、さうさう大井川の谷へと出て來たのだ。

白い瀬がチラ／＼して來ると、ちぎ木賊島の開墾場へ出て來る、黒焦げになつたまゝ立つてゐる木の下に雜草と交つて畑のものがポツ／＼作つてある。木影から石を載せた小舎が懐かしい形で出て來た、中年の男と若い女が二人畑を打つてゐる。近寄る迄双方でシゲ／＼見てゐたが、擦れ違はうとする時「何處から來たえ」と男が聲を掛ける、これが小舎の主じだつた。小舎の中は廣い板敷で、中央に大きな爐が切つてある、これを見るときもう何をすることも懶くなつてしまつた。齒を染めた内儀さんが茶や菓子をお勧めしてくれる、山人達が大きな聲で岳を歩いて來た話しをするのを皆で呆れた顔をして聞いてゐる。

疲れ切つた身體に湯へ入るのが精々だつた、背戸に屋根を蔽つた水槽の大きなのがあつて、油のやゝな山水が音も立てずに溢れてゐる、湯槽はその側に唐松の皮で圍つてあつた。狭い湯槽の中へ身を縮めて入つて入ると、人の棲む所へ歸つて來たとハツキリ意識された。小舎はまだ上手に二軒許り

ある、こゝはこんな狭谷の中としては意外に打ち開けた處で、川の上流も下流も黒木の茂つた山裾が囊の口のやうに括られてゐる。川身は直ぐ前の黍や粟の畑二三枚向ふを流れるのだが、一段深く穿行してゐるから見えない。暮れ方の峡谷の空は淡すりと青白く澄んで來た、岳は未だに雨であらう、折山の端から赤い雲の切れ端が覗きに來る。

伐採などをやる山稼ぎの人たちがポツ／＼小舎へ歸つて來る、怪訝な顔をしてこの新來の客をデロデロ見る、中にはいきなりイヤな光りを浴びせる奴もあつた、向ふ岸には某伐採事務所といふ生新らしい殖民地風の建物があつた、それと同じやうな不快な印象を與へるので、すぐ伐採に何處からか入り込んだ奴だと直覺出來る、主人は自慢で、飼つてある熊の子を見せる、可愛らしい口を開いて檻の格子などを噛つてゐる。獵師が先頃山で親熊を打ち留めた時に一緒に居たのを連れて來たのだといふ。山人達ともうこの位ならイクラ位にはなるとか買手があるの無いのと頻りに話し合つてゐる。さういへば、この主じも信州の者とか言つたが、どこか渡り者らしい人なれのした圖々しい處がある。

私は珍らしいランプの下で、鑢詰肉に山畑で出來た馬鈴薯などを入れた熱汁で食事を濟ますと、主じが板敷の隅へ布いてくれた莫産の上へ、毛布にくるまつて横になつた。圍爐裏の方は段々賑やかになつてくる、「今晚は」など、いつて伐採組の新らしい提灯などをさげたのが入つて來る。酒をとりやりしてゐるやうだつた、話聲は段々高調子になつて、初めは伐採組の小頭の評判やら苦情やら果ては大概落ちて行く處は極まつてゐる、女達迄一緒になつて夜更まで騒ぎが續いた。それが皆この大なる自然の懷でフツクリと育て上げられた純なる感情の發露でなくて、惡雜無慘な平原の弊習の侵入なのだ。無論私のごも種々不審さうに尋ねてゐるやうだつた、山人達が言葉少なに言ふのを引とつて、主じが又聞きを喋々と饒舌つてゐた。けれどもこの人たちに彼等の考へるやうな「利益」といふことを除いた行動が解されやうも無かつた。「可愛さうによつほど疲れてゐるやうだ、そんな事を言つたつ

◎大井川奥山の旅 中村

九〇

て、これで中々思つたやうな甘い金儲けは有りあしないよ、こんなやうな眼が幾つか私の上に注がれてゐるやうな氣がする。私はうごく／＼すると悪夢にでも襲はれたやうに頭がガン／＼する。私の山の上から持つて來た人間に對する貴い幻想は滅茶々々にされてしまつた、懐かしかつた人間といふものが又一ぺんに厭はしくなつてしまつた。あの駒鳥の聲のする森林の中へでも寝ればよかつたと思つた。松や茂作までが寝つかれないといつてブツ／＼言つてゐる。

△七月廿六日。午前六時二十五分、赤石岳頂上北方山稜露營地出發、處々通路搜索。八時廿分、小赤石東方山稜の一部を出發、東方に向て下る。九時卅分、櫻松薙き白檜森林に入る。十時五分、森林俄かに急斜なす。十一時奥西河内上流北谷（假稱）と南谷との落合に下る。晝食。午後十二時十分、出發、徒涉五回水深腿に達す。一時五分、一澤北より來り注ぐ、又暫く一水南よりす、徒涉三回。一時五十分、崩壞多く溪最も險惡を極む、徒涉凡二回。二時二十分、斷崖を綱にて下る、谷屈曲多く、徒涉凡七回、深き所腰に達す。三時、左岸に魚釣の小舎あり、徒涉八回。三時廿八分、左岸に小徑を得て登る。五時、尾根盡頭を北に墮りて大井川谷に入る。六時四十分、大井川上流木賊島西木賊開墾場に着。下平與三郎氏に泊す。

△赤石岳から大井川へ下るには奥西河内と赤石澤の北澤との間尾根を下るのが一番よさうに思はれたので極力探查したのだが、何分ひどい霧で終に發見出來なかつた。後に考へるに小赤石の直下あたりから出てゐるらしい、それにしても遙か下迄絶壁狀になつてそれから始めて尾根の形を成すらしいから必ず通れるとは斷言出來ないが、下の方には三角點もあり切り明けのある事は確かである、こゝを下れば横島（後出）で大井川へ下るこゝになる。それを奥西河内へ下りてしまつたから泊り場所の都合上、河内の出合ひより却て上流の方へ戻り氣味に木賊へ出たわけだ。

△木賊島は人家四戸許り、川を挟んで西木賊には開墾場の燒畑があり東木賊には伐採業の事務所などがある、上流東西兩侯出合迄二里餘、大井川峡谷のかなり上流だけれども一番人間臭い所である。交通は重に甲州よりするこゝ、こゝより甲州三里迄五里。

十三、大井川峡谷の中心

朝の光りは、しかし心持ちよくこの谷底へ注いで來た。碧い空と白い雲と暗い雲とが半々位に山の上へ臨んでゐる。鶏の聲などもする。伐採の人夫も出て行つた。支度をしてゐると、懐手をした三十

格好の男がキョロ／＼門口へやつて来る、そして縁端にあつた私の双眼鏡を黙つて持つて行つて山の方を見てゐる。昨夜話しの中に何でも先頃から四國とかの「白檀採り」がこの奥山へ入つた、白檀は岳の危ふい絶壁などへ行かないと中々無いものださうだ、その代り一本でもいゝのが見付ければ何十圓か何百圓とかになる、ところが村の山へ入るのに一言の斷りもなく入つたとかで田代の人達は怒つて、歸りにはどうしても村を通さないといキマイてゐるさうだ、それに雨ついきで仕事は出来ず、ゑらい損耗だどこぼしながら、未だにこの先きの小舎にブラ／＼遊んでゐる、といふやうなことだつた、それを思ひ出した。後で聞くと私の推察は當つてゐた、大方眼鏡で岳の白檀でも探してゐたのだらう、此奴も情ない人間だ。もう勿々茲を引上げる。

新しいやにこい釣橋で河向ふへ渡る、川は小石の間に瀬を白く波立たせる許りで平凡なものだ。どん／＼下つて行く、白い河洲へ水槽の老木が濃い紫ばんだ蔭を落してゐる。もう村近く迄歸つたやうな氣がするけれど、どうしてまだ二日路たつぶりあるといふ、上流東西兩俣の都合迄二里少しだといふから、どうしても未だ村里と上流の山と見比べて真中よりは上に居るわけだ。川が急に西の方へ曲るどころへ來ると、イナゴ淵といふのが深い水底から藍でも煮るやうにクタク／＼と冷たく湧き返つてゐる。切り立つた崖縁を無さまな形をして、へつる、私は昨夜の人間の騒ぎ方と比べて變な氣がした、彼等も一步出ればやはりこんな處へ逐ひ込まれるのだ、それが命の綱なのだ、私はひそかに微笑んだ、そして何だか彼等が可愛さうで耐まらないやうな氣がした。

忽ち兩岸が迫つて來て、大巖の間を急瀬が泡立つて流れる、元は餘程ひどい處だつたさうだ、ゲバ瀧といふ名が残つてゐる。滑つこい象皮のやうな粘板岩の皺に落葉などが溜まつてゐる所を乗り越えて行く。鶯と駒鳥とが兩岸から交みに鳴きかはす。赤黄ろい *Wh. Heron* が翅をブルツと振つて水沫の間を翔け廻る。又釣橋があつて西岸へ移る、河原には夏草が徑を挟んで眞青な目隠しを作つてしまふ、

◎大井川奥山の旅 中村

九二

桂や楓が頭から房さり緑りの帽子を着せる。華やかにして沈静な青色の空氣は、いつも夏の谷間に屯してゐる。

谷の空へ恐ろしく大きな傘を開いたやうな水楢の梢から藤の蔓がする／＼と匂ひ下りて、暗い滑らかな水面をついで、這つては又元へ戻る。白い水珠がコロリと轉がる、谷の空氣はそれを中心にして幾重にも波の紋を擴げる。森の中には木の枝を網代に組んで、その上へ石を戴せた妙なものが置いてある、松次に聞くとテンピラといつて、冬貂をこる仕掛けだといふ。ガツチがギー／＼と光澤の無い皺枯れ聲をふり絞る、森の木の膚でも鳴くやうだ。

奥西河内の出合へ來た。上流は木山がこんもりと見える計りだ、水は青葉から青葉を抜けて黄や紅や黒の小石を抑へつけるやうに重なり合つて大井川へ落ちる、そこで水と水とが弾き合つて、抓み上げるやうに三角線を立てる、その尖端から微かな水玉が霧のやうに亂れる。そこが浅いからザブ／＼と涉る、涉りながら昨日の水はもう何處へ行つたらうなどと思ふ。頭の上には古い釣橋が主のない蜘蛛の巢のやうに千切れてブラ下つてゐた。本流は藍色のあらゆる階級を燃り合はして冷え切つた玻璃のやうな光りを發する、流石に水底の石などは灰かに藍色を淡くしたり濃くしたりしてゐるに過ぎない。

岳の方からステホソヤマキ蝶がひら／＼と舞ひ下りて來た、信濃金梅の花に翅が生えて飛んで來たのではないか。川が思ひ切り南へ曲るから礫と絶壁に突き當る、岸の水へ入つたりすると水成岩沙が古沼の泥のやうに足を引張るので氣味が悪い。そこを「諸のガレ」が容捨もなく腦天から雲のやうな水沫をザツと浴せる。齧り滑らかな岩の岬角へ出る、深い皺の一つ一つが Ford のやうに抉れて、暗い青藍色の液體をトロリと漉してゐる、頭の上へのしかゝる崖端から藤蔓を下げて短かい丸太が一本鞆のやうに下げてあるが、朽ち切つてゐるからうつかり身體を托せない。小砂利が川の一方へ平らな堤防のやうに盛り上げられた上をゆく。白く照つてゐる石や、離々と立つ川楊や、そちこちの溜ま

り水に朽木がのめり込んで水馬などの遊んでゐるのを見ると、穂高山麓の梓川原を行くやうな幻覺も起る。

榎島へ来た。人間を呑んでしまふやうな青草の一面に隙間もなく生ひ茂つた高原のはづれに、鳥森山といふのが古い圓塚か何かのやうに盛り上つてゐる、こゝは赤石岳の山勢が遙かに長く長く南へ伸びたその突端なのだ。瀬音はいつか遠く幽かになつた。原の片隅に小屋が二軒ばかりある、山の中には不似合な作りだが、嘗て試みた水力電氣の事務所とかいふのださうだ。それがもう惜げもなく打棄られてゐる。羽目の隙や床からは青草がニョロ／＼と首を出し、軒下といはず座敷といはず蛾の繭などが心易げに住まつてゐる。無数の青い目や黝い目がこの擒とらを取り巻いて責めさいなみながら冷笑してゐるやうだ。私も思はず一緒になつて冷笑の仲間入りをしたが無だか氣味が悪くもなつて来た。

これから路はしばらく、大井川に分れて赤石澤へ入るのだ。鳥森山の肩の邊へ登りになる、栂、楓、桂、塩地などが遠く日光を遮ぎつて、梢の方から靜かに蟬の聲などが傳はつて来る。山の背へ登り切らないうちにもう、遠雷のやうな赤石澤の瀬音が上の方から木の間を分けて壓しつけるやうに響いて来る。上り切ると籠つてゐたやうな音が一遍に爆發して怖ろしい高調子になる。木の間を透かすと上流の空は細く挟られて、北澤の頭あたり、偃松帯らしい光澤のない蒼さが灰白い霧の中から垂れてゐた。谷水は燃え立つやうな緑葉の穹門をくゞつて、白く砕けたり、滑らかに皺を刻んだり、水底の岩石と一緒に照り影ろひ、複雑な色と光りごとを振動させる。下つて行くと危い釣橋の際へ出る、この上手で谷は絶大な釜のやうな深潭を湛えてゐる。水はそこへ來るともうあるのかないのか解からない位に澄んでしまふ、底一面に布かれた紫、紅、黄、鼠種々の小石が色と色と溶け合ひ縫れ合ひ、青葉に濾され、水に濾された緑色の滴るやうな日光を直上から受けて、又更にそれを淨化し傳彩して、和かく鋭ごく射返へしてゐる。岸から斜めに華やかな翠蓋を翳しかけた一團の潤葉喬木は影をクツキリと

水底に落して、深く濃淡の青藍色を沈めてゐる。偶ま水の上を亘つてゆく白い蝶も、チラ／＼水底に影を映して行つた。何處といつて人をおびえさすやうな不安な蔭といふものはないが、この明らかな體が何か大きな秘密で、いもあるやうな氣がして耐まらない。私は一番後れて足元の危ふい吊橋を渡りながらも、水の方へ眼を持つて行かれないわけに行かなかつた。

下流は又白い瀬がついく、流石に名に負ふ鮮紅の板岩塊が多い。上三代島は川に遠い青木黒木の混濬林で、累年の落葉か羽布團か何かのやうに、ふつくり心持よく足を吸ふ、暗い林の奥の方から幽かなカナ／＼の聲が洩れて来る。又河原へ出て来ると虎杖が仄かに花を持つてゐる。川の中に黝つぽい皺だらけの大岩が踏まつてゐる處へ来た。時刻は未だ早いが山人達は晝にするといふ、水を前にして身體を休めた。この大岩は中三代の蝮石といふのださうだ、元は岸と離れてゐなかつたので蝮が岩の上じろ／＼甲らを干してゐたものだといふ、今は石の手前は淺い淵をなしてゐて、尺程もある山女が悠々と往つたり來たりしてゐる、腹の銀色の斑が冴えて光る。この澤筋は蝮で名高のだが、幸ひつひに一度赤い兒蝮に出合つたきりであつた。赤色の板岩もこの邊になつてはもう大きなものも無く、どれもこれも圓味を帯びてゐる、あの上流の山の肌にあつて缺いて投げ出された、稜々の奎角を持つたのと比べるごしみに、豁谷の石の一代の惨ましさを感ぜないではゐられない。

下三代になると澤は深い潤葉林の中を穿つて、涇々と流れてゆく、木の根にも岩角にも湿ほい苔がふつくりと被さつてゐる、水も暗緑に沈んでこれにも苔が生えてゐさうだ、それが忍びやかに優しい音を立て、こつて行くのを見ると岳の豎樋のやうな縦谷の雪から搾れて瀑になつて、岩石を破碎し樹木を殺戮して躍り狂ふ、あの勢ひはまるで嘘のやうな氣がする。森林は愈よ深くなつて澤とは大分離れ、梢の若芽と淵の水とが溶け合つて遙かの空を流れる。森の地肌は黝い細かな粘板岩片が奇麗に布かれて、古い落葉の溜まつたのがコソリともしない。黒松澤やツクリウ澤はこんな所を、何かの不思議をで

も語るやうに聲をひそめて通つて行く。この聖ヶ岳の裾山一帯はまるで「夜」の隠れ家でもあるやうに暗い。

遙かの彼方に灯のやうに澤の瀬が光つてゐたが、いつかそこへ出て来た、灰白の磧が眩しいやうに明るい、水の上を信濃白蝶が今にもぱくりと波に呑まれさうに舞つて行く。冷たい水を二度許り越すと、河原が思ひがけなく廣くなる、「神の鳴合ひ」へ来たのだ。聖澤が西の方から走り出て、来てこゝでこの赤石澤と合流する、神の鳴合ひ——先きの森の中に一際檜の茂つたあたり山神の祠がまつてあるのだ。私は水を涉りながらも神の鳴り合ひ、神の鳴り合ひと頭の中で繰り返した、その昔のこの山間に生きてゐた人々々のことが思はれてならない。愈よ濃やかになつて来た狭い碧空の下で、双方から伸び上りながら走つて来た谷水はつと寄り添つて抱き合ふと、刹那にもうごつちとも見分のつかない大きな一體になつて、楽しさうに躍りながら駈けて行く。岳の方からは夏山らしい白い輝きを持つた雲が、絶えず出て来てこの谷間をチラ／＼覗いては深い碧の中へ消えてゆく。

路は上河内岳の裾山へかゝつて、山毛櫛やまうしじろ（シロは緩やかな傾斜といふ山人語）の上りになる。木の間から聖ヶ岳がつと顯はれ始めた時は、伸び上つたり透して見たり、もう叫ばずにはゐられなかつた。皆荷を下ろして一休みする、座つてゐられなくて伸び上つた私が、あ！といつた時松次はもう碌に妨げにもならない梅の若木を叩き切つてしまつた、そしてやはり嬉しさうに岳の方を見てゐる。聖ヶ岳はこゝから仰ぐと、平たく傾きかゝつた破風のやうになつて、私達の泊つた邊の峯らしいのが高く鋭い三稜角を衝き上げてゐる、偃松が濃やかな緑甍を掛け、數點の雪田が鋭い懐かしい光りを送つて来る。そして真上から日光を浴びた岩の肌には匂やかに温かい血の色が透いて見えるやうだ白いつばなのほうけたやうな雲がその背を這つては消える。松次は黒々しい中腹の側尾根のあたりを指して、七十五尋といふ聖の大垂が丁度その蔭になると教へてくれる。

◎大井川奥山の旅 中村

九六

その何もかもが私達の話しの仲間入りをしに来るやうだ。色々な新たなものがくつ付いた、今迄
 どもがつた聖ヶ岳だつた、それを飽くことなく私達は眺めてゐた。

小メンノヲの梅の木の間を又急ぎ足に下つて行くと、赤石ド（合流點）の下手だといふ「釜のツダ」
 の大淵が、まるで巨大な蚪蟻の背を曲げてこつちを睨むかのやうに見える。その背からかけて、大井
 川の峡谷は眞二つに蔭と日向に染分けられた。私達の行くこの赤石山脈一帯の山裾はもうとつぷりと
 暮色に浸つてしまつたが、向ふ山、白峯山脈はまだ傾いた目をまどもに受けて、陽炎が烟るやうに一
 體にポーッと明るい。梅の梢を通して「破風ガレ」が赤黄ろくテカ〜輝き、あくどい紫の影をむご
 く烙印してゐる。大メンノヲを過ぎて薄白い蛇塚澤（當字）の空溪を跨いで川原へ下りた。大井川は三
 筋に分かれて、廣い川原を銀の熊手で搔くやうに流れてゐる。

水へ入つたり崖へ喰ひ付いたりして段々又高みへ登りながら、恐ろしい權兵衛淵の藍瓶を足元に覗
 かせつゝ廻つてゆく、藤島澤の落ち口から河原の沙が俄かに灰でも踏むやうに足の裏の觸覺がムツが
 ゆい。山人達は流水を拾つて焚火をして例の通り茶を煮始める。こゝから澤胡栗の多い胡栗澤に、雜草
 に壓倒された見る影もない昔の伐採小舎を見て、又崖の下の水へ逐ひ込まれた時には、水底の岩がも
 くく〜と闇を掻けるやうで、對岸の白峯山脈の木山が益々黄な臭く赤味を潮して來た。そして裾の方か
 ら、こつちの赤石山脈の妖しい藁が、つた紫が、ぬら〜と匂ひ上り始めた、——あの峯頭の地衣の
 のたくつた石に落ちた金光の影なのだ。松爺が中の宿澤だど荷棒を向ける邊は深い藍色の影が見上げ
 る程高く走つて、恐ろしい程急なほつが上へ上へと數多の拋物線狀の皺法を重ねてゐる、もう厚みも
 何も無いやうだ、見てゐるうちにこつちの山へ倒れかゝつて、そのまゝ息が止まつてしまふやうな怖
 ろしさを感ずる。

皆急ぎ足になつて、深い雜草の中から小徑を探り出しては上つたり下りたりする。ナゾウリ澤の空

溪を越して、桂島の眞上だといふ名もない岩石の窪を横切る時分には、蔭と蔭とが折り重なつて谷底へ澱んで、水みち許り仄かに浮き出して薄白くすぢを引いて見え、白峯山脈の胸から上がカッとき大きな松明でも掲げたやうに輝いた。それも見る見る褪せてゆくと、白味を帯びた夕空に谷から靜かに狼烟のように立ち昇る雲に燃え移つた。

山人達が心配した紅葉澤はまだ薄ら明りに高い崖から掛け下ろした梯子だけは見分けられた。藤蔓で結んだ横木は半ば朽ち去つて、取り違へるご怪しくメキ／＼ときしむ松次が荷棒を崖腹へ突き出して手が／＼を着けて呉れる。澤水は薄紫にぼけて遙かの空から眞暗な岩石を樹木の墜道をくゞつて、恐ろしい反響を立てながら又闇の底へ没して行く、飛沫が水鏡砲で射出すやうにザハ／＼と顔へ吹きかゝる。息をついてゐる暇も無い。山は急斜の崖だらけになるから、小徑は愈よ怪しく町裏の路次のやうな細い眞暗な崩などを出たり入つたりする。そんな間に不動尊の祠があつた、濡れ腐つた旗に岐阜縣人何某など書いたのが樹つてゐたやうだつた。松次がこの下は不動瀧といふ激しい瀨だと教へてくれる、足元の薄闇の中を物色したが幽かに霧のやうなものが見えたきりであつた。

對岸白峯山脈のポツチ薙あたり、鈍い樺色の大氣にウツトリと浸つて明と暗の微妙な界に、妖しい象を現はしてゐたが、それさへフツと他愛なく吹き消えた跡は、この大井川峡谷の天地は水を打つたやうに深い濃い闇の中に陥つてしまつた。幸ひ少し足場がよくなつたので荷を下ろして提灯をつける、その光りは餘り大きな闇に壓し伏せられてか、ポツと足元の草や岩の上に小さな弧を描いたに過ぎない。それでもそれを頼りに、爪先きに全神経を集めて榎の木澤の阻道を探つて行く。

一際闇の密やかな向山の上に、一點の星が幽かな痛いほど冷たい光りを放つ、足元の闇の底で弱い黄緑の光りが絶え絶えに息をするのは螢であらう。水聲が刻々高いので谷底へ近づいたのが解かる。松が始めて今夜泊る「居谷かやの小舎」が近いことを言ひ出した。平滑な大岩の冷たく汗ばんだ肌に抱き

◎大井川奥山の旅 中村

九八

つくやうにして、河原へ下りた。圓石のごろ／＼した處から林となつて茂つた青草の中をうろ／＼押分けて行くと、毛を持つたやうな葉や莖が手に觸れてむづがゆく、生々しい緑りの匂ひが嗅覺を刺戟して、氣がうづ／＼と重くなつてくる。身體が端から融け去つて行くのに任してゐるやうだ。

松次が提灯をふり照らして足跡を探してゐる所へ、サツと沙を蹴散らす音がして、逞ましい犬が飛んで來た、そしてタン／＼鼻を鳴らしたり尾を振つたりしてゐる、御かげで道の在りかゝ直ぐ解かつた。暗い木立を抜けると、懐かしい小舎の燈火が疊一帖ばかりぼつかりと大地へ映つて見えた。一折してや、打開いた下手の谷の空は灰白い雲が斑に浮いて、東の方白峯山脈の影に月の登つたけは、ひがする。小舎の主はもう大分年の積つた老媪だつた、その娘であらう瘠せた十四五の少女がある。松次の親戚に當るとかで、彼は自分の家へでも歸つたやうに何かと差圖してゐる、茂作は丁寧な挨拶をする。老媪は松次のいふことに一々合點しては一緒に私を爐邊の方へ請じて呉れる。小廣いかはり天椽の低い煤けたこの小舎の空氣は淡黄ろい吊ランプの光りにポツと霞むやうで、しんみりこの疲れた魂を抱き締めて呉れるやうだ。少女は甲斐々々しく大鍋の汁などを暖ためて飯の支度をし始める。老媪は隅の棚のやうな處から木の盆へのせた、赤兒の頭程もある妙な物を出して——貴方がたにはとてもいけぬだろうが——と遠慮しながら勧めて呉れる。山葡萄や何ぞの潤葉にくるんだ餅だつた、祇園さまのお祭りで拵へたといふ。松次が爐の火へ燻べて食べ方を教へて呉れる、焼けた草の葉を拂ふと小豆のつぶし餡を入れた栗餅がホカ／＼湯氣を立てる。

私はもう何だか嬉しくて耐まらなくなつた、何か求めて得られなかつた不満が影もなく消えてなくなつてしまつた、そして昨夜の泊りを考へて見ると、何かか谷を下つたのでなくて、却て遡つたやうな氣がして來る。それも道理で、木賊の人々は川下の田代とは餘り交通をせず山越しに甲州の三里みさとあたりと關係が深いのださうだ。そこは丁度白峯山脈の中央あたりで、最も山勢の潰裂し凌夷した處だ

から、自然と人間がそこをつけ込んで、谷から谷へ移る雲のやうに、流れ込み流れ出してゐるらしい。田代といふ「都」が川下にあつても、途中はあの峡谷だ、血走つた眼を剝いた赤石澤は永久に、大井川を中心をば人間の手から遠ざけてゐる。

△七月廿七日。午前七時、木賊島出發。八時十分、一危橋にて右岸に移る。九時、奥西河内合流點。九時四十分、樺島。十時廿五分、始めて赤石澤をその右岸に渡る、橋あり。十時四十分、中三代島蜷石、晝食。十一時廿五分出發。午後十二時十分、神の鳴合（赤石澤聖澤合流點）。一時五十分、赤石澤と本流との合流點上の尾根を匝る、釜のワダ（深澤）を俯瞰す。二時廿五分、大メソノヲを過ぐ。三時、藤島の河原、休憩。三時四十七分、出發。四時廿三分、胡栗澤。五時五分、ナゾーリ澤。五時五十分、紅葉澤を越ゆ。八時、居谷ゐやの山細小舎着。

△赤石岳が小赤石附近から發した分脈は、奥西河内と赤石澤北澤との合尾根になつて東から南に轉じ、遙かに蜿蜒と其の餘勢を曳いてゐるから、之に巡られて赤石澤も大井川と山一重を隔て、平行せん許りになり聖澤と合流して始めて本谷へ出る、路はそこへ入る（本谷は崖つゞきで悪いさうだ）のでこの峡谷沿道中最も幽奥である。赤石岳へは前記大尾根を樺島の邊から上つて大概行かれるだらうと思ふ、唯頂上近くが少しく面倒であらう。

△聖ヶ岳へは神の鳴合附近、ツクリウ澤の少し下手から獵夫の通路といふのが岐れてゐるが、それは上れば達せられるらしい、勿論その道は半腹迄で上の方は餘程困難には相違ない。

昨夜は何も知らなかつた。小舎の前のさゝやかな畑の間を通つて、崖下の手の切れるやうな清水で顔を洗ふ。清々しい曉の谷間の空氣が、冷やりと肌に快い。四邊の山裾は悠たりと開けて、燒畑の粟の緑りが靜かに波打つてゐる。この上にはもう一軒、太右衛門隠居といふ老翁の畑小舎があるのださうだ。私達がこの懐かしい宿を出かける時分には、山を越えて豊かな日が射し込んで来て、碧い空も白い雲も盛んな眞夏らしい輝やきを含んでゐた、草木も蟲も獸も凡ての生物が茂り榮える光りだ、居谷の谷間は平和と愛に耀いてゐるやうに見えた。

大薙澤、ゴトメキ澤などはちよろ／＼水がシナノ木の茂みから落ちて来るのに過ぎない、作兵衛の崖縁を膝まで水に浸つて越す、瀨の浪頭が段々になつてキラ／＼光る、ワダモトの河原は廣く白沙を

◎大井川奥山の旅 中村

展べて陽炎を燃やしてゐる。上河内を渡つた、隅々迄日光を含んだ水が厚く積つた灰白色の沙丘を穿つて流れて、愈よ明るい感じがする。岸について上つて行く喜作の作畑小舎へ出る、石と青葉とイキレ合つて身體がベツトリ汗ばむ。鳶色の耳の立つた、氣の強さうな狩り犬が激しく吠え出した。小さな藁小舎の中から鼻の下にも顎にも深い髯を垂らした大きな顔が覗いて犬を叱る、それが小舎の主の喜作その人だつた。狭い小舎は束ね髪のかみさんや六つ七つ位を頭に三人許りの子供で一ばいになつてゐる。こゝでも稗の草餅を馳走された。

笠を被つて脚絆をつけて、背負梯子を擔いだ少女が三四人、外から覗いて聲を掛けたが、見馴れない客におちたかして、日の一ばい當つた馬鈴薯畑の隅に跣んでゐる、喜作が入れといつでも中々入らない、ごこか下の方の女衆で山へ藤蔓を切りに行くのだといふ。私達は邪魔するのを恐れて又日盛りの山道に出る。河内の遙か上に岳ついきの偃松帯が明るい雲の間から暗く蔭つて見える。山祇峠は焼畑の跡に雑草や雑木が攪り合つて、青々と燃え立つて見るからに目が眩むやうだ。淺黄斑蝶が懶さうに舞ふかと思ふと草の葉へ止まつたまゝグツタリと翅を垂れてゐる。僅かの木影を見つけて休む。松次はこの下が熊島で、その向ふが大瀑のあるカラキド澤だと丹念に教へて呉れる。

峠を越すと、谷底は思ひもかけず廣い沙漠のやうになつて眼の下に展けた、沙漠は手近い日を眞上から浴びて灰白く照り返へり、水道ばかり薄暗く網目に分かれてうねり廻る。四圍の山は皆針葉樹の蒼黒い衣を厚ぼつたく着てむしむしする。信濃俣の奥の方を窺つたが、私達の往きに通つたといふ赤崩れが幾つか見える計りで、何だか嘘をつかれたやうな氣がする。頭がバツと散漫になつたやうに感ずる。川原へ下りて貧しい灌木の影へもぐり込んだが、眼の先きに大ヅナ崩れ(新田河内岳の裾)がギラ／＼した白熱の石の瀑を浴びせるので居たゝまらない。石原の中に人の踏んだ一筋道が、いくらか平らについてゐて耐らず暑苦しい。仁田河内は狭い山の割れ目から川原へ扇形をなして鼠色の光澤の

失せた岩砂を擴げてゐる、それが段丘を三重ねに作つてゐる間から浅い水がさらさらと流れてくる。青葉の奥の奥に、上流の雲に蔭つた岳の濃藍色がチラリと映つた時は、流石に冷やりとした。

山裾に木蔭れに土平の人家が二三軒ある、河原へ荷を下ろして置いて少し登つてその一軒へ立ち寄つた。安竹作次郎といふこれも松爺の親類ださうだ。大きな作りの板屋で農と漁獵をやつてゐるらしい。老人夫婦に若い息子が居る。私は中へ入らないで軒下の涼しい縁側を選んだ。精悍な姿をした息子が出て来て挨拶する、廿四五に見える文字のある若者だ。白檀どりに貰つたといつて板作りの鉢に植はつた、命も絶え絶えの山の檜を見せてくれる。縁に掛けた寒暖計は華氏九十六度。辛い大根の漬物で早晝を濟まし、扇で風を入れながら庭先から信濃侯の入りへ續く、濃淡だんだらの青葉の盡きやうごもしない深まり廣まりを眺めてゐると、いつか私はうごご夢に入つてしまつた。

「主人、主人！」と誰かに呼び起されて又河原へ下りる。作畑へ行くといふ息子が釣竿を擔いで連れ立つた。この河原へ出てくる信濃侯は、やはり水が少なくてハテナと思ふ。高よきに崖をへつる、そしてコシボン河原からタイノゾリの作畑を上る時分には漸く山蔭へ入つて、栗の葉の戦ぐのが、生きかへるやうに涼しい。振り向くと上流に一步步上河内の岳が出て來た、空線が濃い碧空と鏡の齒車でも喰ひ合はせたやうに堅い、龐大なガツチ河内岳は頭を銀鼠色の雲に衝込んでゐる。寺島へ下りると、こゝにも畑作りの一軒屋があつて、十一二の小娘と匂ふやうな赤兒が留守居をしてゐた。馴れては寂しくも無いか。——この近よることも出來ないかと思ふやうな峽谷の中に、所々こんな島といふやうなものを作つて置く自然、さういふ處を又見つけては、恐怖すべき自然の手にも縫つてそこに何かを營んで行かうといふ山人の生活、このくらゐ我々の心を惹くものはない。

作畑ついきを通つて澤ゾリ澤へ來る、往きにはこの澤の遙か上を過ぎたのであつた。溪一ぱいに手を擴げた大きな橡の木蔭に休む、寛げた肌に泌みるやうな冷たい風が、水と一緒に奥の方から吹き

下ろして来て、満山の青葉の觸れ合つて騒ぐ音が溪聲を打ち消す程である。

圓吉（息子の名）は杏を採つて来てあげるといつて、どこか日向の方の木立へ入つて行つたが、今年は駄目だつたといつて歸つて来た。彼は山案内も喜んでする、一返信濃俣から信州の遠山へ抜けたことがある、仁田河内、上河内、奥西河内の岳などへも登つたことがあるなど、話す。途中でこの連れに別れて、三人十六日目に又コハゼ林の中の追分けへ出た時には、不思議な所へでも来たやうな気がした。もう田代の村が今にも向ふへ見えるやうで心賑やかではあるもの、何か自分のゐたい所から意地の悪いものに無理々々追拂はれでもするやうなやせない氣もしてくる。

バツとした張合のない心で歩いて来た、そのうちにいつか日はひそやかに暮れやうとする。白峯山脈にも暗い藍鼠色の雲がドロリと垂れかゝつて来て、水聲がそれに籠るかしてうるさい程高い。東河内の「鳴り合ふ」少し上手で、私達は徑を離れて川原へ下りた、川を涉つて對岸の山裾を小河内村へ出て近道しやうといふのだ。腰からは赤裸々になつた、そして足を踏みしめて雁行して涉る、こゝは一面の瀬で浅い方だが、腰迄づつぶり入つて細い脛がヒョロ／＼した。中央の石は擦られ研かれ鮮やかな色をして光つてゐるが、岸近くは黄緑の苔を被つてぬる／＼上る。渡り了る時分には脚が生温くなつた、岸へ飛び上るとカツ／＼して来た。獨木橋で東河内を越すと小さな堀立小屋がある、大村といふ巖丈さうな山人夫婦が棲んでゐる、そこで夕飯を済まして、又出掛ける頃には、川面から立つ霧と山上から降る雲とが谷の中で上になり下になり亂れ合つて、闇がそこから搾れ出すやうに擴がつて来た。水聲が愈よ高い。

小淵澤を越したかと思ふと、間もなく濕つぽい闇がしつとりと私たちを抱きすくめてしまつた。もう大井川もない、赤石山脈もない、唯あるものは無限の闇だ、闇の中をポーツと青白い消え消えの尾を曳いて流れるものがある、螢か、——私はこの十幾日あの荒らかにして惠深い自然の懷に過した私の

生活の跡を見たと思つた、疲れた身體は自然に人間の群り合ふ村里の方へ急ぎながら。(大正元年十月稿)

△七月廿八日。午前七時卅分、居谷山小舎出發。八時四十五分、上河内を渡る、喜作小舎へ休憩。九時十五分、出發。九時四十五分、大ブナ崩。十時三十分、新田河内を渡る。十時四十分、土平人家に休む。十一時五十分、出發。午後十二時五十分、寺島。一時四十五分、澤ソーリ澤、休息。二時五分、出發。二時四十五分、田代澤、四時卅五分、サゴ一の休所。五時三十分、大井川を往渉し左岸に移る、東河内合流點、大村氏小舎へ休憩。六時十分出發。七時三十分、田代へ歸着。

△谷筋のいゝ處を選つては山人がさゝやうな經營をしてゐるのは面白い、こんな處はきつこ小谷の本谷へ出るあたりにある。その名を聞いたのを擧げると、信濃侯土平(下は合流點を意味する)安竹作次郎、上河内―白鳥喜作、居谷澤―瀧浪太右衛門、田代澤―森竹豊藏、明神澤―安竹七郎平、東河内―(出口)大村三代松(奥)瀧浪龜太郎。

△自分の今度伴なつた山人は、既記の通り瀧浪松次郎、同茂作、同菊太郎の三人、皆忠實に事に従つて呉れた。松次郎は年も寄つてゐるから以後案内は或は進んでやらないかも知れないが、茂作は三十八歳の壯年であるから充分事に耐えると思ふ。猶安竹圓吉もよし、宿の主(瀧浪益吉)もイザルケ岳頂上を踏んだ事があるさうだ。

△この奥山登攀は自分がやつたやうに南の方から山傳ひにやる外に又大井川の本谷をすつこ溯つて側尾根から直接峯頭を極めるのも面白いであらう、カツチ河内岳、仁田河内岳、上河内岳、聖ヶ岳皆出来るさうだ、赤石岳も大概出来ること既記の如し。
△終りにこの奥山一帯を深い自信を以て世の自然崇拜家に推奨する! (完)

恨むらくは雪の嶺こそ眉にあれ

わが傍に君まさぬこそ

(編者曰、本文に挿入せる地圖製版なりて、間もなく陸地測量部の五萬分の一圖赤石號其他數枚發行されたり、地名等に附て對照ありたし)

穂高山南稜跋渉記

鷓 殿 正 雄

一、残 雪

泉水の音に屢夢を破られた。清水屋で落ち合ふた二人の學生（菊地武男君、沼井鐵太郎君）と出かけたのは、午前の七時半頃であつた。道すがら山の話などし乍ら、島々川の深い谷に沿ふて、岩魚止と云ふ所のちよつと下迄行つた。島々からは、凡そ二里半位はあらう。そこは東南面した處で、路傍には残雪（長さ三間巾一間高さ四尺）の一塊が、砂塵を浴びて汗を流してゐた。ひえきつてゐる體にも、今日のような暑さは、身に泌むる事と見える。されど此雪は、まだ數日の間は其影を止むるであらう。雪崩の爲めへし折られ、共にこけて來た柴の遺骸が、だらしくなく傍に横たはつてゐた。川一筋向ふのヤナギツウは、笑ひそめてゐるのに此所の艾は、芽を萌す事も出來ずに踞つてゐる。左手の山は、二三間巾に頂迄も草木が斜垂れてゐる、此の通り年々傷害められては、草木も段々寂滅して、跡は忽ち裸地になつてしまふであらう。今日此頃、我本州中の同緯度同標高の地を漁つて見ても、他では一片の残雪だも得難いであらう。數日前に踏破した、雪で名高へ白馬山でさへも、白馬尻以下の道筋では、些かも其影を認めなかつた。鳥水氏の所謂『自然に對して驚異の念を持つ人は、是非行つて見る價值がある……』を、こんな一寸した所で、味ひ得ようとは思はなかつた。此有様では、徳本嶺、神河内あたりには、澤山の残雪があるだらうと思ふて、大なる興味にかられ乍ら再び行を急ぐ。時は實に、大正元年八月十二日午前十時であつた。（氣温七八度、標高約一二〇〇米突、北緯三六度一二分の地）。

二、徳本嶺

中の茶屋から巔にかゝつても、主に樹陰を行くのであるが、日は高くなる登りは急になる、其上心當にしてゐた残雪は更にならない、頂下の泉で汗を拭ひて頂を迎へ、笹の中を押し分け、左手の見晴のよさそうな所で足を休めた。

天斧で荒削りをしたような皺だらけの大塊が、黒鐵色に錆びて、西から北の空へどうねり、幾個となくそゝり立ち、いつも緑な樅、梅、白梅、あるは白樺、桂、檜などの、木葉の間を通して、梓川の清き流れに菫みごしへに其影を宿してゐる穂高山！昔乍らの森！……!!!
 暫時は無言のまゝ、まじろぎもせず、此大觀にみとれてゐた、はては涙がわく。

穂高山下ゆく水ははやけれど

ちとせのかけは流れさりけり

三、宮川の池

神々しい風を充分に吸ひ込み、嶺を下つて流れの邊りにでた、槍ヶ岳や大天井岳の奥から、しばらくてゆく梓川は是である。川を亂つて嘉門次翁を其小舎に訪ふたがゐなかつた。其足ですぐ宮川の池を見に行つた。入口には穂高山社の奥社が建立せられてある。池の圍りには、梅樅の古木が多く、其下には根曲竹が一ばいに茂つてゐる、浮島の上の梅の矮樹には、サルオガセが垂れさがつてゐる、瑠璃色を湛へた水面には、汀の木影と穂高山とが映つてゐた。私の訪ねてゐた嘉門次翁は、今短袴を穿き猪の皮を負ひ、筏に乗つて島蔭に身をよせ、綸を垂れ乍ら瞬もせず、池の面を見つめてゐた、手綱が二三度、澄んだ水面に輪波をよせて、潑測たる岩魚がびくに投せられた。昔の三歸翁とは、多分こんな

人の事を云ふたのであらう。池の彼岸に廻り、失敬して二つ三つ山の話を訊く。

前路に戻つて川邊を段々下つて行く。かねてより私が想像してゐた、神河内の風光と、今、目のあたり見せつけられる沿道の有様とは、大變異つてゐた。穂高山と共に、神河内の神苑の一部をつくつてゐた、白樺、落葉松、楊等の交つとつた處女の森は、其目稜の塲所は、いつの間にか荒くれた樵夫の斧にかけられ、今はたゞ往事を語る伐株が、恨めしそうに虚空をにらんで悶えてゐるみので、もう昔乍らの俤はなかつた。さても文明でふ亂潮はこんな山奥迄逆襲せざるならぬのだらうか、いつまでも此の清く美しき姿を傷つけずに行く事を許さないだらうか、豈夫人類は燒岳の噴火のような手荒な取扱ひを眞似たはけではあるまい、其後も猶燒岳山麓を荒しつゝあると開く、かへすゝも憾の極みである。

四、密 林

數日の間、連りに各所を荒しまはつた雷雨も、稍倦怠の色を示したので、十三日午前五時、案内者中島作次郎を伴ひ、二日間に、穂高山主峯以南の諸峯を連ねて中尾嶺に出ようとして、温泉を出發した。河原中一帶に罩めてゐた霏がうすれて、其切間からは、穂高山が全身に夜來の濕氣を帯び、旭を受けて鮮かに晃き、西の空から此の方へにかけて弧線を書いて、蒼穹を摩してゐた。河童橋から街道を離れて左に入り、梓川の淺みに足をかませて、白檜、樅、梅等の密林に入り、人を没するまでに茂つてゐる根曲竹を掻き分けて行く。朽木の苔蘚の香がつんとくる。朝露の深い爲めに、半身はびしょ濡になつた。生存競争に打ち負けた、老木の自然橋を危く渡り、岳川に沿ふて登る。楡、五葉松、白樺、落葉松等も點々交つてよく茂つてゐた。鶴鶴の囀る聲は、溪川の流水の音に和し、しつとりとした朝の空氣を衝いて、梢の間を掠めてくる。半里許で苔づいた石塊が推積してゐる、小露地に出た。岳

川と云ふもたゞ名のみ、是より上方半里許の間は、其下半は、前に述べたような針葉樹の密林、上半は、岩石の重疊してゐる間にちらばつてゐる闊葉樹及び針葉樹の粗林を見るのみで、谷川らしき凹條もなく、水も見へなければ、勿論流水の音もせない。朽葉蘚苔の上を踏み分けて、此林を後方に送り終れば、向ひは見渡す限り、青白い石英斑岩の大塊小塊の押し出した大河原にでる。

五、岳 川

此の川原の上方は、扇骨の如く無數に散じ、各自思ひ〱〱の方に向つて、殆直立の姿勢をして穂高山に食ひ込み、主幹は最高峯を呑まうとしてゐる。

登路の危険を以て、匹儔稀なりと稱へられてゐる此の山も。附近十數丁の間は至つて容易に通過し得られる。顧みれば、碧色に光る梓川を狭みて、霞岳、燒岳は、東西に對ひ合ひ、燒岳は噴烟を飛彈方面に靡かせてゐる。暗藍色をした、圓錐形の雄々しい乗鞍の劍ヶ峯は、燒岳續きの十石山を越して、遙かに南方の空に懸つてゐた、其山懐にたなびく、一抹の雲翳は、見る間に怪しく動き、漸々増大して來た。「どうも今日の御天氣は、あやしい」と作は云つた。標高二〇〇〇米突位登つた邊から左の岸に登り、岳樺、ミヤマナ、カマド等の匍ひ廻つてゐる間に分け入りて、西方飛州境なる最底鞍部を指して登る。

最初此行は、東穂高岳（一等三角點ある峯、改名の理由は別に解く、以下同斷）より主峯を越え、其西方の山稜を辿り、一泊して中尾嶺に出る積りで、作に話した所が、「夫は到底も一泊では出來ぬ夫よりは、先づ西方の障壁の中凹部に登り、主峯を極め、引還して、山稜を下らずに、すぐ南に傳ふて行く方がよい」との作の話に従つて其通り定めたのである。

東穂高岳の最高點に登るには、猶先きの主幹（岳川の）を辿り、右に折れて東方の小溪に入り、其

◎穂高山南稜跋渉記 鶉殿

一〇八

中途より又左に折れ溪を離れて登るのである。何處迄も右の主幹を辿れば、雪の墜道があつて、其先きは、一躍して主峯に登つてゐる、岳川の誕生地は、實に此所である。此急斜面は殆ど五十度近くであるから、とても人類の登攀は覺束ない所である。

六、石 斜 垂

脱帽の命を避くる爲め、キャツプの上を手拭で括り岳樺、ミヤマナ、カマドの枝楡の交々錯雜起伏してゐる間を、跳越え潜りぬけて行けば、間もなく叢の急坂に出る、其所には、トリカブト、オトギリサウ、クルマユリ、ハクサンフウロー等の紫花黄葩が笑み乍ら、青草の上を彩色してゐた。草葉の蔭に潜れてゐる石塊は、折々足の爪先きを咬む。東方の空には、鋭く尖つた東穂高岳が、ぬつくと頭を出し、人間と云ふ蟻の這ふのを、冷やかに瞰してゐる。叢の中をかけぬけてしまへば、四十度近くある、角ばつた瓦落駄石の斜垂れがあつて、夫がづつと山稜迄とゞいてゐる、此石崩れを、びくつき乍ら踏んで登る、ともすると帆んど動いてすり落ちる、ついには、三つも四つも相應じ、一時に瓦落々々と崩れ落ち、其反響は、全山振動するかと思ふ程である。大雨や盛の融雪時期には、此崩落作用が至つて劇しいと見え、石塊は皆洗い上げたように碧白く光つてゐる。現今、峻秀獨歩と崇められてゐる穂高山も、此劇甚な破壊作用が、絶えず働いたならば、永い／＼年代を経た後には、遂に今の震岳以下に、凌夷してしまはせぬかと、氣支はるゝのである、併乍ら一定の限界に下れば、是等の破壊力を制する種々な條件が発生するから、左程心配する事ではあるまい。

約二四〇〇米突で初めて残雪を見た、巾十間長さは三四十間位なものであらう。近傍のタケカンバ、ミヤマハンノキ等は、もう支離滅裂して、全く林相を呈せなくなつてゐた。可厭になる程、此の石斜の階段を登つたが、容易に盡きない。峪は段々狭くなつて、左方の赤さびた、いかい障壁は、天半が

危うく突出して、今にも此處に落ちかゝらうとしてゐる。其もとには残雪があつて、水を吐いてゐた、こゝで一呼吸して勢をつけ、午前十時三十分（温泉より五時間）國境に當る鞍部（約二八〇〇米突）に攀ち登つた。

頂部が富士形をした笠ヶ岳は、其全容を顯して西に聳え、其右肩よりは、緩斜線を放つて鎌尾嶺と結び、夫から双六、蓮華、五郎に連つてゐる。蒲田谷は、其流水の音と色とが明瞭に知覺し得る程に近よつてゐる、其左岸より、勢よく突き込んでくる白出（宛字）の澤は、登るに従ひ幾筋かに岐れ、山稜の西部にのりかゝつて、山を啖ひどつてゐる。此谷へは數ヶ所から下る事が出来るさうである。今迄翠色を呈してゐた神河内の谷は、薄灰色の幕が、隙間もなく展開せられて、もう瞰る事が出来なくなつた。南は絶壁北は主峯に連なる峯、高く聳えて眺望をさえぎつてゐる。東に方る池尻や六百の徒は、水平線下に陥つてしまつた。チシマキ、ヤウ、シナノキンバイ、ミヤマダイコンサウ、ハクサンイチゲ等花をつけ乍ら、岩の切目や小石の間に、點々模様をつけてゐた。偃松やミヤマナ、カマドは、天鵬の壓迫の爲め、地面にへたばつて、僅かに餘命を保つてゐる。休みの中に、中食の半を攝り、大抵の荷物は、此處の岩蔭に預け、押さへの石を載せ、身輕な扮装となり、十一時主峯をさして、山稜を渡る。

七、白出澤の頭（三二〇〇米突？）

主峯の西南に、猫の双耳のように、頂が二つに岐れて尖つた一峯がある、其南角は、北角より稍高く、北峯は、東穂高岳（一等三角點のある處）や酒澤頭等と、殆同高で三方から互ひに主峯を擁して、鼎の足のように立つてゐる。白出澤（宛字）の直上に當る處であるから、假りに、白出澤の頭と稱んでおく。

◎穂高山南稜跋渉記 鶴殿

一一〇

山稜一帯、黝色が、つた岩石の大破片小破片が散亂してゐる、双頂間の大岩塊の推積してゐるあたりに、二三人這入れようかと思はるゝ、岩穴があつたが、之は單に、一時的に強風を防ぐと云ふに留まり、近くで然料を得る事が出來ず、水も容易に得られぬから、特別の場合の他は、露營を避けねばならぬ。偃松及び岩角を力に、危うき藝當を演じ、岩壁を傳ひ、第二の鞍部（約二九〇〇米突）に下る。右側の岩蔭には、丈餘の殘雪が、鼠黒い砂塵を浴びてゐた。

八、奥穂高岳（三一五〇米突）

東方に面した岩壁に沿ふて稜に出る。偃松は次第に勢を失ひ、全く跡を絶つてしまつて、チシマギ、ヤウ、タウヤクリンダウ、コバノツメグサ等、ちらほら咲いてゐた。

午後一時、四年経り（四二年八月一二日登山）で再び主公と握手の禮を交ひ、互ひに無事を祝した。郷きに拜見した、無名標柱とは變つて、大正元年八月五日日本山岳會員近藤茂吉登山と記されてあつた。前にはフイシシャー氏及び嘉門次父子と、此處で霧中に罩められ、手ひどく苦められた事等想ひ起された。温泉場の方から、漠々と押騰つてくる亂雲は、東穂高岳から霞澤山一帯を舐めつくし、今又茲に逆襲を試みてゐる、

穂高見の神のまします御嶽には

雲のとはりをかけぬ日そなき

河野通重

が本營は、そうたやすく、包圍する事が出來なんではねかへされてしまふ。

茲で東穂高岳と云つてゐるのは、主峯の東南に派出せられた雄鎮で、頂上には測量櫓を戴き、池尻、又四郎、屏風岩等、數多の眷族を従へ、麓に梓川を擁して、常念岳、蝶ヶ岳、六白山、霞澤山等に禦つてゐる。此岳は、徳本嶺や神河内からは、比較的近く、よく目立つて突記し、絶頂は一等三角點に

選拔せられた位であつたから、いち早く主峯に先んじて名をなし、従つて今迄の登山者は、大抵此峯を指して登つたのである。

西南の方は今來た山稜で、白出澤の頭（宛字）から、南穂高（三等三角點のある一峯）と、可也の間ぎざぐざと鋭く起伏し、悪谷山に至り、穩容な綠色帽に代はり、緩かに畦つて、中尾嶺を越え燒岳に結んでゐる。北方は、急に低下して、後稍緩に上り其天邊には、三等三角櫓が、灰白に光つて此方を望んでゐる、夫が涸澤頭（宛字舊稱北穂高岳）で、夫から山稜は、少しく東北に折れ、テンリウ（作の言、舊稱東穂高岳）と云ふ巉岩多き一峯起り、又北に戻り、槍ヶ岳の最南峯、オホノマ（作の言、舊稱南岳）と、鋭く畦つて向ひ合ふてゐる。中の岳、大喰岳以北の千山萬岳は、重厚の雲中に裡まれ、其雄大な姿を見る事が出来なかつた。白幣が出現すると、辻村氏が記された御幣窪は、東方の御幕の下に葬むられてゐた。飛州唯一の高峯笠ヶ岳は八字形の冠を戴き、雲濤上に搖られてゐた。垂川谷の方から連りに雷鳴が聞えて來た、

今日もまた夕立すらしかきろひの

穂高かたけに神そごゝろく

田島春園

幾回となく霧進を續けた雲霧は、昇騰し遂に凝つて雨となつた。名残はつきねど、又逢ふ瀬を約し、紀念として主峯に石塊を手向け、其健在を念じつゝ、北と南に袂を分つた（一時二十分）。影を没する迄は、幾度となくかへりみる。

九、露營の失敗

足がりの石、手倚と思ふ山角、瓦落々々と崩れ、ポロリと抜けて機をくらう、加之に濕氣を受けての下り道、足は沁る、霧に捲かれる、危険なる事一通りでない、先きの中休所に戻り、一と先づ前

◎穂高山南稜敗港記 鶴殿

一一一

進を中止して荷物をまとめ、露营地を物色したが、こゝぞと思ふ場所も見當らねば、段々と石斜垂を下り、タケカンバ、ミヤマナ、カマド等の矮林に入り、枯枝を拾ひ集め、樺の皮を剥き、雨の小歇となつたのをしほに、火を點けようと、一箱の燐寸を提供して、交代にやつて見た、がもう充分に濕りきつてゐるのでいかにあせつてみても、點火せない。やがて日暮は近づき、空模様は怪しく曇り、又も雨となつたので、露營を斷念して、温泉に下る事に定め、岳川をすぎて、密林中入り、電燈を振り照らしつゝ、暗黒を破りて温泉に向つた。

十、山稜傳ひ

翌れば十四日、朝の様子は昨日と變りはない。六時十五分出發、旭日に反映する穂高の峻峯を仰ぎ、わかれゆく穂高かたけのよこ雲に

匂ひそめたるあさ日かけかな

上村たかよ

其氣高き風貌を賞で乍ら、急行三時間半で、昨日荷物をおいた、鞍部についた、荷物の輕いのに、道草をくはぬので昨日よりか一時間餘りも速かつた。今日も亦岳川谷の方では、そろ／＼霧を製造しはじめである、腰を下ろしてゐる間も、ろくにせないで出かける。岩壁が崩れ易くして危険であるから、作が道を探して先きに行き、先方がオーイと云ふを合圖に、オーと答へて一峯に躍り上る。

どうす黒いイワブスマの粘りついた岩塊、齋齋が、つた破片が、一つばいに散亂してゐた。行くては、螺を伏せたような峯が、黒く鋭く尖つて、限りなくたけりたつてゐる。岩壁の層向は、概ね西南から東北に、傾むいてゐるから、割合に飛彈方面に緩かで、信州側は、峻急である事は、槍ヶ岳や穂高山間と殆同じである、故に大抵は、飛彈方面に偏して峯渡りをするのである、が偃松は信州方面には、頂迄あるに反し飛彈方面は、其上部界が稍下つてゐるので、二ヶ處計りは信州側を絡むのである、若

しも此偃松がなかつたならば、此峯渡りは、絶対に不可能であると云ふてよろしい。内地諸高山の上
部界を占領してゐる偃松は、往々南山に於ける鐵條網に擬せられ、厄介視せらるゝ時もあるが、現に
此の峯渡りでは命の綱ともなり、階梯ともなつて吾々を助けてくれる。其他山の破壊を防ぎ、禽鳥を
育ひ、露營の折には燃料を供してくれる……。

十一、蟬

此の頂の下り目に、三十疊内外の壘を敷きつめたような所があつて、其上面には礫が少し散亂して
おり、處々の割れ目には、苔や芝が頸を出してゐた。私は常に觀測をし乍ら行くので、後れ勝ちであ
つたから、少々歩を早めて其處に差しかけた、どう云ふ機みであつたか、たよりに思ふた其芝苔が、
割目を離れた、あつと云ふ間もなく仰に倒れる、其途端私は、逸早く左手の一二尺高い岩塊の先を握つ
た、處が夫が又たわいもなく崩れたから、私の身は礫車に乗つたまゝ、二三間迂りこけた、もう一步すれ
ば、穗高明神の末席を汚したかもしれないぬ其下は十數丈の險崖！。心臓の鼓動がしばし治まらなかつた。
作は遙か向ふの方で、此様を見て、あつけにとられたような風をしてゐた。臀部に傷みを覺えたから、
さすつて見ると、ずぼんが破れ、もゝに少々擦過傷を負けたのみで、幸ひ大怪我はなかつた。

第三を東側から、偃松を手操つて登つて行途次、不意に霧の中より、翅をあをるような音がして、
目先きの山稜に突きあつたものがあつた、何であらうと探して見ると、一匹の蟬であつた。人里間近か
に棲んでゐる彼女は、友に追はれたのか、速風を陥つたのかしれぬが、氣候の荒き、高嶺に迷颯つて、
苦しんで居るは、實に訝かしき限りである。兎に角下界迄伴なつてやらうと、ポケットに入れる。追
追に霧が東側から逆寄せて来る。

十二、南 穂 高 岳 (二九〇九米突)

猪の牙の如くに、空を抉つて立つてゐる峯を五つ六つ乗り越え、十二時五十分、南穂高の三角點を迎へた。櫓は全く破壊散亂して、標石のみ石に挟まれ、淋しそうに空を眺めてゐた。櫓を建てる時に、三四尺切り均した位で、至つて頂上は狭まかつた。此處の西角から、白出澤(宛字)と小鍋谷(宛字)との間に突出してゐるのは、宇登洞の支脈(本誌六年二號九五頁の挿圖中宇登洞の支脈を、奥穂高より、栗尾の尾嶺を、前穂高より分岐せる如く記せしは、誤につき、本文によりて訂正す)で、低下する事約千餘米突、其先端に三角點が置かれてある、其直下は、蒲田谷である。南方偃松を押し分けて遙かに下り、猶密林を潜つて行けば、惡谷山に達し得られる。主脈より西方に分岐れ、小鍋谷と惡谷との間を割つてゐるのは、栗尾の尾根で、其中程には、三角點がある、此尾根は雜木で蔽はれてゐるようだ。是より猶南行を續くる考へであつたが、己に主嶺を征服した後ではあり、以南は前述の通り、這松や密林と惡戦せねばならず、危険は少なくとも、中々困難であつて、甚だ趣味に乏しいさうであり、其上に天候も次第に險惡を呈し遂に雨となつたので、南行を止め、中食を濟し、二三の小峯を踏み越え、東側のざれを下り、岳川尻に出で、密林中に影を沒した。

(328)

十三、和 歌

わたつみの神のみすゑのあと、は、

穂高かたけにありとこたへん

刈のこす里のおくてにしも見えて

穂高かたけにふれるはつゆき

河内直武

藤江正明

十四、附 錄

山

岳

回遊線、近來は、此山も槍ヶ岳と同様、大分登山者が多くなつて來た、が一等三角點のある東穂高に登る人は多きも、其北方の最高點を極める人は少ない。之は好案内者を、容易に得られぬ事と、登路がよく拓けて居らぬ事との二つが、其原因をなすものゝようだ。普通案内者と云ふものは、主に金錢に許り目を注ぎ、必要があつても、なるべく苦勞を避けたがる弊がある、是等は、登路の概況を詳知してゐると、餘程迄避ける事が出来る、夫で私は、一般に最高點の方をも併せて踏破せられん事を御勧めする、夫は決して、博物の奇品を得らるゝからではない、たゞ硤岩俊拔なる山上の大觀（快晴の時は、日本海の一部が見えるそうである）を欲まゝに吸ひ込む事が出来るからだ、此點に於て、東穂高は、遙かに劣つてゐる。で此山は、朝少し早く（四時頃）出發すれば、表口即ち岳川通りで（脚力中等のもの、五百目内外の荷物携帶）十時には、一等點所在峯に達し得られ、此處を十一時發にて、午後二時には、最高點に行ける、此處を三時出發、白出澤の頭（宛字）を經、四時を經、午後七時温泉に下る事が出来る。是は充分餘裕のあるように見積つたのである。健脚のものは、尙一時間以上を短縮する事が出来る。但し道草を多く食つてゐては、駄目だ。好案内者を要する事は、勿論である。若しも最高點のみの希望ならば、今回私の採用した、白出澤の頭經過が最も容易である、此方ならば十二時間で、登降する事が出来る。天氣さへよければ、槍ヶ岳でも一日で登降し得らるゝ。明治三十八年九月十一日、私は温泉から槍ヶ岳を登降し、翌十二日には、穂高岳の一等三角點を極めて下山した事があつた、其時の案内者は、島々の市作と云ふ柚で、現今穂高の表山道（嘉門次の拓ひたと云ふ舊通路とは途中一里位の間異なつて居る、其方は今は、殆廢れて居るそうだ）は實に彼が拓ひた鼻祖である。當時、同窓一人と右柚の他二名、都合五人であつたが今程に道が開けて居らず、何人も初めて、

道を探し乍らの登降、随分危険困難を甜めた事があつた、其時分から比べると、今は餘程楽になつた。私の考には、好案内者を得られ、好天氣で、身體強健の時と此三者が揃つて居れば、一日に主峯を登降する位は、決して逡巡すべき程の道ではなからうと思ふ。

案内者。槍穂高間に委しい案内者は、目下嘉門次父子と私の今回伴ふた、中島作次郎位なものであらう。嘉門次父子は、己に定評があるから、此には述ない。作次郎は、中々詳しいが、當時どうも横着で不親切の弊があつた、現今ではどうであるかしれぬが、推奨を憚る次第である。單に絶頂を踏んで歸ると云ふには、あまり差支へないが、長途の行軍には不向きであらう。當時彼の案内賃は、二圓の他に食料を給した。三十八年市作と云ふ柚には、單に一圓を給したのみであつた、随分變れば變るものである。

標高。本誌五年三號小島氏の「日本アルプス風景論」一〇八頁には、「最高點奥穂高三一〇二米」と又中村氏の「日本北アルプス略圖」には、奥穂高を三一〇三米としてある、右は孰れも陸地測量部の調査にかゝる由なるも、同所の奥穂高は、最高峯の直北なる一峯潤澤岳（宛字）を指したもなるを、兩氏は謬つて最高峯と考へられたる故、自然其標高も誤つてゐる事と思ふ、で私が色々の方面から調べた所、先三一五〇米は下らない事と思ふ（「穂高群峯呼稱につきて」を参照）

地質。小島氏は「日本北アルプス風景論」及「日本アルプスと萬年雪との關係」で、穂高山及霞澤山を、花崗岩とせられてゐるが、愚見によれば、穂高山は東高穂の一部を除く他は、石英斑岩で、霞澤山は、三本槍や六百岳を除いた他は、粘板岩のように認められた。私共の如き素人では確實の事は不明である。何れ後遊者の精探を煩らほしたい。

赤城山の冬

關口 泰

山

大沼に氷が張りつめるのは毎年十二月の廿日過ぎである、無論其年の時候によつて遅速がある、昨年などは月の十三日にはもう張つたが、一昨年は大晦日迄張つては風に碎かれてゐた。小沼は高いのと小さいのとでいつでも早く張る、大沼にはまだ冷たい鐵の様な色の水が湛えてゐる時分、梨木の方から越えて來た旅人が「小沼の上を渡つて來やんした」などと傳へる。

風の無い寒い夕方湖邊に立つて見ると氷の張るのがわかる。薄いビードロの様なものゝツーツと寄る、寄り合つてはあつちこつちに薄い氷が出来る、出來た氷が又ツーツと寄り合つて大きくなつてゆく。

こゝやつて沼の部分々々が氷に蓋はれる、然し其儘で氷が厚くなる事は少ない。此頃に多い切る様な北風が五輪峠を越えてやつて來て切角出來た氷を破る、朝になつて湖に出て見れば、打ち碎かれて吹き寄せられたガラス板の様な氷が覺滿のあたり一帶の岸に重なりあつてゐる。

黒檜嵐が辨天の石垣にうちあてた浪が凍つて朝毎に石を覆ふた氷が厚くなつてゆく、岸のさ々れ石も皆氷の衣を着て金玉糖の様に奇麗である。

小鳥ヶ島の蔭は風をよけてゐるから氷が一番さきに、そだつ、氷が張りつめてしまへばもう日毎夜毎に厚くなる一方である。寒い冴えた夜氷の裂ける音を聞く様になる、ピンと鋭い音が山に響いて冷えまざる夜の張りきつた空氣を響かす。一番響くのは氷が五六寸の頃である一尺となり尺三寸となる時分は多く大砲の様な大きいが然し遠くへ響かない音をたてる。全く氷の裂ける音は妙なる自然の音

◎赤城山の冬 関口

一一八

樂である、雄大なるオーケストラである。フリユートの鋭い音もあれ、バオーウオエの鈍い音もある、ドラムの様に大きな音を立てれば又ヴァイオリンのチピカットの可憐に響く、ピアノの高音がセロの幅廣い音に混る。自分の乏しいヴォキャブユラリイはとても湖畔に立つて、此壯嚴なそして微妙な音樂に聞き入る——といふのでは足りない、聽覺はその僅かの部分しか分擔してゐないのだから——時の感じを傳へることは出来ない。

これは夜とは限らない、十時か十一時太陽が偏い光を投げる頃漫歩の足下から突然響く、山彦は山彦をかへして四圍の山はやがて又深い沈黙に歸る。その音響と一所に龜裂が走つてゆくのが見える、その龜裂の雪の様な白線が面白い、キュービストだかフユチュリストだかの繪の様に何の形かわからないが、興味ある直線の配合が非常に面白い、之も細い氣持のいゝ線があれば太い力強い線もある。沼が凍つて數日たゝないうちに大抵どこへ乗つても大丈夫の様に氷は堅くなる、船底にキールの様に鐵線のはいつたスケート下駄をはいて滑べりに出る。

星の降る様な夜であつた、冬の霜夜然も深山の夜の空は限り知れず深く星の光は凄き迄鮮かである、湖面は平に空のまゝに星を寫して底知れぬ夜の深秘を藏してゐる、地藏嶽の肩に金星が大きく輝いて山の影とその坊主山に生えた三本の樹の影を暗い氷の鏡に投げる。迂る三人の影も長くひいて遠くなり近くなり小鳥ヶ島へむいてゆく、語る聲も叫びも笑ひも永久の死を思はせる深山の夜に吸ひ込まれてしまふ。立ちどまつて星の宿つた湖水の深い深い底を見つめるともなく見つめてゐると體が沈んでゆく様な氣がする。鳥へあがつて焚火をする、赤い焔のゆらめきが黒い氷にうつて靜寂の極一種凄愴の感を添える。

十一月の下旬から雪は降つても山を鹿の子斑に染めるに過ぎない、一月にもなれば大雪が降つて沼のまわりの山の膚は雪の外の色を見ない、沼は一面の雪の原である。月の夜などはその皓々たる光は

雪に弱い反射をなして氣高い雰圍氣に包まれる、月光を浴びて湖の真中に薄蒼黒い墨色の影をおとし、自分はポツンと山の中に一人取殘された様に立つ。本當に兎は御月様が好きなのだといふ、こんな月夜に親兎は小兎を連れて湖の上に遊びに出るのだ。

辨天様から眺めると平な雪原がズーツと擴がつて藥師ヶ嶽が高く然し温和しく聳えて、左は地藏の裾にきれ右は五輪峠の方へ連なる。昨日島へ往つた時のまげ（輪かんじき）の足跡が「巨人の跡」といふ様に眞白い雪の原に眼を辿らせる唯一つの一筋を作つてゐる。黒檜山は樹氷に飾られて眞蒼な冬の空につゝたつてゐる。

こんな晴れた日に黒檜に登る、まげと金足（かんじき）と藁沓に足を固めてゆけば、冷いことも滑ることもおちこむこともない。道は無いのだから何處も道である、頂上目がけてひた登りに登る、萱野に出れば島が見える、樅梅の常緑樹が黒く立つてそれが雪に蒼い影を落してゐる。木立の中に入れば樹氷は小枝の尖迄ついて、その下をくゞつてゆけばさながら水晶宮の廻廓を上つてゐる様である、樹氷の間から見る空は雪の反映に黒き迄澄んで見える。

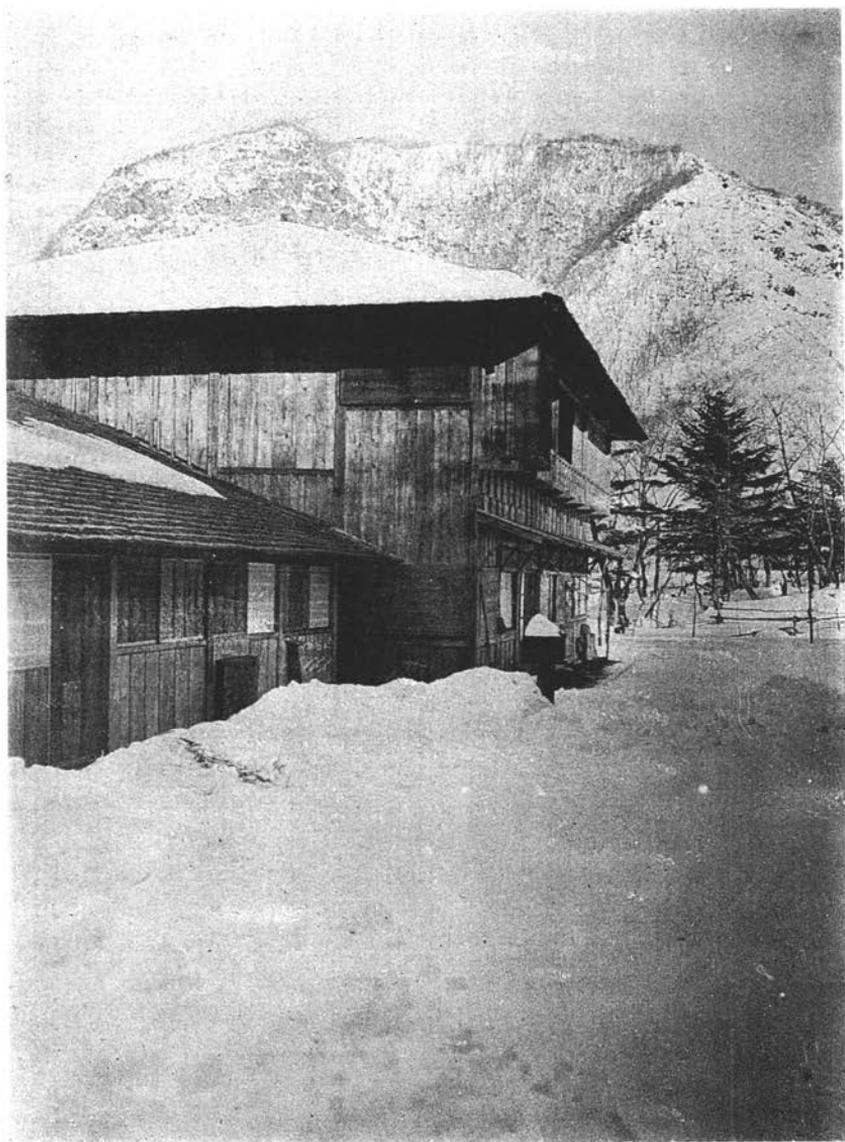
淺間が鈴ヶ嶽の上にせり出して來る、噴煙が白く光る、榛名がその下に踞る。大ダルミには利根澤の方から吹きあげた雪が將に崩れんとする一丈の浪の姿に墻を築いてゐる。こゝを上りつゝ願れば南に雪の山にかこまれた白い丸い平が見える、小沼である。頂上は流石に寒いが凍え死ぬ様な事はない、手袋は凍る、然し小便は凍らない。男體山が雪溪の線をくつきりと男らしく立つてゐる。下り路は滑る様に落ちる様に雪を蹴らしてゆけば三十分ならずして島の背後の上り口に出てしまふ、之を要するに夏よりも却つて樂である。

氷切りが初まるのは一月のすつとおしつまつてか二月にかゝつてからである。沼のあちこちに雪を拂つて氷に穴をあけて、その厚い處を切るのである。寒い年は無論厚い然し氷の育たぬうちに雪が多

く降ると其儘氷は厚つくならない、沼尻の方は一帯に薄い。氷小屋の前の沼の中へ二町も出た處へ大抵穴をあける、齒が二寸もある三尺餘りの大鋸で穴の周圍からだん／＼切つてゆく、一尺五六寸四方長さ三尺位の長方形の氷を切り出して、氷挾にひつかけて氷小屋迄引いてゆく。十年前にはまだ京濱地方の迄此處から出した、此年頃は人造氷に壓倒されて三つの氷倉は壊れたまゝに雪に埋んでゐる。氷小屋へは枯葉をつめて雪を敷いて氷を入れる、氷と氷の間には又雪と枯葉を入れて積む。

此頃では氷切りの人足は十人位しか來ない三四人が切り出して三四人が氷小屋迄曳いてゆく。雪の上についた道は氷の様に堅く滑かに氷はそれを軌道に滑つて運ばれる。雪の沼の眞中に黒い穴が段々大きくなつてゆく、然し半月か、つて人のあけた穴はやはり沼の眞中に黒い點を作るばかりである。高瀬川の柳の蔭を伏見から舟曳く人の形して歌は聞えず黙々と俯いて氷を曳く、沼に風が立てば雪は翻る、風が雪を捲いて氷切りの人影は薄く消える。然し吹雪の時はとてもこんなことでは無い、その日は氷切り處の話ではなく、人足は爐傍に集つて一日の休暇を樂しむ。沼を吹き捲く風に降る雪と立つ雪と巴に亂れて阻る物なき沼中を荒れる。何物も見えない、只雪である、白い雪ではない玄い雪である。濃霧の襲ふよりもなほ恐ろしく吹雪は山を荒れまはる。

こんな風で氷切りの仕事もはかざらず、氷が倉に一ぱい積まれるにはもう月は三月にかはる。彌生といへば里には梅も咲き草も萌える、山はまだ冬の最中である、里にしと／＼と降る春雨は山では霏霏紛々たる雪である、東から來る風が山に當つて降る雪は流石にやわらかい、然し一度に一尺も二尺も積る事がある、此頃は山には一番雪が多い、吹きだまりには何丈もあらうが新坂の平でも五尺位はあるだらう。雨が降れば雪の上層は氷る、山中どこを歩いても落込む事もない。手製のスキーに氣持のいい平行線を作つて歩きまはる。スキーは此山に適する、様々の傾斜がある、新坂平でも駒ヶ嶽の裾でも又は地藏から小沼の上へ滑つても定めし愉快の事であらう、沼のスケートの時期は短くとも



(山城赤) 洞大の冬
影撮氏助伊村辻

岳 山

スキーは十二月から四月の始め迄用ゐる事が出来る、今度は本物のスキーをかつき上げやうと思つてゐる。

欺き難い春の日影に屋根に積る雪も解けて、延てゆく春の日永を日ねもす、軒に落ちる玉水の音のしづけさ、雪の内にも春は来て軒の雫にうつさりとする。垂氷の長きは三尺、下弦の月の夜更など軒にきらめく。

都は櫻の蕾が綻びて柳の芽ぐむ四月となれば山もなんどなく霞んで、雪の色も暖く陰には赤い色が混ざつて来る、繪をかく人でなくとも自然に親しむ人ならば雪を白いとのみは云ふまい、霧の日も朝も夕も春の日中も雪の色には變化がある。地蔵の南側の雪は大方解けて下から見れば山にももう雪が消えたと思ふがまだ、外輪山の内側と火口原には雪は人の背丈に餘つて落ち込み、跳る様に、夏なら井何分かで来られる新坂の上から大洞まで一時間半もかゝつてやつと着くのである。

山は紫に煙むる、空は何となくドンヨリとする、晝の日光が雪に反射して空一面が白く光るのである。夏の様な光ではない、やわらかに萬物を包む春の光である。

沼の雪もだん／＼にゆるんで氷のやうに固つて一帯に緑の寶石を解いた様は淡いエメラルドに透きどうる、處々に水晶の様な清い水がたゝえて泉のありかを知らせてゐる。

御宮の縦の樹にも小鳥が来る、白樺の小枝の尖も何となくあかるむ、御宮の川を雪解の水が流れる音が聞えて来る、此頃となれば雨が降つても日が照つても雪はとけるばかりである、雪は一日一日に少なくなつていつの間にか道に土が出、原の枯草が見える様になる。

四月の間をかたく閉した湖の氷も雪の下に薄くなつてゐるに違ひない、四月の末になれば湖水のまはりには大きいエミが出来て、やがて解ける時をまつてゐる、南の風がなま暖く吹いて来る日、薄くゆるくなつた雪ども氷どもつかない氷を、一年の三分の一を湖の底に閉されてゐた水が破る。氷は碎け

◎登山の準備 高野

一一二

る、水が躍り出る。氷はたゞメチャく砕けはしない、必ず六方石の形に碎ける、碎けた氷が岸によつたら取り上げて見給へ、氷はマッチの棒の様に細かくサクサクとくづれる、漂ふた氷片を棒でつツつけばやはり同じ様にくづれてしまふ、そんなにもうゆるくなつてゐるのである。こうやつて碎けた氷片が浪にゆられて南が吹けば島の方「沼向ふ」へよせられる、北からふけば辨天の岸によせられる。二日遅くとも三日も沼を漂へば全く解けてしまふ。

碧々と湛えた湖の色を見た人の心は全く冬から解放される、長い厳しい冬に閉ぢこめられた水が氷を破つて湖の底から跳り出た心が山の家を待つた人の心である、岸にさゝやく漣の音もなつかしい、前橋道から下へ低く木の間に見る縮緬皺の湖面も眼に新しい。

どうく長い冬が過ぎた、春になつた、小鳥ヶ島に四十雀や頬白が遊ぶ、駒鳥も来る、原の樅に木ツ、キがコツくと音をたてる、やがては時鳥も鳴かう、郭公も来やう、原には狸々袴がまつさきに咲いて、籠山のやしほが鮮かな色に咲けば、やがて氷小屋の汀の楊が煙り駒ヶ嶽の裾の若楓が新緑の魁をする。炭焼がまのわきに葎が咲き、清水の岩に白い忘れな草が咲く、五月も半ばをすぎれば残雪も消えてしまふ、(鈴ヶ嶽の石楠花、沼田道の鈴蘭) 常番小屋の馬つ、じが大きな花をつける頃は、黒檜山に虫ざり葎が蕾をもち千日ヶ澤に毛氈苔が柔い葉を擴げる。

——大洞日記の内、冬。——

登山の準備 (一)

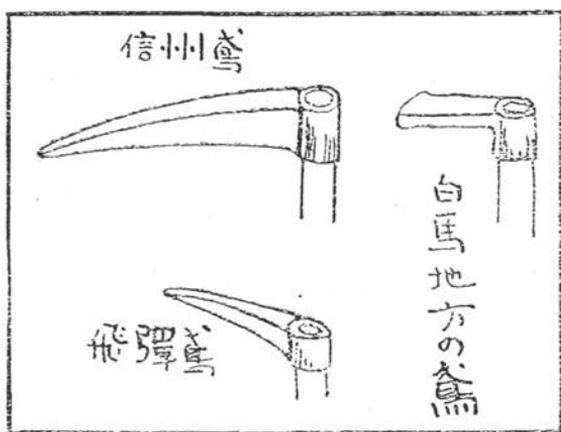
高野鷹藏

山に登るには、それ相當に道具の入るものにて、必要のものもあり、又あれば便利、なくても済む

と云ふものもあり、要するに、其人の趣味と、場所の如何に由るものにて、日本にては、大部隊の登山旅行、さては人跡未踏の山岳に、幾夜の露營を重ねると云ふ如き事は、殆ど稀にして、僅かに數日の野宿にて、人里に出らるゝを以て、登山用具として、専門に發達し來たりたる、ものなしと云べし、日本固有のものにて、山岳用として便利なるものもあれど、現存せるものは要するに西洋の模倣に過ぎざるべし、山登りの本家は、やはり歐洲アルプスにて、彼のものを取つて、直ちに用ゐんには、風俗氣候の異りたる我國には、其功少きものもあり、茲に述べんとするは、西洋のものにあれ、我國のものにあれ、成る可く、多方面に渡りて、吾國にて用ゐられ得べきものを記し讀者の參考に資せんとす、固より筆者は、未だアルプスの本場を踏みたるに非ざれば、アイヌ、アツクスの持ち方も、Step cutting の仕方も本式には知らず、人の話に、物の本に讀みたるに過ぎず。

一 Ice-Axes 斧頭氷杖と譯したる人あり、柄長き斧の先に石突きをつけたるものにて、アルプスにては、堅き氷河の上を渡るには、なくてはならぬものなり、吾國にても、殘雪の上を登り、なごするに、最も具合よきものにて、富士の如く、雪溪なき山にては、只の棒にて事足るべく、金剛杖丈けにて十分なり、然し所謂日本アルプス地方にては、あれば、足掛りを作るにも、崖を攀るにも、便利多く、殊に雪溪を降るには、只の棒に優る事數十倍なりと云ふべきか、日本には不幸氷河の大觀を見る能うして、アイヌ、アツクスも絶對的必要品には非ざれど、あれば便利此上なし。

我國にも、山登り用として用ゐらるゝ、鳶口あり、信州にて、飛驒鳶、信州鳶と云ひて區別さるもの此れなり、アイヌ、アツクスと異り、單一なる鳶口なり、石突きあるに非ず、極めて幼稚なるものなり、其名の示す如く、飛驒にて作らるゝものと、信州にて作らるゝものと形異れり、飛驒鳶は、信州鳶に比して、嘴短く、比較的上向きとなれり、斜面に打ち込みて登る時、飛驒鳶は、信州鳶に比して嘴は垂直に近く、信州鳶は或角をなす、飛驒鳶の方小形にして、且つ用ゐよし、飛驒の高山にて作る、三



ツ鱗の印あるもの最も賞美さる、價は一個、柄なくして四十錢位なり、柄の長さは、人の好みに由るなれど、三尺五寸乃至四尺五寸位なるべし、柄は櫓の目の通りたるものよし、此外、白馬岳地方（北安曇郡北城村）にて、柄の長さ二尺前後にして筧形の鷹口を一端に附したるものを用ふ、此れは、人夫の用ふるものにして、奇なる事は、印度、カシミア地方の土人が此れと殆んど同一のものを用ゐつゝある事なり。

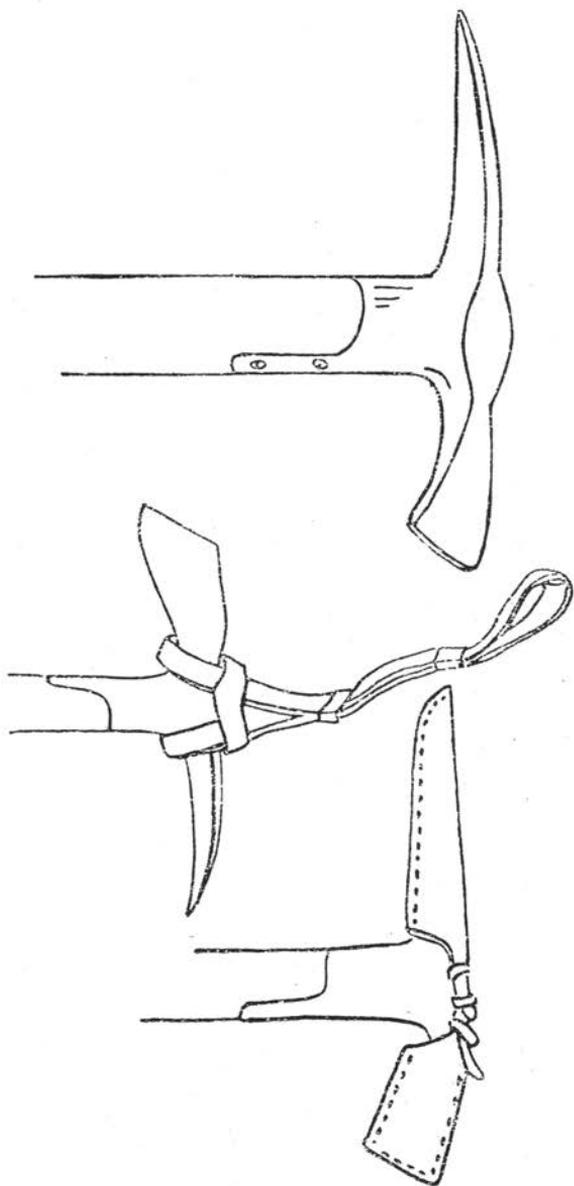
アイス、アックス (Ice-Axes) (獨逸語の Eispickel) は圖に示す如く、木柄の一端に鷹口と、扁平狀の鈍刃を附したるものにして、土工の用ふる所謂鶴嘴を、小形に、柄を長くして、石突きを附したるもの、如きものなり、製造者が異なる如く、數多の形式ありて、各部分に就きて、夫々相當の理論ありて、中々にむづかしきものなり、アルプスにて氷河を渡る時、日本にて雪溪を登る時、唯一の力とする所は、此アイス、アックスにして、其粗惡なるが爲めに不意に折れなどせば、其危害計り知るべからざるべし、むづかしき理論あるも理由ありと云ふべし、アイス、アックスの本場は、勿論、瑞西にして、其れに次びでは、テイロール(塊地利)なり、瑞西にても、Friz Jörg 或は A. Hupfaut. などは名高き製作者にして、各嘴の形、扁平刃の形を異にす。

アイス、アックス全體の重さの中心は、頭部より約一尺一寸の所になかるべからず、嘴及び扁平刃は、丁寧になられたるものにして、適當の焼きを入れられたる鋼ならざるべからず、只堅きのみにて

は、岩石に當りて、缺ける憂あり、餘りに柔きは、其用をなさず、最も適當なる硬度を有せざるべからず、嘴及び扁平刃は、柄に對して、僅かなる弧狀をなし、嘴の下面には、淺き鋸齒狀を有するものあり、或はなきものあり、或論者は、鋸齒の不用を唱ふる人あり、或人は斷崖など攀る時に木の枝、岩石に、引き掛る時滑らざる爲なりと云ふ、扁平刃の形も種々あり其先端一直線に終るもの或は、三

◎登山の準備 高野

Eispickel



◎登山の準備 高野

一一六

邊をなすものあり、然れども直線に終るもの、最も便利なるべし、實際に用ゐざる時は、常に革又は布製の適當の袋にて覆ひ、保護すると共に、持者の爲めにも手指を傷る事なかるべし。

アイス、アツクスの金屬部は常に磨き置くべく、使用せざる時は、ワセリン或は其他の脂肪又は酸なきニスを塗り置くべし、磨すとも役には立つべしと雖も、娛樂の爲めに用ふべきものなれば適當の、美さを保つ必要あり。

日本人には、全體の重さ一基瓦(約二百六十匁)乃至一基三〇(約三百五十匁)位のもの適當なるべく、日本の如く、氷河なき所にては、左迄重きを必要とせざるべし、全體の長さは、背高き人にて一米一〇(約三尺六寸)にて十分なるべく、普通の斜面を降るにも、此長さにて十分なるべし、元より長さは、人の好みにして、一定せるに非ざれど、餘りに短き時は斜面を下る時に大なる不便あり、雪少き斜面、草多き傾斜地を降る時、間々滑る事ありて、鋭き嘴を有する、アイス、アツクスは危険なれば、鈍き先きを有するものを用ふべしと、説く者あれど、少しく注意して、アイス、アツクスを保持する時は、其危険なかるべし、岩角を攀ち、絶崖を登る時は、アイス、アツクスは、邪魔となるべし、然る時は圖に示す如く適當の革又は布紐にて結び、手頸に通して登るべし。

アイス、アツクスの柄は、Ash (*Fraxinus excelsior*) (トネリコの類) 或は Hickory (*Carya alba*, *Carya amara*) を良しとせり。

本邦にては、未だ適材を知らざれど、棕などは適品なるべきか、何れも、木理の通りたる、十分成長せる材を撰ぶべく、而して十分乾燥して、製作に際しても十分の注意を要す。

平時使用せざる時は、餘り乾燥せざる場所に置くべし。

二 Rucksack. 登山用の背囊、と云ふべし一言に云へば、布の袋の口をくくりて背に負ふものなり、登山に要する、道具、食料など入れて荷ふべし、普通の雜囊などより、遙に便にして、且つ擔ひよし、

普通の品は何れも、防水性の布にて作れり、或種のものには、裏にゴムを塗れるものあり、大體四角の袋の口をくゞり底の兩端と、其くゞり目に、負革を附し、恰も軍人の用ふる背囊の如くせり、彼れは、箱状なれど、此れは、べめたる時は、三角形の袋にして、其三角形の各頂點に、負革の端附着せるものと知らるべし、袋の内部にも、ポケットあり、外部にも、一ツ乃至二個のポケットを附し、小形のものを入るゝに便せるあり、此袋は、負革を十分ゆるめて、腰の上部に負ふべし、普通の背囊の如く、肩に高く負ふべからず、此れは袋にて、外装箱状をなさざれば、高く負ふには甚しき不便なるご、荷ふて重し、されば心して擔ふべきなり。

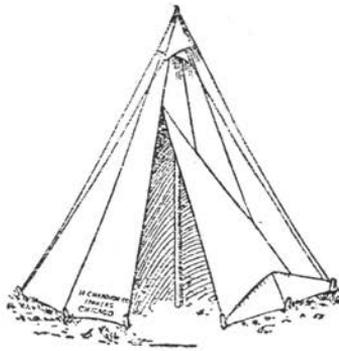
値安きものは、防水性ならぬものあり、登山に際して、雨に逢ひても、内部に透過せぬ爲めには、相當の品を求めざる可らず、大きさも種々あり、體質と力量に由りて考ふべきなり、晝の辨當を持つにしても、普通の雜囊にて、ぶら／＼さすよりは遙に樂なり。

夜、露宿する時に、内部の品物を、出して、脚先を入れる、時は、暖かなりと云へり。

Rucksack stütze 　つて、背中と、リュツツツとの間に當て、汗のしみ出ぬ様防ぐものあり、發汗甚しき人などには妙なるべし、輕金屬にて作り重さ僅に八、九十匁に過ぎず登山用背囊背當てごでも稱すべきか。

三 Tents 　登山に際し、携ふべきテントは、重要なものなり、在來の如く、一日にして頂上に登り直ちに下山し得る登山のみをなせば、テントの要もなかるべしと雖も、數日に及ぶ登山、或は、山脈の縦走新しき登路の探求等にはテントの要あるべし、一枚の油紙に雨露を防ぐ簡單なる方法は、長き旅行には耐へ得べくもなかるべし、登山用具の總てに通じての要件なる、輕量にして、堅固此れを疊めば、小量となり、使用に際しては十分の面積を得ざるべからず、輕量と堅固とは、常に反比例をなすものにして、登山用テントとしては輕量なるを尊ぶと同時に山上にての烈風に十分の抵抗力を保た

ざるべからず、登山用のテントの形状を大別せば、支柱の一本よりなるものと、支柱の二本或は二本以上よりなるものとに別つべし、前者は、其平面圖放射相稱をなし後者は普通、左右相稱なるべし。支柱の一本なるものは、圖に示す如く、多角形錐體狀をなし、廣き面積を得んとすれば、勢ひ高さを増大せざる可からず、然らざれば傾斜緩くして、水の落ち悪るし、高さを増す事は、携帶と、構造上不利多く、即ち一支柱のものは、登山用としては小規模のものに止り大形のものに適せざるを知らるべし、普通支柱の高さ八尺、底面の直径八尺位にして、四人を容るべし、日本にて作る場合には、支柱は竹にて作り、四折位にして、

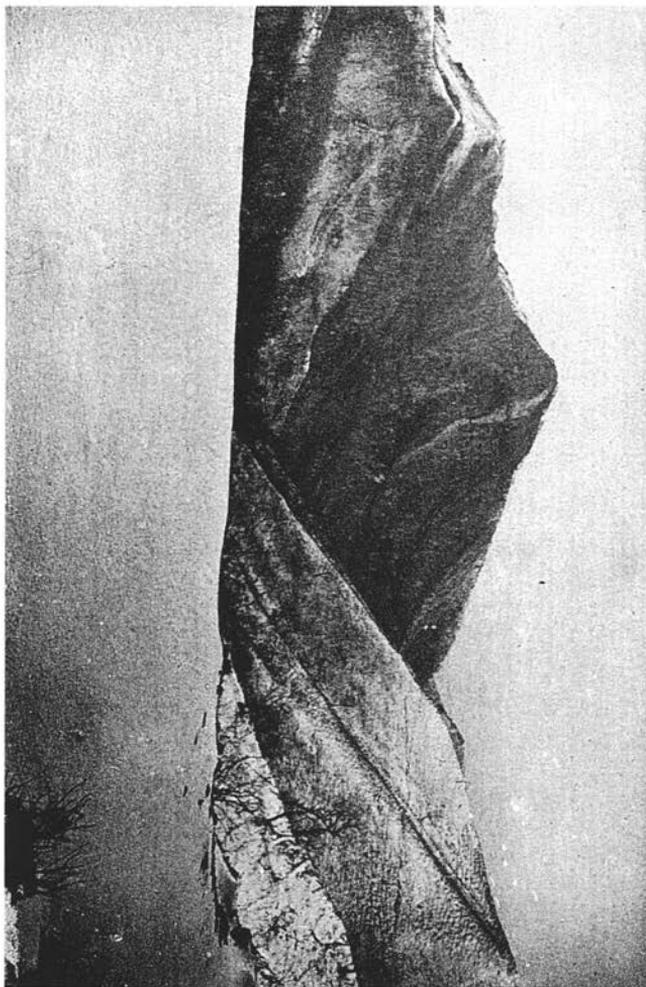


携帶に便にすべし、中村、三枝南氏は、此形にて入り口を上を開く様にし、開く時は長き庇となる如くし、又上部に窓を明け、煙の出る如くせられたり、至極適當なる考案にて、テントの内にて燃火をなす場合など最も具合よろしかるべし、在來のものにてはテントの内部にて、燃火をなす事殆んど不可能に近かりしなり。

質は、天笠木綿にアルミナ石鹼を塗りしものにして油引に非ず、油引にては、燃火に危く、且つ目方重し前述の形にして、支柱、杭、繩及び外袋にて、一貫五六百目より二貫目位のものに過ぎず、(乾燥せる時の量目)然れども、夜露、又は、雨の爲め濕める時は重量増加すべきに由り、人夫に負しむる時は、重さの配分上注意すべし。

屋根形のもの、未だ經驗なければ、詳述し難し、ウインバーテントなど稱して、故ウインバー氏の考案になれるものあり、思ふに此型は、風向により、其方向を考慮せざれば、風當り激しかるべし、軍隊の用ふる携帶テントは、山には不適當なるもの、如し、十分防風雨の役をなさざるが如し、從來

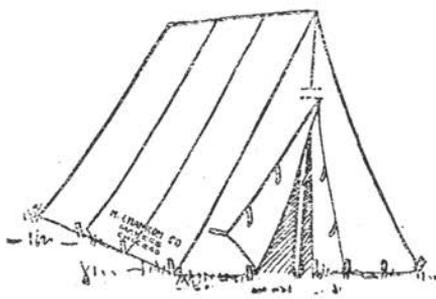
山城赤の冬
影撮氏助伊村辻



共、普通は大形にして丈夫なる、油紙にて不完全ながらも屋根形に時に其一面丈の如き形に油紙を張りて代用しつゝあり、此れにても雨露は防ぐべし、油紙の大形のもの、出来合品としては、荷馬車の荷覆となすものを求むべし、美濃紙又は細川などを張り合せ、對角線に、麻繩を入れ十分塗油せるものにして、上等のものにて疊四疊敷位にて、一圓五六十錢なるべし、京濱地方にては、荷馬車の上には、普通ツック製のものをを用ふるを以て、油紙製のものは少し、されば寧ろ、登山途地方の都會にて求むべし、信飛方面には、主として名古屋製のもの多し油紙はテントの代用とするのみならず、地面に敷て、濕氣を防ぐべく、其他萬端の物を包みなど其用途極めて、多ければ、大小となく、數多く携帶すべし、總ゆるものは、必ず油紙に包みて、携ふべく、然らざれば一朝、急雨に遇ふ時は、甚しき困難に會ふべし、殊にマツチは最も注意すべし。

テントの地質は、最も丈夫にして有効なるものは、無論ツックなり、然れども、小人数の登山には重量の増加の爲め不適當なり、英國製にて絹地に防水せるものあり、僅々數オンスに過ぎざるものあり、然れども、普通天竺木綿にアルミナ石鹼を塗布せるもの、輕量にして、且つ比較的有効なるべし、甚しき大雨に遇へば此れとて、雨の浸出するを得ざれど傾斜急にして、テントの内面に他品の接觸するものさへなくば、殆んど水の滴下する事なかるべし。

テントは平地に適當の如く作るゝものにして、傾斜地に適する如く、特に裝置なし、されば成るべく、平地を撰んで立つべし、多角形のテントなれば、別に支繩を引かずとも、大丈夫なれど、風甚しき時は頂上より、適當の方向に支繩を引く方安全なり、何れの場合に限らず雨天の際は、テントの



(343)

四周は、浅き溝を掘るべし、テントより滴下せる水の内部に浸出するを少くせんためなり、殊に土地斜面の時は上方より雨水の流下しテントの内に流れるを防ぐ爲め、上方には特に溝の内側に、小なる堤防を作るべし。

止むを得ざる場合の外、テントは、風當り少きひら地を求めて樹つべし。

テントの内、地面には、草、又は木の枝(葉の附けるまゝ)を多く集めて敷き其上に油紙、又は其他の濕氣の透さぬものを敷くべし。

四、服装 登山の服装としては、輕装なる洋服を尙ぶべし、和服不可なりと云ふべからざれど、洋服の便利なるに及ざるべし、以下洋装に就て述ぶべし、登山服としては、輕くして丈夫に、各部分が自由ならざるべからず、普通の背廣服などよりは、出來得れば、特に登山用として、或は獵服、散歩用として作られしもの便なり、普通此等の洋服は、Knickerbockers と稱せらるゝ半ズボンと、帶を有し且つ豎の襷を有する上衣より成れるものにして、特に登山服として、新調する場合には次の要點を具したきものなり。

△登山服として、散歩服など、異り、形よりは寧ろ實用を主とせらるべし、總じて山に登る時は暑けれど、雨天又は夜分などは寒ければ、厚きメリヤス地のシャツなど二三枚を着て尙ほ適合する位の餘裕を作るべし、されば、下着少き場合には、少しく大き過ぎる觀あるべし、然れども、他少の形は我慢せざる可らず。

△地質は毛織を尙ぶ、木綿にては、濕氣を吸收し易く、且つ寒暑共に調節の功少し、少雨に遭ひても、木綿にては、直ちに、濡るゝの憂あり、平地の旅行には、多少暑くとも、毛織を尙ぶ、毛織物にても、成るべく、雨水の透過せざる性質のものを尙ぶ、同じ毛製にても、水の透過甚しきものあり、出來れば適當の防水性としたるもの可なり。

地質は丈夫にして、木枝、岩角などにて裂破せざるものならず、登山服地としては、Homespun 又は Loden を可とせり、眞の Homespun は、手織製にして、英國出来なり、丈夫なる事は、確實なり、然れども眞の手織は少くして、價も高し、普通は、何れも機織なれど、絲質撚り方、織方を模したるものにして、眞の手織は、柄も、織り方も如何にも無骨にして、且つ巾、短し機織の方は柄も、地質も、遙に進歩せるものあり。

Loden は、奥太利亞の特産にして、其産地としては、Tirol 地方殊に Innsbruck 又は獨逸の München を最上とせり、地質粗く、丈夫にして、防水性なり、柄、及び色は、寧ろ野暮なり、思ふに Tirol 地方山民の常衣にして、それを模して機織せるものなるべし。

△洋服の形は、各人好むまゝなり、然れども、ポケットは成る可く多き便利なり、且つ何れものポケットにも蓋を有しボタンにて留める様なすべし、山中にて俯下したる時、内容物の脱落せざる爲めなり、又出来れば、ポケットの内面は、護謨布又は油布にて作り、絶對の防水としたし。

ヅボン は、半ヅボンの方具合宜しかるべし。然して仕立方は、騎馬用の如く、成るべく外方に膨らむ様なすべし又上衣の腋下にはマチを入るべし、手を上に擧ぐる時、上衣のつれる事なく便利なり。

(未了)

繪畫の題材として山岳の出現

小 島 鳥 水

科學の勃興が、繪畫及び文學等の諸藝術に影響を及ぼしたことの大きなるは、今更らしく言ふまでも

◎繪畫の題材として山岳の出現 小島

一三二

ないが、殊に人間よりも自然界を題材とする藝術、例へば風景畫のやうなものには、新らしい題材を供給したことでなくても、莫大なものであつた、即ち科學的智識の擴充と共に、從來人間界から取り除けものにされてゐた神秘境などいふものが、次第にその領分を狭められて、智識の慾望は、所謂探險事業となつて、地球上の隅々隈々まで、人類の足跡を印したり、又は印されやうとしてゐる、私が少年時代に愛讀した（無論譯書で）空中旅行だとか、海底旅行だとかいふ、デュールス、ヴェルテの所謂科學的假空譚も、最早今日では假空譚では無くなつた、スタンレイの阿非利加探險とか、ピアリーの北極探險とか、アムンデルセンの南極探險だとかいふことは、それ自身が既に小説中の事實でもあり、又事實上の小説でもある、この際廣大なる地球の上で、只一箇の巨人が、長い眠から醒まされた經過を顧るのも、興味のあることである。

その巨人とは、山岳のことである、よしや地球の屋棟と言はれたヒマラヤ山の最高凸點が、未だ踏破はされてゐないにもせよ、今までローマンチック派の自然觀にあつたやうな、水には妖女が住み、森には巫婆が住み、月光の山には魔性の侏儒が住むやうに思はれた世界が、破壊せられて、山岳は永遠なる自然の法則に依りて構造された立體であつて、それはアルプス山氷河研究の科學者、テングルが言つたやうに「美はその力と聯結せられる」當體として、先づ山の方が認識された、或山には熔岩が流れてゐる、山はその熔岩のやうに熱い、或山には氷河が懸垂してゐる、山はその氷河のやうに冷たい、或山からは雪崩が非常の速力で落ちかゝつて來る、山はその雪崩のやうな重力がある、それ等の山の組織上、彫刻上、内部は幽暗にして、外部大氣に晒されたところは、鮮明に浮び上つてゐる現象は、從來ローマンチック派時代の人々には、丸ツ切り見えなかつた種々のものを見せた、山の雪も爬虫類の鱗の如くに光があり、山の森林も、大魚の鱗の如くに動き、山の稜岩も巨獸の角の突起に劣らぬ力の充實した美しさがあり、山にたゞよふ雲も、彩鳥の冠のやうな顯著な色彩が見えるやうにな

つた、その委曲リテイムの緻密な研究が出来ると共に、今までは漫然たる岩石の堆積體であり、氷雪の屯集所であり、雲霧の離合亭であつた山岳は、その容積の巨大なるだけに、その占領してゐる群衆の物象の複雑に駭かされた、尤も自然の物象が、かういふ經過を取つて、人々の眼に映つて來ることは、何も山岳に限られたことではないが、殊に山岳は、その内容に綜合統一されたる群衆自然を、一廓に併有してゐるだけに、その精緻密妙なる組織には、一時は手をつけかねるより外は、無くなつた。

科學的智識が諸藝術に與へた影響は、自然界に奇らしい題材を、供給したばかりでなく、如何に之を觀察するか、如何に之を描寫するか、如何に之を表現するか、といふやうな *How to...* の問題も重要なものであつたに違ひない、之れが又文藝界にあつて、ゾラの解剖小説には人間も「自然の一片」となつて機械的に取扱はれるやうになり、批評界にあつて、ラスキンの地質學的論評や、繪畫には印象派や新印象派の人たちが試みたやうな、色彩の光澤的分析から生じた、點描法ポイントや、又はセガンの發明したやうな分色法ディヴィジョン・カラーになつて來た、中には随分露骨なる科學と藝術の結合なるものを企てたるものもあるが、近代の所謂後期印象派の人たちのやうに、智識の雜念からの羈囚を脱却し、思邪なき原始の昔に還元して、純一なる感情に立つて、或は裝飾的に、或は韻律的に、表現されるものにして、根底には文明の理智が潜在してゐる、原始的なる野蠻人と異なるところは、この理解と智識があるから、單純なる形式に盛られた複雑微妙なる表現といふことも、必然に生じるので、科學の智識は、單に物質の外形を、微細に洩れなく、自然らしく再現するだけに止まるものではない、物象の内部に穿入するといふことは、人間の心と物の本體と、合致して出來得べきことである、その啓發された人間の心は、十九世紀の科學勃興時代を省略しては、理解することが出來ないのである、もし印象派の繪畫が、科學の智識を或點に於て應用したものであるならば、後期印象派は、一旦應用の境を通過して、然る後、こゝから脱却して、新しい感覺の綜合に生きたとも言へる、既存のものから

◎繪畫の題材として山岳の出現 小島

一三四

脱却したといふことは、當初から絶無な事とは、區別して考へねばならぬ。

さういつた科學の著るしい影響を蒙らされた時代に、山岳はどういふ役目を、務めたであらうか。人類の大集合地なる都會は、それが海邊にあるにもせよ、山間にあるにもせよ、平原もしくは準平原の地貌を有するところに多いことは争はれぬ、そこに廣狹があるにしても、平原は概して單調であるから、その背景には、何物かの屏風を有して、その屏風に突き當つて見たいやうな、氣分になりたくなることは無いであらうか、かのシベリア線を汽車で旅行した人の話には、茫茫たる老朽の大平原は、海底のやうに、地盤の彫刻も著るしく無く、風のために起るべき破丘の堆積も、際立つたものごてはなく、地皮の破斷に依れる高大なる地貌の山岳などの、ありやうのない、出入稀な單調な地平線を、速日急速力で旅行しても、風物の眼を遮らないので、物にぶつかりたくなるといふ。

このぶつかりたくなる氣分なり感情なりは、山といふ大屏風に突き當つて、始めてエネルギーの放散と、潜在電力の飽和を得られるのであるから、山岳に對する憧憬と、研究心などは却つて山國よりも、歐洲大陸や、米國新大陸などに多い、近代の山岳研究が、海國で、山岳國ならぬ英國を中心として起され、歐米に旋風のやうないきほひで弘まり、最後に我が日本にも、ほんの少しばかりの影響を與へたのも、山を中軸として、求心遠心相互反してゐるやうな、氣分を感じ得られはしまひか。即ち自然の地形上から、山岳に對する憧憬を起して來ることが、今更に眼を覺まされた人類の、山岳に向つて踏み占める第一歩である。

次に、藝術發展の大なる時代は必ずしも感情や狂熱が、昂進してゐる時代でなくて、冷靜に物を観ることの出來る時代に多いやうである、さうして原始的に、特殊的に、新らしいテクニカルの改良が行はれてから、今まで停滯してゐたものが、堰を切つたやうに、一時に洪進して來るやうである、例へば古代埃及人などが、斑岩質の硬い岩石や、又は肉色（長石）の克つた花崗岩などに、窮屈な思ひ

をして、不自由な彫刻をしてゐた時代に比べて、希臘時代に紫にはふペンテリカスの峡谷から、大理石がたびたび発見されてから、いかに感覺的に、しかしながら單純に、一層自由で、人情味のある彫刻が出来上つたかは、言ふまでもないことである、ヴェネチアンの藝術は、油といふ顔料が発見されたために、その繪畫は全然革命せられた（日本でも明治以前は、殆んどこの油でゑがくといふことを、知らなかつた、その頃から見て今日の邦畫の、いかに變化したことよ）近代樂器の改良についても、音樂界に關して、略ぼ同様なことが言へやう、かういふことを念頭に置いて見ると、眞實の意味に於て、山の發見といふことが、いかに藝術界に多大なる容積を加へたであらうか。殊に況んや前人未拓の新領土が、茲に豐饒に存在してゐるのだから、代々の巨匠たちに、藝術上の「先取權」を奪はれた若い人たちが、この刺戟多き自然の奢侈國に向つて、踵を回らすのも、自然の數ではあるまいか。

科學的研究から、山岳——殊にアルプス山が、諸ろの意味と、慾望から、繁昌するやうになつてから、風景畫家なり、或はその批評家なりが、更新された心と、洗滌された眼とで、新しい題材の山岳を仰ぎはじめた、それから成る山岳の繪畫を鑑賞しはじめた、その雲霧には、新しい執着があり、その樹木には、新しい表情があり、その岩石には新しい光輝があり、その溪流には新しい活躍がほの見える、こゝに於て、新しい題材を新らしく描寫するために、新らしき畫家が、盛に要求せられた、——或は古き畫家と比較されて、論評せられた、ラスキンはそのために、「近世畫家」の第四卷を書いた、多くの憫れむべき、無定見なる、動かされ易き、畫工が、その註文に應じて、もしくは彼が教訓の意義を誤まり取つて、簇出した。

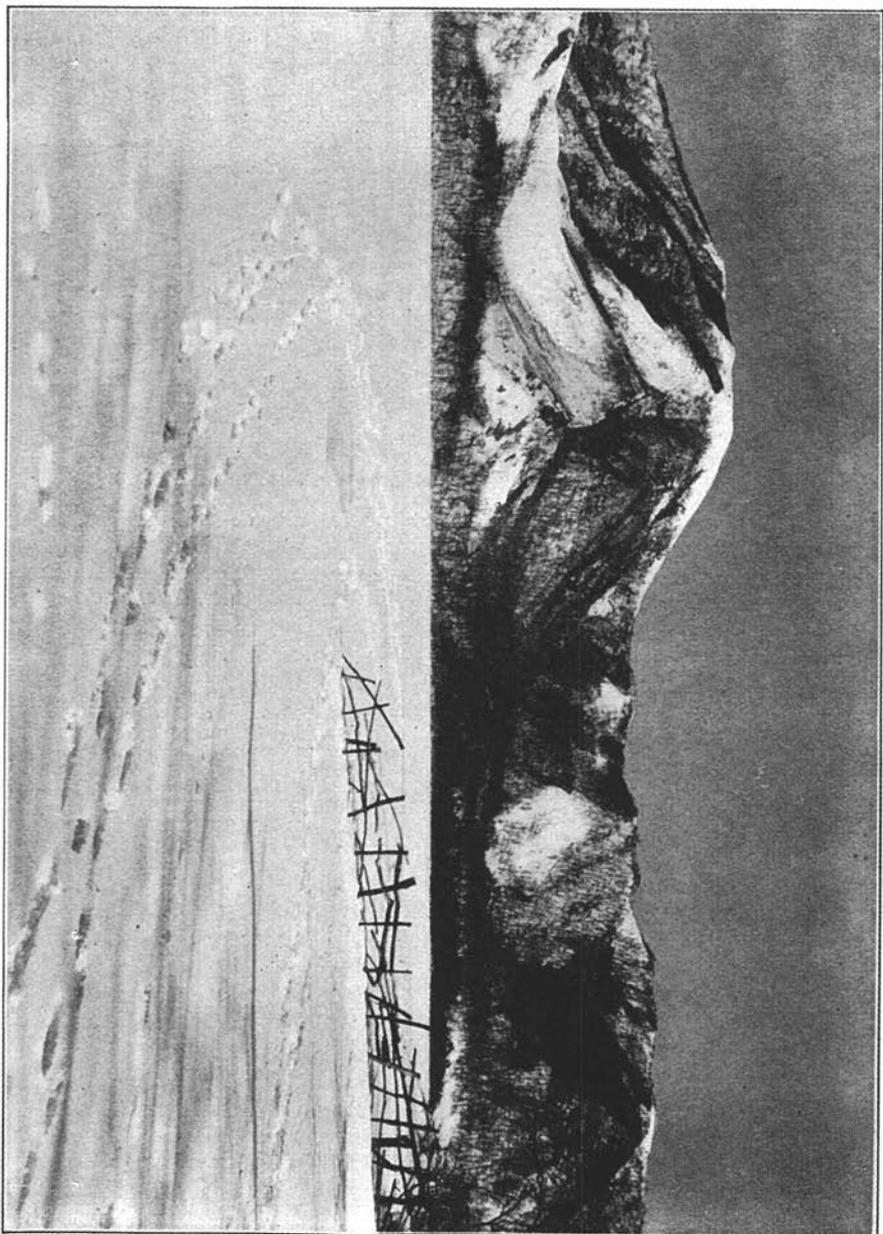
歐洲と違つて、山岳國なる我が日本では、可なり古くから、山岳の寫生畫はあつたが、併しながら、智識の幼稚な時代には、物を正しく視る、威嚇されないうで視るといふことは、よほど困難であつたらしく、多くの名所圖繪や、風土記體の地理書に挟まれた山岳の圖などは、必ず傾斜が、實物のそれよ

◎繪畫の題材として山岳の出現 小島

一三六

りも峻急になつてゐる、北齋の富士などは、素より裝飾的、韻律的に描寫されたもので、純粹の、物質寫生の立場から、輪廓を云々するのは、おろかな仕業であるが、あの實際上より五十度も傾斜をより多く峻急にした作者の心には、富士山が噴火したと言つては、禰宜神主の信仰の不足に歸して、時の朝廷から、譴責せられたり、山麓に神座を勸請して、鎮火を祈禱したりした祖先時代からの、自然に對する恐怖心が、美の假面を被つて、潜んでゐなかつたとは言はれまい、「近世畫家」第四卷には、セテヴァや、シャモニイの店先で、旅客に賣りつけてゐるアルプス山針峰ネイグの繪畫を、正しき寫生のそれと比較して、その尖銳の、實際より誇張に過ぎてゐるのを、指摘してゐる（第十四章）が、それ等も人間が自然に恐怖してゐた時代の、偽はらざる感情の反影として、叙情的に觀察すれば、寧ろ後代の畫家の、智識に囚はれて、自己の感覺を、計數の規尺で、修正しやうとする不正直に比べて、正直なる表現と言はねばなるまい。

さうして山の傾斜を、模倣的に、正確に描寫しやうとしてすら、猶且つ實際より、峻急に描寫してしまつた好例は、獨乙の科學者、アレキサンダア、フムボルト（一七六九—一八五九年、この人の傳記は Karl Brunns の *Life of Humboldt* に詳し）が、南米の登山旅行中、アンデス山の、圓錐形の大火山コトバキシ（この山は、略ぼ完全なる圓錐形を成してゐるため、理想的火山などと記載されてゐる、どうかすると、日本の富士山と、その點で、比較のために引合ひに出されることもある）を寫生して、その南北の傾斜の角度を、五十度以上に描いてある、さうしてそれは、爾來この火山を記載する多くの地理書に、盲目的に轉載されてゐたが、後に山岳専門の畫家として、又マツタアホーン征服の登山家として、多高いウイムバアは、親しく同山の南北の傾斜を測つて、三十度以下であることを明言し、それよりも多少峻嶮なる、東西方面の傾斜を度つて見たが、これ又稀に三十二度を超過するのみであると言つて、フムボルトの誤謬を指摘修正してゐる。



(影撮 兵助伊村辻)「……に様ふいさ」跡の人臣」が跡足のげまの時たつ雀に鳥目味」

フムホルドの寫生畫は、その著「Vues dans les Cordilleres」に見え、ウィムパアの記文は、その著「大アンデス山旅行記」第百二十三頁にある。

自然そのまゝの正直なる再現を旨とすべき科學者ですら、然りであるから、畫家などは、猶更さういふ方面に、自然と違つたものを描いたからと言つても、特赦を要求する權利は保留されてゐやう。併しながら人間と自然とは、いつまでも、接近の出来ない平行線ではなかつた、山岳が自然界から、人間に握手を求めめるのに至つたのは、劫初以來、出るべき筈で出なかつたものが、顔を出したのだ、山岳に向つてその一線一劃を握つかまうとする現代の或人々の努力は、今まで遠く離れて見られてゐた殘忍の美、戰慄の美、反抗の美、衰頹の美を、平氣で、寧ろ同化するまでに好んで取り入れやうとしてゐる、これ人類が、自然に對する生活のアドヴェンチュアである、盲目的なる自然の、金剛的大意志が、いかに山岳の一線一劃に、情緒的、癡學的、象徴的に活動してゐるかは、雲の窓まどの中からも霧の群がつかつた小球體の中からも、夕日に搖られたる鎔銅盤の中からも、看取せられて、藝術家の強烈な人格が、この自然の金剛的大意志と默契し、冥約し、合致したときに、山岳といふ大立體に結縁して、いかばかりブリ、アントな作品を出すべきかは、我等の樂しんで將來に、期待するところである。

歐洲アルプス旅行と及其感想

丸 山 晚 霞

私は今日新しい名稱を附せられた、日本アルプスの連峯を展望する高原で、呱呱の聲を擧げた爲か

◎歐洲アルプス旅行と其感想 丸山

一三八

大巒山岳が好きでございます、それ故山岳といふものに趣味深く、又大に研究して見たいと思つてゐます、そこで一昨年ですが、外國の山岳も研究して見たいと思ひまして歐洲に参りました、併し歐羅巴へは先年も参へつてアルプスも旅行致しましたが、當時は普通の旅客が通るところだけで、美しい湖水は渡つたり峡谷をぬけたが、氷や雪に掩はれた山岳は、谷の間から遠くに眺むる位で、眞にアルプスの趣味を味ふ事が出来なかつたのでした、今度は充分にそれを味はうと云ふ考で出かけたのであります。

それから今一つは自分は水彩畫を専門に致して居りますので、十年前の歐洲の美術界と今日では、非常に變つてゐるであらふ、その新らしいものに觸れて見たいといふ、この二つの目的で出かけたのでございます。ところで、ちよつと御斷り申て置きますが、私はどこまでも山的に自分の身體が出来てゐるやうに思ひます、それは頗る無鐵砲主義で何でも自分の思ひ立つたことは、どこまでもやつて見たい、そして其事を必ず實行したいと言ふのが自分の主義であります、今日まで兎に角種々思ひ立つたことを實行して参りました、それ故或眞面目の側からは、非常な危険な仕事ではないかと言ひますけれど、自分は當つて碎けるので危険といふ事を始めに考へない、極端ではあるが充分の用意もしないで、思ひ立てば直ちに實行するといふ頗る性急であります、それが非常に成功する事もあると同時に、非常に失敗することもあります。日本北アルプスの白馬山へ眞夏の候ではあるが、單衣一枚着て登山し、山巔の露宿に凍へた等は失敗の一です。今回の歐羅巴旅行も、其仕方でありました。

それで先づ英國に着きまして、先年参りませんでした蘇國は、英國の瑞西とまでに稱されてゐる美しい山岳地であるとのことでしたから、早速に出發して、蘇國の高峯ベンナピスの聳へてゐる、オートウエリアムからカレドニアアンカナルを航してインパネスに出で、更に北方ハイランドの日本人の未だ曾て足を入れないといふ北の端まで行つたのは七月の中旬で、日の全く暮れない光景にも接し

ました、併しそれはこの席では申上げないとして、蘇國の旅から歸つて來て直ちに瑞西に出發致しました。例の無鐵砲主義ですから、山岳や山岳的繪畫の研究をするといふに於ても、豫め其下調べをするとか、さう云ふやうなことを十分にやつて行くと言ふのが當然の事だらうと思ひましたけれど、何でも打當つて碎けると言ふ主義で、何の用意も無く参りました、併し何んば無鐵砲でもベテカ旅行案内書位の用意はありました。それから今自分のやつた一例を申ますと、歐羅巴の内地に這入りますと、英語が少し話せる位では逆も用事が間に合いません、晝飯時分になると腹が減る、何か食はなければ苦しい、料理屋に這入つてどう言つて注文したら宜からふ、斯う言つて注文をしたら宜からうと云ふ考を有つて居つては、なか／＼食ふことが出來ませんから、いきなり飛込んで、最も宜い場席にうんと腰を下ろして、それから心靜かに食ふことを講ずるのでありますが、どうにか斯うにか腹を充たします、かう言ふことも段々經驗すると、判らないけれども判つた風をして、先づメニューを手にとつてハハーと判つたやうな事を言つて、不得要領に或品物のところを指の先で突くのです、さうすると何か向ふでも食へるやうなものを持つて來ます、けれども曾て食つたことの無いものを持つてくれば馬鹿に怒りつけるのです、江戸辯の卷舌でも構はない、さうすると向ふでは間違つたと思つて外の品物を持つて來る、これだと言ふ風でそれを食ふ。(聽衆笑ふ)

併しこの主義も失敗がある、先年二三の友人と伊太利のミランで、ハナリラといふ高價の葡萄酒を突つき出した事があつた。先づこんな主義で今度のアルプス旅行もやつたのでございます、それから自分は僅に英語で話をするくらゐなこと、ごこの言葉も知らないものであります、知らなくつても私しはやつ、けるのであります、伊太利語でも佛蘭西語でも獨逸語でも、英語の尾を振つたり中をピンと跳ねたりして、それで結構用便が足りたのであります、併し申上る上に於て、佛蘭西語も伊太利語も獨逸語も皆々英語讀みにやつてゐますから、地名等の發音が無論違つて居ると思ひますが、それは

◎歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一四〇

前に申上げた次第でありますから、御聽捨てを願ひます。併ながら幾ら無鐵砲の自分でも向ふまで行つて、どう回らうと云ふ、それ程無鐵砲ではございませぬ。初め地圖を披いて見まして、さうして瑞西の地圖を御覽になりますと、所々に白い所がございませぬ、それは氷や雪を戴いてゐる高い峯であります、其一番白い部分の多い所を一通り回はらふといふ考へで、そこを鉛筆で線を引き、ペデカを讀んで豫めプログラムを作つて出かけたのであります。

それから瑞西の御話の順序として、極手短かに自分の歩いた所を一通り申上げ置きたいと思ひます、瑞西に這入りましたのは七月の中旬過ぎで、巴里の夜汽車で出發いたしました、先づ綺麗な湖水に面したヌシャテルに下車し、三日ばかり逗留して首府ベルンに参りました、こゝには美術館博物館があつて山岳畫や其他アルプスの種々のものが集めてありますから、アルプス研究には是非とも立寄る處であります、その上吾故郷の如くアルプスの諸峯が展望され、景色も勝れて居りますのでこゝに暫く逗留し、それから南に下つてゼネバ湖畔に出でモントリヨに止まり、ゼネバ湖水に注ぐローン河に添ふて、ローン谷のマチニーといふ山村に参りました、そこより別れてモンブラン山を探らうと思ふて、シャモニーに行きました、シャモニーと云ふ所は丁度モンブランが、眼の前にせまつて、その連峯が壯なもので、氷河の幾條は谷の底まで流れ下つてゐる頗る壯觀を呈して居ります、其所に飛込んで行きました自分は、モンブランは矢張り瑞西の山だと思つて、郵便を出すため切手を求めた所が、佛蘭西の切手をくれました、おかしいと思つて幾日も逗留し、歸途税關に捕まつて漸く佛蘭西領だと言ふことを知つたのでした、それから又マチニーに引返へし、ローン谷を湖つてピスプに着き、ツェルマットの谷に這入り、ツェルマットに逗留して、マターホーン、ロザ、ユルナー大氷河を探り、ピスプに戻つてブリークに参りました、こゝはローン谷の突き當つたシムブロン麓で、氷河はこゝより大トネルをぬけて、伊太利瑞西に行くので、自分はこゝより左折したローン谷の極る處まで辿りた

く、ブリックから途中三宿を重ねグレッツチに着きました、こゝがローン谷の極るところで、ローン大氷河が流れ下つてゐます、こゝには一軒のホテルと二三の土人の小舎があるばかりで、路は左右に別れ右嶺を越えてサンコタールの南へ行き、左すれば又嶺を越へてマイリンゲンに通じてゐます、この寒村のホテルに兩三日逗留してマイリンゲンの方へ行く事に致しました、途中ローン大氷河を眼下に見て、嶺を越へ、グリムサル大峽谷の奇勝を探りつゝ、マイリンゲンに出で、こゝに逗留しブリックよりブリンズ湖を渡り、インタールレーケンに着き、こゝを根據地として大きな荷物は宿に預け、ユングフラウ、アイガー、メンヒ、エテルホルンを探るべく、山廻りの汽車や電車でローターブルーネン、アイスメアー、グリーンデルワルドの各所に止まつて山の寫生を毎日やつてゐました、或るときは徒歩してマイリンゲンに行つた事もありました。

かくするうちに九月の中旬頃になりまして、秋風が吹き初めましたから、伊太利の博覽會を見物しやうと思ひ、近頃開通した電車で、チューン湖畔のスピーズからゼネバ湖畔に出づる溪谷は頗る風景に富んでゐるといふ事で、こゝを通過することにした、途中ツワイシムメンといふ山村に下車し、又暫く逗留して、ゼネバ湖畔のモントリヨに出で、湖上の遊覽船でゼネバに着きました、こゝは美しい町で、博物館や美術館を見物し、又新しい畫の展覽會等も開かれてありました、山の中は寒い位でありましたがゼネバに参いますと、それはくゞ苦しい程暑いので、經驗ある伊太利の暑さが偲ばれて、又山に引返へす事に致しました、インタールレーケンが大に氣に入りましたから、又インタールレーケンに引返へし、十月の上旬まで逗留して、それから伊太利に出かけました、博覽會の開催してあつたトリノから各地を回はり、羅馬の世界美術博覽會も見物して、北伊太利に参いましたのは、十一月下旬で、銀屏の如くそゞり立つアルプスの連峯を見ては、冬のアルプスを味ひたく、ミラン市からコモに行き、霜葉麗はしき湖畔に、サイブレス樹の直上して、雪の山を配した眺めは、伊太利瑞西特有の

ユグフラウ



◎ 歐洲アルプス旅行記及其感想

丸山



一四二

景を味ひました、それよりマジヨレ湖ルガノ湖を廻はり、サンゴタールのトンネルをぬけ、十年以前の旅想を偲び、ルセルンに着きました、こゝは先年参りました夏の面影は無く、闇夜の如き濃霧でありました、宿屋は頗る閑で、すゝめらるゝまゝピラタスに登り、リキにも登りました、山の四合目位まで登ると、快晴で瑞西の雲の海を深く味ひました、銀行から金を引き出すため、チューリーヒに参りました、こゝも濃霧で、美しい湖水も味ふ事が出来ませんでした、こゝからマイリンゲンを経てインタールレーケンに出でジュラの雪中登山シーの遊び等をして、クリスマスも経つてから、倫敦に引上げました、これが今回の瑞西旅行であります。

これから其の間に於ける自分の観察したことを正直に申上るのぞ、又自分の感想をちよつと申上げやうと思ひます、そこで私は畫家でありますから科學者が山を見ると違ひまして、岩の質とか又は氷河の成因等いふ事は知りません、併し時々知りたいといふ疑問は起りましたが、あまり調べたくない方で唯自分の感想だけを申上げやうと思つて居ります。

私が端西に這入りましたときは、非常に天氣が續きました、その上頗る暑かつたのです、この年の夏は全世界が暑かつたとの事で倫敦のやうな涼しどころでも、日々日射病で倒れるものが澤山ございました、山岳地方は空氣が綺麗に透明してゐますから、見るものが皆新鮮で判明してゐます、先年端西に這入つたときは、こんな感じでありましたが、今回は天氣の續いたゝめでもありませんか、全體にポーッと薄い霞のやうなものがかゝつて、遠い山のアウトラインは殆んど見へない程でした、ゼネバ湖畔からアルプスの連峯を見渡した時に、初めての印象は實に美しい暖味のある紫色に見えたのであります、この紫の色が忘るゝ事の出来ない深い印象であります、山の紫色は日本の山岳にも見られ、山紫水明と言ふ言葉さへ昔からございますけれど、今迄の畫に紫の山を描いたものを見ません、併し日本でも筑波山の紫の美を小島氏が讚美した事がございました、又自分も筑波山の紫色も眺め、又

山

岳

信州其の他の山岳に於て紫色を味ひましたが、端西の紫色は、日本のものは全然違つた美はしいものです、單に紫と言つても、之を區別すると、青味の強い紫もあり、紅味の勝つた紫もあり、又灰色、が、つたもの、その他種々種類がございますが、青味が、つたものは何となく寒い感を與へますが、紅味の勝つたものは、暖い宜い心持ちを與へます、丁度端西の山の紫色は稍紅味の強い淡くして鮮麗の藤の花に見るやうな紫色でございました、而もこの紫色が山全體に含まれて朝夕は無論の事、眞晝に於ても窺ふことが出来るのです、それはどう言ふ譯かといふと、少しく科學の領分に立入るかは知れませんが、何しろ端西の山岳は、日本の山と違つて、山全體が岩石で出来てゐて、盛夏にも緑を見ない、草木を見るのは殆んど麓といふてもよい氷河や雪に削られた岩壁が、山の面であつて、風雨の爲めに彩色されたものが、既に紫色であります、その上日和續きの深い霞を透して見るから、濃いものは淡く暈けて、一層の美彩を發揮するのであらふと思ひます、日光を正面にして見る山は、無論紫色に見えますが、日光に照らされたものも紫色で、岩壁の面は風雨に彩色されたものに、紫に錆た苔が附着して、テールランドの上は、美はしいグリーンに彩られ、又麓のグリーン等と對照した結果錆色が紫色に見えるのであります、若しカラリストの畫家が、アルプスを描いたら、空は純コバルトを彩し、山は純紫色に、白い雪に氷河の青と、麓の草木の美はしい綠色を塗りつけたら、端西の山の感じは現はるゝであらふと思ひます、これに反して日本の紫には濁があつて、青味が過ぎて居ます、色の上より高尚とは言はれませふが、華麗で無い事は慥かです。それからこの紫色更に美彩を發揮するのは朝夕であります、午前は十時頃まで午後は五時より殆んど紫を以て挿はれ、山高く谷が深いのでありますから、太陽は早く隠れます、一方の山の影が、一方の山へ投影されます、その蔭の麗はしい色は、言葉で以ていふ事が出来ません、綠紫といふ事が若し許されたら、それは綠紫であります、モネーの風景畫に綠點と紫點とを、混和的に塗りつぶしたものを、少し離れて見ると、軟かい暖味の

ある紫色に見えます、丁度こんな色を呈するのであります、而して漸々太陽が沈むと、山上は漸く變化して、山上は黄味を含みし赤色を彩し、麓は濃紫を以て蔽はれ、漸次太陽の沈むにつれて、山上の氷雪も岩石も、黄は薄れゆきて紅となり、紅は微紅となつて、薔薇色に變じます、これは尤も短い時間に現はるゝ美彩ですが、色の上より見たるアルプス特有の美の、尤も優れたるものであります、尙日和積きの稍々霞める夕、日光に面したる山の一角に日の隠れんとするとき、光線は山の空気を染めて、薔薇色を呈することがあります、これもアルプス特有の美で日本の山岳地方では見た事がありません。

山の名稱は、消え残る雪の形が、何々に似たとか、又は雪が漸々消へて、岩石の現はれた形が、何に似て居る等いふ處から、名稱を附されたものは、東西共に同じであります、ユングフラウの乙女も、消へ残つた氷雪の形から來た名稱で、案内者に注意されましても、私し等にはそれかと首肯する事が出来ません。私しはインターレーケンに逗留してゐて、毎夕ユングフラウの美に接しました、而して日が沈んで山嶺に薔薇を呈するとき紫衣を纏ふた山の乙女が、靈酒に微酔して微笑む姿ではあるまいかと思はれた。形態の上からは、アルプスの山は男性的であるが、色の上からは女性的が多いやうに思はれます、山の名稱は東西共に醜名が多い、序に言ふが高山植物の新名稱に、俗的醜名を附したものが多く、科學者が植物や山岳を見るのは、飼犬や猫と思ふて居るらしい。私しは山岳を見るに、岩や石や土の塊として見る事は出来ない、偉大なる威力を備へた麗美の姿として接するのであります、アルプスの麗彩に接したときは、心に何等の慾望も無く、唯々自分が畫家であつた事の幸福に、大々の満足を拂ふたのであります。

次は山岳の形態であります、これも強い印象を受けました、なせかといふと、自分の眼に馴れた日本の山の代表は、小島氏が頻に説かれてゐる富士山であります、あの富士山は恐らく日本の山を代表して居るのであります、峯の形は違つてゐませうが、タイプは大概似て居ります、多くは火山であ

◎歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一四六

りますから麗はしい曲線美を以て裾野を長く引いて居る、アルプスのやうな水成岩で出来た山もあるさうですが、私は未だ見た事も登つたこともありません。日本の山は平地から漸々高くなつて、裾野を経て山頂に達するので、比較的裾野を多く有たない山でも、多くは曲線的に肉があつて軟かい感じを與へる、そのみならず草木は順序整しく、裾野から山頂まで繁茂して、肌や骨の現はれてゐる處は、頗る少い、然るに端西の山はあらん限りの肉は落ちて、残るは逞しい骨のみであるから、山の線は眼を鋭く刺戟する、日本の山の曲線に反した直線で、吾優美に反して壯美であります、それは無論氷河の爲に、軟かい部分を段々削られたからであらふ、吾富士山等は頂上に雪があるが、アルプスの頂上は雪も氷も無い、鋭い角を有つた峯が尖つて、降る雪は山の四方に落ち、それが氷河の源を爲し、丁度小さい川が段々集つて大きな川になるといふ鹽梅に、大きな谷に落ち込んで来て、その谷を深く打缺いて流てゐる、どの山を見ても皆鋭い角を有つてゐる、若し日本の山に比したなら、妙義山か又は信州淺間の舊噴火口壁の牙山を大きくしたのが、端西の山の形であります、尙ほ私の持つて来た繪葉書やアルバムがありますから、それを御覽になつても判ります。モンブラン等は高峯のうちであるが、山頂まで雪があつて、アルプスの山のうちで大きい丈け尖峯ではありませんでした、その連峯等は殆んど劍を植たやうなものばかりで、山のアウトラインが鋭いので、如何にも豪壯な男性的な山です、これ等の山形はどうして出来たのであらふと云ふ疑問が起り、小島氏に質したこともありませんが、何れもこれは概して氷河の作用であると云ふことだけを知つてゐれば、それ以外の事を知る必要は無いと思ひました。

それから氷河であります、これ又強い印象の一つです、山の色も形も多少の相違はあるとして、想像を馳することが出来るが、氷河に至つては想像も及ばぬのであります、先年旅行したとき、氷河を遠望したが、これを踏んだのは今回が初めて、佛國領のシャモニーに行つた時に、初めて見ました、

其氷河は丁度氷河と摺れ／＼の所を、瀛車が走つて行くので、瀛車の窓から見たとき、その壯觀に驚いたのでございます、早速次の日に、例の無鐵砲主義で、案内も何も連れないで、見える所を見當てに段々登つて、モンブランの三合目位まで登りました、尤も旅客が大變に参りますから、完全した道がございまして、その道をグン／＼登りますと、氷河を觀望する所に出ました、そこにはレストラントもあつて、料理も食へるし、ビールも茶も飲む事が出来る、そして旅客を案内して氷河のトンネルに導く、トンネルの中は眞直に開けたのでなく、中は地獄の道のやうに、あちらにも、こちらにも、迂曲した道があつて、案内無しでは、出る事が出来ない、堅い透明した純氷であるから、氷を透す光線は丁度螢の光で物を見るやうで、人の顔も着物も皆コバルトに、エメラルドグリーンを混じたやふな色で、何だか幽靈界、夢の國と言つてはおかしいが、兎に角あの世にでも行つたやうな感に打たれたのであります、(聽衆笑ふ)中に這入つゐると、段々冷たくなつて、僅か十五分か二十分ばかりで、凍るやうに寒くなつて、どう／＼飛び出しました、飛び出て來たところが、何しろ普通の靴を穿いてゐるから、つる／＼／＼でるので頗る危険でありました、穴を出てこんどは大氷河を横切るので、案内者はその靴では不可であるといふのも聞かないで、迂りながら、ぐん／＼行きますと、あとから案内者が來てそこは危いからこちらに行けと云ふ注意を受けました、成るほど氣が付いて見ると、氷河の上の一つの道が付てゐる、其道を辿つて行くと、平なやうに見えましたのが、段々行つて見ると氷河が割れてゐる、割目を覗いて見ると、中は暗綠色をなして、謂はゆる千仞の谷になつてゐる、普通の靴を穿いて行くと、こんな處へ迂り込むから頗る危険であります、迂り／＼案内者に手をひかれて漸く向ふ側に着いた。

氷河を眺め氷河を踏んでこの壯觀に接すると、先づ驚くと同時に、氷河に就ての疑問は起すまいと思ふても起さずにゐられない、早速小島氏に向つて、氷河の成因と、又自分の見た處では大古の遺跡

で、昔から此通りで残つてゐるものではないかと云ふ考へを申上て置きました、その答や其他の自分の觀察で、氷河の成因等も判明いたしました、この話は専門家にゆづる事に致します。形や色の御話をすれば、氷河は空氣か又は風筋か氣候の關係があるか、又は山と山との間に何等かの關係があるか知れませぬが、氷河の形は大體は同じであつても、一定しないものが澤山あります、名は忘れましたがモンブランの氷河の一部に恐ろしいのがあります、例へば滂湍激流と云ほうか大洋の怒濤ともいほうか、氷河の中の氷山で、山のやうな大きな塊りがごつ／＼としてゐる所がありました、それから或ものは丁度豆腐にでもチョイ／＼庖丁を入れたやうな鹽梅に刻んだ割間のあるものもあります、又中には佛掌薯を置き列べたやうな形のものもあります、又或處は大きな割目があつて丁度噴火口の外壁のやうなものや、又は淺間の鬼押出しのやうなもの、又非常に平で殆んど日本アルプスの殘雪の上を歩くといふやうな大氷原もございました、さう云ふ所は、櫓のやうなものを拵へて、客を乗せて其の上をあちらこちらと引き廻はしてゐます、氷河には氷河の上に、又幾筋かの河が出来て水の流れてゐるものもある、氷河の流れ下つた麓の方は、砂や埃に掩はれて汚れてゐるが、上流の方は埃も留めない純水で、何とも形容の出来ない程美はしい、それから初めて接したのか、何だか一種の恐れを懐いて、何ば無鐵砲でも、大に氣遣つて渡るやうなこともありました、又或る處の氷河を渡るときに、その靴ではいけない、此の靴を穿いてお渡りなさいと、案内者が靴を貸してくれました、其借りた靴は五六貫目もあつて私の足が二つも這入るやうなもので、辛ふじて足に着けてそれで渡りました、重くはあるが齒がついてゐるから這らないで渡りましたが、大變草臥れたのであります、それから尙ほ面白かつたのは、ローン谷を遡つて、ロー氷河を見たのですが、そこには氷河に大きな穴があつて、穴の中に大きな瀑布が落ちてゐて、水は氷河の下から滂湍をなして流れ出るのであります、これがローン河の水源であります、その附近には氷河の破片が落ちて來て危いからといふ注意札が建てありまし

た。

先づ大體に於て氷河といふものはこんなものであります、殊にシヤモニーに居た頃はよい月でありましたから、月を配した氷河を見物に出かけました古城や廢址に月がよく適して居りますが、氷河の月は又一種の感に打たれて、迎も日本では味ふ事が出来ないのです。

次は植物の分布をちよつと申上ます、私は植物に興味を以てゐますので、殊に高山植物が大變好きでございます、植物の分布は、日本の山岳では喬木針葉樹灌木、それから草本地衣雪帯といふ如く順序が正しくなつてゐますが、アルプスは前に申上げたやうに、屏風のやうな絶壁を成してゐると又深が深いので、樹木の繁茂してゐる處は頗る少い、谷の底とか又はテーブルランドの上とか、斜面をなした山腹等に、森林や草の繁茂を見るのであるから、日本の如く分布の順序が正しくない、そして岩壁の多い山であるから、植物の種類も吾アルプスのものとは大に相違したものがあつて、喬木ではブナ、シラカバ、トチ、ドロ、ニレ等が日本と同じで、針葉樹ではモミ、エゾマツ、落葉松、等が多く繁茂して一種の松の林も見うけました、彼の地の樹としてはオーク、ビーチ、バーチ、アルダー、ライム、アシ、メイプル、シアモアー、ポプラ、ホーリー等があつて、吾山櫻に似たものも澤山見うけました、それから瑞西は山ばかりで、平地が少いから、僅の平地にも草を作つて、羊や牛を飼ふ有様でありますから、到る處手入がしてあつて、少しの障物も無く、恰も大きな公園のやうな感じが致します、人工を加へない自然のまゝといふやうな處へも参りましたが、歩行に困難するやうな障物は一どつともございませんでした、

日本の登山にはこれに反してクマザサ、ネマガリダケ等の非常の障物を與へる、また山の頂上に近づく頃より「ハヒマツ」等が蔓つてゐて、これも大障物である、アルプスには是等のものが無い、稍障物者とも思はるゝものはアルパインローズと言ふてゐるアルプス特有の石楠である、これは到る處に

◎歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一五〇

繁茂してゐます、花も葉も吾石楠よりは小さく、花は深紅色で吾高原の躑躅を見るやうであります。高山植物は種々の種類に富み、山上の氷河に接近したテールランド等は、七月より八月に至りて、ありとあらゆる花の咲き充ちて、日本のものより美はしいものが深山にあります、山の中腹以上になると植物が群落的に咲てゐるので、紅、黄、白、紫と咲き亂れて、丁度美はしい色を箴めたモザイクと同じやうに見える、それを植物學者に質した所が、生存競争の結果、斯うなつたこの事でございます、日本にも僅にありますが、アルプス程、群落を成して咲てゐるものは他に見ないのであります。植物の種類は頗る澤山のもので、日本にもある種でチヨノスケサウ、コケモ、リンネサウ、キバナノツメ等を見受けましたが、他のものはいづれも日本に無いものでした、丈が短かくて、花大紫色のリンドウや、忘れ勿草の一種に叢をなして、咲てゐる、キング、オフ、ゼ、アルプス等は、青色を流したやうでした、到る處の岩壁に附着して、紅、淡紅、淡紫の菊花の如き花の咲ける、岩爪草ともいふ可き花や、又は乾燥地に群落して咲てゐる淡紫の小花、百千萬と咲き亂れてゐる、ステムレツス、キャチフリー等は、今も印象を残してゐます、これ等を寫生したり押花にもして持つて參りました。山の紫色に感化されたためか、淡紫、紫色、青色の花が多かつた事も記憶してゐる。奇とすべき植物ではアルバインセイホーリー、シルバースター、ステムレツスカルライン、コンモンシクラメン等でありました、何しろアルプスの高山植物は、美しく又名高いものであります。

それから次は湖水であります、日本には山の頂上の舊噴火口に、水が溜つて、湖水が出来てゐる、又山麓や高原にも湖水があるが、瑞西程湖水の多いところは、他にあるまいと思ひます。

雪や氷を戴き、氷河が流れてゐても、山ばかりでは單調であります、然るにアルプスには、所々に湖水があつて單調を破つた上、多大の趣を添へるのであります、その湖水には他に見る事の出來ない特徴があります、それは湖水の水の色です、純コバルト色で、潤澤のあるスカイブリユであります、

ゼチバ、チューン、プリンズ、コモ、マヂョレ、ルガノ等は、皆同じ色で、それは頗る美しい、自分の今迄見た湖水に比類するものが無いアルプス特有のもので、それに反して溪流は鉛色に濁つて、山的美と伴はない、尤も先年の夏通過したサンゴタールの溪流は、透明した美はしい水のやうに覺えてゐますし、又今回の冬通過したときも、綺麗な水が流れてゐました、又ライン河の水源なるコンスタンス湖や、又シヤタル湖等は、青味が少く暗緑に澄明した美しい水でありましたから、瑞西の湖水や河の水色が、皆同じであるといふ事は出来ない、前に申上た濁流では、山紫といふ事は言へても、水明といふ事は言はれない。或學者の説明によると、氷河は絶へず微動して、非常の壓力を以て岩石を削つてゐるので、細かい堅岩の分子が水を濁らし、この汚濁の水は何れも、氷河が水源になつてゐます、この水の湖水に注ぐまでには、荒い分子は途中で沈澱して、極細かい分子の含まれたのが、湖水に注ぐのです、それ故湖水に充たされた水は白色を呈し、それがあまり細かい分子であるから、湖底に沈澱するには、何年と言う時間を要するとの事です、白味を帯びた水が、深い湖水に湛へるので、水に厚味が出来る、そこに光線を透して、綺麗なコバルト色を發するのださうです、それは丁度透明した水であつたら、硝子の切斷面が緑色になる如く、白味を含んだ不透明の水であるから、雪に穴を穿ちて光線を透すと、青の美彩を發揮するのと同理であらふと思ひます、コンスタンス湖とライン河や、ヌシヤタル湖は、水源に氷河を有たぬために、清澄してゐるのであらふと思ひます。そして白濁の水も、ゼネバ町の出口になると、青味こそ含まれてゐるが、綺麗に清澄して、藻の水底に繁茂して、その間に魚が遊んでゐるのも見えます、この水が五六町程流れると、一方のシヤモニーの谷から流れて来る鉛濁の水が合し清濁に分れて暫くの間流れてゐる、このコントラストが面白い研究でした。

それから尙今少し湖水に就て申上て置きたいのは、種々自分の見た澤山の湖水の對照です、北英の湖畔地方で見たものは、稍美しく澄んでゐましたが、蘇國に這入りますと、多くの湖水の水は醬油の

岳

山

◎ 歐洲アルプス旅行記及其感想

丸山



瑞西山樂者

一五二



やうな色を呈してゐるのです、スコットの詩に有名なる『湖上美人』の生れたカトリン湖も、カレドニア運河を通じた湖水の總てが、皆醬油色でありました、又溪流等を見ましても煤色で、自分には不快の感が起りました。エデンバラの植物園長の説明によりますと、あの地方には泥炭が多いので、その關係上色が濁つてゐるとの事でした。英國の風景に湖水や溪流を描たのを見ると、水の色が煤色であつた、それは日本に見るやうな雨後の濁流では無い、自分はこれを疑問にしてゐましたが、實際を見るに首肯さるゝのであります、自分は煤色の湖水や溪流に接して、一種の感に打たれましたが、美等いふ感は少しも起りませんでした。獨逸のベックリンが描いた死の嶋といふ畫を見ました、黄味と紅味を含んだ暗い静止の水の上に、サイプレス樹の茂つた暗い嶋が浮んでゐる畫です、その水は丁度この煤色で、一種引き入れられるやうな印象の強い畫でありました、煤色の水は魔的で神秘的であります。日本の水は清澄してゐるから、湖水も澄で綠色を呈して美しい、スコットをして中禪寺湖畔に住はせたら、どんな名詩が生れたであらふ。日本の湖水にも信州の北部溢嶺から、上州の白根山にかけて、その附近に散在してゐるもので、醬油のやうな水を湛へたものを見たが、それは頗る小さな水溜りに過ぎない。矢張泥炭等の關係で濁つたのであらふと思ふ。序に言ふが白根火口の湖水は青味の強いエメラルドグリーンの水が湛へてあつた。湖水の美は一種崇高の感が起り、慥に人をチャームする力を以てゐる。

以上述べました湖水や溪流で、清瀉の水といふ上に於て、日本が世界一であると言つて誇るに足ると思ひます、謂ゆる日本アルプスを中心として、四方に流れ出づる水程美しいものは、私しの旅行中に他に比類すべきものはありませんでした。

それから自分の定めた事で科學的ではありませんが、適中するのが面白いと思つてゐます、私しは妙な癖があつて、旅行中は到る處で、紀念として石や木の實等拾つて参ります、それを自分の室に飾

◎ 歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一五四

つて眺むると、旅行當時の事が偲ばれて、洵に快を覺えるのであります、而して拾つて來た石や岩片ですが、その石や岩片の形が、拾つて來た山岳や、又はその場所の形によく似て居る事に氣が付きました、これは不思議にもよく似てゐるのです、白馬山頂で拾つたものや、アルプス山中の各所で拾つたものや、その他英國の内地、蘇國の山中、又は海岸等で拾つたものが澤山ありますが、鋭い峯を有つて斷壁のあるアルプスのものは、多くその形をなし、英國内地の大きな波の蜿つてゐるやうな丘から持つて來たものは、角が無く曲線で圓味があつて、丁度その丘の形に似、平な砂濱のものは碁石の如く、岩の海岸のものはその岩に似てゐる、殊にモンブランや、マターホルンで拾つたものは、その山に接した程、よく似てゐるのであります。

次は瑞西の交通機關を申上ります、これは實に驚く程、能く行届いて居ります、ハンニバルやナポレオンがアルプスを越えた記事等を見ますと、洵に恐ろしい山のやうに思はれますが、今日のアルプス漫遊は女でも小供でも出來、モンブランの頂上に登るのは、富士に登るよりも樂に出來ます、瑞西の地圖を開らいて見ても判りますが、有名の上には、その麓まで瀧車や電車が通じ、麓から山上には電車やケーブルカーが通じ、又山を展望するには、到る處のシユラ山に、電車やケーブルカーがあつて、僅の時間で上下されます、又徒歩して登るにしても、完全の道が出來てゐますから、これ又困難を感じないで登る事が出來ます、前に申上げたブリックからローン谷の極る處を経てマイリンゲンに出づる溪谷は、非常に險しいところで、瀧車も電車も無い、かふいうところは馬車で行くのであります。

其の馬車は中々振つたもので、それは郵便馬車である、客本位の郵便馬車で、旅客の便乗を官營にしてゐるのです、ブリックからは午前と午後一日に二回發車するので爰に五臺程並んで出かけるのです、一臺は八人乗りで、馬は五頭で、それを曳くです、五頭曳位でないと登れまいと思ひます、客の乗つてゐる下の所に、僅に郵便物が這入つて居ります、其五頭の馬には、一頭に三四箇の鈴が附着し

てありますから、五臺二十五頭の馬が、坂路をチャラン／＼と静に登つて行く、客は東を眺め西を望み、又は脚下の溪流等を瞰下するので、頗る趣の深い旅行です、途中の小部落では、チャラン／＼の鈴の音を聞いて、棒の先に手紙を附けて、馬車が来るのを待つて、それを差出す、馬丁がそれを受取つて行く、或るときは一束にした手紙を、通りがりの家に投げ込む、馬車の停留するところは、無論郵便局で、郵便局はお茶屋も兼ねてゐて、茶も酒も鬻いでゐる、村の小供等は、エーデルワイスや、その他の野花の花束や、櫻の實等を皿に入れて、持て来て買つてくれと叫ぶ、嶺等の路は迂曲してゐる坂路であるから、馬車が中々手間される、かういふときは、乗客は皆下車して、路傍の花等を摘みながら、近道をぬけて頂に登つて、馬車の来るのを待つてゐる。又あるときは、郵便局の附近に、いろいろの名所があつて、旅客はそれを見物に出かける、奇岩絶壁や、瀑布等を望み、繪葉書等を求めて認めてゐると、そこに馬車がやつて来るといふやうで、観光の客にとりて、瀛車や電車で急行するより、これ程趣味が深いかしれない。

それから目的地の郵便局に、馬車が着くと、宿引きも来てゐるが、局のお役人さまが宿屋まで荷物を運んでくれる、こんなところを見ると、日本の郵便局は、郵便小僧までが、お役人様だといふやうの風であるのは癢に障る、日本の山岳地方も、瀛車や電車は常分出來ないとして、せめては郵便馬車位を設けて、観光客に便を興へてもらいたいと思ひます。其他馬車も通らぬ處は、馬を以て観光客を送迎してゐる。

右に申上たやうに、交通機關が発達してゐるから、従つて宿屋其他の設備も遺憾無く行届いてゐます、宿屋は山麓は無論山の中腹にも、山上にもあつて、これ等は普通の旅客が宿泊するので、探險家の爲めには、山岳會で建てた完全した小舎が、山上の各所に出來てゐる、これのみならず山下でも、人家に離れた處は、所々に小舎が出來て居つて、途中で行き暮れても、露宿はしなくてすむ、定まつ

◎歐洲アルプス旅行及其感想 丸山

一五六

た宿泊料を投ずる箱が備へつけてあるから、朝出發のとき、その箱に料金を投じて出るのであります。瑞西は世界の大避暑地で、又一大公園でありますから、こゝに集る人々は、皆觀光が目的で、旅客のために一切遺憾無きまでに期されてある、其故到る處が俗了されてゐるのでございます、私しがシヤモニーに着いたときは、夜でした、丁度暑いさかりで、殊に暑い年でしたから、海岸に避暑するものまでが這入りこんだので、何れの旅館も満員で、目ざした宿屋は二軒まで斷はられ、漸く一軒の宿に投宿する事が出来ました、夕食後は廊下に出て見ると、空に異様の星が輝いてゐる、町は人を以て充されて居る、音楽は各所で奏される、巴里や倫敦にも見られない程の雑踏を極めてみました、異様の星と見たのは、モンブランや、その他附近の山の頂上に、アーク燈を輝かしたので、何となく厭な感じが起りました、自分の考では、日本の山岳で味ふやうな、一種崇高なる山靈の氣に打たるゝ筈であつたのに、あまりに俗了されて、期待した自分の當ははづれて、遙々瑞西までやつて来て、こんな俗地を見るためではなかつた、明日はこゝを去らふといふ念が起り、頗る失望したのであります。翌朝になつて見ますと、モンブランヤ、その他の氷山が、旭に染つた異觀に接し、日本の山岳と同一の念を以て見る事は出来ない、變つてゐるといふのがアルプスの特調であり、これが又歐羅巴式なんであらふから、アルプス特有の美を探るとして、思ひ直して逗留する事に致しました、ツエルマツトの山村等も、又シヤモニーと同じやうでした、山々に登りますのに、二日もかゝつて登るといふ處が僅二時間半位で登れますから、態々歩いて登るのは馬鹿々しいから自然電車で登るやうになります。私しもあらゆる山嶺を究めたいのでありましたが、これは無鐵砲でも、案内無しでは登れません、案内者に荷負一人を頼んで、三日として、先づ一人前料金が二百フランも要るから、我々は四百フランもあれば十日も二十日も逗留する事が出来ますから、そんな馬鹿氣たことは致しませんで、自分一人で登れるところまで登つて満足したのでございます、書を描くのでモンブランヤ、ユングフラウの頂上

に登つたところで、寒くて仕事が出来ないのであります。

次は瑞西の山の生物類を申上ます、羚羊は澤山居つて、それを方々の料理屋で呉れました。それから熊、鹿、狐、狸等もある、鳥の類では鳥に似た鳥が岩壁に群つてゐました、それは名を聞たところですから知らないのですから、自分は岩鳥といふ名を付けた(聴衆笑ふ)雷鳥も多く、又この種類が澤山にある、鶏や雉子よりも大きい鳥で、ブラツク、グローズといふ黒い鳥がある、尾が短かくて兩方に別れ、外に向つてぐるりと曲つてゐる、その尾を抜いて、アルプス登山者や、テイロールの山民は、帽子の飾りに挿し、麻製の袋を負ふて、アルバインアツキスや金剛杖を持つてゐる。これが徒歩にて登山する旅客であります。ブラツクグローズは非常に鋭い山岳鳥でありまして、何れの山岳會でも、剝製にして飾りものになつてゐました。

それから私は斯う言ふことを感じました、日本の登山者は、兎角歐羅巴アルプス登山者の眞似をしてゐる、私が先年あちらへ參へつて、歸つて參りますと、總て西洋のものがよいやうに思つて、よく外國を振り廻はしましたが、それは薄弱な觀察であつたらうと思ひます、今度參りますと、日本は決して外國に劣つてゐないと思はれます、殊に登山に於ても、歐洲アルプスと日本アルプスを同一視する事が出来無い、彼にありては多年の間研究した結果、齒の着いてゐる靴とか、アルバイン、アツキス、(先に劍の附けてある金剛杖)とか、あ、云ふ袋も帽子に鳥の羽を附けて置くのも宜い、けれども日本の山に登るには、不必要のものばかりで、日本山岳の登山は、草鞋が生命である、又彼の地にあつても草鞋があつたらばと思ふ事が折々あつた、山岳會員の、目下倫敦にゐる武田久吉君も、スノードンに登つたとき、草鞋を偲んだといふて居つた、殊に岩等を登るに、草鞋なれば踏付けた岩の、不安安も感ずるし、一方の手を岩片にかけて登れば容易く登れる、彼等の岩登り等は、洵に不器用のもので、アツキスで足掛りを拵へて、そこに足を引掛けて、又第二の足掛りを拵へるといふ如くにして、鶴嘴

山

岳

のやうなものを突掛けて登る、氷河を上るには、あゝ云ふものが必要と思はれます、日本の山には、草鞋脚絆の身軽で、金剛杖の先に鳶口をつけた位で、澤山であります、私しも記念として求めて参りましたが、あまり必要を認めないやうに思ひます。それから山の人は素朴であります、これは日本の山岳地方の人と變つたところは、ありません、ツワイシムメンに逗留してゐたとき、一日谷川に添ふた道を登つて、一嶺を越し、又溪川について下つて行きますと、大變景色の宜いところに参りました、こんな山奥に参りましたが、皆圍ひがあつて、日本のやうに開放的ではありません、寫生の位置を定むるには、圍の中に這入らなくては工合が悪い、私はその中に這入りこんで、寫生をしてゐますと、直ぐ上の家で、頻りに呼ぶのです、これは叱られるのであらふと思ふたが、何に構ふものかと云ふ氣で描てゐると、又頻りに老婆が呼ぶからそこに出かけて行くと、色々話しかけられるが少しも判らぬ、私は山を描てゐるといふ事を漸く傳へると、それは承知してゐる、今日は非常に暑いから、この日蔭に来て描たらよからうと云ふ事が漸く判つた、そこに引越して描てゐると、大變喜んで、櫻の實やプラムをとつて来て呉れたり、お茶を出してくれたり、様々の待遇をして呉れた、やつてゐるうちに、日が暮れた、これからツワイシムメンまで戻るといふたら、今からは遅いといふことである、そんならお前の家に泊めてくれと言た、無論言葉は分らないから手眞似をしたり、振で話したりして、どう其交渉が巧く整つて、その家に泊ることになつた、

そのうちに主人は歸へつて来て、大變な優待で、自家製造の臭氣ある葡萄酒も、臭い肉も、黒パンも、我慢して飲んだり、食つたりして、この家の客人となつて三日間逗留しました、近所の人々とも大分懇親になつた、別れるとき、手當を置いた所が、それは多過ぎる、少しでよいといふのであつた、主人は嶺の下まで送つてくれ、今日でも文通してゐます、又植物が好きだから、珍らしい花を送つてくれと頼んで置たら、珍らしくも無い花まで、小包郵便で、今も送つてくれます、飛驒や信州の山の中

の人と、少しも異らないのです。

それから瑞西では、牛や羊の頸に鈴を付けて置きます、涼しい森の蔭で、チリン／＼と鈴が鳴るその鈴には大小があつて遠く近く聞へるので其チリン／＼に抑揚があつて、音楽的で單調でない、この鈴の音は朝寝てゐるうちから聞へる、晝は木蔭から聞へる、夕方になるとあつちからもこつちからも聞へるので、洵にゆかしい音である、私はこれを瑞西特有の音楽として、深く味はつた、巴里や倫敦で聞く、猛獸の叫ぶやうな音楽を聞くよりも、瑞西の鈴の音楽は如何に詩的に、聞き得たであらふ、今でも眼を閉つると、チリン／＼といふ音が聞えるやうに思ひます、何故牛羊の頸に、鈴が着いてゐるといふと、彼の地は大變に霧が多い所で、牧場は平原地と違つて、谷や岩や山の斜面等で、そこにある牛羊の所在を知るために、鈴を着けて置くとの事であり、又牛羊を集めるに、ラツバを吹くところもあります、それから又頗る大きなラツバがありまして、非常の事を隣村に知らするために、吹くのださうですが、今は土人の物貰ひが、トンネルの入口等にゐて、それを吹奏し、旅客から一文二文の錢を與へられてゐます。その音響は、大したもの、山から谷に傳はつて、遠方まで音を傳へるのであります。日本の山伏や、行者などが、登山のとき、チリン／＼と鈴を腰に付けたり、法螺貝を吹くのは、畢竟するに魔除けにもなるであらふが、霧の深い時分に、仲間のものに所在を知らせる目的である、日本アルプスに牛羊を飼育したら、矢張鈴が自然に附けらるゝであらふ、と思はれます。

山中は文明に遅れて、古代の風が残つてゐる、瑞西の山村では、婦女子は白い上衣の上に、更に黒いチョッキのやうなものを着け、それに銀の飾を施してゐる、これは他に見られぬ瑞西古代からの風俗である。飛驒の白川は、平家の落人であるとの事で、今でも老若婦女子は、黒の裾散しの模様をつけた着物を着けて、畑や野に出て、働いてゐます、これ等も東西山岳地は同じであります。

険しい山岳と氷雪の中に育つた人間は、自然の感化をうけて、豪壯な強い人間が出来る、斯う云ふこ

◎歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一六〇

とは歴史を讀んだ人は、私が申上るまでも無く、御承知でありませう、木曾の谷からは義仲が出でたも偶然ではない、山や清水の麗はしい色彩や、高山植物の美くしい感化か、瑞西の人間は強い處にも又優しいところがあつて、山民は先天的一般に小細工が發達してゐる、冬の仕事としては木細工をして、夏になると、來遊客に驚ぐ、又時計とか鎖その他金屬の小細工も、發達してゐます、信州や飛驒の山中から、木匠の出るのも、又偶然ではありません。

まあ大體に於て、私の觀察しましたのは、かう云ふ次第でございます。それからあちらの山岳會のことを、聊か申上て置きます、前に申上て置きました伊太利の、トリノ市の、世界博覽會を見物に参りますと、伊太利山岳會の設計したアルプス村が、場内の森林の中に出てゐました、これは可なり大きい規模で、家の數が十棟程あつて、外觀はアルプス山中で見ると、少しも違ひがありません、内部はアルプス山中の草木岩石から、山岳圖地質圖より、動物に至るまで、陳列し、又山上の小舎の模型や、登山用具から、産物の品々及び木彫、その他金屬の細工もの等を陳列して、これを齎いでゐる處もあつた、或る室には歐洲山岳畫家の出品した油繪水彩畫の展覽會も開催されてありました、尙又各地の山岳會より、出陳した寫眞や地質圖も掲げられ、寫眞は厚いガラスに大きく轉寫したものが窓ガラスに使用されてありました、それを一々見て行くと、ヒマラヤ大山岳もあれば、アンデス山もあり、ロッキーマウンテンや、アラスカ邊の氷山もありました。生物や紀念物を齎ぐもの、又はカフェー店の女や番人は、何れも瑞西の風俗でありましたから、この區域は瑞西の山中と少しも變りはない、山岳趣味を普及するには頗る、面白い事と思ふた、日本の山岳會も、博覽會でもあつたら、日本アルプス村でも場内に設計したいものである。蘇國のグラスゴーに行つたとき、丁度蘇國博覽會があつて、この山岳會でも、ハイランド村を場中に設計してあつた。近來博覽會は到る處に開かれてあつて、大概同じやうなものであるが、瑞西村やハイランド部落等は自分は頗る興味を以て見物し、又得る處も

多かつた。

トリノ市には、別に伊太利山岳會の事務所が、アルプスの連峯を展望する高丘にあつて、そこに附屬したアルプス博物館や、研究所がある、尙事務室、會議室、圖書室、展望臺等もあつて、室には會長の肖像や登山の爲、死んだ人の肖像、その他山岳畫等が掲げてある、又各國の山岳寫眞を、眼鏡で大きく見る設備もしてありました、植物の標本として、植物生態をそのまゝ、ガラスの箱に入れてありました、その製法は植物の花の咲いてゐるものを、そのまゝ箱の中に植ゑ、そこへ砂を充たして、そのまゝ乾かすとの事であり、研究室には地質圖や模型等が澤山あり、展望臺では、茶菓を供し、紀念繪葉書やアルバムを販賣してゐました、これ等の設備は無論寄附金等で、出來たであらうが、維持費としては、山岳會に附屬した博物館の入場料をあつるとの事である。

それから英國の山岳會にも參りました、そこには事務室、會議室、圖書室、展覽會場があつて、圖書室には高頭さんの著はした、「日本山岳志」が麗々しく飾つてありました、こゝにも、山岳の畫や寫眞又は山岳研究者の肖像も掲げてあり、地圖地質圖もありました、展覽會場では、時々山岳畫の展覽會が開催さるゝのであります、展覽會には、屢々行つて見ました、山岳畫家は、少いと思ふてゐましたが、中々多いのに驚きました、瑞西のルセルンの山岳會でも、附屬として、博物館を設け、アルプスに關係したものが、澤山陳列してありました。

それから私は私の希望ですが、動々もすると日本の仕事は、金が無いと云ふ事が先に立ちますが、吾山岳會でも、山登りや雜誌發行以外に、規模は大きくなくともよいから、外國の山岳會のやうに、何れかへ事務所を拵へ、事務室、會議室、圖書室を設け、それに附屬して、山岳博物館を拵へたい、この費用は寄附金を集め、維持は博物館の入場料を以てしたら、繼續すること、思ひます、尙これに附屬して、展覽會場も設け、時々山岳畫及び山岳に關係したものゝ、展覽會でも開催し、この支部は

◎歐洲アルプス旅行記及其感想 丸山

一六二

各地に置き、信州や飛騨等の山地には、支部の事業として、高山植物園でもこしらへたいものである、而して明年は大正博覽會が、上野公園で開催さるゝさうであるから、場内の一部に、日本アルプス村でも設計し、内部は山岳に關するものを、陳列して見せるやうにして、貰ひたいといふのが、私の希望として申上げて置きます。

それからこれも多少山岳に關係がございまして申上げて置きます、それは高山植物園です、瑞西の各所で見ましたり、英國のキュー植物園内にもあり、又蘇國のエヂンバラにもあります、エヂンバラの高山植物園の園長さんに、伊藤篤太郎さんの紹介状を持つて参りましたから、親しく見せて貰ひ尙逗留して奇花珍花の寫生等もやりました、この植物園の變つてゐるのは、時々人工の霧を拵へるのです、私のために園内一面を霧にして見せてくれました、高山植物園として、私の見たのではこゝが一番大仕掛で發達してゐると思ふた、植物は全世界の高山のものが集まつてゐました。高山植物園は氣候に伴はなくてはならぬ、東京のやうな夏暑いところでは、絶対に不可能であります。日光の大學の高山植物園も見ましたが、洵に問題にならない、小さなもので、又氣候が伴はぬ、信州の上高地か又は戸隠邊が、尤も好適の地と思はれます。

歐洲のアルプスでは、高山植物の花を、旅人の採集するまゝにまかせてゐますが、有名なるエーデルワイスは、始んど採集し盡した程で、今日では旅人の眼に觸れませんのです、山岳會の人々がこれが保護の道を講じ、今では或る區域を限りて栽培してゐるとの事です、日本には妙な迷信があつて、コマクサを靈藥と稱して、御岳や乗鞍白馬等のものは、殆んど採り盡されたので、今は各方面に採集に出かけ、數年を出でずして、絶無になるのであらふ、そして駒草は彼の地には、無いやうで、又各所の高山植物園でも見ません、私の見たところでは、或は日本特有のものにも思はれます、さればこの貴重なる植物を、今のうちに保護法を講じなければ、なるまいと思ひます、御岳でも乗鞍もで、或

る場所を限りて、栽培するのである、これ等も山岳會が、その筋へ提案すべき問題であらうと思ひます。

これから、自分の藝術上の事を少しく申し上げたいと思ひます、自分の研究してゐる水彩畫は、日本の謂はゆる西洋畫であります、西洋畫は彼の地から這入つたもので、しかも今は過渡期でありますから、裸體畫や風俗畫が多く、風景と云へば、近頃少しは山岳も題材になるが、多くは平地か、又は高原の道路山水的のものである、日本のやうな山岳地にありては、これから風景畫が發達するであらふと思はれます、支那の畫風が日本に這入つて、山水畫といふものが頗る發達した、今や日本は藝術の上に於て、西洋の酒に酔ふ時代ではあるまいと思ふ、西洋畫の一も寫生二も寫生で、自然を寫生するのは一つの研究で、畫としての製作では無い、古人の描かれた南畫や北畫の、寫實を離れたものに、自分の崇高する一とつゝの力を認め、他人は兎も角、自分だけはこの美はしい境土にそゝり立つ日本アルプスといふ麗姿を、更に深く研究して見たいと思ひ、それに就き歐洲の畫家は、山岳に對して如何なる注意を拂ふてゐるか、又山岳をどう云ふ風に描き表はしてゐるか、實際の山岳と對照して觀察して見たいと云ふのが、今度の旅行の目的でありました。

それで到る處の美術館や、新古美術展覽會に這入つて、山岳畫を見、山岳を旅行して、實際に接し、自分もスケッチの上に、種々の試をいたしました、而して彼の地では山岳畫といふものは、頗る近代の發達で、ターナーが最初の試といふてもよい、その以前にも多少描いたものがありますが、大したものではない、人物や宗教畫の背景等にも、描かれたものがある位でした、近來は山岳畫家が多くなつて、アルプス山中に畫室を設けて、研究してゐるものもあり、又は遠くカシミア邊に出かけるものもある、各所の山岳畫展覽會は、頗る盛況を極めてゐる、その畫に就て、一々觀察致しますと、寫實的に描かれたものが、大部を占め、甚だしいものは原色寫眞を見るやうなものさへあつた、技巧の上か

らは、よくもかくまでに、寫生されたものだと思はるゝが、山岳の精を描たものが少い、これ等の試をやつたものもあるが、自分には満足が出来なかつた、例へばアルプスの神靈と題するものは、山に湖水を配した月夜で、湖畔の岩上に十字架が建つて、その側に羊の群が居る、耶穌敎國の人間は、神聖と言へば、十字架以外に無いと心得てゐる、これでは十字架が主になつてアルプスは副である、名義を出されたアルプスは馬鹿を見るのだ、又山の方と題するもので、人間が山の頂上で、相撲を取つてゐる、これも山の方で無くて、人間の方である、其他氷河の月、輝き、等いふものが澤山あつて、主材を山に取つた種々の試が施されてあつたが、一も自分の意に満足が出来なかつた。

併ながら其中で稍々首肯の出来るものがあつた、それは新しい派に屬するもので、感じた印象が多少現はれて居つた、印象と言つても、色の美の印象で無くて、感じた印象である、東洋の古いところの山水畫に見るやうな感じでありました。近來は又尤も新しいものとして、伊太利の未來派といふものが出来ました、これも極端の印象派に過ぎない、この印象派の根源は、東洋の美術に違ひ無い、東洋の美術が西漸して、印象派といふ名を附されて現はれたものである、十八九世紀の寫實が、極端になつた反動もあらふし、又新時代の要求でもあらふが、この新しい派は殆んど歐米を風靡し、英國のやうな保守主義のところでも、アガデミーの古い描法は一掃されたかの感が起りました。日本等でも今日は新派として描かれてゐる、その畫を見た自分の感は、印象を現はすといふ上に於て、何も彼等の描く如く、油繪具を使用しなくも宜いと思ふ、在來の日本彩畫で充分間に合ふと思ひました。

繪畫を描く手段として自然を研究し、自然に就て學ばねばならぬといふことは、言ふまでもない、併し寫實は繪畫の目的では無い、自然の感じが一度人間の頭を透して、生れたものが、繪畫である、山岳に惹き入れらるゝやうな感じは、形や色の實寫以外に、現はるゝものと思ひます。

新らしい派の這入つて來た影響でもあらうが、近來自然描寫の上に於て、自然の示してゐる色を無

視して、畫家の頭で種々の色を工風して、塗りつける、そして色といふものは、赤黄青綠紫以外に、無いやうに心得てゐるものがある、これは頗る間違つてゐる。甚だしきに至つては、日本には色が無いとさへ言ふてゐるものがある、色は前に述べた色に限られてはゐない、殊に日本には、歐洲や南洋に見るやうな。艶麗の色は無い、何れも澁味のある、高尚の色で、華麗といふ立場からは日本の色は見出す事は出来まいと思ふ、高尚にして澁味ある色を充たされた日本の自然は、南畫北畫の水墨がよく適し、水墨のものにも感じは迸發してゐる、そして又藝術に貴む品位も備はつてゐる。

それで自分はこれからどう云ふ畫を描くかは、自分ながら一の疑問であります、絶對の寫實には満足が出来ません、山岳の偉大なる力と云ふことを、充分に研究し、充分に悟覺した曉には、自分の希望する繪畫が描けるかと思ふてゐます、それまでは、自然に師事しやうと思ふてゐるのであります。こゝに妙なものを御覽に入れます（彫刻物を示し）是は大變に恐れ多いことでございますが、先帝陛下の衣冠束帶の御影像を拜し奉つて乗鞍の山に籠つてゐる、板殿にいふ仙人が、沐浴齋戒して、彫刻いたしました御像でございます、ほんの一刀刻ではあります、この直線的大體の形が、侵すこととの出来ない崇高の趣が現はれて居ります、自分の今希望してゐるのも、實寫を離れたこの彫像のやうに、現はしたいと思ふてゐます、無邪氣にして信仰の高い板殿行者が、鉞をふり上げた心持ちで、私もブラシを握らふと希望して居ります。まだ種々の事を申上げたいのであります、大分時間も過ぎましたから、是で失禮いたします。（拍手）（五月二十五日日本山岳會第六回大會講演）

雜

錄

山

岳

鳳凰山塊に就て

私は昨年七月高頭氏の驥尾に附して白峯に登山を試みた、私の豫定はそれから荒川岳と蝙蝠岳に登り猶ほ笹ヶ岳をも窮める積りであつたが、不良の天候の爲め荒川以下は全く放棄することゝなつた、二十二日野呂川の廣河原で高頭氏に御別れしてから、せめては鳳凰山塊でゆつくり遊んで歸らふと思つて居た處、天候は何處までも崇つて其日も翌日も雨で遂に鳳凰登りも斷念するの止むなきに至つた、其様な譯で之と云ふ新しい材料を得ることは出来なかつたが、白峯から見た山塊の南面や、蘆安で一寸見聞したことや以前の『山岳』に記したことの訂正やらを少し許り書きたいと思ふ。

天狗岳　ゴロ澤頭は蘆安の方では矢張り天狗岳と呼ぶらしい、蘆安の湯場で古繪圖（野尻氏の記された鹽七俵を撒いて造つた云ふものであらう、尤も私の見たのは原圖ではあるまい）を見た處、此峯を高根天狗岳と書いてあつた（天狗岳と大きく書いて其右上に高根と小さく書いてあつた）、それは高根天狗岳と續けて一つの山名を成して居るのか、或は高根一名天狗岳と云ふ意味であるのか、一寸分り兼ねるが、名取連一氏は此峯の名を高根と私に教えられ、又た前年第二回の登山を、行つた時、山上で逢つた蘆安の案内はテンゴウ山と云つて居た、此テンゴウは多分天狗のことだと思はれる、斯様に人々に依つて高根と天狗とを別別に云ふ處を見ると高根と天狗とは續けて一山名をなすものでないらしく、此峯に高根或は天狗

岳と云ふ名があるのらしい。

『山岳』第七年第一號一七頁に天狗と云ふ名に疑問を生じたから暫く預かることゝして置いたが、蘆安では此名があるから、之は復活することにする、但し天狗山でなく天狗岳が古繪圖にもあるし、地藏、觀音、藥師等の岳に對して釣合がとれて宜しからう、且又山頂には偃松と岩石が多く針葉樹が繁つてゐると云ふ譯でないから、岳の資格は充分ある。

一體此峯は其地質が變つてゐるやうに、鳳凰山塊中で繼子扱ひを受けてゐて、蘆安では鳳凰山を本社と云つて尊敬してゐるが、此峯などは餘り名も聞えて居らず又た登るものもないらしい、外の峯が地藏とか觀音とか優しい名をつけられてゐるのに、天狗と云ふ恐しい名で敬遠されてゐる次第である。

今度白峯から見た處に依ると此峯は正しく野呂川のゴロ澤の頭に當つて居るから、ゴロ澤頭と云ふ名は動きがない、殊に柳澤方面では此名でなければ全く通らぬ、天狗岳以上に確實な此峯の

名稱は矢張りゴロ澤頭であらう。

アカヌケ澤の頭 地藏岳から山脈が西北に連つて鳳凰山が北方に岐れる三叉點の處に花崗岩の眞白に露れた頂上の長い峯がある、北の方から見ると餘り振はない形をして居るが、南の方から見ると地藏岳の様に白い美しい峯である、澤の方から云ふと丁度地藏岳と天狗岳との間に深く刻み入つたアカヌケ澤の源に當つてゐる、敢て新名を捏造することは必ずしも必要ではないが、此山塊の山脈の分れ方から云つて重要な位置にある峯であるから將來アカヌケ澤の頭と云ふ名で之を呼びたいと思ふ。白峯の農鳥山邊から眺めると鳳凰山は此峯と重り合つて地藏佛の大岩は恰かも此峯の上に立つてゐるやうに見える。

アカヌケ澤の野呂川に注ぐ處は天狗岳方面から崩れたものと思はれる古生層の岩石がゴロくしてゐるアカヌケ澤は恐く赤拔澤であらう。

觀音及藥師岳に就き 此二岳は私には今に確と分らない、是迄の登山は何日も臺ヶ原又は柳澤から出發したので、此地方の人夫は地藏以南に就て

は全く智識を以てゐなかつた爲め此二岳をどれと定めることが出来なかつた、鶴殿氏が『山岳』第七年第一號三〇頁に此岳等に就て書かれたことは大に有益な御報告として感謝する次第で、山名の順序からも又た『ハンドブック、フォア、ジャパン』の記事から云つても恐く同氏の説は正しいものであらうと思はれるがスケッチか寫眞で示されたのではない爲め、同氏の観音岳と私の思てゐる同岳とが果して一致してゐるのか、どうか一寸分らぬのは甚だ残念である、同じ『山岳』に登つた私の寫眞（仙丈岳より望める鳳凰山塊）が鮮明で山頂が分明したら諸君の御示教を願ふにも大に好都合であつたのであるが、原板が拙作の爲めでもあるが、肝心の山頂が丸で潰れてしまつたので致し方がない、尤も観音、薬師など物々しい名はついてゐても此附邊にある三つ許りの岩塊の内のどれかの名であるに違ひはない、特立した岳々の名稱が分明せぬやうな場合は甚だ異つてゐる。

鶴殿氏は地藏岳と云ふ總括的名稱を置いて薬師観音等を其各角の名とするがよいと云はたが、こ

れは私はどうも同意し兼ねる、果して總括的名が必要ならば鳳凰山と云ふ名が最も適當であるまいか、而して地藏、観音、薬師等の佛名を其各角の名稱して今の狹義の鳳凰山を大日岳とでもするが宜しい。『甲斐國志』にも鳳凰山を廣義に用ゐた記事が處々にある。

観音、薬師が合點が行く爲めには私は蘆安の案内を伴つて登山を試みねばならぬ。

山塊南面の澤に就き 前々號『山岳』に挿入された高頭氏の『白峯山脈臆測圖』中、鳳凰山塊の南面の澤の位置には大分間違がある、尤も同號（六一頁）に高頭氏の訂正も載つてゐるが、私も其校正に與たので無責任と云ふ譯に行かぬから同じやうなことを一寸記す、實は校正の時、已に誤謬を認めて居つたのであるが印刷の時日が迫つた爲めなどで、止むを得ず其儘に過した譯である。誤謬と認められたるのは大體次の如くである。

ゴロ澤 天狗岳（ゴロ澤頭）の南方より發すること。

アカヌケ澤 地藏、天狗二岳間に深く入り込む

こと。

シロ井澤（シレイ澤）地蔵と観音、薬師等との中間より發すること（シロ井或はシレイは勿論白の意味で花崗の澤に相應しい名である）

本圖のゴロ澤以下深澤（小澤）まで何れも其位置を今少し下流（野呂川に就て云ふ）に移さねばならぬ、而して此内鳳凰山塊（南御室を其東南限として）に關係のあるのはゴロ澤以下カスケ澤位迄で其他は蘆倉山の方から發するものである猶ほ一言記して置くべきことは澤の方向で、ゴロ、アカスケ、シレイ等は幾分か南方に、カスケ以下は餘程西向に流れるものらしく見受けられた。

廣河原より南御室への徑路 野呂川の廣河原から鳳凰山塊に登るには廣河原峠へ登つて尾根傳ひに天狗岳を経て鳳凰、地蔵に行くことも出来るが、さもない場合には一旦南御室に出るのが宜しい、此廣河原から南御室に登る徑路はシレイ澤から切れ込むのであつて距離も甚だ近いらしく思はれるのであるが未だ記録が無いから詳しいことは分らない、鶴殿氏の紀行に南御室から地蔵平を経て野

呂川に下ることが出来ること記されてあつたのは此徑路であらう、但し此平はタヒラであらうか、どうも地蔵の南面に平地があるやうに思はれない。

南御室から下る方は容易であるかも知れぬが、野呂川の方から登るのは切れ込む處を知らないこと恐らく面倒であらう、前年高頭、小島兩氏が白峯から鳳凰山塊へと登山を試みられた時には一旦杖立近くの別れ路まで戻つてそれから南御室へ出られたい、之は鳳凰山の案内を知らぬ湯島の入夫を伴はれたから致方のないものであるが、非常なる迂路であることは御話にならない、私も昨年は矢張り湯島の入夫を伴れたのと、天氣の悪かつた關係等から五葉根の小屋（屋根ある許りで全く荒廢して居つた）に泊つて翌日登山する豫定としたのであるが、シレイ澤から五葉根まで五時間餘りを費して非常に遠いと思つた、若しシレイ澤から直接南御室に登るとしたら恐く此迂回路に費す時間の三分一位で到着することが出来相に思はれる。

山頂の眺望に就き 『山岳』第二年第三號『鳳凰山第二回登山記』中に赤石山が見えるやうに書

◎雜 錄 鋸岳白崩岳及び其他の二三ヶ條

いたのは此方面の山岳の智識が頗る乏しかつた時代の爲めの誤りで鶴殿氏の注意された如く惡澤岳であつたのである、而して此山が鳳凰山から見えどしたのには記憶の間違で地藏以南からで無くば見えぬことと思ふ、猶ほ惡澤の右には魚無、西河内の岳も見える、又た中村清太郎氏に據ると筑ヶ岳及七面山の見えることも確かである。

登路に就き 鳳凰山塊の高さは駒ヶ岳（甲州）に百メートル餘り譲ることになつてゐるが、其登山は駒ヶ岳の比較的容易なのに比べると却て時日を要することが多い、勿論山上は峻しい處もなく歩行は樂な山であるが何分寄り付くのに面倒がある、本會々員の中で此に登らるゝ人の甚だ少ないのは此等が恐らく一原因であらう、蘆安から登るときは鳳凰山までの日歸りは困難で、しかも山中小屋の都合が悪い（大木場、切明等の小屋の有無は一定と云ひ難い）且つ蘆安まで入り込むことは白峯登山を行ふ序と云ふやうな場合の外は已に甚だ不便である、又た青木湯から登るときは日歸りは兎に角樂であるが此湯まで入り込むのが是又一

一七〇

日仕事で、しかも湯宿は餘り快愉な方でない、然らば鳳凰山塊に登るに何處が都合好いかと云ふに先づ柳澤（駒城村）であらう、昔しは此處からの登山者は少なからずあつたものらしいが今は登路は荒廢し小屋もないから現在のまゝでは登山は頗る困難である、それで私は柳澤の人々に依つて此舊路が開かれ北御室のあたりに粗なものでも良いから小屋が建てられんことを切望する、此登路には精進瀑と云ふ立派な景物があるから相應に登山者を引き付けることが出来るであらうと思ふ。（辻本）

鋸岳白崩岳及び其他の二三ヶ條

私は前號の雜錄、「鋸岳と釜無山脈」の條で鋸岳の最高點を、粘板岩より成るやうに記載したが、その後採集品を整理するに當つて、鋸岳の最北私の所謂編笠山から齎らした岩片と、それから同岳の最高點で採取した岩塊とを、或専門家に見せて檢定を依頼したが、それは兩方とも、硬砂岩であつたから、鋸岳頂上の殆んど全部は、硬砂岩から

成り立つものと見て、差支へなからうと信ずる、私の瞥見した限りでは、別種の岩石を見なかつたからである。

但し粘板岩は、駒ヶ岳の信州方面、所謂白崩^{しろくずれ}状態をなせる崩壊地より、遙かに下つて、黒川の谷に近づいて来る頃には、盛んに露出してゐて、溪澗附近で、採集した水成岩は、砂岩に交つて、多くは粘板岩であつたから、粘板岩の露出も、この附近に可なり多いことは事實である。

白崩岳の霏爛した地貌は、甲斐駒信州側の一特色であるが、この霏爛地の花崗岩塊は、美しく赤色に染まつてゐる、火成水成兩岩が、交互接觸して、岩石の變色する例は、多いことであるが、この花崗岩の赤色は、鋸岳不動山一帯の水成岩と接觸したためでなくて、花崗岩それ自らに、含める鐵分の酸化したものと見るのを、妥當な解釋としたい、岩石は腐蝕の際に於てすら、更に美しく別種の色調を呈することは、この邊の花崗岩に於ても認められる、もし實用の目的に限られて言へば、赤く酸化した花崗岩などは、崩壊墜落の前

兆を表示してゐるので、建築用材などには、大禁物であるが、自然といふ大作者の手に成れる山岳は、その崩壊墜落の前に於てすら、寧ろ山の一特色として、その點を以て生存の權利を要求し得られるほど、力強いものになつてゐる。

甲斐駒の「花崗岩の性質は、標品が手許にないので、何とも言はれぬ」と前號に述べて置いたが、これも私が、頂上と信州側とで、採集した二個の岩片に依つて、檢定してもらつたところに依ると、やはり黒雲母花崗岩で、甲州金峰山や、木曾駒ヶ岳の大部分を占めてゐる岩質と、同種のものであつた、たゞ山の花崗岩全體がさうであるや否やは私の知らぬところである。

同じく前號所載、拙文「山岳崇拜論」に挿入したシナイ山頂の寫眞に關聯して、基督があつた山で説教したやうに書いたのは、誤りで、基督の説教された山は、全然別な低い岡であると言つて、會員別所梅之助氏から、それ等の地點に對して、種々参考となるべき事實と共に、御注意があつたから、あれは取消すことにする。

參謀本部陸地測量部から、最近に出版せられた五萬分一圖、市野瀨圖幅に依ると、鋸岳最北の、私の所謂編笠山に當る峰の標高は、二、六〇六米突餘であるから、それが正しいとすると、鋸岳全體は、私の臆測二、七〇米突よりは、一體に少しく低いことになるわけである、又案内者の言つた「雁木峠」は、「同圖には横岳峠の名で、黒川の谷(戸臺川)から、釜無川の本谷へと、通路の點線が附せられてある、拙文「落合から中の川」に入りて、雁木の窪みの下まで」とあるのは「釜無川へ入つて云々」の誤謬で、これなどは大なる過失である。(小島)

鋸岳附近の甲信境

本誌の第七年一二一頁で自分等は甲信の境が釜無川と中ノ川との間の尾根について居るもの、様に書いたが、今度陸地測量部から出た五萬分一地形圖によると、左様ではなくてどこまでも釜無川の本谷に沿ふて進んで、遂に鋸岳から佛平峠の方へ引いた脈にまで上つて、それによつて鋸岳の一

峯(三角標のある峯)に至つて、あとは自分等が前に書いた様に進んで行くもの、様である、國境と云ふものには何も地形上の約束がやかましくあるわけではない上、斯く區分しても少しも天然的地形にそむいて居ると云た次第ではないのであるから、茲に謹んで前に自分等が書いた説を取り消して當然該地圖の示すが如きものに賛成する事とする、權威のある地圖が漸々完成して來て、疑はしい事が追々はつきりして來るのは甚だ喜ばしいこと、思ふ。

處でその三角標のある一峯は如何なる名を以て呼ばれて居るのであらうか、小島鳥水氏はこれを本誌第七年一三七頁の辻本氏の記載に基づいて編笠山であると認定されたが、土地の者にその名をたゞされたわけではない様である、自分等は山梨縣廳の山林圖をあまり詳しく見なかつたから分らぬが、前號(第八年一三三頁)に小島氏が梅澤の説として、編笠山は釜無山脈を外れて居るものらしいと書かれたその説は、ほんの自分等の想像説ではあるが辻本満丸兄に嘗てこの考へを申し上げた

處、たしか賛意を表された様に記憶して居るので、山林圖にある編笠山の位置は少々明確でないのではあるまいかと思はれるのである、然し地圖によると三角標のある峯の北に尙二五二米と標された一峯頭があるらしい、而して下から見た編笠山とおぼしき峯の大きさや高さを考へればやはり恐らくその二五二米とある峯が、その位置形状から推して編笠山に該當するものらしく思はれる、辻本兄も八丁尾根方面からのスケッチまでを添へて自分等に編笠山が二五二米の峯なるべしと考へられる旨を示教された、左すれば編笠山は釜無山脈の鋸岳から分れる主點に當る峯ではなく、傍係のものだと云ふ事になる、前號の記文に對する責任を明かにしたいと思つて、以上の言を述べるわけである、而して編笠山の名はどこで使はれて居るのかば知らない旨をも書き添へておく。

偕陸地測量部の地圖にはこの鋸岳の處に鋸山との名が書いてある、これは輯製二十萬の地圖に、これより西北によつた信州分の處に書いてある名で、その時に誤りであらうと思つて居たが、今

度の本製版になつた地圖にも鋸山と書いてあるのを見ると、間違ひの名とは思はれない、然し此の山に其の名があるであらうか、此の邊では岳と山とを嚴密など、云ふほどやかましくはないが、ちやんと區別して呼んで居る様であつて、此の山は鋸岳と呼んで居る様である、これは甲州の方にも信州の方面でも通用する名であつて、どうも鋸山とは云はぬ様である、地名は一寸の呼び違へでも丸で通用しない事もあるもの故、實用的の地圖等には成るべく通りのいゝ名を選ぶ事にされたいと思ふ、どうも此の山の場合には鋸山よりは鋸岳とするのが當つて居る様である、表裏名を異にして居る時にその一方を採用されるのは或は止むを得ないが、その時にさへ成るべく兩方の名を記しておいてほしいと思ふのに——同じ圖幅の仙丈岳は、前岳なる副名をもしるしてある、通用の廣さから云へば前岳が正名で仙丈岳を副名にせねばならぬと思ふが、兎に角兩方の名を書いてあるから實用上差支へはないので、その親切に甚だ感謝するわけだが、それに引きかへて——兩方で廣く使ふ名

を捨て、少しの差ではあるが、呼び聲さへも違つた名を使はれた事は甚だ不感服に思ふので事のついでにこれも書いておく事とする。

尙又前記の三角嶺のある峯の西、所謂釜無山脈を横切つて、地圖に横岳峠と云ふ一つの通路がある、小島氏が前號に書かれた雁木峠なるものは恐らくこれであるらしく思はれるが如何であらうか三郡の境の位置から考へてもそれであるらしい、それとすれば「雁木ノ頭」「乗越シ」等の名の外に尙この横岳峠の名があるのか知ら、これらの事すべて該地附近に便宜を持たれる士の精探を願ひたいと希望して筆を擱く。(梅澤親光、山川黙)

穂高群峯の稱呼につきて

稱呼を申上ぐる前に、先づ境域を申上ぐるが順序ですが、是は山岳六年「穂高山論」にて小島鳥水氏が詳しく述べられた、又同六年二號「穂高岳につきて」にて私が其大要を記して置きましたから、茲には之を省きて直ちに稱呼の方にうつりま

す。

さて又、此稱呼につきても、同紀念號「穂高岳槍ヶ岳縦走記」、「同上附圖」及び同六年二號「穂高岳につきて」にて記して置きました、が其當時は天候不良で、精査する事が出来なかつた處があつたのでして、其部分は、他の地圖を參酌して作つたものでしたから、今日から見ますと、誠に誤謬不良だらけの杜撰なものを、諸君の前に提供した事を、耻ぢ入る次第であります、であれ等の全部につき一々對照して其良否を申上ぐるのが當然ですが、夫では甚だ煩雜を來し、却つて其目的に副ひませぬから、全部取消を願ひ、今回私が調査した斷片を取り集め、簡單に述べておきます。

古來穂高岳と云ふ山岳は、信飛の國境にある山岳だと云ふ事は、漠然と稱へられてゐたようですが、其山塊の區分につきては、一つも確かな記録はなかつたようです。近來此地を探險するものが益々多くなり、其山塊の中に、幾多の著大な峰頭のある事を詳知り、便宜上是を、前穂高、奥穂高、東穂高、西穂高、南穂高、北穂高等と稱ひ做された、

で是等の多くは、第一は案内者の言、第二は「陸調」(參謀本部陸地測量部調査の略)等により、各自の意見を加味して作つたものと思はれます、で前記の呼稱は、正しいものか又は誤があるかと云ふ事を定めるには、先づ案内者及び「陸調」は、何程迄信用し得らるゝか、又どう云ふ事を云ふて居るかを定めねばならんのですが信用如何につきは、已に本誌にちよいと載つた事がありますから述べませぬ、つまり此邊も他地方と同様、充分には信用が出来ないものと御承知おきを願ひまして、案内者及び「陸調」の言を申し上げます。

此附近の案内者として第一に信用すべきものは上條嘉門次と其子の嘉代吉で、第二には中島作次郎位なものでありませう。嘉門次父子の言によれば、主脈より分岐して神河内に突出した一塊を、最初は單に穂高岳と稱ひ做して居つたようです、陸地測量部の人等が登山して以來、登山者が多くなつて、八釜しく訊ねたので此一塊を東穂高、信飛國境に屬する方を西穂と稱ふようになつたらし

い。明治四四年六月の嘉代吉の通信には、一等三角點のある峰を奥穂高又東穂高と其南の三等三角點ある峯(「陸調」の池尻)を前穂高とありました。で今は西穂高の最高峰以南を岳川の頭、以北の峰を潤澤頭(宛字)と云ふてゐるようです。作次郎の言によれば、東穂高又西穂高なる名は嘉門次父子と同じですが、最高峰の直北一峰を、奥穂高又は北穂高、其北隣一峰を「テンリウ」(漢字不明天龍の意か)槍の最南峯の三等三角點所在峯を「オホノマ」本誌六ノ一辻本氏他二氏の「後立山連峯從斷記」三一頁に「ノマ」の説があるが、本山にも如斯地形の場所があつてかく名けられたのではあるまいか)最高峯の西南の三等三角點所在峯を前穂高と云ふてゐました。「陸調」では、最高峯には三角點を設けざりし故無名で、其直北の三等三角點のある峯を奥穂高(三一〇三米突)、其北隣一峯は無名で、槍の最南三等三角點のある峯を北穂高(三〇三三米突)最高峯の西南三等三角點のある一峯を前穂高(二九〇九米突)、一等三角點のある一峯を、穂高岳(三〇九〇米突)、嘉代吉の前穂

◎雑 録 穂高群峯の稱呼につきて

高と云つたのを池尻（二二六四米突）穂高岳の東北の一角を屏風岩（二五六五米突（以下畧す））と云ふてゐるようです。孰れも感服し難い點があります、殊に「陸調」の北穂高は、無稽の甚だしきものと云はねばなりません。

紀念號にある私の記事は勿論の事ですが、前頁の諸件が原因をなしたものと見え、本誌（五年三號）の小島氏著「日本北アルプス風景論」、中村清太郎氏著の「日本北アルプス畧圖」中の奥穂高岳北穂高岳の位置標高等が、大に誤解せられてゐます。次に愈本題に入りて愚案を申し上げます。

- 一、總稱して穂高山又は穂高岳と稱する事、
一、國境に綿亘する山塊を、西穂高岳と稱する

一、神河内に突出する山塊を、東穂高岳と稱する事

- 一、西穂高岳を區分して、北より北穂高岳（三〇五〇米突？）、潤澤岳又は潤澤の頭、奥穂高岳（最高點三一五〇米突？）、白出澤の頭（宛字）（三一〇〇米突？）、南穂高岳（最南一高峯

一七六

△點ある峯）と稱ふる事

- 一、東穂高岳を區分して、北より屏風岩連峯、明神岳（一等三角點ある峯）、宮川の頭（三〇〇〇米突？）、池尻（最南三等三角點ある峯）と稱する事

右の呼稱を解し易き爲め、次に概畧圖を示す。概して位置と澤の名に因みました。案内者の言及び「陸調」をも參酌しました。

本誌六年二號で梅澤氏は、「位置を示せし智的な冠を、穂高と云ふ崇高な字の上に附ける事が甚だ面白くない……」とて、東西南北の冠詞を斥けられ、東側の一塊に明神岳、最高峯を御幣岳と命じ度しと云はれた。で智的な冠云々につきては、私も同感で他に良名あれば、夫を用うる事を難らぬい、が差し當り、是に更へ得べき良名——他と同名のまぎらはしき呼稱を避けようと思はば、容易に得られない——があるであらうか、御幣岳、明神岳なる名は、舊稱より超越してゐる最良な名であるであらうか、東穂高なり北穂高なり、已に區分的名稱であつて見れば、穂高と云ふ概括的名稱よりも、

山

岳

の直下、中房獵師の所論御幣窟は、當時一面の大殘雪にて、雪消えるに従つて現出すると云ふ、白幣の形を見る能はざりき」とあるのを以て見れば、二氏の形容した主體が夫々異なつて居る故、其探否に苦しむ次第である。夫れに第三高峯に明神岳なる立派な名を附し、最高峯へは、其前に提供すべき物名を冠する事は、面白くない事ではあるまいか。若し強ひて此名を用ゐようとするならば、寧ろ反對に附した——槍ヶ岳絶頂から望めば、東側なる一塊に屬する屏風岩連峯は、丁度御幣を右側に傾けた側を見るようであるから——方がよいと思ふ。夫から又同氏は、二峯の他は、暫らく名を預かるとの仰である、が山岳研究が益々進歩して、細密の域に達するの今日、僅かに面白くない、威嚴を傷ける等云ふ、感情的に拘はれ、無名で置くと云ふ事は、甚だ不便であつて、且つまづい事ではあるまいか、かような調子で行くと、仙丈ヶ岳に於ける前岳、木曾駒ヶ岳の前岳、奥仙丈ヶ岳、其他東西南北等冠せらるゝ山名を、一々改めたくなるが之は歴史的の權威を尊ぶとして不問に付すると

するも、八ヶ岳群峯、信濃越中界の連峯、立山山脈等に至りては、一層細分せられてある例もあり、假りに命名して置く方がよからうと思ふて鄙説を提出致した次第であります。(鶴殿)

山名につきて

▲割谷山。山岳五年三號小島水氏著「日本アルプス風景論」一〇八頁、及同六年二號同氏著「日本アルプスと萬年雪との關係」一二二頁中に、割谷山(二二二四米)又は割谷火山なる名稱が載せられてある、孰れも傍訓が附してないから「ワリダニ」と訓むか「ワルダニ」と稱へるのか不明である、が夫は共通するものとして置きます、で私があるの夏、穂高岳一部の縦走をして、最南の一高峯、南穂高岳に行つた時、同伴の案内者、中島作次郎(飛驒、中尾の住)なる者に此山の所在を訊ねた所、焼岳の北に方り、密林に蔽はれてゐる小高い山を指して「ワルダニサン」と云ひ其西麓には、「ワルダ」と云ふ惡い(通過困難又は荒れ

たるなど云ふ意) 谷があると云ふた、で私の考では、此山の名は、此谷の名に基づいた事だと思ひます、若し是が誤りないとすれば、やはり悪の字を採つて悪谷山と稱する方がよいと思ひます。

▲割菱岳。此岳の名は、近來別に、五龍岳、後立岳等稱せらるゝようである。山岳六年一號二頁「後立山連峯從斷記」中に「近頃鹿島槍岳北方のヨリウ岳(北城村の割菱岳)を後立山と書き、後立をゴリウと音讀すること大部流行の様子なるが……」と、此岳を後立(ゴリウ)と音讀する事を否認せられた。其後鳥水氏は、同第三號一〇九頁以下數頁に亘り、鯉鮒山、五龍山及び後立山等を列記し、種々の例を引き、是が反説を試みられた。所が同七年第一號「机上談山」で蜘蛛生氏は、一七七頁以下で「ゴリウ」非「後立」と鳥水氏の説を妥當でないとせられた、而して其終りに、新に字を與へるなら、最初の人に從つて、五龍が最もよいと思ふ、しかし近來は、是に割菱岳の字を宛て、居るようである……」と云はれた。でまだ孰れとも斷定して居らんようでありますから、鳥澁

がましい次第ですが、菲才を省みず、盲蛇的に卑見を述べて見ます。或人の説の如く、後立山山脈を、立山火山脈の背後にありとする事は、越中方面の人には容易に首肯され得るも、信州方面から一寸考へにくい、よく立山火山脈が標高に於て勝り、其主峯が早くから開けてゐたにせよ、山脈の長短、領域、走向及び國境等の關係を無視し、比較的信州に關係深く、且つ正しく其背後に當り居らざるのみならず、後立山と云ふ一個の山體の存否すら不確實であるのに、越中に籍を置く、立山火山脈の背後に方るものとして、後立山山脈と云ふ屈從的の名を付するのは、概括的名稱とした所が、いかにも主従の位置を顛倒したものではありませんまいか。概して今迄に名づけられてゐる山脈名で、同脈中の或る山名を冒してゐるのは、其内にある代表的名山の名を用ゐられてゐるのが普通である。是に準じて、此山脈に冠すべき名山を物色すれば、比較的古くから知られ、且つあまり偏つてゐない鹿島槍ヶ岳を選むべきである。さもなくば白馬岳なり、鷲羽岳、黒岳は少しそれと異ると

山

して、五郎岳等の傑物が澤山あるのに、なせ第二流以下の、存否不確實の山名（あると假定す）を採つたのであるか、是が甚だ解し難い點である。是は或人が後立山山脈と云ふ名はあつても、其脈中に同名の山なきは、甚だもの足らないように感じ、確的の山名のない山を「後立」「ゴリウ」等と稱ひ做したものと見らるゝが、結局是は、山名と山脈名とは、何等取立て、云ふ程の關係なきものと見るに至當とす。學者の命名（其辭何人が稱へたのか知らない）が幾何の權威があるか知らない、が已上述べた通り、後立山山脈なる名が不適當（……の物議を引き起す丈け夫丈け）であり、後立山の存否が不確實である以上、敢て之を用ゐなければならぬと云ふ理由はない。で此（ワリビシ）なる名は、何人が稱へてゐたかと云ふに、之は私に元年の夏、白馬山に行つた時の案内者、丸山俊雄及び其他の案内者から「あの山はもと此地方の人は、ワリビシ岳と云ふてゐたが、近來ではゴリウと稱ふ人もある……」と、聞いた。さて此「ワリビシ岳」なる語の意義をたづぬるに、ワリと云

ふのは割裂の意で、ビシは菱（古字菱（註）菱也（俗云）菱角是也、武陵記）四角三角曰菱、兩角曰菱）の義で、菱角の如き鋭きものを從斷した所の意味で稱へたものではあるまいか、現にあの地方では、天狗ビシ、小僧ビシ、其他何々ビシ等云ふ所が數多あつて、主に斷崖の場所に用ゐられてあるそうである。菱は又稜に通じ。リツヂの意味もある。此の山も可也險しいそうであるから、菱を割つたような斷崖のある場所と、附會してもよさそうである。ワリビシと云ふのは又惡谷の例に倣ひ、惡絶の斷崖と考へられぬ事もない。夫から五龍と宛字した人は、三枝氏なる由なるが、今一寸よい思ひつきが浮ばない。「ゴリウ」の「後立」を「ゴリウ」と訓みて、神立山としたならば、至極面白と思ふ、申す點もない神の在ます山とて神々しい類例の少ない山名で、ちごもつたないような氣もする。で私は、近來の新稱にかゝる「ゴリウ岳」と稱するよりも、從來地方土人の稱ひてゐた、解り易く且つ山態に適當する、割菱岳又は惡菱岳と稱しておきたい、では非共「ゴリウ」なる名を

存して置きたいなら、濁らずに「コーリウ」——神立山と稱ひ度い。若し是等の内の何れかに定つたならば、後立山、五龍岳、後立山山脈など云ふ怪むべき名は、直ちに抹削し度いものである。

▲割引山。吉田氏著「大日本地名辭書」中卷二〇一〇頁にある割引山（一九五〇米）（高頭氏著「山岳志」には割引山なる名はない、同志一四六頁にある、牛ヶ岳（六五五七尺）なる山と同山ならんか）は、前項の如き「ソリビシ」の、又「山岳志」の云ふ牛ヶ岳は「ヒシガタケ」の轉訛したのではあるまいか。此例を擴めると、越中黒岳の北端にある赤牛岳の牛も亦「ヒシ」と云ひ度くなるが、そはちと強ひすぎると思ふから此位で止めておこう

▲五郎岳。本誌六年一號附録地圖（中村氏著）「日本北アルプス一部臆測圖」中には、野口五郎岳と黒部五郎岳との二山が記してある、が此野口五郎岳の方は高頭氏著「日本山岳志」二七五頁及五八六頁とある五六岳なる二山の内の一つであらう。「長野縣統計書」には常磐村に南五六岳（山

岳志」の高度表にある南五六岳、恐らくは此南五六岳の事ならん）と云ふのがある、此岳の事は、同七年三號一頁で辻村氏が述べられた通り、現今あの附近に類似名の所がないようである。黒部五郎岳につきては、寡聞の私には、何とも申上ぐる事が出来ない。さて此五六と云ふのは、或は「ころく」した岩石の亂積してゐる急坂が何處かにあつて、かく名づけられたのではあるまいか、若しそんなわけだとすれば、五郎と書くのは不適當である、又た五郎と云ふ人に關係あるとすれば、五六と書くわけにはゆかぬ、兎に角是等は何れも附會の嫌あるかもしれぬ故、判然する迄は、舊記に従ひ五六岳と書して置く方がよからうと思ふ。五六を五郎と轉記した事は、つい近代の事だらうと思ふ。世が文明になつたからとて、山の名迄も、無茶苦茶に改めると云ふ事は、ちと考慮せなければならぬ事と思ふ。辻村伊助氏の説によれば、ゴロク、ゴロウ、ゴウロウ、ゴウラ、ゴウト、ゴロウ等元同一語より轉訛せしものならんかとの由、此に附記して其高意を謝す。

地名につきて

▲御山澤。御前澤。中村清太郎氏著山岳六年一號附録地圖「日本北アルプス一部臆測圖」中、立山の東側に、御山澤及び御前澤と云ふ二つの澤が記してある、是には傍訓がないから、確かな訓み方はしらないが、素人訓みに、「オヤマザワ」「オマイザワ」と訓みて私の考を申し上げます。で右の御山澤は、立山の主峯雄山の方から流れてくるようでありますから雄山澤と、又御前澤は、大汝峯の兩側から流下して相合してくるようでありますから大汝澤と宛字した方が實情に適合して、兩方共前と同様に訓み得られはしまいかと思つて、かく記しました。

▲「オホコンバ」。山岳七年一號二八頁拙投「地藏岳及鳳凰山」の記事中にある「オホコンバ」に大木場なる字を宛てたる事につき、同七年三號一八頁で、武田氏は、小場の謂にあらずやと御せありしにより申上げ候。私が該所を通過の際は、木挽工が二人居つて、木材を澤山推積しある傍で製

材してゐた所から早合點し、碌々詮窄もせず、右の如く宛字し置きたる段慚愧の至りに候。さて其後聊か取調べ候所、右の如き所を、信州邊にては「コバ」と稱し居る所多く有之候、多分是は、工匠等の仕事場即ち工場を、約めて「コバ」と稱ひ居るものと推定致し候。故に前記の「オホコンバ」は大工場と解したならば——山地の急斜地にて仕事をなすは甚だ困難なるより、何地の人も可成緩斜地（面積小なるも）を選ぶを常とす——よく實情を表示し得らるゝ事と存候、併し是も猶數多の「コバ」「コンバ」につき調査せざれば、確言致しがたく候、且らく記して深く同氏の厚意を感謝す。

▲竹ノ巢。山岳七年三號九八頁、辻村氏著「神河内と常念山脈」の記事中に、有明村竹ノ巢なる地名が載せられてある、之は無論「タケノス」と訓む事と思ひます、で之には格別條件が（小鳥島氏水氏著「雲表」には有明町竹ノ巢高地としてあつて宛字がしてない、此有明町の町は、村の誤植で高地は耕地であらう）附してないから、現今、上如く書くものと推はれますが、私が明治三十七

年の夏、彼の地に行つた時に、見當つた字は、嵩下(古い地圖には、嶽下など書したのもある)と書してありました。當時友人からの書面にも、必らず嵩下と記してありました。之は何れが正しきや又兩者併用せらるゝや伺ひ度い。序乍ら記しますが、前と同頁、四行目には、畠山菊一とありて、八行目以下には、山と云ふ字がありません。之は多分印刷の際に落したのだらうと思ひます。(完)

(鶴殿)

仙丈岳のカールに就て

本誌六年三號、辻村太郎氏の「日本アルプスと既往の水河」一六頁挿圖に、Aカール部より發する水が「ヘイエモン谷」に落下するより記載せられあるも、こは確かに藪川に落下するもの、誤りと存候、小生去る四十三年藪川より該山に登山し親しく實見したる所によれば、「ヘイエモン谷」(此谷は馬の背の北方に發源する故右カールと關係なし)に流下せずして、藪川に流下するものと認め

候、而してカールは實に藪川の誕生地に有之候。

又同七年三號、大槻禎郎氏の「駒ヶ岳及仙丈岳登山記」八一頁にも右と同様、平右衛門谷に落下するよりに認められてゐるが、是は多分藪川を平右衛門谷と見謬りしものならんと推定致し候。(鶴殿)

駒込富士詣

『俳風柳多留』に

清姫をひつ提げて來る富士詣

時は今富士へじやの出たあしたなり

蛇と蚊の出るのは駒込の六月

麥藁が化けて蛇となる暑い事

とあるのは、毎年六月朔日、江戸駒込富士參詣と、其所の名物で唯一の土産たる、麥藁の蛇を詠んだものである、

駒込富士權現社は、今も本郷區駒込富士町に在るが、其草創に就ては『江戸砂子』享保廿一年版本に

當社は昔本郷の内に在り、山の上に大木一もとあり、此もとに六月大雪つもる、人民其本によ

◎雜 錄 駒込富士詣

一八四

れば必ず崇あり、よつて富士権現を勸請すといふ、其舊地は加州家御やしきの内なり、寛永年中此地に移さる、猶其跡に社をたてらる、其山の形富士山の姿也、

とあるのは俗説で、権現社遷宮當時の記録たる『慶長見聞集』寫本に

神田山の近所本郷と云在所に、昔より小塚の上に祠一つあり、富士淺間立せ給ふといへども、在所の者信敬せざれば他人之を知らず、然る處に近隣駒込といふ里に人ありて、淺間駒込へ飛來り給ふと云ひて塚をつき、其上に草庵を結び、御幣を立ておきつれば、參詣の者群集せり、本郷の里人これを見て、我氏神を隣へとられ羨む斗りなり、今見れば駒込の社立直し、朱の玉垣前に大鳥居、壯嚴殊勝なり、皆人これへ參る、神は人のうやまうによりて、威を増すといふ事思ひしられたり、靈驗あらたにおはしますといひならはし、近國他國の老若貴賤、悉く參詣し、六月朔日大市立て繁昌する事、前代未聞なり云々、とあるのに従ふべきである、かくて六月朔日に市

が立つて、老若の參詣人群集せる事は、慶長年代からの風習であるが、當時參詣者の風俗に就ては、未だ記したものを見ないが、貞享年代のは、『好色二代男』眞享元年版本に

みな月の夜をこめて、江戸の新富士に參詣する事あり、人皆白衣の袖をつらね、水道の流れに身を清め、行に松明たてつれて、烟は風になびくどよみて山かごぞ思ふ、才覺なる神主、去年ふる雪を日陰に埋み置て今日掘出す、參らぬ人の爲とて、手毎に取りて歸る云々、

とあれば、當時駒込富士參詣者は、老若の差別なく總て垢離に身を淨め、行衣を着して未明から參詣したのである、この雪を掘出して參詣人に與へた事は、當社の繁榮を計らんが爲に、駿河なる富士権現社の古式に倣ふたものであらう、かく白衣を着する事は、富士禪定の心をとつたのであるが、これも元禄年代以降何時しか廢れ、其代りに身を淨め散し髪にて詣づる事となつたのは垢離の式を象つたものであらう、この參詣者の多くは、富士登山の出來ない少年輩である所から、



◎雑

録

駒込富士詣

駒込富士詣

夫を當込で玩具の
 麥蕪蛇が創製せら
 れ、終に其所の名
 物となつたのであ
 る『塵塚談』本に
 少年参詣者の風姿
 を記して

駒込富士権現祭
 毎年五月晦日よ
 り六月朔日まで
 参詣夥し、予若
 年の頃は、俗間
 の童子等参詣に
 は皆髪を洗ひ油
 元結を用ひず、
 ちらし髪にして
 詣でしが多かり
 し、近年右體の
 童更に見えず、
 移り替る世の様此

の如し、

又『續江戸砂子』享保廿二年版本にも

五月晦日より其夜すがらかけて、朔日の夕景まで參詣す、大かたは子供なり、多く髪を亂せりこれ富士禪定の心なり、かりのよし簾茶屋多く建ちつゞき、餅酒やうの物を貯へたり、當所の産は五色網袋、軍配うちは、麥わらにて作れる蛇、或は梅桃杏李の果物、かのすがり網に入て産物とす、麥藁の蛇は延寶始の頃、所の女童麥わらにてつくれり、ねちり龍とかやいふもの、やうに長くあみつゞくれば、自然と龍の形に似たり、これを手むだごとのやうにこしらへ軒におけり、子供の參詣多ければ玩物にととのへぬ、いつとなく次第にひろがり、富士みやげにこれあらでは如何ならんやうになりて、今は當所第一の産となれり、

とあるので其一斑を知る事が出来る、この土産中の尤物麥藁蛇の起原に就て、『江戸塵拾』には寶永の頃、此わたりの百姓喜八と云へる者、ふと是を作りて祭禮の日市に賣りける、諸人珍ら

しく思ひて求め歸りしが、其年七月江府疫病はやるごときに、この蛇を置きたる家、はからずして富士詣の土産には、必ずこれを求むる事になり云々、

この異説を記してあるが、採るに足らぬ辯説でこれは『續江戸砂子』に記してある如く、少年參詣者の多きを當込んで、附近の百姓家の手すさびに作つたのが、圖らずも當時の人氣に投じて、何時しか同所の名物となつたものであらう。

(朝倉無聲)

千垢離と大山參詣

千垢離は一に水垢離とも稱し、江戸時代に於ける年中行事の一として、毎年五月五日の曉江戸各町の若者等、染絆天に向鉢の姿勇ましく、梵天と丈餘の木太刀を押し立て、山伏螺貝を鳴らして先に立ち、大傳馬船に打乗りて兩國の垢離場に至り、奇妙頂禮六根罪障の聲轟ましく、大山石尊を念じつゝ、水垢離を取り歸途梵天に挿せし幣を町中

に配りて、悪氣を拂ふの咒をなさしむるなり、もし其町にして川に遠き處は、『世の中のくさく』
野村文紹
著、寫本に

千垢離は五月五日町々の境にて、若き者大勢集り、修験者螺を吹立、大勢は大だらいへ水を汲入れ是をあびて祈り、三ヶ所程にて終るなり、川邊の町々は川へ入り祈るなり、

ごあるが如く、町々の角に梵天を立て、祈禱する事垢離場に於けると異ならず、

この行事はもと江戸市中の職人等が、相州大山石尊へ祈願參詣の前、身心を清淨にせんが爲に、淺草川に於て一七日水垢離を取りしより起由りしもの、如し、

『續江戸砂子』享保廿
年版本石尊參垢離取の條に

相州大山石尊（朔日山六月廿八日より七月七日に至、盆山七月十四日より同十七日の朝山に至）淺草川にて一七日こりをとりて、石尊禪定するなり、乳のかぎり水にひたし、さんげく六こんざいしやう、おしめにはつだいこんがうごうじ、大山大聖不動明王、石尊大權現、大天狗小天狗とい

ふ文を唱へて、も、水をかづくなり、さんげくは慚愧懺悔なり、六こんざいしやうは六根罪障なり、おしめにはつだいは大峯八大なり、ことく誤れども信の心を以て納受し給ふならん此事中人以下のわざにして、以上の人はなし、又『江戸總鹿子名所大全』寛延四
年印本にも

相州大山石尊、六月廿八日より七月七日に至るを盆山と云、此石尊え參る輩、兩國橋の東にて河水にひたり居、垢離を取と云ておめく聲蚊の鳴くが如し、ゐかにや市人の中にて、中人以下の者のみにて、其人品放逸無漸の者のみ多き事いと不審なり、

ごありて、享保年代以前の古書に、五月節句に於ける水垢離の事を記せしものなきを以て證とすべく、千垢離の名稱も藪しべの數取によりて、百度千度水をかづくといふより發せしものなるべし、江戸に於ける難行の起原に就きては未だ詳かならずといへども『新話笑眉』正徳二年
江戸版本

兩國橋を渡りかゝりしに、折節川の中にさんげさんげ六根罪障、大山大小もさゝす、しかも丸

◎雜 錄 千垢離と大山參詣

はだかなる垢離取共、丹誠をなして禮拜するを、往來の人大勢立とまり見物す、

とあれば、正徳年代以前既に世に行なはれしを知るべし、

かく寛延年代以前に於いては、千垢離を取りて大山參詣をなすの徒は、中流以下の諸職人に限られたりといへども、何れも信心堅固に祈願したれば、神も納受ましくけん、靈驗灼然なるにつけて、寶曆年代に至りては誰が云ひ初めしか、『水の行邊』の所謂ひよんな事の守神と囃し立てられて大山參詣は放逸無漸の徒に限られたる如く見做さるるに至りしこそ是非なけれ、『教訓續下手談義』寶曆三年三圍にて流行神評議の條に

抑某石尊相州大山の頂に住る事年久しく、近年諸人の渴仰往古に彌増、人目には繁昌致すやうなれども、内證の迷惑殆んど五衰三熱に五割まして難義の筋あり、其子細は近世何者の申出したるか、拙者を博奕の勝負を守る運の神といひ立て、二階梁ほごなる木刀なんどかつぎつれ、毎年六月の末七月の半まで、雲の如く登り蟻の

一八八

如く詣來る輩、何れも仁體ふつゝかなる客人、をのゝ喧嘩眼に成ての參詣、千人に一人も忠孝仁義をわきまへたる衆生の詣來らざる事、神中間の外聞もあしく云々、

又『當世坐持咄』明和三年版本石尊大權現丑の時詣に異見し給ふ條にも

扱又、六月末より七月の中句まで、當社へ詣來る者共、我をさへ祈ればよこしまな願でも叶ふ事と心得、百日の精進七度の千垢離と身をこらして、むせうに運を強くして下されど、たてせがみにしおるかしました、毎年の事ながらさりとほ迷惑千萬なり、なんば千垢離精進で身をこらしても、肝心の心清めねばすの子の金箔とてあばらや金張付したる如く、いどいやしき事なり、中々見せかけでは神は吞込マぬ、人間でさへチトかしこき者は、うはべのかざりにはなづむものにあらず、まして佛神は神通ありて、誰が心中はごう、かれが意はかうとは忽ちに知る事なれば、心がけがれては千垢離も精進も糸瓜の皮なり、隨分肴も喰ひ水もあびすと、心さへ

清淨なれば麓でついちよびくど手水で至極よい、なんぼ千垢離に身をこらし、奉納の品に物入してもおのれを博奕のかとうごに頼みたい了管ではたとへ百萬垢離をとり萬度参しても、いかなくも聲ほども聞はせぬ略中まづためしに正しい人間にたよりて、私儀は博奕が好物で御座りまするが、ごかく運がないなふ御座るやら、度度まけまして難儀致します何とぞ御前様のお力で、ちと勝たせて下さりませ御禮には千詣離をとりて御目かけ、其上に大きな木太刀を拵へ差上ませう程に、ひとへに頼上まするとやつて見よ、それこそうんどもすんども息の絶える程の目に出合ふべし、

とあるにて、當時江戸市中の遊民等が、博奕の勝利を祈願せんが爲に、七度千垢離をなせし上、石尊参詣をなせしを知るべく『俳風柳多留』の

石尊は土場からすぐに思ひ立ち

石尊はかし元ひいきあそばされ

明日立と土場で切火で吞でゐる

は是等博徒の登山を詠しものなり、

◎雑 録 千垢離と大山参詣

相州大山の開基、並びに不動尊及石尊の鎮座等に就いては、『新編相模風土記』『東都歳時記』等に詳かなれば今贅せず、参詣の輩はいづれも納太刀と稱して、小きは七八寸大き、は丈餘の木太刀に、奉納大山石尊大権現と大書したるをかつぎ、初山は六月廿八日、盆山は七月十四日より参詣して神前に納め、他人の前に納めし太刀と交換して持歸り家々の守となす事なり、されば盆山は節季前に當れるを以て、當時借金逃れの唯一の奥の手として参詣する無頼漢多かりし事は『俳風柳多留』中に、

盆山は缺落らしい人ばかり

十四日油断をするご山へ抜け

納まらぬ盆を納める太刀で逃げ

ご、ヲは山へかゝアは内で言譯々

しよせん足ないと大山さして行

さんびく、借金で参りました

精霊と女房を留守に急な旅

とあるにて知るべく、其登山の風姿は、『水の行邊』

明和二 石尊参詣の條に
年版本



石川豐信畫(繪本花縁の所載)寶曆三十年版

大 山 參 詣

相模の國あふりの山に立せ給ふ不動明王は靈驗あらたにましくて、鎮護國家の道場なり、近來山上に石尊大權現鎮座あつて、衆生の祈願に應じ給ふ事、聲と響との如くなり、關八州の民我も〜と參詣し、六月末より上るを初山といひ、盆を盆山と、なへて其群集夥しき事、あまねく世の人の知れる所なり、或は運を守り給ひて、信ある人は負べき事にも勝と云てより、ひよんな事の守神の様に覺へ江戸中の齋の者諸職人の弟子魚賣、天窓に少しも血の氣持た者は、なまぐさばんだばさら髪に、大の木太刀を引かたげて、五郎時宗が富士の狩場へ切込んだる勢ひ、伊達染浴衣

の露をむすんで肩に懸け、今年も藤澤の宿も世並がなかつて、よいあまめらが見へる、兄イたて引だ一ばんとまつてくれるなら、忝けなすびの胡麻あへだど、譽る事さへよはみを見せぬ朝比奈の三づとも云べき若イ者云々、

又『俳風柳多留』に

おさまらぬ天窓でかつぐ納太刀

亂鬢で吉廣をばッこんで行く

木ク刀のすぬけ親分持て居る

切先を揃へる渡る田村川

を以て一斑を知るべし、

かくの如く千垢離は、五月五日の悪氣拂と、大山參詣前に於ける修行なるが如しといへども、亦親族或は近隣の者大病にて、醫師も匙をなげし時には、不時に千垢離をとりて、其平癒を祈りし事當時の習俗たりしなり、『續下手談義』に

近き頃江戸にて千垢離と名付け、病氣災難を免れんとて、我々兩所◎石尊云の名を呼ばりて、夜の目も合はせぬ仕合せ、尤も病氣災難は、祈らずとしも餘所に見る筈もなし、まして三冬に氷

◎雜 錄 千垢離と大山參詣

を碎て河水に飛入る苦るしみ略極寒にさりとはけんごん一つや淡雪豆腐の一膳略などで、能は頼まれて飛込ことぞとそいろに憐み、少し小頼のにくひ奴をも、濟ひ遣し候へば、扱は何事も頼めば埒の明く事と呑込で、法度を犯し様々の惡事露顯して、或は牢獄に入らるゝに及で、我々が請合ひたるやうに、をめき叫びて責はたり、さしもの兩國橋も動くばかりに呼ばはる中あまつさへ近隣の者まで義理づめに駈集め、若辭退すれば人のやうに云はざる間迷惑の涙を袂につゝみ、數ごりの錢さしに鯖をよんで、奇妙頂禮不思議な手管に漸く仕廻て、震ひく歸る形勢云云、

又『當世座持咄』にも

氣の毒な事は愚な凡夫共の家に病人の有時なり或は當分の風邪か寝冷などしたる節は、俵屋振出し一服でつい平癒すれども、さア病が重り藪井喜閑老の匙でもふいけぬ段になると、長屋の衆中御太儀ながら、千垢離をとりてやらしやれど、大屋が差圖で惣長屋つら役の千垢離、義

◎雜 錄 千垢離と大山參詣 甲州山村の三升樹

一九二

理一遍の人見せ計り、ゑいやつと百二三十とどりでもふよいかげんに仕舞ふと、さゝりさつと差置おる、是等はまた軒並びの好身を以て、いやながらも川水に飛込ば、いとしはらしくも思へど十方もない筋違ひは、彼病人千垢離のしるしも見えず、

疾病災難に何等の効驗もなき、この迷信の流行に就いて、當時の識者痛嘆して、口に書に訓戒する所ありしも、容易に其悪習俗を脱する事能はず、明治維新に至るまで繼續して、後世の笑柄となるに至りしこそ、又是非もなき事といふべし、

(朝倉無聲)

以上二項、作者の承諾を得て、風俗繪畫雜誌「此花」より轉載。

甲州山村の三升樹

去る明治四十二年、高頭、高野、中村、三枝、茨木、諸君と共に赤石山脈の北部へ旅行をしたとき、甲州南巨摩郡の西山温泉に投宿して、米や味噌の買ひ入れに着手したが、その時案内を頼んだ

獵師と、米の分量のことで、相談になると、獵師は一升といふ言葉に、京樹か甲州樹かと、一々念を押すが、一行の人々、誰も京樹と甲州樹の區別を知つてゐない、そのうちに話がトンチンカンになつて來たので、説明を聴くと、京樹といふのは、普通の一升樹のことであるが、甲州樹といふのは、その三倍、即ち三升を量り込む樹である、併し分量は三升あつても、それを一升(甲州樹を用ひる時は)と稱するのであると知れて、大笑ひになつたことがあつた、京樹といつても、何も京都から傳來したといふ程の意味でない、都で使用してゐる位の事であらうが、それにしても之に對して甲州樹といふ稱呼は、おのづから地方的であることを示してゐるのが面白い。

その前後を忘れたが、甲府に近縣の勸業共進會が開催されたとき、土地の人が共進會向きの大津繪を新作して、藝者に唄はせた、その文句といふのを、新聞で讀んだが、唄ひ出しが『甲斐の國より、外に無いものは、甲金、三升樹……』云々とあつた、併し三升樹は甲斐の國なら、何處でも

使用しゐるといふわけではなく、山梨、巨摩、八代三郡の或一部に限つて行はれてゐるらしく、我がの一行が早川溪谷のほごり、早川連嶺の底にあたる孤屋で、白峯大山脈の雪庇に眩ゆがりながら、この樹の名を始めて知つたのも、愉快であつた。

そこで、甲州樹とは、何んなものであるといふと、我々は大山脈を眼の前に、控えてゐて、悠々くり山民の風俗や習慣を調べたりなんかしてゐる暇もなかつたので、寶物を一見せずに、過ごしてしまつたが「山梨鑑」(明治二十七年版)といふ本に依ると、左の如くである。

甲州樹 甲金と同じく、山梨巨摩八代の三郡にのみ行はれしものにして、其量は方七寸五分深サ三寸四分五厘餘、殆んど京樹の三升に當れり、故に三升樹とも稱す、又別に甲州樹の四分一に當るものあり、端子樹、或は四ツ入と云ひ、端子樹の半量に當るものを、半樹と云ひその又半量なるものを、小半樹と云ふ、獨り都留郡は、之に異なり、京樹三升五合を以て、一升と定む、即ち甲州樹の八合三勺三

才餘に當れり、各地此樹法の行はれたる起原未だ詳ならずと雖も、數百年前より、用ひ來りしものなり。

數百年前といふ言葉が、少しく大握みに過ぎてゐるやうであるが、このやうな山地に、舊くから特定の大樹が、傳はつてゐるのも、面白くはあるまいか、さうしてその起原としては、私の當推量に依れば、この邊の山民は、稼ぎが荒く、所謂一升飯を喰べる人たちで(但し山中の人たちは、今でも米食は贅澤な部類に屬してゐて、粟か稗を常食にしてゐる、即ち分量の多い割合に腹が満たぬのであるから、小樹ではめんどうであるため大樹で量り、その他の小樹も、之に準じて大きくなつてゐるのではあるまいか。

次に同書に依つて、大津繪に所謂甲金なるもの、説明をも掲げて置く、これは我々には縁の無いものであるが。

甲金 古へより甲金と稱へ、山梨巨摩八代の三郡に限り、久しく行はるゝ所の金貨あり、此甲金の種類甚だ多く、殆んど百餘種に及びた

◎雜 錄 甲州山村の三升樹

り、大判、灰吹、碁石判、延金、繩目金、太鼓判等は、最も古く、その品質も皆純良なり、近世に至り、専ら行はれたるは、甲重甲定の二種なり、甲重は享保六年、柳澤氏の鑄造する所にして、即ち壹分、貳朱、壹朱、朱中の四種あり、壹分金は目方壹匁貳朱以下、順次其半減とす、甲定は同十二年の發行にして、品種形状、甲重に同じ、共に表面は桐の紋及松木の印を刻す、只裏面にある重と定との文字を以て、區別するのみ。

次に云ふ、甲金も三升樹も、同じく山梨八代巨摩の三郡にのみ限つて、行はれてゐるといふ事實は、この三郡が一括して、同一の行政區域の下に置かれてゐた時代を暗示してはゐなからうか、もしさうであるとするど、富士山の寶永山が、噴出するに先立つこと二年、即ち寶永二年に、五代將軍綱吉の寵臣、柳澤彌太郎が、山梨八代巨摩三郡の地十五萬石を賜はつて、甲府に入城して、三郡はその統轄を受けてゐたから、この時代から、三郡を通じて三升樹の量目制が、立てられたので

一九四

はあるまいか、もしさうなら、數百年は古過ぎるやうであるが、柳澤氏の祖先は、甲州武田氏の出で、甲州が徳川氏に隸屬するやうになつても、家康は甲州の人心を收攬するため、凡て武田氏の舊制に従つて、政治を行つて來たほゞで、後代柳澤氏も、さういふ縁故もあり、且つ自身の希望もあつて、甲州に領地を給せられたのだから、やはり民俗を斟酌して、この三升樹の制なども、舊法に依つたわけであるとするれば、數百年來の古制法と言つてもいゝかも知れない。

因ちなきにいふ、今の北巨摩郡駒城村柳澤（駒ヶ岳又は鳳凰山への登山出發點）は、この柳澤氏祖先の代々の居住地で、砦のあつたところだといふ、巨摩郡武川筋武田の庄は、武田家發祥の地であり、柳澤氏はその武川衆の一人である、駒ヶ岳から發源して釜無川に入る大武川、及び小武川は、古の所謂武川のことだ、この二川の通過する駒城村に、柳澤の名を命じた村落の置かれたことは、歴史的に、重要な意義があるらしく思はれる。又前記柳澤氏の鑄造した甲定甲重の兩小判に、松木の印を

刻すとある松木の意義は解らぬが、「山梨鑑」は印刷の粗悪な活字本であるから、或は松平の誤植ではなからうか、何故なれば柳澤氏は、松平の姓を賜はつてゐるからである。(小島)

陸地測量部槍ヶ岳附近及飛驒全部の地圖を出版す

從來登山家の渴望して止まざりし、日本北アルプス南半の地圖は、唯僅かに地質調査所の四十萬分一圖あるのみにして、陸地測量部の輯製圖の如き、輯製にあれよくも、誤謬のみを、綴り合せたるものと、其勞力を思ふのみなるが、今回出版されしは、五萬分一地形圖にして何れも昨元年度の實測にかゝる、昨夏、所謂日本アルプス地方に、測量部の各氏が測圖の爲め登山せられつゝありし事は、聞知せる所にして、數年の後ならでは、其出版を見る事能はざるなるべしとせるに、思はざりき、今夏其出版を見んとは、吾人は測量部各位が特に、吾人に便宜多き此舉を取られしは、感

謝の辭を列記するに隙なきなり、よし假製版にもせよ、世間没交渉の此方面に、特に昨年度の測圖にも係らず、此登山期前に、其發行を敢てせられしは、一方ならず、吾人は其厚意を感謝し、喜ばざるを得ざるなり、「槍ヶ岳圖版」の如き、吾人登山家を除いて、要求すべきもの絶無なりと云ふべし、要求多き地方を除いて、出版されしは、吾人は一方ならぬ快心を禁ずるを得ざるべし、今回出版されし圖版の内山岳關係のものは次の如し。

五萬分一地形圖一色の部

甲府號の内五面(金峰山、八ヶ岳、市野瀬、大河原、赤石岳)

長野號の内三面(坂城、和田、諏訪)

高山號の内三面(池田、松本、鹽尻、鹿間、舟津、白木峰、槍ヶ岳、焼岳、乗鞍岳、高山、古川、三日町)

金澤號の内二面(西赤尾、白山)

以上其包含する區域は、市野瀬、大河原、赤石圖幅に於て、聖、兔、赤石、惡澤等の赤石山脈の大立者と、白峯山脈の殆んど全部、(本號中村氏の地圖と對照)と甲斐駒、仙丈、を含む(地藏、鳳凰はなし)八ヶ岳金峯の圖版にて、秩父の一部十文字峠、國師、又筑摩川の上流、を含む此れにて秩

父の南半は其典籍を有する事となれり、高山號は一舉して其四分三を出版せられたり、此れにて飛驒國の全部、赤牛、不動堀澤岳、藥師岳以南の諸山岳は、此れにて一貫して、其地形を知るを得たり。

從來飛驒國は山國として知られ、交通不便、絶崖に點綴せる人家あるのみと思へるもの多し、恐らく、世人は然か思へるなるべし、さあれ此飛驒全圖の出版は、飛驒に關する、世人の蒙を開くに足るべし、此れに由りて飛驒は、産業に交通に教育に益する事大なるべし。

聞く、尙ほ數十日後には、今回出版されし以北の圖幅出版さるべしと云ふ、此れにて、所謂日本アルプスは南北一貫して其地圖を有する事となるべし。

吾人は、今回出版されし圖幅に就て、云わんとする事多し、號を改めて、吾人の考へを述べんとす、吾人は會員諸君に、報すると共に陸地測量部の厚意を感謝するものなり。(蝶 郎)

一 高山岳會の成立

第一高等學校の生徒の中に山好きの者が可なり
の數居ると云ふ事は、旅行と云ふ事、取り分けて
登山旅行と云ふ事が、元氣のある若い人々に適し
た事で、又好まれる事であるのから考へて、當然然
るべき事なのではあふう、然し漫然と澤山居ると
云ふだけではそれだけの話しであるが、それらの
同好の人が集まつて話しを交換し、旅行の相談を
するとなれば澤山居ると云ふ事が意味のある事にな
つて來様と思ふ、そんな主意であるのか如何かは、
門外漢の私には少しも分らないが、とに角
同校の校友會の陸上運動部の一つの仕事として――
―であらうと推測する――一高山岳會と言ふ集り
が出来た、而して去にし六月廿八日にその發會があ
つた、本會から幹事の高野、辻村、梅澤、小島の
四人がその席に列なる榮を有した、同日午後同
校の物理講堂で高野氏は飛驒山脈の縦走と立山の
話を辻村氏は立山より藥師岳への縦走と赤城山
の話しとを幻燈説明をされた、原版は昔て本會の

大會で見た品ではあつたが、畫が甚だ鮮明であつたので新らしく見る様な思ひがした、同講堂一杯と云ふ盛況で、教授の方々も數名席に臨まれた、同夜同校内の一室で丸山教授まで出席されて座談の會があつた、その席上で此の夏團體登山旅行の計畫が發表されて——燕岳、大天井岳、常念岳、槍ヶ岳、穂高岳、燒岳等へ遊ばれる約一週間の企てで、大部多人數集まつて數隊に分つて行はれる程の盛況である由である——種々な話に花が咲いて十時大分過ぎてやつと散會すると云ふ景氣であつた。

發會の日も盛況で、登山旅行の企ても盛んだと云ふから、今後もこの熱を挫く事なく益盛んに發展して行かれる事を切望にたえないが、山岳會と云ふ名は、登山會とは聊か違ふものとして發達されん事を祈つておきたいと思ふ、數年前までは、大天井山と云ふ山が日本にあるか如何かさへ疑問であつた程のものが、今は所謂日本「アルプス」の目星しい峯が多少の記録を持たぬのは殆無いと云つて然るべきほどまでに進歩した、少くとも二

千八百米以上の獨立した山で登山者の名を本誌の上で見ないのは駿信境の小河内岳をのぞいて殆どないと思つて然るべき程までに山には登られたが東京市中から見得る峯の名を悉く數へ得る人は幾らもないと云ふ状態でありさうに思ふ、可なり多くの人に登られた山の地形が今尙よく分らぬのも少くなくあらう、山岳と云ふものを研究と云ふ程まで深く立入らずとも、記載し、調査すると云ふ上に於て幾多の事が残されて居ると云ふよりも、殆ど手をつけてないと思つて然るべき程度ではあるまいか、其の上山に就て種々の方面から研究するにしたら山はまだ暗闇の内にあるものではあるまいか——これを科學的の方面から考へても現在の説明は甚だ不満足な不完全なもので更に新らしき研究がなければ素人さへも合點しないほど、事實に合はぬ説明が少くない——高等學校の人と云ふ智識の程度では研究と云ふまで立ち入るのは特別な人の外には無理かも知れぬが、皆未來の多い人故この事を希望しておく事は屹度後日役に立つであらうと思ふし、少くとも種々な事實を集めてこれ

を排列して解釋する事の出来る問題を取扱ふ上に於ては、多くの同志にして常に顔を合せざる事が出来る、而して體力と時間を可なり充分に有する人を集めた、この一高山岳會に最適當な仕事で、殆外に適當な人を見出し得ない程の事であると思ふ、登山と云ふ事は現在の山の状態に於て決して多人數の團隊がやるのが便利な事ではない——富士とか御岳とかの様な設備の行き届いた山にしても尙然りだ——登山旅行だけの集團は何の意味もないものではあるまいか、山の話をするそれは好きなき者が集れば常に起る事でそれだけの會ならあんまり名義が大きくはあるまいか、然し雜誌を出すとか、講演會を公開するとかそんな結果ばかりを急ぐ事は一高の氣風にも合ふまいし、又決してお勤めいたし難い事だ堅實に内容が充實して有意味に發達して行かれたならば、或は日本山岳研究の牛耳は諸君の集りの人々の内から執る人が出様と思ふ、牛耳なんか執つても執らないでもかまはないが、一高山岳會の有意味に盛んになつて行かれん事を豫め祝しておきたい。(〇〇生)

机 上 談 山

○大日本陸地測量部の五萬一地圖が大分盛んな勢ひで出版されるのは甚だ喜ばしい、次第で、從來は山岳地に對しては地圖は出鱈目なもの、様に思はれて居たのが、一足飛びにこの實測の五萬一と云ふ立派な地圖に會つたので、急に地圖と云ふもの、價値が分つた様な氣がして、頗る有難い事と思はれる。

○それで該地圖をとつて、自分等が可なりよく知て居る處を調べて見ると、細かい部分にはまだ不足があるが、大體に於ては、二三標高が間違つて居るではなからうかと思はれる處がある事の外は、地形に於て不服の點は殆ど見出されない様である、たゞある圖幅には立派な岩峯を左様でない様に書いてあるのに、他の圖では實際以上にはげしく岩が書いてあると云ふた様な記號に不服な點は所々にある様だ、然しそんな事は何か圖の制式上の約束もある事と思ふから頗るよく出来てゐる——從來の出鱈目地圖と比べて考へると云ふ點も

少しは手傳ふかも知れないが——と申して差し支へは大してあるまいと思ふ。

○然し地形はよいが地圖としては頗る輕からぬ不滿な點が二三の圖にあると思ふ、それは地名の調査が不充分なのだと思はれる點である。

○それも空木岳に南駒ヶ岳とあつたり、惡澤岳を東岳、魚無河内岳に荒川岳を夫々あてたの等は、そんな名を實際にごこかで使つて居るか否かは知らないが、頗る耳遠い通用が甚だおぼつかない頗る不實用的な名であると思ふが、そんな名もあるものかと思へばそれで済む事で、そんな類を數へたら甚だ澤山あつて始末に困る様にもならうから、今後はなるべく一般に通用する様な——方面によつて呼稱を異にして一方の名は他方へ通じないものは、相當の約束の下に一方を正名とし他の方を副名として合はせて記載する事にして——名を採用する事にしてほしいと希望するにためておくが、如何しても間違ひで、都合がその爲めに甚だ悪くなるのである。

○それも例をすつかり出す程詳しく地圖をまだ見

ないから、ほんの氣のついた處を一二提出する事にする、金峯山圖幅で、奥千丈岳なる名を國師

岳の南の肩へ附けてしまつたのは甚だひどいと思ふ、金峯と國師岳の間の朝日岳とある峯が正に奥千丈岳の名を有すべきもので、三角櫓の位置と云い以外に格別山らしい形もして居ない國師岳の肩なんかにもその有名な名はヤリたくない、而してその狭い區域に同じ名の山が二つにらみ合ふ事はあるまいから國師岳の肩の地點の名に抹殺し朝日岳の名もすて、——ごつかで使つて居るなら副名にでもして——奥千丈岳の名をそこへつけるべきなのである、尙そのとなりの鐵山とある名も使用範圍は頗る疑がはしい様に思はれるのである、然しこれはまだ間違ひの少ない部なので、槍ヶ岳圖幅を見ると飛信越國の境が、鷲羽岳となつて居る、實際はその東北二九二四米の三角櫓のある峯が鷲羽岳とか單にワシとか呼ばれる峯で、目標になるべき鷲羽ノ池も圖にちやんとあらはれて居るのである、而して三國の境は蓮華岳なる名で呼ばれて居るのである、而してその南地圖に蓮華岳とある

のは正に雙六岳に當つて居るのである、これらの山の名は殆ど一般の通用を持つて居るので決して彼我相混じて使はれる様な事のないものであるから、頗る該圖の名は不都合であつて、その地方に行くとつては、人足の使ふ名と行き違ひが出来るたり等して仲々迷惑を起す事であらうと思ふ、これらの事の爲めに切角疵の少ないこの地圖に實用的のものとしての疵をつける事は決して少ないので、この點は大いに何とか御一考を願ひたいと思ふ次第なのである。

○本誌前號に於て、小島島水氏は所謂日本「アルプス」に恒雪の存する事従つて雪線を假定し得る事をのべられたが、雪線と云ふものが同氏の云はるゝ如く然く漠然たる定義を有するものとすれば雪線があるとかないとか云ふ事は一體何等かの意味を有するものになるのであらか、氷室の中の氷は夏も融け切りはしない、その中に雪を入れておいたら恐らく融け去りはしない、然しこれは誰も恒雪だとは致へはしまい、勿論當然の事ではあるが、何故であらうか、雪線と云ふ事が何かそれに

ついて特別な意味を語るのになければ雪線など、云ものは夢と同じ様な愚にもつかぬもので、これを何とか扱ふことは全く價値のない事なのではあるまいか。

○日本に嘗て氷河があつたとか云ふ事は、これを地質學の方から見れば一つの扱ふ値のある問題であるのかも知れない、然し何だか氷河が日本にならぬと云ふ事が世界的の高山の仲間外れる様な氣がすると思ふので、彌次的に何の彼のと理窟をつけるのは甚だ以て愚な企てだと思ふ、昔は昔今は今何と證明したとて現在氷河は日本に無いと云ふ事實は決して動かす事は出来ないのだから、如何彌次つても仕方はない事であるまいか。

○地質學と云ふものは他の多くの學問と同じく、その研究は、一つの假の土臺の上に事實と推論とを以て組み立て、行のであるから、如何にその事實が確かでも、推論は正しくとも土臺の假定がその構成された説に充分耐へ得るものでなければ、まだまつた結果が正當に出て來べきものではないのである、ましてちぐはぐな事實と自分勝手な推

論とを以て組んで行つては、たとへ土臺はしつかりして居てさへも、到底人に笑はれない結果が得らるべきものではないのであらう、素人が地質學をひねくつて説を作ると、往々この兩方の短所を兼ねたものが出来てしまふ事が多い様に思ふのである、茲で素人と云ふのは専門家でないと云ふ意味ではないので、地質學の基礎たる假定が如何なるもので如何なる弱點を有するが故に假説のまゝで居らなければならぬものであるかを、充分了解して居ない人は全部この内に含めるつもりなのである。

○山岳會の仕事も、たゞ山に登ると云ふ事は目新しい山についてにはほゞ一通りなしとげられた、あと其地形の調査——地圖は其縮尺の度に應じて、ある束縛を受けねばならぬから、ごく細かい處まで眞を語るものではないの故——も必要であらうし、動植物の有様を見るのも一つの仕事であらうし、其の外種々の仕事があらう、それらの時に上に云た言が何かを語る事が多分あるであらうと思ふ、何も地質學についてのみ云ふべき詞ではない

ので、多くの研究にその説の根本、長所短所をよく知りおく事は必要なのであらうと思ふ。

○時事新報で此の夏の富士登山大競争と云ふ事を企て、居る様だが、多く登山路もある内から、最も無趣味な——近いと云ふ實用的の方面からはいかにも知れないが——最も單調な、最も俗っぽい御殿場口を特に選んだのも凡そ推察が出来様が云ふまでもなくいやな愚な企てにはあるが、この事は富士山を公園地にしやうの、大連動場の設備をしやうのと云ふ、山を俗化する事を一生懸命に企て、日本一の靈峯たる富士山の長所を漸々切りとつて、人に近いと云ふその短所を漸々發達させ様として居る人さへある内に、俗の俗なる新聞社で企てる事としては、或はまだおこなしい部なのかも知れない、然し相當の頭をもつた所謂紳士連中が、御世辭かは如らないが快舉だの壯企たのごこれほめたてゝ居るのは、随分ひどい話して、人を誤まり世を俗に化する責は少くともその人々も當然負はねばならぬ事であると思ふ、富士、御岳の如く必要以上に設備の出来た、山來俗化して

居る山は、自然に愛好心なき人々に荒らされてしまふ運命を遅かれ早かれ持つて居さうだから、仕方はないとして、これら以外の地にその毒手の、びざる事を切望にたえない、山はこれを同志に語るべし、おのれの體力を知つて、自然の偉に驚く事を知らざる輩には語りきかすべき題目ではなさうに思はれる。

○日本の山岳地はあまり放任されて居る、早く瀛車でも通はせて、誰にでも行つて見られる様にせねば、折角日本の誇りたる山水の美も、行つて見られないから仕方がない、瀛車を風景の美を疵つけぬ様に引く事位出来やうと云ふ様な説を折々種種なもので見受る、手近い處で芝公園と日比谷公園とは如何設備をしても、品格が違ふと云ふ理由を一つ考へて見たら如何であらうか、瀛車は金さへ出せばどんな奴でものせて運んでくれる、自然は美しい景の前に關を設けて自然に愛好心のない耽美心の乏しい者はせきこめてしまふ、其選びがあればこそ美しくつて居られる處を、金を標準で選ぶ様に模様變へをして、それでもどの品格が

保てるのであらうか、その心を持つて苦しんで行つて見てこそ價値のあるのが山岳の美しさなのである、俗物の手から放任されて居るからこそ、山の有難味があるのである、外國の山が俗化して居るから日本の山も俗化させろと云ふのは、如何に物が分らぬ所謂紳士の言としても暴にすぎはしまいか。

○先例によつて亂言を例られてこの篇をつゝる、人の頭の蠅を追ふのもあんまり樂な仕事ぢやない、わが頭の蠅まで手の及ばぬのは、自分ばかりぢやない多くの人の常だと思つていたゞきたい。

(賀留原)

間 違 ひ

山岳第八年一三三頁下欄第十二行の下から十四行へかけて『即ち東西御荷鉢……………見えてしまつて居るの故』の二行は飛んだ間違ひであつたら、削除して頂きたい、自分はたゞうつかり大抵左様だらうと思つて、ちつとは人にもきいて見た

が、格別異議もない様だつたので、一寸前の如く書いてしまつたのだが、中村清太郎君から御注意を受けて、兎に角自分の見て御荷鉢山や稻舎山だと思つたのは全く違ふものなのだとこの事を、確に知たから取敢ず、間違ひの處を削除を願ふ事にした次第で、それらの山は全く東京市中からは恐らく見える事はあるまいと思ふ、方向に於て正に御荷鉢山等に當る峯は見えるがそれは東京市から見ると、丁度東西御荷鉢や稻舎山等の前に當る笠山、大霧山の脈や二子山等で、それらの峯の高さや位置を考へると市中から御荷鉢等はとも見えない事になると確かに思へるのである。

尙ほ「御前山塊」の記文中にはいろんな事の爲ちよいちよい變な處があるが、一々訂正してはきりが無いし、格別重大な處はまあ無い様に思ふから追て一まどめに訂正する折に小附にでもする事としやうと思ふ、たゞ御岳山の奥ノ院を那見男峯と云ふのであるのは誤植なんで那見男峯と云ふのが正しいのである、尙又小河内の温泉が河内にある様に書いたのは原の誤りである、これらは地名の

事故特に書添てついでに御訂正を願つておく。

(梅澤親光)

秩父山岳の記文

飛驒山脈や赤石、白峯の連中が盛んに登られるのは、偉きく高く人を引きつける處があるからには相異ないが、聊か流行ものゝ様な氣もする處がある、朝に夕に顔を見せて、その重厚な姿、その壯麗な彩に我等の心を引きよせて、その懷に抱れたく思はせる秩父の山々は、そのなつかしさに比べて多くの耽美者を持つて居ない様である、少くともそれに關する記文は甚だ僅かしか書きものとして現れては居ない、然し數は少ないかも知れないが秩父の山は、熱心な信者を持つて居たので、陸地測量部の五萬一地形圖の出來る前にその複雑した骨組みも、よく知り盡くされる事になり、細かい澤や山名等についても一通り材料が得られたので僅かな人の力で完成を待つ事はあまり多くの時を經やうからと、その人々——新たなる參加者を募

◎雜 錄 秩父山岳の記文 東京より見ゆる山のこと

ある。(一記者)

二〇四

るのでは決してないがこの集りの名を秩父會などと假りに稱して居る面々——に計つて、近き本誌の上に秩父の山々の記文をのせると云ふ約をした眞面目な熱心な人に富んで居る集りの仕事故、或は本誌の一二篇をのりごる程の材料もあるのだがなあらうと、思はれるほどの意氣組が見える、事最近と思ふので、一寸その計畫を發表して責任を持つて仕事を急ぐ様にさせたいと思つて以上の言をしたのである、而して右秩父會の同人は秩父山岳に關する一切に就て事の大小に係らず、多くの材料と報告を得て、記文を完きものにしたといふ云つて居られる故、その由を取次で大方諸君の御助力を願ふ事切だと申添へる次第である、右通信は便宜上東京府北豊島郡渡ノ川村田端西臺通六百二十二番地中村清太郎氏へ宛て、送られるを幸甚とする由である、でその秩父の山として扱はるべきもの、範圍は荒川、多摩川、千曲川、笛吹川、桂川等の水を出す附近の山々なのである、その麓の野の傳説や神社の由來記又は山岳の古名新名など云ふ様な方面の報告も甚だ以て喜ぶ處なので

東京より見ゆる山のこと (圖版参照)

都會の中でも殊に山に縁の遠い東京でも、秋から冬、早春へかけては、砂塵と煤烟の蔭から平野をどり巻く山々の姿が、先づ分明に望まれる。イヤ併し望めば望まれるといつた方がいゝ。烟突や屋根瓦の間からチラ／＼見える山の影を、廣告の繪看板程にも氣をとめない人々は措いて、少しでも「山」といふものに引きつけられる人は必ず何處からかその姿を眺め、凡その名位は頭へ浮べて或る慰藉を感じるに違ひない、まして激しい山岳宗徒は、「都會」へ幽閉された山民の子孫は、その寸線をもたぐり出して命の綱のやうに縋らうとするのだ。高等學校の烟突へ登つた人もあるさうだ、凌雲閣へ上つて東京見物の人々の間からあらぬ方へ眸を凝らした人もあるさうだ。併し日常の生活の隙々に出て來る山は登山家でも用意された心で對ふ餘裕が無いせいか、又はこの親しみ易い山々

にさへ餘り登つた人の少ないせいか、其の名さへ存在さへ中々思つた程廣く知られてゐないやうだ中にはヨホド思ひ掛けないやうな山さへ望めば望まれる——と氣がついたのも自分にはツイこの頃のことだ。

それは不二や筑波はいはずとも、道志山脈秩父群山、日光山彙は直ぐ眼につく、併し山は神秘の塊だ、中々一通りや二通りでは露はれないやうなものを持つてゐる。いつか自分は折々町や郊外のいゝ觀望臺を見つけては仄かな怪しい線のキレを見出すことに興味を持つた。東京から遠い雪の山が見える——之は近年「山好き」の仲間によく話しに出たことだ、あの白峯が六郷川の邊で瀛車の中から見ることが知れてからそれでも大分経つたが、この方は何山だかサツパリわからなかつた。たゞ折々遙かの空から都會を覗く白い幻だつた。丁度秩父山脈と道志御坂の山脈と裾を曳き合ふ邊から。之は冬でも餘程よく晴れた日でないと思めないやうだ、この四月廿——日雨あがりの珍らしくよく晴れた朝、恐らくこの春の最後の姿と見せ

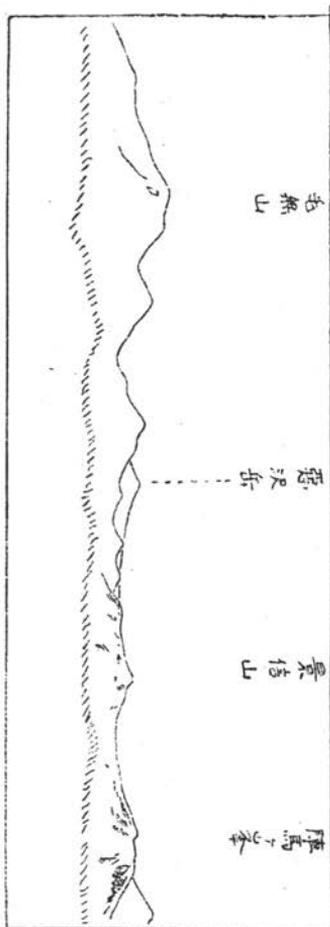
た。丁度この日本暮理太郎君は駿河臺の一端から望まれ（こゝに同君のスケッチがのせてある）自分は池袋附近からやはりその姿をやゝ臙ろ氣に望んだ。駿河臺からでは御坂山脈の右の外九大幡山と思はれるものと秩父山脈の左りの外れに近く景信山との間に出る。池袋からでは陣馬ヶ峯の左りの斜線に將に隠れやうとしてゐる。併し同じものに相違ない、同君とその晩落合つて、それは大概赤石山脈の惡澤岳^{△△}であらうと斷定した。形なり方角なりどうしても惡澤らしい、あの極く近年迄専門の書物にさへ皆目名前すら見えなかつた、生れつ放しの嘘のやうな惡澤岳、その惡澤岳が折々でも遠い天の一角からこの誇り顔な「智識の府」を覗いてゐたのだらうか。

三頭山は面白い、鋭い冬の晴天などにはどうかすると後ろの大菩薩岳、初鹿野山の連嶺へヒタリと蝙蝠のやうにハリついてしまつて、判らないことがある。曇り日か春先きなど、水蒸氣の多い空気を浴びると、影のやうな後ろ山からホツカリと浮び出て双頭をそびやかす。大岳へ肩車に乗つ

◎雑 録 東京より見ゆる山のい

たやうな御前山、御岳の奥の空多摩川の上に飛龍
 山の一峯前飛龍（嘗て南日君と一緒に登つた折私
 かに命じた名）の向ふから國司の一峯らしいの
 が横たはつてゐる、その飛龍の右鷹巢を踏へて大
 雲探の南の悠たりした傾斜へかけ黒い齒を三つ許

九米）ではないかと思ふけれど。
 秩父の中心ともいふべき位置のワナヅラ山は大
 雲探と白岩の間にその高い部分をチラと見せてゐ
 るやうだ、その影は二重になつてゐるらしいが若
 しや雁坂嶺が或はソツと額を覗かしてゐるのでは
 ないか。武甲はい、目



図原氏邸大埋蔵木道西麓河原於日四廿月四

り並べるのがリウバミの頭（二〇一二米）らしい
 それよりも微かなのは、その大雲探の雪の傾斜に
 ボツと黒點を打つものだ、今年二月木暮南日梅
 澤の諸兄と十條の停車場で双眼鏡を奪ひ合つてゐ
 た時始めて見付けた怪しい影だ、唐松尾（二一〇

赤城は日暮里邊の臺地からよく見える、そして
 日光の赤薙、女寶、男體、白根、から袈裟丸など、
 瀧縮になつた雪白と、冴え切つた藍色の鋭ぞく顯
 はれた日は、北風が強くて顔も向けられない。赤城
 と之の間に武尊らしい山が見えたこともあつた。

標だ、大雲探白岩の邊
 はどうしても秩父群山
 の心核になつて、一段
 高くセリ上がつてゐる
 丈け、曇る時が多いが
 武甲の隠れることは滅
 多にない、二子、大霧、
 笠山の平らな波で秩父
 が終る。

前の御坂山脈では毛無山が秩父の高尾、小佛を超えて中々壯大に顯はれる、御正體、加入道、大群、之と蛭ヶ岳とを踏んで不二が浮ぶ、丹澤山、塔ヶ岳、大山。池袋目白新宿澁谷、あつちの臺地からはこの方面がよく見渡せる、本郷元町あたりもいゝ、唯動もすると砲兵工廠の煤烟に妨げられる、山の手線の電車が池袋を通る時は氣がゆるせない、イツカこゝを通つた時同車の商人らしい人が「景色のイ、處ですナ、山がよく見えます、秩父ですカナ」と話しの間に挿んだ一言が自分を一寸喜ばせた。秩父の連山は春の夕日に背のびをしてゐる時だつた。冴えた冬の日には時どすると、山が驚ろく程強く町へ迫つてくる事がある、まるで松本の町から北アルプスの一部をでも眺めるやうに、そんな日に一度日本橋を通つた、濁つた水の上へ大雲採が高く白熱した稜角を削つてゐた、橋の上を通る人は皆ドン／＼過ぎてしまふ、橋詰の巡查は山に對つて立つてゐたが、その眼はモ少し近い處に落ちてゐるやうだつた。

遠い山の覺束ない線のもどかしさ、時には少し

でもいゝから近づいて見度くなる、一遍板橋から歩いて野火止の原（武藏野の中心）迄五人して出掛けた。梅澤君、木暮君、南日君、小島君、皆古くからの秩父通だ。東京を二三里離れるともう空氣の清澄が、驚ろく許り際立つて山を磨き上げる。秩父道志の山脈が全樺色の夕空に濃紫の幔幕を引き廻らした時には、小島君などはステッキを振つて躍り上つてしまつた。少しこつちの郊外へ出ると淺間も見える、筑波は至る處の木の間に躍つてゐる。澁谷から多摩川の方へ行けば臺地からは箱根も見える。

挿入圖版は時々郊外池袋附近から望んだ折、覺えに書き留めて置いたもので、武甲の左に有馬山とあるは參謀輯製甘萬にある名及位置で、全五萬「秩父大宮」に有間山とあるものに當り、又大平山天目山とあるものも該圖に謂ふ所のものであります。御覽の如く一通の説明圖に過ぎません、幾度か修正しましたがまだ怪しい點が多くあります、ごうそ御氣付きの節は御是正下され度く存じます。池袋では目白の方へ寄つて踏切附近と、それを通つて山の方へ向き長崎村の方へ通する道を一町程進んで左手を見ること雜木林の間に一つの圓塚があります、その上が眺望が宜しい。市中市外の他の部分から望んだものはイクラかは違ふが大同小異であります。（中村）

「瑞西風景論」の作者ジョン、

ラボック先生を弔ふ

今から思ふと、志賀重昂氏の「日本風景論」は、私に色々なことを教へてくれた、この本に書いてあること、例へば登山の氣風を養成するとか、又火山や火成岩の高山の案内様の小記事なども、私に多大なる興味を興へたに相違ないが、この本に添えてある同書の批評集から、私は初めてラスキンといふ名をおぼえた。

ラスキンを持ち出して、この書を批評した一人は、内村鑑三氏で、「近世畫家」から抄出した原文を、初めてそれで讀んだ、さうして一向わけが解らずに中止してしまつた。もう一人の批評家は、「帝國文學」の匿名氏で、これもラスキンに比べて、文學的方面から論評してあつた、その筆者は、瑰麗な文章と齒切れのいゝ句調から推して、私は多分高山樗牛氏であつたらうと思つた、今でもさう信じてゐる、それから後にラスキンが段々面白くなつて、いろんなものを耽讀するやうになつた、

ラスキンの名を——早晚おぼえるに決まつてゐるごするも——早く教へられたのは「日本風景論」のおかげである。

この本を愛讀してゐた時分、私はある英國歸りの紳士から「ラボックの英國風景論」を讀んで御覽なさい、あなたのやうな旅行好きの人には、面白からうから」と教へられたが、それほど氣にも留めてゐなかつた、一つは英學力の不足であるのを悲觀してゐるのと、も一つは、英國といふ國を、あまり好まなかつた、めである、何故と言つて、英國には火山も、その他の高山も、無いぢやありませんか。

そのうちに、ラボックの著書で「英國風景論」の外に「瑞士風景論」といふのがあつて、日本アルプスの旅行者や研究者には、傍ら参考となる本だといふ事を聞き込んで、わざ／＼英國から取り寄せて、讀み初めた、すると可なり面白くなつて、執務先の銀行へ通勤しながら、ポケットへ忍ばせて、時々デスクの上へ持ち出し、課長さんの顔色も一緒に讀みながら、青鉛筆で卷中の方々へ

underline を施したりしてゐた。

本年五月二十八日ロード、アヴェブライ逝去す
 とある新聞電報を讀んで、私は書棚の上から「瑞
 士風景論」を取り卸し、埃をはたきながら、ごこ
 となくページを繰へして、青鉛筆の横線の痕を眺
 め入つた、さうして嚴かめしい學者を失つたとい
 ふ感じよりも、親しみのある叔父さんを亡くした
 やうな氣がした。

ロード、アヴェブライといふ貴族の名の方が、
 一般には通つてゐるかも知れないし、又さう呼ぶ
 のが多分禮儀であるのかも知れないが、「我は鎮西
 八郎にて足れり」と言つたほどの矜持は、天分を
 重んずる學者にもあるであらうから、私はやはり
 一私人としての、ジョン、ラボックの名に懐つか
 しさをおぼえる、さうして卿と呼ぶ代りに、先生
 と呼びたい。

先生は山岳が好きで、長からぬ休日を、幾度も
 瑞士アルプスで過ごされたらしく、ハツクスレイ
 やチンダルと同伴して、有名な案内者ベンチンの
 嚮導で、ユングフラウを登つたとき、案内者の一人

が氷河の罅穴に陥つて、引き揚げに困難したこと
 などは、チンダルのアルプス紀行に、書様に描寫

されてゐるから、知つてゐる人が多いであらう、
 そんな緣故で、瑞西アルプスの山岳が、いかにし
 て隆起したか、湖水がいかにして成生したか、河
 流がいかにして、かゝる方面を取つたかといふや
 うな問題を、解決した本が欲しくなつたので、最
 も適任と信ずるチンダルや、その他の人に、さう
 いつた本を作つて、世人に便益するやうに勧めた
 が、チンダル及その他の人々は、夫れ々々手が明
 けられないので、却つてその編著を先生に慫慂し
 た、め當時地質上の諸現象で、その途の大家たち
 にも、解決がつかず、争論の焦點になつてゐるや
 うな大問題が、澤山あつたにも拘はらず、先生は
 その最も穩當にして、異論の少ないと信ずる説明
 を、綜合斟酌して「瑞西風景論」を脱稿したので
 ある、尤も時の名高い地質學者や、氷河學者が、
 種々の材料を供給されたり、又は親しく原稿校閲
 の勞も取られたらしいが、今日までに最も纏まつ
 た、又最も普遍に行はれてゐるアルプス風景論の

隨一であることは争はれない。

目次は、瑞士の地質、山の始原、瑞士の山岳、氷河の前代に於ける擴張、溪谷、河川の働作、河川の方角、湖水、風景に於ける層理の影響、侏羅中央平原、外廓アルプス、中央大山塊、ゼチヴァ湖、白山大山塊、及び以下數章で、圖版百五十四地圖二葉である、每章の始めに、名家の詩句、例へばバイロンや、テニズンなどが引抄してあるが、こゝにセオポルドの一句を掲げて置く。

山の内部が、吾人の心眼に、水晶の如く透明なるに至るまでは、吾人は眞に、山を知れりと言ふ可らず。

「瑞士風景論」も、そんなつもりで、書かれたのであらう。

先生の著書は、私の算へ得るだけでも、二十三種あつて外國にも多く翻譯せられ、弘く世の中に流布してゐる、一、九〇六年の計算に依ると「生命の用」といふ書は、十三萬四千部、「生の快樂」は第一卷が二十二萬四千部、第二卷が十八萬一千部（本邦にも翻譯がある）、「自然美論」（本邦では正

岡藝蔭氏が全部を翻譯された）が六萬一千部、賣り盡くされて、中には同一の書で、合巻本や、廉價本まで、別種として刊行されてゐるものもあるから、是等の書が、今もなほ權威と生命とを有して、多くの人心を感化してゐることが解らう。たゞしこの中で、私の讀んだのは、僅に「瑞西風景論」と「自然美論」との二冊だけで、前者は三四度繰り返して讀んだが、先生の著書として、最も有名な蟻や、蜂や、花に關する本に就ては、私は紹介する權能を有してゐない、「自然美論」の中の「山岳」といふ一章は、よほど以前の「國民新聞」に、翻譯されて連載された、たゞし譯者の名も、又この本から譯したといふことも、記載して無かつたが、私は文體や用語癖から推量して、それは徳富蘆花氏では無からうか知らと思つてゐる、また同氏の「不如婦」といふ小説の出なかつた以前のこゝと、記憶してゐる。

先生に對する私の追懷は、これだけであるが、も一つ是非言はなければならぬことは、先生ほど多能で、多方面で、精力蕪絶してゐる人は、殆

んど比べ得るものが無い、之を文壇に求めるとすれば、同じ國のバアナアド、シヨウぐらゐなものであらうと思ふが、人格に於て、人の師表になつてゐる點では、先生に及ぶべくもない。日本などでは、とても、とても、多方面といふ點だけでも足許にも寄りつける人は無い。

蟻の研究をするのに、朝の六時から晩の十時迄、一疋の蟻の行動を看視するために、殆んど傍目も觸らずに、附き切つてゐた人である、精力のえらい哲學者スベンサーも、先生の精力には、呆れ返つてその事を自叙傳に書いて賞讃してゐるといふことである。

「そのくらゐなことは、私にも出来る」といふ人が、日本にもあるかも知れないから、さらば次のやうな事までも、出来得られる自信があるかと、反問して見やう。

先生は歴史家である、「有史以前の時代」を著して、才幹を認められた人である、先生は昆蟲學者である、殊に蟻に關する生活や、習慣の研究では、世界的に有名で、蟻といへば、直ぐ先生を憶

ひ出させるほどである、先生は植物學者である、英國の野花などに關して、多くの名著を續出してゐる、先生は又博物學者で、一、八八一年ブリタニヤ協會の大集會を司會したとき、「科學の五十年」といふ大講演をして、各方面に亘れる該博の智識は、學者社會の讚嘆を得て、後に單行本になつてゐる。先生は教育家である、上記の外に、自然科學者として、研究や著述の傍らに、社會運動や教育事業に盡瘁され、倫敦大學の副總長となつてゐることが十一年間であつた、先生は政治家である、且つ社會改良家である、議員に選舉されて、下院に入つて奮闘すること三十年間であつたが、此の著るしい社會的功績としては自由主義のことから

時の大政治家グラッドストーンと闘ひ、或は又勞働時間制限法案を通過させたことで、そのために十八歳以下の少年の勞働時間を制限させ、又一般勞働者のため、就業時間を短縮し、休日を増加させるやうになつたのは、先生の人格の力で、數百萬の勞働者は、そのために永久の恩恵を受けてゐる、先生は貴族である、三十年間も一日の如く、社會

山

岳

や教育のために盡力された、めに、一、九〇〇年貴族に列せられて、上院に入られた、先生は實業家である、自分でロバーツ、ラボック會社を設立して、その社長となつて、長年月の間、倫敦實業家の重鎮であつた、先生は銀行家である、倫敦銀行協會の第一回總裁となりもしたし、又同協會の幹事として、廿五年も在職された。

まだある、倫敦商業會議所の會長になられた、ローヤル、ソサイエチイの副總長にも選ばれた、それからセント、アンドリュウの大學總長、萬國統計學會の第一會長、それから………私は實は、もう書くのがくたびれた。

先生は一、八三四年四月卅日倫敦に生れ、一、八五六年廿三歳で結婚せられ、その夫人の死後五年にして後妻を娶られ、本年五月廿八日逝去せられた、享年八十歳、未亡人と嗣子が現存されてゐる。(小島)

立山、白馬岳、黒部の地圖
出版さる

本欄に報じたる如く、山岳地々圖數多出版されたるが、八月九日に至り左記の如く新に出版されたり。

- 二万五千分一地形圖(假製版)ノ部
 - 日光近傍ノ内 五面 (大桑 今市 日光北部 日光 中禪寺)
 - 五万分一地形圖ノ部
 - 甲府號ノ内 一面 高遠
 - 和歌山號ノ内 一面 吉野山
 - 五万分一地形圖(假製版)ノ部
 - 富山號ノ内 二面 白馬嶽 黒部
 - 高山號ノ内 四面 大町 立山 五百石 八尾
 - 五万分一三色刷地形圖ノ部
 - 静岡號ノ内 二面 修善寺 駒越
 - 仙臺號ノ内 二面 仙臺 川崎

挿入の地圖に就き

本圖三角點並に米突は總て參謀本部陸地測量部に負ふものにて、その「網圖」を嘗て高頭氏の謄寫せられしものに據れり。又圖の下方三分の一弱

(信濃俣合流點以南)は既成五萬「井川」及び「南部」より採りたり、發足點田代迄を包含して一目の下に置かんと欲したる故なり。之を除ける他は悉く小生の臆斷なり、乏しき材料を基とせるに加へて、紀行を出すにつき急に稿を作せし故定めて誤謬多からんと覺悟す。且又地圖といふも何等特別の技能もなく、注意を拂へるものにも非ざる故、精粗甚だしく不均等、唯登山行の路次に便せんことをのみ慮りたり。

この邊詳密なる地形圖(五萬)は遠からず測量部より出版せらるべしといふ。それまでの中目下の處にては更に信憑し得る地圖なき有様なり、測量部の無き地方にては先づ農商務の廿萬を採るべきなれど、同圖もこの邊は流石に手のつけやうなく、赤石岳大無間山間に一の山名記載もなく、惡澤岳を抹殺し、聖澤と思しきものは赤石澤に合流せずして直接大井川に注ぎ、駿遠信國界は直徑一里も赤石岳に近く、而してその峯は或は上河内岳の如く或は仁田河内岳の如く信濃俣の大谷孰れなるか捉へ難く青蘆岳を葬りて東河内を有耶無耶にした

り。(中 村)

(编者)本號に載せたる地圖製版印刷の後、該地方の陸地測量部五萬分一地形圖發行されたり、されど敢て、此憶測圖を世に公にせり、觀者其意を諒せられよ。

○追 言

其後最近に發表せられし所によれば聖ヶ岳絶頂の高距は三〇一米！又惡澤岳は三一四六米！赤石を抜くこと優に二十六米、兼て考へたるよりも又更に高かりし。陸地測量部の五萬分一圖白峯赤石附近續々發表せらるゝに至れり、旁々本號紀行に添付せし小生の臆測圖には其後數多の誤謬を發見したれど、次號にて緩々訂正せんす。(中 村)

雜 報

山

岳

各地在住の讀者諸君の通信を望む、新聞の切抜、雜誌の摘録の寄贈を乞、將來の山岳史の材料となさんか爲めなり。
會員鶴殿正雄氏は毎號多數の材料を寄贈せられたるあり記して感謝の意を表す

淺間山の記

●淺間山人を殺す 廿九日淺間山爆發の際行衛不明となりたる荒井三一郎の搜索隊の一行は卅日午前十時出發して小淺間山一帶の搜索を遂げ更に淺間山東口より登山したるも當日は雨天にて濃霧深く四合目頃まで登攀せるも雲霧は愈々深くなり暴風雨は猛然として襲ひ來りて六尺位を隔て前進する人影は殆んど認められず折々劇しき鳴動起り搜索は全く不可能なれを以て一行は遺憾ながら一先引き還すの止なきに至り午後四時頃途に沓掛に引返し翌日の快晴を待第二回の搜索を爲んき準備し居れり群馬縣高田町消防組十餘名の一行も卅日夕來着同行搜索に従事する筈なり。
▲強烈な爆發 猶ほ今回噴出したる燒石を見るに従前燒き出した

る輕石様のものゝ異り恰かも岩石を打ち碎きたるが如き形狀を呈し如何に今回の爆發が強烈なりしかを思はしむ沓掛附近及び山麓の民心は一般に平穩なり。(岩村田電話)

●死骸遂に發見

新井三一郎の死骸は三十一日午後一時頃淺間山噴火孔の東約一丁に於て搜索隊中に在りたる同人の弟新井龜次郎の爲め發見されたり。

▲合掌して斃る 三一郎の死し居たる有様より見れば最初落下する熔岩のために脚一本を切斷され歩行すること能はざるに至れるより死を決して其の場に倒れたるものゝ如く合掌して居れり右の足の外咽喉部にも石にて打たれたる傷あり此の二つの傷が致命傷となりたるなるべし尙同人は羽織を被りて居れり。

▲危険猶迫る 此の死體を發見して將に收容せんとする際又も小爆發を爲したるに付其の危険云はん方なりしが親身の弟のこゝさて必死の力を出して死體を南方なる安全の場所まで引き下し無事沓掛まで擔ひ歸れり道もなきところを引下したる弟の活動如何にも自覺しく同行の人々何れも感じ合へり輕井澤分署にて檢視を行ひ午後八時の列車にて室田町の自宅に引き取る筈なり三一郎は曾て登山せるこゝ二回あり今回にて三回なりと兩親妻の外子供二

人あり(三十一日午後輕井澤電話)(六ノ一信濃毎日)

●淺間山の奇觀

淺間山は六月十三日早朝より深々たる噴

煙ありしが午後六時頃より少量となり七時頃には全く見えなくなり火口の頂上附近に當り約半時間薄赤色を呈せり其後も煙見えずなり午後十一時十九分二十八秒に始め低く終り高きゴアの音響あり暫時にしてドンと恰かも大砲發射の如き音響と共に急劇なる爆發地震あり約五六秒後に又も音響を伴ふ急震あり此時刻を讀み取りて後直ちに山上を見しに黒煙は猛烈に噴騰し頂上は赤く大なる火災を遠望する如く(黒煙と赤色の中間程の處)小兒の頭大なる火球の如き(抛擲せらるる熔岩なるべし)もの落下す其中電光の如きもの閃き其壯觀なること言語に絶すこの間斷へずゴアの鳴響を聞きしが同時五分には全く多量の黒煙のみとなり(幾部分は紅色を帶ぶ)翌十四日朝實地を調査せんを欲し登山せしも噴煙尙強勢なるゴアの鳴響の盛んなる爲め七合目迄にて中止せり但し七合目以上にて見得る區域には噴出物も見す。

●全山火と化せる淺間山

眠れる獅子が尾を伏す虎にも

似たる淺間の怪山時々山壁を震ふて人心を寒からしめし事數々なりしが俄然十七日午後九時四十三分に至り全山裂んばかりの大音響發するよと見る間に深々たる黒煙天を衝き火焔は巨柱となつて灼熱せる大石。熱灰を降りし實に是れ天明の噴火を目前に見るの光景を現じ今猶熾んに嚇怒しつゝありア、火坑の口。火焔の舌、黒煙の息は千丈地底の焦土を吐き盡さざれば止まざるか?

▲灼熱せる溶岩前掛山を蔽ふ。去る十二日頃より鳴動を始め同日正午及び十三日午前六時の二回に亘り大鳴動と共に夥しき噴煙有

◎雑

報

淺間山の記

りたる淺間山は其後引續き鳴動噴煙止まず數回に亘る小爆發有り山麓住民の心膽を寒からしめつゝ在りし矢先を又もや十三日午後十一時三分俄然大爆發を爲し小諸地方迄戸障子を震動せしめたる同山は又々十七日午後九時四十一分又もや空前の大爆發を爲すに至り今各地方より達せる報導に依れば

▲第一信 十七日午後十時二十分小諸發電に依れば本日午後九時五十分淺間山は突然大音響と共に大爆發を爲し山上は噴火の爲め一面赤色を呈し凄まじき黒煙は深々として大渦卷を爲し阿苦羅に似る煙柱天に冲する壯觀は實に物凄かりし(午後十時小諸發電)十七日午後九時五十八分一大音響と共に淺間山爆發し中腹以下一面の火の山と化し約十分間に亘りて凄しく燃たるを見たり(午後十時白田發電)同九時四十分頃淺間山は突然巨砲の如き音響を發して大爆發を爲したるも目下被害取調中なり

(同十時岩村田發電)

本十七日午後九時四十七分淺間山は一大音響と共に大爆發を爲し大地震動し家屋甚だしく動揺し黒煙深々として中空を蔽ひ火柱天に冲し溶岩は山上に飛散し其の狀凄慘を極めたるも降灰及び人畜には負傷無きものゝ如し(午後十時三十分輕井澤發電)

▲第二信 午後十二時小諸發電に依れば同夜九時四十二分俄然大音響と共に強震有り家屋動揺するも同時に大爆發有りて柱時計は外れ落ち戸棚箆の轉倒する有様に天明年間の如き大慘狀に接せんにはあらざるかとばかり山麓の住民悉く戸外に飛び出し遙かに淺間山頂を望視すれば前掛山全體に灼熱せる熔岩に蔽はれ恰も火の山の如き物凄き光景を目撃して中には泣き叫ぶ婦女も有り

て一時の騷擾は殆ど言語に絶せり、斯の如き有様には噴出せし熔岩は四合五勺目に在湯の平觀測所より下方尙五六丁の三崎附近に迄燒け石降下し來り漸次白熱光を發し火山館と觀測所中間の道路に落下せしものは地を深く突破して埋没し其の大ききを知る事不能なるも蛇堀川上流の湧出する所に落下せるものは直徑一尺以上堅緻質のものにはあらず其の他五六ヶ所に落下せしものあれど今尙手だも觸るゝ事能はざるの熱氣を持ち觀測所も一時は難を避くる不能と思ひたりしも幸に無難なりし震動の爲めか或は石の飛返りに遭ひてか二枚の硝子を破壊せらる。

▲壯觀極まり無き南面の山壁 岩村田町に於て遠望せる淺間山爆發の状態は十七日午後九時四十分頃突然戸障子に火光の反射せるを見たる人々はスツ大火事よと許り戸外に飛び出し四方を望めば淺間山は全山火を以て包まれ火團の轉々五合目邊の山麓に降下するにぞソレ淺間の爆發ださ異口同音に叫ぶ折柄黒煙は恰も螺鏢の如きコブ／＼したる形をなして數十丈の高きに立ち騰るを見たる刹那大音響は耳朶を劈く許りに轟き渡り大震動を起し蠶室にありし洋燈の墜落せるものさへある程なりき(十八日午前八時岩村田發)

▲溶岩噴出を前橋方面より望む 十七日午後九時四十分頃淺間山は激しき音響を發して爆發し戸障子を震動せしめたるが恰も表面より叩く様なりき之より先き大音響の發すると共に溶岩の噴出するを認め且つ火柱は高く數十丈に及びたり續いて黒煙の上るを認め長く北上州方面に延びたるが尙前橋附近には更に降灰の形跡は無かりき併し高崎方面は頗る多くの降灰ありし由にて目を明ひて

通路を往來する能はざる程なりしと尙吾妻地方や長野原松井田原町附近にては大音響ありしを聞き更に絶頂に溶岩の噴出せるを認めたるが何等の被害は無かりしも人々大に驚き戸外に飛び出した(前橋電話)

▲劍ヶ峰に溶岩落下は稀有也 今回の淺間山大爆發に當りて家屋の震動は非常に激烈を極め熔岩の噴出に際しては白晝の如き感あり人心恟々たるものありしが降灰もなく何等の被害を認めざりき唯僅かに淺間山に面せる壁の墜落せる所一箇所ありしのみなりし又香掛追分方面は家屋の震動猛烈にて戸障子は悉く外れたるが別に被害の認むべきものなく地方の人々は明治四十二年十二月の大爆發に比してより以上の大噴火なりと語りつゝあり(十八日午前輕井澤發)

淺間山今回の爆發は南面が最も熔岩の噴出激しき様子にて山麓なる小沼村大谷地、乘瀨、鹽野等は定めて被害を受けたるならんを調査したるに音響の大と震動の強きは近年に無きなれど戸障子の震動ありし外二三の硝子窓を破壊せるありしのみ別に被害はなかりしと尙大谷地附近の國有林の植栽成木に延燒し多少の被害を見たる模様なり數年來淺間山は時々噴火するも今回の如く劍ヶ峰附近迄も溶岩の落下せるは稀なる事なりと同地方人は談れり(十八日午前御代田發)

十七日夜の大爆發あるや淺間山頂は濃霧に蔽はれつゝありしが十八日午前六時頃に至つて山頂は雲の間より出現せるよき見へしも何等の音響無く前夜に増したる黒煙を噴出し忽ち北方へ降下したるを認めたり(十八日午前輕井澤發)(六ノ一九長野)

●淺間山噴火公報

淺間山噴火當時恰も觀測所に居合せたる西澤長野測候所長より本縣知事に宛てたる報告左の如し

十七日終日頗る靜穩に只時々白煙を見るのみにて地震も一回もあらざりしが午後九時四十分五十九秒突然大音響を發し急激なる地震を感ずると同時に(地震繼續時間一分三十九秒)「グアッパンパチン」の怪響と俱に大爆發をなし忽ち前掛山觀測所が噴火口の丘を望見する能ず)は灼熱したる熔岩に覆はれ全面火の山と化し凡そ三分の一は濃淡なる灼色となり加ふるに噴出する光芒又頗る猛烈にして其上濛々たる數十丈の黒煙を重疊して龍卷の如く抛出熔岩石火閃々として電光の如く空中より落下飛散の狀は流星群の如く又汽車の火塵の如し而して前掛山より轉落する火岩及び空氣震動との爲め全山波狀の如く動き其狀何とも形容すべきなく小職の如きは此の活動を誤解して全く全山を破壊して熔岩熱泥が觀測所方面に押流するものと思ひたる程なり又抛出せられたる熔岩は頭上を掠めて墜落し赫々たる光輝を放ち觀測所の屋上に落下する小礫は電鞭を打付けるが如く大なる火球がウツリをなして斜に急下する等全く火の雨と評すべく其狀の凄愴なる慄然たるものにして小職の如き一時は恐怖の念に驅られて施すべき所なく唯茫然たるものなりき最も遠方に抛擲せられたる熔岩は火口を距る事約十五丁字長坂附近にして次ぎは約十二丁を去る唐箕なり何れも暫らく高熱光を放ち居りたれば徑二尺以下のものと思はれず而して觀測所附近に火口を去る約十一丁より十丁を距る所にして四ヶ所に落下し就中路上に墜落せしものは深く土中に埋没し其影を止めず十一時頃尙未だ地中より盛んに水蒸氣を噴き出し其破片なる徑一尺の

◎雜

報

淺間山の記

岩石は赤熱色を存し居り又夫れより一丁程登りて湯の平の平坦地に至る時は落下無數にして大なるものは徑九尺の穴を穿ちて其の内に入り其の大なる破片長さ三尺五寸厚さ一尺五寸の岩石の穴内に現はれ居り十八日正午過ぎ尙ほ一分時間と手を觸る事能はず小破片は四五間の周圍に散亂しあれば墜落熔岩の全容積は小なりと雖も穴に現置しあるもの三倍大のものならんと思はる而して茲に異様の感あるは尙ほ進でん五合目間には落下熔岩至つて少なき事なり但し六合目以上は全く不毛の域に入るを以て落下影し夫れより以上は尙ほ危険の懼もあるべく又噴出岩石未だ冷却せざれば

徒步に困難する故中止して表口北大井鹽野より登る方面へ迂回觀察を遂げたるも別段特記する程のものも認めず推測するに今回の爆發に付き却つて近接しある五六合目には落下少なく又表面にも數多あらずして獨り西南の觀測所方面のみ遠方まで抛出せるより察すれば抛出線は此の方面に向ひつゝあり尙折を見計ひ火口を實査したる上更に報告致す可く候。

觀測所には何等被害なきと云ふべく但し淺間山に面したる硝子の算木に小石を打付けたる爲め硝子二枚と算木一本を折りたり翌十八日午後六時十分十七秒にも黒煙を噴出し震動時間一分五十秒の地震ありたり。(六ノ三信濃毎日)

●淺間小爆發三回

二十日午前二時より同四時迄の間に於て淺間山小爆發をなすこと三回に及びたり第三回のものより稍大なるものにして湯の平の地動觀測所より熔岩の噴出して山頂飛散する様を明かに望観するを得たり。(六ノ二信濃毎日)

●淺間山近況

淺間山は十七日の大爆發後には以前に比して噴

二一七

煙多量となり昨廿六日も亦小爆發ありたるが廿二日以来の状況を
示せば左の如くなるが廿一日は火口を視察せん爲め西澤測候所長
九合目迄登りしも煙多く嘯響又強く頂上に達する能はずして下山
せり。(長野測候所報)

▲廿二日朝來ゴウの鳴響烈しく鼠色の噴煙多量にて且つ淡紅
色を帯ぶ但し熔岩泥の孔目に溢出するゆゑならん。

▲廿三日、終日鼠色の噴煙騰す但し爆發はなし、長野に於て噴
煙の見得る否とは山上風向によるものゝ如く風向東若しくは南
東に吹く時は見るを得ずして北乃至西の風の時若くは殆んど無風
の場合に於て見るを得るならん。

▲廿四日、午前は稍平穩なれども十時四十五分三秒に急激の地震
を感ずると俱に爆發あり但し大ならず其後は始終鼠色にて霧の間
より時々望見同午後十一時五十二分五十秒地震と共に又々爆發せ
るが濃霧の爲め窺ふ事能はざれども音響によりて推察すれば小爆
發ならん。

▲廿五日、午前十一時まで濃霧あり晴れたる後は吐煙少量なりし
も南風強き故實際に知る事能はざれども煙頭線状をなさざるより
見るときは少量の如し。

▲昨廿六日、午前八時十分淺間山爆發して前掛山へ熔岩の拋出す
る事無數なりしが本月十七の爆發よりは小なるものなりし因に小
諸警察分署方の報に依れば音響震動等なく測候所は鳴響を聞かざ
れども黒煙は雲表に高く昇騰するを見たりと(六六二七信濃毎日)

●淺間危険に瀕す 淺間山は昨二十六日午後十一時五十分
頃突然闇を破りて大音響を發し爆發したるが時恰も曇天なりし爲

め其の状態を認むる能はざりしが廿七日早朝湯の平觀測所に問合
せたる處前掛山附近へは盛に燒石の落下するを認めたるが別に被
害は認められず其音響は去る十七日の時の如く大なりしと同山は
目下絶えず震動し居り九合目以上は危険にして到底登る能はず同
所以上には各所に小さき龜裂を生じ小煙を噴き出し居る状態なり
大森博士は廿五日加藤技師と共に調査の爲來り小諸町松屋旅館に
投宿翌廿六日早朝人夫と共に登山したるが前記の有様なれば登山
を見合せ折見て登山することに決し廿日頃に大森博士は下山の豫
定なるが加藤技師は猶ほ停留して調査に従事する都合なりと(廿
七日小諸電話)

●淺間將來の豫想 過日來縣し淺間山の調査をなしたる理
學博士大森房吉氏の報告書中の一節を摘記するに左の如し

抑々五月なる月は強き噴火多き時期に當るものなるが今年の淺間
活動も果して五月より勢力を加へたり今後一二月間は同様の状
體を持續すま假定せんに爰に又た八月も強き破裂多き時期に相當
するの事實あり然らば本年夏秋の候に亘り淺間の状況は如何なら
んか云ふに次の二様に想像せらるべし(一)今後一二月月の後淺
間噴火の勢力は一時休止して火山地震(微震)を頻繁に發するに至
るべきこと若くは(二)益々噴火勢力を加へ終に再び非爆發的の傾
向となりて二三日間より一週間も破裂を繼續する場合となり熔岩
が噴孔壁を超へて山麓に溢出することがあるべし但し替へて記せ
る如く熔岩は淺間より北方六里原方面に流出すべきも此れのみな
らず村落に迄格別危害を及ぼすものに非ざるなり、今假りに前記
(一)の如き最後の場合に立ち至るさせんに高熱の輕井澤及び山東

麓地方に降下することあるべし従つて蕨葎屋根の如きは稀れには火災に罹ると無きを保せざるも元々此際の際の破裂は強き爆發的ならしめて數日間繼續して次第に灰砂等を降下するの順序なきを以て格別恐怖するに及ばざるなり而して日下の如く噴火が主として爆發性なる間は此上更に數等の強さを増すとも灼熱の堅き熔岩片が輕井澤及び山麓の地に落下する患は無き所なりとす。

●淺間御獄兩局 淺間登山者の便宜を計り淺間山へは七月十一日より九月三十日まで郵便局を設置し郵便電信小包等を取扱ひ御獄も同様七月二十日より九月三十日まで局所を設くる由なるが此方は電信の取扱ひは爲さざる由。(六ノ二五信濃)

●御嶽山の山き 木曾御嶽山は七月一日より閉山されホツホツ登山者ある模様なるが先月廿六日既に帝國法科大学生田中博同三雄の兩氏登山し其の當時既に頂上にも殘雪なく僅に四ヶ所許りに僅かの殘雪を見たりと云ふ。

●惠那山登山 下伊那郡伍和村長縣會議員平野孝四郎氏は惠那山登山會を組織し本月十九、二十日頃登山せんじ目下伍和會地山本智里等の有志勸誘中。(七ノ一五信濃毎日)

白峰山村の生活難

山梨縣中巨摩郡廣安村は戸數百五十戸人口一千餘人にして入會地なる従前の御料林御勅使川水源地に於て古來の慣行により薪炭を

◎雜

報 淺間山の記

白峰山村の生活難

盜伐し之を賣却して一村の生活費に供し居たりしが畏くも先帝陛下の御治世に當り山梨縣下の山林荒廢を來し出水類々として損害甚大なるを思召され山梨縣管内の御料三十萬町歩の山林を縣有財産として御下賜遊ばされたるより縣廳は嚴重なる保護規則を設け所屬村の入山禁止を厲行したる結果前記廣安村民は薪炭の材料を得る能はず爲めに生活の基礎を失ひ糊口に窮するも山間の一村落さて耕作地の收穫物たる米麥及び雜穀等は僅かに一箇年間の二箇月を支ふるに足るのみ製板等の事業なきにあらざるも其収入は極めて僅少なれば昨今の窮境は目も當てられず一村を擧げて破産に瀕せる今日の場合家作宅地等を擔保として持ち歩くも銀行其他資產家等は相手になつて融通せず村民は家財道具及び衣類等を擧げて典物に供し盡し今は金を借出す途なく饑餓の困厄は日一日と迫るより百五十戸一千餘名の村民は此程總連署を以て其救濟方法を山梨縣に出願すべしとて奔走中なり

蓮華嶽鳴動

蓮華嶽方面に於て五月下旬より六月へかけ時々鳴動同山中腹の蓮華溫泉場へ入浴者及び同所より材木運搬に出張中の入夫等は鳴動を恐れ下山せり同山嶽は一昨年崩落せし稗田山つゞきにて同山附近は一般に火山脈にして五月二十八日の晴天に糸魚川街道なる國界橋の西方信越國境の小澤を同日越中賣藥商二人通行の際突然土砂押し出し二人は土砂の爲め死去せしこは既報せしが小澤の澤

蓮華嶽鳴動

二一九

◎雜 報 蓮華嶽鳴動

は蓮華嶽つゞきなり押し出したる土砂は稜田山崩落當時の土砂の如く硫黄の臭ひあり蓮華嶽は越後地籍にて同所は北安曇郡北小谷南小谷兩村の境界にて里程僅か四五里なり北小谷南小谷村地方は蓮華嶽の鳴動の爲めか時々震動あり一昨年稜田山崩落以上の大慘害を蒙りはせぬか人心恟々たり。(六ノ一七信濃毎日)

諸高山の晩雪及び融雪

山名	晩雪期日	融雪期日
淺間山	五月十六日(五月廿三日)	五月廿五日(五月廿三日)
三尾根山	同	同 十九日(同)
籠塔山	同	同 日(同)
烏帽子岳	同	同 十七日(同)
四阿山	同	同 六月十五日(五月卅一日)
武石嶺	同	同 六月三十日(五月廿八日)
蓼科山	同	同 七月四日

右諸山の中淺間山三尾根山の西方より籠塔山烏帽子岳は西南より四阿山の南方より蓼科山の北方より武石嶺連山の東北より夫々望見したる晩雪と融雪の時日を示したるものゆゑ晩雪期日は宛に角融雪期日は武石嶺連山蓼科山を除くの他は猶若干時晩るものなり、而して括弧内の時日は明治四十五年のものなり。(大正二年七月十七日 且來)



日本山岳會第六大會 の記

大正二年五月廿五日、風の静かな、好く晴れた日で、毎々雨にたゞられる、日本山岳會の大會の日としては、何だか思ひもかけぬ程ない、日柄であつた、午前九時には、もう幹事の面々が、會場たる赤阪三會堂の階下の一室に、そろつて陳列品の整理をやつて居る、白井理學博士や茨木猪之吉、丸山晚霞、田村政七等の諸氏が早くから見えられて、出品陳列に盡力をされたのは深く謝する處である、やがて神保山崎兩理學博士等も、それぞれ出品物を携へて來られた、規定の十時より二十分も前から、もう熱心な會員諸氏がやつて來てくれる、出品物が大方揃つて皆が息をついた頃には、もう

二三十人も見えられた、陳列室が、聊か手狭だつたので、見るのに少し手間取れる傾があつたかも知れないが、一々説明を求め、書籍等も打返して見られるので、三時間も一覽するのに費やされた綿密家もあつた様だ、午後三時から一きは混雜したので、締切るべき刻限を三十分のばして、四時半に閉鎖した、この晝間の來會者は、凡そ二百名もあつた様である、夜の講演會は階上の廣間に開かれた、小島幹事がまづ開會を宣し、尙山岳會の事業について、外國の例等を語られた。次で高野幹事は過去一年間の會務を報告され、日本「アルプス」の諸山も、前年中村清太郎氏が南「アルプス」の南部を踏破され小島烏水氏が鋸岳の最高點を究められたので、知られない山が殆無いと云つて然るべき程になつた様に見えるが、まだ委細に分ら

ぬ處だらけであるから、一層の精探を望ましい、又探ると云ふ事業が片付いても、尙調べると云ふ事業は、殆手がついて居ない處である、今後の希望を加へて述べられた、そこで小島幹事の紹介の下に

第一席『歐洲「アルプス」旅行と其感想』の題で、丸山晚霞氏が、拍手に送られて演壇に立たれた、聊聲は低かつたが氣焔は高く、氏獨特のバンカラ主義を振舞して、まづ聴衆の膽をぬき、盛に笑話を交へて、歐洲へ遊ばれた途上所見について多くは美術上からの觀察や感想を事細かに物語られた、(氏の講話速記は本號を見られたし)

第二席『本邦火山の近時の活動に就て』の題で大森理學博士が講演をされた、即有珠岳、三原山、淺間山の活動を多くの事實を順よく排列して、火山活動の有様に就て、吾々の如く全く火山等と云ふものゝ智識のない者の耳にも、はつきり入る様に丁寧親切に説かれた、(博士の講話速記は次號に出づべし)最後に

第三席『信州より越中へ』と題して、辻村農學士が

幻燈説明をされた、即同氏が前年信州大町より針木峠を越えて、越中立山に遊ばれ、更に五色原を横切つて、薬師峠へ行かれ、天候の都合で有峯へ降られた旅行談であつて、同氏は丁度少し健康を害して居られた爲か、前年の第五大會に於ける赤城山のお話の如く、警句口をついて出でるおもむきには、聊乏しかつたが、山を戀する氏の態度は、よくその説明にあらはれ、加ふるに印書が多く、頗鮮明であつたので、會衆諸氏に多くの快感を與へた事は、殆一葉ごとに拍手相ついだのを以ても知られ得ると思ふ、斯くして七十枚ほどを寫したつて、小島幹事が閉會を宣したのは午後九時四十分、午後から聊風が出て、夕刻からは大分雲が加はつたが、雨の心配は遂になかつた、夜の會衆はちよつと三百人程であつたらう。

同日は例に依て入口に机をおいて、來會者芳名の御記入を乞ふ事としたが、混雜の爲洩れなくと云ふわけに行きかねた様である、ともかく御記入を乞ひ得た方々の内、本會會員だけを記録する事とする、これにも洩れがある事勿論だ

根岸元吉	濱谷泰次郎	關口	泰	田邊義雄
本山侘吉	齋藤菊三郎	仲尾錠吉	二階堂保則	
辻村太郎	小野崎良三	山田健吉	酒井忠一	
今田十五郎	田中阿歌麿	白井光太郎	山崎直方	
丸山晚霞	寺尾新	平福百穂	田村旨達	
關戸一平	野口米次郎	福井玉夫	山内淳一	
田澤喜代造	坂入實	加山龍之助	大木操	
百瀬慎太郎	守田豐藏	大井信勝	金子良吉	
日高信六郎	武田信	高橋政次郎	矢野宗幹	
深井武司	石田竹太郎	塚本文助	冠松次郎	
田中健太郎	村高幹博	池野成一郎	平野次雄	
武智直道	荻野勝五郎	甲藤新	鳥山悌成	
内藤安城	五味泰造	遠山祐三	濱名増雄	
野崎靜太郎	中村孝二郎	佐藤傳藏	豊田金之助	
服部與兵衛	德永幸助	岡田秋嶺	別所梅之助	
櫻井愛二	今村巳之助	星野爲太郎	岡野德之助	
北澤基幸	小林兼次郎	竹内運平	木村廣畝	
加藤竹三郎	石谷讓二	忽滑谷安美	大森房吉	
田村政七	茨木猪之吉	近藤茂吉	高頭仁兵衛	
高野鸞藏	辻村伊助	梅澤親光	山川默	
三枝守博	小島久太			

尙一般來會者の内には神保小虎、磯萍水、野尻正英、高木背水、小林房太郎氏等知名の人々をも見

受けられた。又會員中ても百瀬慎太郎氏の如きは、わざ／＼本會大會に出席するため信州大町から出て來られたのである。

出品目録

齋藤菊三郎氏

- 出羽庄内酒田風景
- 甲州身延山圖
- 改正地球萬國全圖(長久保赤水撰)
- 水會御岳山全圖
- 房州圖
- 大明九邊萬國人跡路程全圖
- 晃山眞景
- 水會街道名所一覽(葛飾北齋撰)
- 二水合流圖
- 風雨賦國字辨(安永五年中西敬房著)
- 觀瀾圖誌(鎌田梁州著)
- 東海紀行(井上通子等)
- 本朝奇跡談
- 丙辰紀行(元和三年林道春著)
- 本朝地震記

諸國里人談 (寛保三年菊岡米山著)

箱根山温泉圖會 (弘化二年)

筑波山名跡誌 (安永九年上生庵亮盛著)

小島 水氏

現存水河之特性 (ホツブス作)

瑞士蘭土 (シングルトン作)

水曾圖幅地質說明書 (理學士野田勢次郎)

東海道風景圖會 (廣重作)

米國地學雜誌

ヨセミテ溪谷

ロツキイ山一望圖

アルプス山繪ハガキ帖

ヒマラヤ山水界紀行 (ウォークマン博士及夫人)

マツキンレイ (詐欺) 登山紀行文 (クツク博士)

西藏紀行 (アーチスト、ネヴェ)

アンデス山及アマゾン河 (レギノルド、エノツク)

アルプスの自然及歴史 (クローリツヤ作)

アルプスの建築 (ホンネイ教授)

布哇火山 (ヒツチコツク作)

アルプス詩集 (アツクスバツテン作)

アルプス山柱曆 (昨年及今年の)

米國大雪山 (ウイリアムス作)

美濃飛驒地質圖 (明治三十年版)

マツタアホーン

百富士圖畫

山王眞形

田中賢太郎氏

本澤温泉より見たる箕冠岳の爆發口 (八ヶ岳)

夏澤溪谷 (八ヶ岳)

沼尻より望みたる黒檜山 (赤城山)

小高 秀一氏

淺間山之圖

和州芳野山勝景圖 (貝原益軒先生撰)

安藝國廣嶋勝景圖 (同上)

高頭 仁兵衛氏

下諏訪の宿屋 (廣重)

田毎乃月 (廣重)

贊川之宿屋 (廣重)

山登に用ぬしと云ふ古面 (出所不明)

今田 十五 耶氏

熊野百景繪はがき帖

紀州那智山金剛杖

那智本宮産籠

熊野百景寫眞帖

酒井 忠一氏

熊野百景寫眞帖

シベリア有用鐵物分布圖

神保 小 虎氏

關 口 泰氏

岳 山

赤城山の春 (清水柳太郎氏作)

志賀重昂氏

キラウエア火山 (熔岩其他)

數點

理學博士 山崎直方氏

スイス山麓の風俗 (アールカウ地方)

イタリヤアルプ、ルカノ湖附近山民の背

負ひ籠と下駄の標本

去年の柱曆 (アルプス山小屋の模形—故坪井博士寄贈) 一

スイス製普籠 (大人用、兒童用)

スコットランド山婦とホンカリア牧夫の袋

チロールの酒盃

チロールはオーストリア領アルプス山中にあり山民由來撲直勇

武を以て聞え古武士の風あり酒盃の句を直譯すれば

チロールの國のしるしの赤鷲よ、

なれが羽色は誰が染めし、

茜さす朝日の光、

紅したる葡萄の酒、

にくき敵の血汐のしづく、

これぞ吾身の色にてありけれ。

野口米次郎氏

南岳廟銅印

南岳廟

南臺寺

竹皮草鞋

南岳

中華民國湖南省衡州府衡山縣に在り支那五岳の一にて衡山と云

ふ最高峯を祝融峰と云ふ四、六五〇呎

支那南岳 (衡山) 土産

大谷光明氏

スタンレー山 (ルウエンズリー群衆中の)

理學博士 白井光太郎氏

伊豆日金山周觀圖

木曾伐材之圖

田中阿歌麿氏

諏訪神社上在大祝家所藏御神渡注進用の諏訪湖の舊圖寫

文政十三年 1828 濱中島撤去後のもの

千野氏所藏圖の寫御神渡注進用の諏訪湖の舊圖

天和三年 (一六八三年) の製圖に係るもの

諏訪神社上社大祝家所藏浮城時代の諏訪湖の舊圖寫

天正末年 1591 又は文祿 1602—1605 頃のもの

諏訪神社上社藏諏訪湖現存せる最古の御神渡注進狀の寫真

嘉吉三年十二月十日 (一四四四年一月九日)

大正二年二月諏訪湖の御渡の寫真

大正二年二月諏訪湖の御渡の寫真

大正二年二月諏訪湖氷上の割目の寫真

大正二年二月諏訪湖の御渡の寫真

大正二年二月諏訪湖の御神渡黒きものは湖底の泥土を押し上げたる

もの寫真

岳 山

◎會 報 出品目錄 出品評判記

冬の諏訪湖畔大正二年二月水温観測の寫眞

大正二年二月檜原湖長嶺附近氷上観測の圖の寫眞

同 年同月冬の盤梯山檜原湖上より望むの寫眞

同 年同月小野川口排水に附近の人家の寫眞

同 年同月小野川口氷上橋送の圖の寫眞

同 年同月小野川口氷上橋送の圖の寫眞

同 年同月小野川口氷上観測の圖の寫眞

冬の秋元湖大正二年二月の寫眞

秋元湖の氷の寫眞

秋元湖の結氷遙に沼尻火山の火口を望むの寫眞

川上温泉の寫眞

浅間山、焼岳、三原山、有珠山の噴火寫眞

伊豆大島三原山の噴火第二期の新山

同 上 夜間の光景

有珠山の噴火明治四十三年十一月十日撮影

有珠山を洞爺湖饅頭島より望む (隆起現象)

明治四十三年八月北海道有珠山の噴火

浅間山の噴烟 (小諸より望む)

焼岳噴火孔の北縁より噴孔を望む

上高地附近より焼岳を望む

浅間山を上州吾妻郡鎌原村郊外より北方に望む

浅間山噴火孔底の状況

上野國吾妻郡小宿村常林寺の釣鐘

浅間山天明年間の大熔岩

二二六

梅澤 親 (光氏)

丸山 晚霞氏

數十枚

數冊

歐洲アルプス及其他寫生畫

余が採集せしアルプスの植物

山岳書籍

伊太利山岳會樓上よりの展望觀

登山用防濕袋

彼我アルプス山民の木彫

アルプス金剛杖

アルパイン、シー

登山用手桶

登山用シート

出品評判記

見わたしたところ、圖書類が多くて、器具が割合に少なかったが、圖書類の中では、珍重に値ひする稀品もあつた、寫眞は大森理學博士の浅間山、有珠山、三原山等、學術上參考となるものが多いので賑わつた、例に依つて、一とわたり見渡したまゝを書く。

○酒井子爵出品の那智山金剛杖は、四角に削つて、

梵字を焼印したのが、富士山などの金剛杖と違つて、宗教的に見えた、他日金剛杖ばかりの、陳列會をやつたら、面白からうと、ふと思ひついた、那智産の草蓆で編んだ籠も、おもしろかつた。

○齋藤菊三郎氏は、例の通り、多くの古繪圖や、珍本を出品された、同君の陳列品は、いつも場中に異彩を放つて、呼び物の一になつてゐる、出羽庄内酒田の烏海山は、昔の木版繪によくある型の火山で、傾斜は決まつて、實際より急峻に描かれてあるところは、古人の山に對する畏怖の情を、線を以て叙したものと見られる、烏海山の絶頂だけを、全體の赭褐がちの色調から、一變して、黒く塗つたところは鑛鑿狀の熔岩でもあらうかと思はれるが、さういつたところは、やはり寫實をしてゐる。

○山崎理學博士(直方)は、親子道連れのサツクを、大小並べて出品せられた、小は柱曆に、おもちやのサツクを結びつけたもので、おもしろい趣向であつた、大は歐洲アルプス登山に用ゐられるもので、そのしよひ方まで、繪をかい添えられたの

は、注意周到、チャールズの酒盃も、我々には獲がたく珍らしいものと思はれた、それに添えてある説明書の中、同地方の右に關聯した詩句を譯されてあるが、本號目錄に轉載してあるから、參照せられたい、この外同氏出品スコット高原地方山婦の編んだ袋は、アイヌ人の編んだそのやうな、原始的なものではないが、青地の衣を白糸で刺繡して、赤い筋を入れてあるところは、かういつた山地の地方色を思はせる製作品であつた、同氏の出品は、そのまゝ、山岳博物館に納めても、然るべきものであらう。

○白井理學博士(光太郎)は、木曾森林伐採の長大な繪卷物(原本)を出陳せられた、これも稀有な珍品で、しかも同氏の専門を離れてゐないところが、用意の程を覗はれる、ところへ、蟲喰ひもあるが、淡彩を施こされてあつて、單に風俗歴史上の參考ばかりでなく、美術上から見ても「木曾川管流狩下の圖」などは、立派な作品で、綱張の圖などは布置の上から言つても、趣味のある作畫である、元木見立から錦織狩下まで、長い繪卷物を、各圖とも

それ〴〵異つた味を以て見る事が出来た。

○加子母山村木伐出の圖は、山形で天地を潰して、その真中に、谷を描き、岩を描き、或は梯子を描き、山小屋への道路を引くなど、至つて裝飾的に結構されてあつたが、之を原本として、長大な屏風、又は唐紙にでも、描き直したら、立派な模様風的美術品が、出来得られやうかと思つた。

○梅澤理學士(親光)の出品に係はる武藏圖木版着色舊圖は、青い山が茶饅頭のやうに、鳥眼景風に圓く累なつてゐる、そこを見ると、秩父郡である、かうして見ると、武藏も随分山の多い國だと思ふ、今日でいふ飛龍山は、この地圖では單に權現となつてゐる(尤も飛龍權現が、山の上とかにあるさうだ)今のハフといふ山が、眞の澤となつてゐる、今日では村落としての存在すら定かでない小佛が大きい邑に描かれてあつて、八王子が、それよりも小さい邑に描かれてあるなどは、峠と人文の消長史の、参考になるであらう。

○今田十五郎氏は、廣重の浮世繪を、額縁つきで出品せられた、田毎の月は、月を「くらげ」形に

印影されたところに、面白い線をうかゞはせる、木曾街道贄川の宿屋は、廣重の面目躍如たりで、徳川時代の驛路の、忙はしい、賑やかな、併しなから香氣な、演劇的生活を描きあらはされてゐる、私は幾度もこの繪の前に立つて、過ぎ去つた時代の匂ひを嗅がうとした。

○大森理學博士(房吉)の出品された寫眞の中、淺間山天明年間の大熔岩は、北上州方面に流溢したものを、撮られたもので、淺間噴火孔底渦卷狀の燒石のそれも、學術的印畫として、貴重なものである、殊に天明噴火の時、吾妻川の底に埋没したのを發見探掘した吾妻郡小宿村常林寺の梵鐘は、大自然の活力と、運命の數奇とを、緬ひ交せにして、そこに神秘的な冥想が鑄り込まれてゐはしないかと思はれる、聴きたいのはこの梵鐘を撞いたときの隱々たる聲である。

○その外三原、有珠、燒岳、淺間等、活火山噴出の光景を撮影された寫眞が並んだのは、さすがに火山國山岳會の陳列品であると思はれた、歐洲アルプス山下に、この有益なる材料は、ないのである。

○本會名譽會員志賀重昂氏は、布哇土産の熔岩數個を出品されたが、布哇の邦人が工夫したといふ、同地キラウエラ火山の熔岩から製作した工藝品は、出來榮えは兎も角としていかにも新しい思ひつきであつた、同氏は自筆の墨痕淋漓たる説明書を、右に附せられた。

○諏訪湖の史料が澤山に出てゐる、と言つたわけでも、それは本邦唯一の湖沼學者、田中子爵（阿歌鷹）の出陳されたものであることが、既に解るであらう、詳細は本號の出品目録を一覽していただきたい、嘉吉三年御神渡の註進狀寫しなどは、歴史家にも有益なものであらう、御神渡の後の湖氷隆起の寫眞は、湖沼學に志ある人々の是非入手したく思ふところであらう、しかもそれが大正二年二月の撮影で、最も新しい材料である、諏訪湖浮城時代の地圖も、有益なものであつた、因にいふ同氏の諏訪湖を研究された大著作も、近々出版せられる由であるから、是等の材料と對照すると、更に一段と興味のあるものにならう。

○高頭仁兵衛氏は、和州芳野山勝景繪巻物を出品

されたが、雪のやうな花瓣を、印象派の畫風のやうに、點彩で凸く出し、紙地を青く白くぼかしたところは、注意を惹いた、作者は不知、相應に古いものであることは疑ひない。

○中村清太郎氏の「雪の大井川奥山」原畫は、「山岳」に掲載された木版畫のそれと、對照すると、筆力を顯はしたオリジナルと「刷り」の藝味を加へた版畫のそれと、夫れ々々異つた趣を見せてゐるのに、氣が注ぐであらう。

○關口泰氏出品清水柳太郎氏作「赤城山の春」は、黃の色調の克つた、柔らかい感じのする油繪である、小高秀一氏の八ヶ岳等の油繪と相待つて、場中の異彩であつた。

○本願寺の大谷光明氏からは、ルウエンゾリ山やそれに點景された熱帶植物の寫眞を寄せられた、私はルウエンゾリ山の大なる探險者ジューク、アブルデゴヒマラヤ山の探險者大谷光瑞伯とを、いつも連想しないことはない、さうして特筆すべき、この内外二貴族の名は、永久に登山史上の花であらう思つてゐる。

○新歸朝者で、この大會の講演者なる、丸山晚霞氏は歐洲アルプス寫生畫數十枚を、壁間にかけて宛らなる山岳水彩畫展覽會の觀があつた、この外にスウイス地方の高山植物標本、高山鳥、山岳地製作の工藝品、寫眞繪ハガキ等で、陳列室の略ぼ五分の一ぐらゐは、同氏の出品で覆はれたほどであつた、それだけ同氏の出品に、最も多く見るべきものもあつたわけである。

○この外、書籍圖書の出品も多かつたが、一々解説を附することは省略する。(さんわう生)

大會があつてから、二ヶ月半も過ぎて、この評判記を書いたのだから、忘れたり、間違つたりしたところも、大分多からうと思はれる。

會員登山報

△南日重治、中村濤太郎兩氏は木暮理太郎氏と共に五月中旬甲府より金峰山に登り御室川嶺に野臥、奥千丈岳の絶頂を極めて國司岳に達し、頂上直下の傾斜に露宿、連續を傳ひて甲武信岳に至り千曲川上流の廢屋に一泊、信州川上村梓山に下り更に十文字峠頂より「又ノ澤のウラ」なる岩峯に攀ち、三寶山(二四〇〇米)に拔

け再び甲武信岳に登り、雲切山(二四〇〇米)を経て荒川上流木賊谷の源に野臥、破風山雁坂山を縦断して雁坂峠舊道を秩父栃本に下り、一週日にして歸京したり連日好晴南北アルプス殊に自峯赤石の諸高峯の雪容最壯觀を極めし由。

△廿五日午後滑川を發し岩崎寺に宿泊、廿六日午前四時十分發午後五時室堂着、近藤サンに奇遇、六時發雄山にのぼり日本海に沈む太陽を見候、廿七日近藤サンに御供して淨土より龍王をへつり鬼ヶ岳より佐良峠の少し東に出で五色ヶ原に中村サンにあひ天幕に御厄介に相成り候、夕方大鷲、大鷲にのぼり、夜は星を仰いでをり候廿八日七時佐良峠の上へ下り平ノ小屋へ九時頃着、飯をたき結飯などいたせし爲十一時發カゴ渡して黒部川をわたり候、黒部は水少く倭小なる小生も膝を浸する位かと思はるゝ位に候、五時針木峠に着、蓮華岳にのぼり、針木峠越中側にて夜營、廿九日即本日、午前六時針木岳に登り五色ヶ原にテント二つを發見踴躍、九時廿分峠を下り十一時、島山小屋通過二時野口に着休憩、五時過ぎ大町對山館に一段落を劃く候、之申して白馬行はよして姫川を再滑川に出づるにて候、天氣毎日よろしく眺望絶佳。

(七月廿九日信州大町にて關口泰)

△(前号)十九日夕上野發途中汽車故障有之候爲め二時間遅れて富山に着行李一個遲着の爲めに廿日富山一泊廿一日平藏宅に一泊翌日立山温泉泊、廿三日室堂一泊、本年は殘雪甚だ多く貴兄と共に來らざりしは残念に御座候廿四日九時雨天中劍澤に下り長次郎澤上に野營翌廿五日平暗六時出發濃霧中を九時無事頂上着、時々白馬方面を望み申し候例の岩窟を何か尋れ申せしも石崎氏一行の

名刺の外に最早や何物も残りなり不申候

露路は頂上より直下別山峠續きの尾根に下り左したる困難も無之
四時間餘を要し別山峠に到着峠直下の一高地に野營いたし候(降
路は平藏と二人連にして登路には長次郎をも引連れ申して同人及
他の人夫は「平藏澤」を下り申候)天幕外の焚火に暖りつゝ九時
過ぎまで山々の暮れゆく様を心ゆくばかりに眺め申候

本日は昨年の廿四日に勝れし快晴にして大日登り豫定を變更して
別山より雄山に登り正午室堂に到着昨年の腹いせに甘酒の大振舞
を致し申し候明日龍王を佐長峠に下り槍迄縦走來月四日頃上河内
に出て十日以前歸京の考に御座候中村君には明日五色ヶ原にて遇
ふ豫定にて候(立山室堂にて近藤茂吉)

△去る七月廿七日大町發大澤泊廿八日針木峠より蓮華を極め針木
岳を絡みスバリ裏泊廿九日大スバリ小スバリを赤澤鳴澤を経て新
越泊卅日午前午後發扇澤を経て爺ヶ種池より十五分ばかり前進
南峯尾根裏の池に一泊

卅一日此日も午前中雨の爲休午後一時發霧の中を爺岳を超えて鹿
島槍南槍西裏三角池に泊八月一日七時發北槍に至り八ヶ峯の模様
を展望し岩石の急斜面を尾根傳ひに降下し燕岩の險崖をすきて第
一のギレット八峯の難場着九時

此處にて路を探すに五時間を費し漸く越中側の假松ハンノキの葉
尾根を下り(ギレットより小さい尾根を三つばかり南を)對岸の
ピークより落つる空澤をのぼりそれより二つばかりの峯を超えて
五龍より三つ目の峯の尾根に着五時

◎會 報 會員登山報

八月二日五龍を極め國境山梁を傳ひ大黒岩の頭の假松を切り抜け

八日二日五龍を極め國境山梁を傳ひ大黒岩の頭の假松を切り抜け
續山の道に沿つて平川の雪溪を降り四ッ屋着午後九時半三日第六
回白馬登山を試み昨日山頂より下り午後九時漸く歸宅仕り候最
初の目的は大町より鹿島槍五龍間逆走の新レコードを作り縦走を
白馬絶頂に終らんせしも大黒岳に至り草鞋の欠亡の爲遺憾乍ら
四屋に降りしものに候も後に細野人夫より大黒嶺山に至れば草鞋
米の上げ置きしもの有る由を聞き及び候も今更の事と相成殘念に

候ひき人夫は勝野玉作傳刀林藏伊藤菊十の三人同行者は大町中學
校奏教師に候二つ目のギレットとは五龍の南二つ目のピーク邊の
事と考へ申候此は岩を絡んで渡り得べく候八峯の渡場所は白馬方
面より來る人には大町方面よりするものに竝べて割合に發見し易
きよしに候こはギレットの南(大町側)尾根は築が繁く尾根上よ
り下方の谷の様子は展望し難く北方五龍方面よりは河原小屋谷に
落込む數條の澤及尾根の容子を瞰取し得る故に候

前年中村氏の縦走の折の困難も思遣られ候鹿島槍絶頂にて數日前
五龍より來られし高橋氏の名刺を見申候

此度の逆走は思慮深き林藏と玉作の猛者との調和により成功せし
ものに候小生等の渡り場所は山稜より約二百二十米突を降りし所
に候

スバリに泊りし時翌朝針木岳三角點に望みし二人ばかりの登山者
の姿は後にて關口泰氏等一行と察し申候

鹿島槍うら泊りの夜薬師岳北尾根に野營の焚の見え候折玉作が近
藤さんならん申居候

白馬岳にて信濃山岳會の矢澤氏一行に會し申候天候も善き方にて

◎會 報 會員登山報

候ひき榎谷氏は一昨日立山方面へ小島樺御令弟も同日登出發いたされ候由小生留守にて兼て小島樺より御手紙頂き居候も御面仕らず失禮致候(大町百瀬慎太郎)

△七月廿四日月山に登り海拔一九〇〇米以上の地にアルプスの珠玉たるエーテルワイスの盛んに咲けるを見て快哉を叫び一株を採つて貴下に捧げ申候(月山にて山崎直方)

△七月廿一日山木旅館出發白馬岳より祖父岳まで縦走致し候天候頗るよく、たゞ、白馬頂上小屋にて細雨の爲め一日滞在したるのみに候、八峯も明かに探り申候詳細後便にて(高橋政次郎)

△例のリユックサククに天幕、米二升五合防突具草鞋五足其他約三貫餘の荷物を僣に押し込みて南日君と二人豫定の如く鎗より薬師を経て五色ヶ原の中村君の天幕に躍り込み申候無上の快晴は元より成功に興つて力あり候もリユックサククの効も偉大なるものに有之候餘は御面會の節色々可申上候草々(立山温泉にて木暮理太郎)

△拜啓八月三日上高地出發殺生小舎一泊四日双六ノ池に、五日黒部五郎と赤城の間に、六日薬師と越中澤岳との間に泊り、七日五色ヶ原にて中村君に面會そこに野營、八日立山温泉へ降り申し候これから劔岳へ行かうかと思ひ居候眞川へは折角手紙を貰ひながら都合悪く下り申さず何卒悪から思召下され度候黒部五郎で霧のため降口分らず約二時間迷ひ申し候委しいことは九月面會の上御話申上候

(立山温泉にて南日重治)

△拜啓五色ヶ原十数日の生活首尾よく終り候昨日原の一端へ南日

木暮兩兄の黒影顯はれ互に無事と天候の幸さを喜び會ひ申候今日温泉に下り之より立山劔岳へ登り不日歸京のつもり近々拜眉の期遠きに非ざるべし(立山温泉にて中村清太郎)

△拜啓出發前には種々御配慮被下感謝の至りに御座候先發は二十日に一行は二十一日に中房着、本日二十二日登岳の途に就き申候當中房は辻村先輩の「上高地及常念山脈」に賞められたる結果にや人夫の鼻息のあらしき事非常にて五貫以上は背負はず又赤澤及び上高地よりの歸賃は二日分を請求仕り候、追々當地も上高地の様に相成る事と心配に御座候

案内は島山菊一に御座候へば信用出来る事と存じ候二股までは例の類蔵が參る由大に吹かれる事と悲觀仕り候へ共當方も負けぬ氣になり機先を制して大に一高風を吹かせて逆襲仕り候へば先方も少少面食ひの體に御座候

類蔵は「俺と嘉門治とは客の荷物なんか背負はない案内は二貫も背負へるものぢやない」など申し居候へばソナナを偉い案内人は貧書生には分に過ぎ申候條一班に同行したる上様子を見て都合によりては二班よりは使用せざる事とすべしと存じ候

今年は登山者餘程多き由に御座候が、其連中がつまらぬ先例をつくり閉口に御座候或書生の如きは四五貫の荷物を二人に背負はして登山したる由、こんな事をするから人夫が益々重荷を厭ふ様になるのかと存じ候勿々不一(出發前)(一高山岳會第二班)

△加賀正太郎氏は、日光湯本に滞在

△芝川又之助氏は、亦日光湯本に登らる、

△茨木猪之吉氏は、大作の爲上高地に八月中滞在の由

△小高秀一氏は八ヶ岳に登らる
 △今村幸男氏は、木會駒ヶ岳、甲州駒ヶ岳、及び八ヶ岳を登攀せられ、歸路吉田口より富士山に登られ、八月十五日御殿場口に下山せられたり。

△大槻頑郎氏は、信州上高地より檜ヶ岳に登られ二股溪谷より、大天井岳、燕岳等を登り、中房温泉を経て、明科より歸らる。

△石川源次氏は、八月二日白馬岳に登山せらる。

△矢澤米三郎氏は、八月二日信濃山岳研究会員を引率して、白馬岳に高山植物研究旅行を試みらる。

△關戸一平氏は、七月廿三日信州松本を發し、四屋に一泊廿四日白馬岳頂上に登られ、二十五日絶頂なきはめて下山、それより木曾路を経て歸らる、同氏の書信左の如し。

七月廿二日一番列車にて東神奈川發同夜は松本に一泊、廿三日は明科まで汽車にて參り松本より行く、青木、中綱、木崎の三湖の風光を賞しつゝ四ツ谷まで參り山木に一泊、宿帳を借りて見たる處。

七月七日に東京大林區署の技師一行が登山致したるが本年最初の登山者にて、余等一行の登山以前に約二十二三名の登山者之れ有り候ひき、同日殊に、同夜は非常の雨にて明日の天候を懸念しつつ臥床。

廿四日、雨止みしが密雲は徒らに重疊なり、八時頃強力二名を具して登山の途に就く午後一時頃白馬尻小屋にて午食、六時四十分頂上の小屋に着、途中より天氣は好都合にて、風もなく、雨も降らず、曇天のみにて歩くには至極上等に御座候ひき、同夜は小屋に強力さも二十一名の大勢にて大混雑にて候、夜半月出て一同歡喜の聲を發す。

廿五日、四時卅五分絶頂に立ちて日の出を拜す榊棚の裡に日本海を認め申候、下界は雲の波にて少しも相わからず終り候が、遠く御嶽穗高等も手に取る如く相見え申候、同日直ちに下山翌日

り木會に出で廿一日歸濱致し候。

信濃山岳研究会

一昨年來、信州松本市に於て、毎年開會せらる、信濃山岳研究会は、本年八月一日を以て、同市女子師範學校講堂に開會せられたり、階上の陳列室には、近頃發見せられたる光蕨ひかりとけを始め、岩石植物の標本、圖書雜誌等の陳列ありしが、中に就いて光蕨の解剖圖、伊能忠敬の測圖より、信州分だけを謄寫したる掛圖等は、興味に富めるものにして、講演の來聽者は勿論、登山がへりに、立寄りたる縦覽者の、注目に値ひするものなりき。陳列品等に就きて慾を言へば、圖書標品類以外に、信州の如き山國にては、登山用具、又は登山に關聯せる宗教上の用品等數多あるべく、又之を蒐集する便宜も多かるべければ、それ等をも加へられたかりし、かゝる物品は山國以外の山岳會にては、收集容易にあらざるだけ、山國なる山岳會陳列品の特色を作るべければなり、最も土地の人には珍らし

からず、又學術上にさまで益なしと言ふ遠慮もあらなれども。

講演は午前九時より開始せられ、さしもに廣き講堂も、聴衆にて一杯になりたるほどの盛會なりき、午前は光蘇の發見者小山海太郎氏、光蘇に就いて詳細に解説せられ、千野光茂氏は高山蝶に就て述べられ、志賀重昂氏は山と人文の關係に就て雄辯を揮はれ、午後に入りて信濃山岳會々長矢澤米三郎氏は、信州に産する高山植物中、保護を要すべき品種に就きて警告を與へられ、最後に小島烏水の日本アルプス研究といふ講話ありて、四時閉會せり、當日招待員として講壇に立ちたるは、日本山岳會名譽會員志賀重昂氏、及び日本山岳會幹事小島烏水の二人なりき、光蘇に於ける小山氏、高山蝶又は植物に於ける千野氏及び矢澤氏の講話等は、學術上頗る有益なるものなりし。

信濃山岳研究會諸氏の熱心なる態度と、研究會所在地の便宜とは、將來に於ける同會の發展を、期待され得ると共に、何とかして同會の機關として、山岳研究雜誌の發刊ありたきことを斯道の上より

も切に希望するなり。

講演の翌日、同會の有志者は、三組に分れて、白馬岳、槍ヶ岳、及び木曾御岳駒ヶ岳等へ、登山旅行を試みられたり。(こじま生)

「高山深谷」第五輯に就て

高山深谷は、卷を重ねる毎に美裝を帯びて、世に生るゝを常とせり、來らん大正三年の春、生れんとする第五輯は如何、知る人ぞ知る、第五輯の挿入の寫眞は成るべく、廣く、世の登山家諸君より寄托せられん事を希望す、初めて「山」を寫されし諸君と雖も、決して躊躇する事なく提供せられたし、敢て美術的寫眞たるを要せず、要は「山」そのものゝ感じを現せば可なり。

- 一、寫眞は、大きさは隨意の事、最も原板に適すと思考せらるゝ、印畫方法にて提供されたし
- 二、挿入印畫の撰擇は、本會の自由とす、挿入と決定せるものは必ず原板を貸與せらるべき事、撰に入らざる印畫は御返却すべし。

三、入撰せる原板は、御相談の上必要と認めると修正、補筆をなす事あるべし。

四、入撰者には本輯一部を呈す。

五、期限はなし、然れども、早き方を尙ぶ。

志村氏「千山萬岳」稿成る

會員志村氏烏嶺氏は、既に「やま」を著して、山岳界に知らる、近來「千山萬岳」は「やま」に次ぐ氏の紀文なり。著者は健脚と、寫真と、高山植物とを以て鳴る、氏の紀行文たるや、山岳黨の與望する事大なるべし。

山岳發刊遲延に就て

山岳は、不定期出版で御座いますが、大體四、六、十月と云ふのが内規で御座います、然し近來は、内容が精撰する上にも、尙は一層よくしたいと云ふ

希望から、遂々編輯も、印刷も遅れ勝ちで御座います、決して怠けて遅れるのでなく、よくせんがために延びるので御座います、此點はどうか御諒察を願います、本號は、地圖や圖版の印刷で大分手間取りまして延びましたが然し、延びた代りには、頁數は、前號より増加致しました挿畫も撰びました二三年前迄は、雜誌の發行が少し遅れると隨分手ひどい催促が参りましたが今回の如き、何等催促がましき御手紙も頂戴しなかつた事は、吾々同人の努力を認めて、信用さるゝ結果と思ひ、深く嬉んで居ります、決して年三度のものを二度には致しません、が然し材料（…原稿…寫真…地圖…通信…）をどしどし御寄贈下さいませんと、勢ひ雜誌は貧弱なものなる譯で御座います、「山岳」を愛し、同人の努力を認めて下さる諸君は、一枚の原稿、一葉のはがきに、材料の寄與さるゝのを、躊躇されない様に願います、「山岳」は常連の舞臺ではないのです、天下の名文を發表するものでもないのです、要は「山」に關する事であればいいのです、一言遅刊の御詫びと御願を述べて置

◎會

報

志村氏「千山萬岳」稿成る

山岳發刊遲延に就て

二三五

新入會者

訂正

報

新入會者

訂正

〔山岳〕同人



山

岳

訂正

本號插畫「聖ヶ岳より末石山を望む」の末石山は赤石山の誤りに付訂正す

校正 高野 應藏

大正二年八月三十日印刷
大正二年八月卅一日發行



發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

橫濱市太田町五丁目八十七番地

村岡平吉

印刷所

橫濱市山下町百〇四番地

福音印刷合資會社

橫濱市本町四丁目六十七番地

高野鷹藏方

發行所

日本山岳會事務所

(振替貯金口座東京四八二九番)
電話特長百七十一番

發賣所

東京市神田區表神保町

東京堂

定價金七拾錢

